宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第176集

板平遺跡

いたびら

Itabira Site

東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

2008

宮崎県埋蔵文化財センター

板平遺跡遠景（西より）

巻頭図版2

板平遺跡遠景（北西より）

基本土層（平坦部）

基本土層（谷部）

9号竪穴住居跡出土土器

包含層出土車輪石

9号竪穴住居跡出土高坏

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（門川～日向間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成17年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した板平遺跡は、平成17・18年度に発掘調査を行い、後期旧石器時代の遺物をはじめ、縄文時代早期の炉穴や土坑などの遺構や遺物、古墳時代の竪穴住居跡や古代以降の掘立柱建物跡などさまざまな遺構や遺物を確認することができました。特に、古墳時代前期の車輪石が県内で初めて出土したことは、遺物包含層での出土ではありましたが、畿内等との交流の手がかりとなる重要な遺物でもあり注目されます。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　清　野　　勉

例　　言

1　本書は、東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴い、平成17～19年度に実施した日向市所在の板平遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、日本道路公団九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

　なお、日本道路公団は平成17年10月１日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社（ＮＥＸＣＯ西日本）となったため、本報告書中ではＮＥＸＣＯ西日本として記載する。

3　現地での実測･写真撮影等の記録は、主に向江修一、石津晴菜が行ったほか、田中敏雄、土屋雄毅、三品典生、渕ノ上隆介、安藤利光、白地浩、島木良浩が行った。また、地形形成や堆積状況については赤崎広志の助言を得た。

4　整理作業は、遺物洗浄、注記、接合、フローテーションを整理作業員が行い、実測、トレースは整理作業員の補助を得て向江が行った。一部の石器実測及びトレースを（株）九州文化財研究所に委託した。

　また、石器類の分類や石材同定については藤木聡の助言を得た。

　なお、本書で使用した遺物写真は、向江が撮影した。

5　次の業務はそれぞれ業者に委託した。

　基準点測量・グリッド杭設定　：（有）日向測量

　空中写真撮影　平成17年度　　：（有）フジタ

　　平成18年度　　：（株）南九州コンサルタント

　自然科学分析　　：（株）古環境研究所

6　本書で使用した周辺遺跡位置図は国土地理院発行の５万分の１図をもとに、周辺地形図等は、ＮＥＸＣＯ西日本延岡工事事務所（現延岡高速道路事務所）から提供の1,000分の１図をもとに作成した。

7　国土座標は平面直角座標系Ⅱ（世界測地系）に基づく。また、標高は海抜絶対高である。なお、本書で使用した方位は座標北（G.N.）である。

8　土層断面・土器等の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。

9　本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

　ＳＡ…竪穴住居跡　ＳＢ…掘立柱建物跡　ＳＣ…土坑　ＳＩ…集石遺構　ＳＰ…炉穴

　ＳＨ…ピット　ＳＸ…石組遺構

10　本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主なものについては一部例外を除いて次のように統一している。

　集石遺構…１／30　炉穴…１／40　竪穴住居跡…１／50　掘立柱建物跡…１／60

　陥し穴状土坑・石組遺構・その他の土坑…１／30

　縄文土器…1／3　土師器…1／4　須恵器…1／4　陶磁器…1／3　銭貨…2／3

　旧石器…1／2　石鏃…1／2　石斧・スクレイパー・磨石・敲石・砥石・石皿…1／3　台石…1／4

　車輪石・勾玉…1／1

11　本書の執筆・編集は、向江が担当した。

12　出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　遺跡の位置と環境 …… 2
第Ⅱ章　調査の概要 …… 7
　第１節　基本層序 …… 7
　第２節　調査の方法 …… 10
　第３節　調査の経過 …… 10
　第４節　整理作業及び報告書作成 …… 11
第Ⅲ章　調査の記録 …… 13
　第１節　１次調査の概要 …… 13
　第２節　旧石器時代の遺物 …… 14
　第３節　縄文時代早期の遺構と遺物 …… 17
　　１　散礫 …… 17
　　２　集石遺構 …… 19
　　３　炉穴 …… 25
　　４　土坑 …… 31
　　５　遺物 …… 31
　　６　小結 …… 35
　第４節　縄文時代後期の遺構と遺物 …… 37
　　１　土坑 …… 37
　　２　石組遺構 …… 37
　　３　遺物 …… 42
　第５節　縄文時代晩期の遺物 …… 44
　第６節　古墳時代の遺構と遺物 …… 49
　　１　竪穴住居跡 …… 50
　　２　土坑 …… 66
　　３　遺物 …… 69
　第７節　古代～近世の遺構と遺物 …… 75
　　１　掘立柱建物跡 …… 75
　　２　遺物 …… 86
　第８節　その他の遺構と遺物 …… 89
　　１　陥し穴状土坑 …… 89
　　２　その他の土坑 …… 94
　　３　包含層出土石器 …… 96
第Ⅳ章　自然科学分析の結果 …… 109
第Ⅴ章　まとめ …… 120

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 3
第２図　周辺地形図…… 4
第３図　全体遺構配置図…… ５～６
第４図　土層断面図（１）…… 8
第５図　土層断面図（２）…… 9
第６図　グリッド配置図…… 12
第７図　１次調査トレンチ配置図…… 13
第８図　旧石器時代遺物分布図…… 14
第９図　旧石器時代石器実測図…… 15
第10図　旧石器時代調査トレンチ配置図…… 16
第11図　散礫分布図…… 17
第12図　縄文時代遺構配置図…… 18
第13図　集石遺構実測図（１）…… 20
第14図　集石遺構実測図（２）…… 21
第15図　集石遺構実測図（３）…… 23
第16図　集石遺構実測図（４）…… 24
第17図　炉穴実測図（１）…… 26
第18図　炉穴実測図（２）…… 27
第19図　炉穴実測図（３）…… 29
第20図　炉穴実測図（４）…… 30
第21図　縄文時代早期土坑実測図…… 31
第22図　縄文時代早期遺構内出土遺物実測図…… 32
第23図　縄文時代早期土器実測図（１）…… 33
第24図　縄文時代早期土器実測図（２）…… 34
第25図　縄文時代早期遺構配置詳細図…… 35
第26図　縄文時代後期土坑および石組遺構実測図 …… 37
第27図　縄文時代後期遺構内出土遺物実測図…… 38
第28図　縄文時代後期土器実測図（１）…… 39
第29図　縄文時代後期土器実測図（２）…… 40
第30図　縄文時代後期土器実測図（３）…… 41
第31図　縄文時代後期土器実測図（４）…… 43
第32図　縄文時代晩期土器実測図…… 44
第33図　古墳時代遺構配置図…… 48
第34図　１号竪穴住居跡および出土遺物実測図… 49
第35図　２号竪穴住居跡および出土遺物実測図… 51
第36図　３号竪穴住居跡および出土遺物実測図… 52
第37図　４号竪穴住居跡および出土遺物実測図… 53
第38図　６号竪穴住居跡および出土遺物実測図… 54
第39図　７号・８号竪穴住居跡および出土遺物実測図 …… 55
第40図　９号竪穴住居跡および住居内土坑、遺物集中区実測図…… 57
第41図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（１）… 58
第42図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（２）… 59
第43図　10号竪穴住居跡実測図…… 60
第44図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図（１）… 61
第45図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図（２）… 62
第46図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図（３）… 63
第47図　５号竪穴住居跡および出土遺物実測図… 63
第48図　11号竪穴住居跡および出土遺物実測図… 64
第49図　12号竪穴住居跡および出土遺物実測図… 65
第50図　古墳時代土坑および出土遺物実測図…… 66
第51図　古墳時代土器実測図（１）…… 67
第52図　古墳時代土器実測図（２）…… 68
第53図　石製装飾品実測図…… 69
第54図　古代・中世・近世遺構配置図（１）…… 76
第55図　古代・中世・近世遺構配置図（２）…… 77
第56図　１号・２号掘立柱建物跡実測図…… 78
第57図　３号・５号掘立柱建物跡実測図…… 79
第58図　４号・６号掘立柱建物跡実測図…… 80
第59図　７号・８号掘立柱建物跡実測図…… 81
第60図　９号・11号掘立柱建物跡実測図…… 83
第61図　10号掘立柱建物跡実測図…… 84
第62図　古代および中世出土土器実測図…… 84
第63図　中世および近世出土陶磁器および石製品実測図 …… 85
第64図　中世および近世銭貨拓影…… 85
第65図　陥し穴状土坑配置図…… 90
第66図　陥し穴状土坑および出土遺物実測図(１)… 91
第67図　陥し穴状土坑実測図（２）…… 92
第68図　陥し穴状土坑実測図（３）…… 93
第69図　その他の土坑および出土遺物実測図…… 95
第70図　包含層出土石器実測図（１）…… 98
第71図　包含層出土石器実測図（２）…… 99
第72図　包含層出土石器実測図（３）……100
第73図　包含層出土石器実測図（４）……101
第74図　包含層出土石器実測図（５）……102
第75図　包含層出土石器実測図（６）……103
第76図　九州の車輪石の分布……108

表目次

第１表　基本層序（平坦部）…… 7
第２表　基本層序（谷部）…… 7
第３表　旧石器時代石器観察表　…… 14
第４表　縄文時代早期集石遺構観察表　…… 19
第５表　縄文時代早期炉穴観察表　…… 25
第６表　縄文時代早期遺構内出土土器観察表　… 36
第７表　縄文時代早期土器観察表　…… 36
第８表　縄文時代後期遺構内出土土器観察表　… 45
第９表　縄文時代後期土器観察表（１）…… 45
第10表　縄文時代後期土器観察表（２）…… 46
第11表　縄文時代後期土器観察表（３）…… 47
第12表　縄文時代晩期土器観察表　…… 47
第13表　古墳時代竪穴住居跡観察表　…… 51
第14表　古墳時代遺構内出土土器観察表（１）… 70
第15表　古墳時代遺構内出土土器観察表（２）… 71
第16表　古墳時代遺構内出土土器観察表（３）… 72
第17表　古墳時代遺構内出土土器観察表（４）… 73
第18表　古墳時代包含層出土土器観察表（１）… 73
第19表　古墳時代包含層出土土器観察表（２）… 74
第20表　古墳時代遺構内出土石器観察表　…… 74
第21表　古墳時代包含層出土石製装飾品観察表… 74
第22表　掘立柱建物跡観察表　…… 75
第23表　古代～中世出土土器観察表　…… 87
第24表　中世～近世出土陶磁器および石製品観察表
…… 88
第25表　中世～近世銭貨観察表　…… 88
第26表　陥し穴状土坑観察表　…… 89
第27表　遺構内出土土器観察表　…… 95
第28表　遺構内出土石器観察表　…… 95
第29表　包含層出土石器観察表（１）…… 104
第30表　包含層出土石器観察表（２）…… 105
第31表　包含層出土石器観察表（３）…… 106
第32表　包含層出土石器観察表（４）…… 107
第33表　谷部遺物包含層別主な石器出土量　… 108
第34表　谷部遺物包含層別土器出土量　…… 108
第35表　古墳時代前期遺構別「在地系」および「外来系」土器分類表　…… 108
報告書抄録　…… 141

図　版

巻頭図版１　板平遺跡遠景（西より）
巻頭図版２　板平遺跡遠景（北西より）
基本土層（平坦部）
基本土層（谷部）
巻頭図版３　９号竪穴住居跡出土土器
巻頭図版４　包含層出土車輪石
９号竪穴住居跡出土高坏
図版１　表土除去後（Ａ区、北から）…… 123
平坦部土層断面
谷部土層縦断面
谷部土層横断面
谷部掘削作業風景（北から）
谷部風景（北から）
旧石器時代遺物出土状況（Ａ区）
土石流による礫溜り（Ｂ区）
図版２　散礫検出状況（Ｃ区）…… 124
散礫検出作業風景
ＳＩ10検出状況
ＳＩ16・20・21検出状況
ＳＩ19検出状況
図版３　ＳＩ４・５・６半截状況　…… 125
ＳＩ11半截状況
ＳＩ６半截状況
ＳＩ３配石
ＳＩ16・20配石
ＳＩ10配石
ＳＩ18配石
ＳＩ19配石
図版４　ＳＰ12検出状況　…… 126
ＳＰ27～29検出状況
ＳＰ23～26検出状況
ＳＰ27～29埋土中礫出土状況
ＳＰ１完掘状況
ＳＰ２・３・４完掘状況
ＳＰ20・21完掘状況
ＳＰ12・ＳＰ13・ＳＰ14～17完掘状況
図版５　ＳＰ27～29完掘状況 …… 127
ＳＰ５～10・18完掘状況

ＳＰ23～26完掘状況
集石遺構と炉穴の位置関係
ＳＣ20土器出土状況
ＳＣ20完掘状況
ＳＸ１検出作業風景
ＳＸ１検出状況
図版６　ＳＡ１検出状況（南から）…… 128
ＳＡ３遺物出土状況
ＳＡ９遺物出土状況
ＳＡ10遺物出土状況
ＳＡ９完掘状況
図版７　ＳＡ３完掘状況　…… 129
ＳＡ12完掘状況
ＳＡ４完掘状況
ＳＡ１完掘状況
ＳＡ６完掘状況
ＳＡ10完掘状況
車輪石出土状況
ＳＣ21土器出土状況
図版８　Ｃ区掘立柱建物跡検出状況　…… 130
Ｂ区ピット検出状況
ＳＢ２検出状況
柱穴土層断面
柱穴中根石
図版９　ＳＣ１検出状況　…… 131
ＳＣ４・６半截後状況
ＳＣ１土層断面
ＳＣ10土層断面
ＳＣ４完掘状況
ＳＣ18半截状況
散礫取上げ作業風景
現地説明会風景
図版10　旧石器時代石器　…… 132
縄文時代早期土器（１）～（３）
縄文時代後期土器（１）（２）
図版11　縄文時代後期土器（３）～（７）… 133
縄文時代晩期土器
図版12　ＳＡ１・ＳＡ２出土遺物　…… 134
ＳＡ３出土土器
ＳＡ４出土遺物（１）（２）
ＳＡ６出土遺物
ＳＡ８出土石器
図版13　ＳＡ９出土土器（１）～（11）…… 135
ＳＡ９出土石器
図版14　ＳＡ10出土土器（１）～（６）…… 136
ＳＡ10出土石器
図版15　ＳＡ５出土遺物　…… 137
ＳＡ11出土土器
ＳＡ12出土土器
ＳＣ21出土土器
ＳＣ15出土土器
包含層出土土器（１）（２）
図版16　包含層出土土器（３）～（５）…… 138
包含層出土石製装飾品
包含層出土車輪石
図版17　中世陶磁器　…… 139
古代～中世土器および銭貨
近世陶磁器
図版18　打製石鏃・石錐・異形石器・石匙 … 140
石錘
打製石斧
スクレイパー・礫器
敲石
弥生時代以降石器

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道（延岡～清武間）は、平成元年２月に基本計画区間に決定された。本遺跡が所在する門川～日向間約14kmについては、県文化課が平成15年８月に旧日本道路公団から遺跡の分布調査の依頼を受け、翌16年３月、７遺跡174,000㎡の埋蔵文化財包含地の所在を回答している。そして、門川～日向間を担当する同公団延岡工事事務所が開設された同年11月には、工事計画や用地取得、埋蔵文化財調査等の調整会議も開催されている。

また、平成17年２～３月には「埋蔵文化財発掘調査におけるコスト縮減及び限定協議に伴う除外面積について」の協議が同公団と県文化財課との間でなされ、これらにより発掘調査の対象面積が当初の174,000㎡から91,000㎡に縮減された。

限定協議等の結果、板平遺跡では当初面積36,000㎡のうち、21,960㎡が調査対象となった。

第２節　調査の組織

板平遺跡の調査組織は次のとおりである。

【調査主体】　宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

平成17年度

所　長		宮園　淳一
副所長兼調査第二課長		岩永　哲夫
総務課長		宮越　　尊
同課主幹兼総務係長		石川　恵史
調査第一課長		髙山　富雄
同課調査第二係長		菅付　和樹
同調査第二係	主　査	向江　修一
	主　事	三品　典生
	主　事	渕ノ上隆介
	調査員	石津　晴菜

平成18年度

所　長		清野　　勉
副所長		加藤　悟郎
副所長兼調査第二課長		岩永　哲夫
総務課長		宮越　　尊
同課主幹兼総務担当リーダー		髙山　正信
調査第一課長		髙山　富雄
同課主幹兼調査第二担当リーダー		菅付　和樹
同調査第二担当	主　査	向江　修一
	主　査	土屋　雄毅
	主　査	田中　敏雄
	主　事	三品　典生
	調査員	石津　晴菜

平成19年度

所　長		清野　　勉
副所長		加藤　悟郎
総務課長		宮越　　尊
同課主幹兼総務担当リーダー		髙山　正信
調査第一課長		長津　宗重
同課主幹兼調査第二担当リーダー		菅付　和樹
同調査第二担当	主　査	向江　修一

〔調査協力〕
日向市教育委員会
宮崎県東九州自動車道用地事務所

第３節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

板平遺跡は、宮崎県日向市大字富高字板平・程ケ迫・前原・鍛冶屋・小板平に位置する（第1図）。

日向市は、宮崎県の北部に位置し、尾鈴山系の北端にあり、東に日向灘を臨む。市内のほぼ中央を流れる塩見川を挟んで南北で基盤層が変わり、北が四万十層群、南が尾鈴山酸性岩類である。本遺跡は、塩見川の支流富高川左岸河岸段丘上に位置し、標高は約20～40mを測る。基盤層は四万十層群で、富高川の埋積谷低地にあたる。富高川は本遺跡付近の上流地域では、雨季と乾季で水量が大きく変化する。

本遺跡は周知の遺跡であり、弥生時代の散布地として、平成12年には日向市より文化財指定を受けている。

２　歴史的環境

今回の調査においては、旧石器時代～近現代までの遺構や遺物が確認された。本遺跡の周辺には以前から多くの遺跡が周知されており、一部は発掘調査も行われている。そこで、発掘調査が行われた遺跡を中心に、時代ごとに述べる。

旧石器時代の主な遺跡は、寺ノ上遺跡（図1－32）や奥野Ｂ遺跡（同－34）、東草場遺跡（同－14）がある。寺ノ上遺跡では、ＡＴ（姶良Ｔｎ火山灰層）直上から集石遺構４基や、石器ブロック５箇所よりナイフ形石器など1,200点の石器が確認されており、奥野Ｂ遺跡ではＡＴ下位から石器ブロックが検出されている。

縄文時代では、早期の後陣遺跡（同－31）、越シ遺跡（同－30）、後期の東草場遺跡、分蔵遺跡（同－２）などがあげられる。後陣遺跡、越シ遺跡の両遺跡とも早期の集石遺構を検出している。特に後陣遺跡では60余基を数える集石遺構が早水台式の押型文土器や吉田・前平式の円筒貝殻文土器、無文の円筒土器等に伴って検出された。また、後期の東草場遺跡では円形竪穴住居跡が、分蔵遺跡では御領式の黒色磨研土器などを確認している。

弥生時代では、越シ遺跡で弥生時代終末期の間仕切りのある方形基調の竪穴住居跡も検出されており、東草場遺跡で中期の溝状遺構、終末期の方形竪穴住居跡等が確認されている。

古墳時代では、本遺跡の南東２㎞には県指定富高１号墳・２号墳（同－12）があり、盟主と目される２号墳（全長86mの前方後円墳）では盗掘坑から仿製の四獣鏡が発見され、市指定の鈴鏡塚古墳（同－13）では獣文八鈴鏡が出土している。

古代では、越シ遺跡から土師器坏を伴う集石遺構や布痕土器を確認している。

さらに中世では、南方３㎞に戦国時代には日知屋城、門川城とともに「日向三城」と呼ばれた塩見城跡（同－３）や中山遺跡（同－４）があり、中世の掘立柱建物跡や輸入陶磁器等が確認されている。

【引用参考文献】

日向市教育委員会1983 「寺ノ上遺跡」
日向市教育委員会1986 「後陣遺跡・越シ遺跡」
日向市教育委員会1991 「富高古墳２号墳」
宮崎県1989 「宮崎県史　資料編・考古Ｉ」
日向市教育委員会1985 「日向市遺跡詳細分布調査報告書」
宮崎県埋蔵文化財センター 2004 「中山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第93集
宮崎県埋蔵文化財センター 2006 「分蔵遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第139集
宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「平成18年度　埋蔵文化財発掘調査一覧」

1	**板平遺跡**	2	分蔵遺跡	3	塩見城跡	4	中山遺跡	5	権現原遺跡
6	池ノ下遺跡	7	大谷尻遺跡	8	秋留遺跡	9	比良山古墳	10	比良遺跡
11	山下遺跡	12	富高古墳群	13	鈴鏡塚古墳	14	東草場遺跡	15	西谷横穴群
16	西草場遺跡	17	谷口遺跡	18	宮ノ尾遺跡	19	和田遺跡	20	谷川遺跡
21	北川内遺跡	22	黒原遺跡	23	山口遺跡	24	畑浦遺跡	25	細島古墳
26	日知屋城跡	27	伊勢ケ浜古墳群	28	野首遺跡	29	竹之下遺跡	30	越シ遺跡
31	後陣遺跡	32	寺ノ上遺跡	33	奥野Ａ遺跡	34	奥野Ｂ遺跡	35	門川城跡
36	門川南町遺跡								

第１図　遺跡位置図

第２図　周辺地形図

35.000m
32.500m
30.000m
27.500m
25.000m
22.500m
22.500m
SC15
SC5
SI1
SP1
SA1
SA2
SC9
SC11
SC12
SC4
SC7
SC8
SC6
SC1
SC3
SC2
SC10
SA9
SB10
SB8
SB7
SB6
SC17
SB5
SB4
SB3
SC16
SB2
谷部
SC20
SC18
SX1
散礫
A群
SI20
SI21
SI16
SI13
SI15
SC22
SI12
SI10
SI17
SC23
SI14
SC24
SP19
SC25
SI8
SI9
SP23～26
SI7
SC26
SI11
SP27～29
SI4
SI3
SI5
SI6
SI19
SI18
散礫
B群
SA10
SB9
SB11
SP22
SP5～10・18
SA4
SA5
SC14
SA8
SA7
SC13
SP11
SP20
SP21
SP13
SP3
SP2
SP4
SB1
SP12
SA3
SP14～17
SC21
SC19
SA11
SA12
SA6
Y=57000
X=−61300
X=−61400
Y=57050
0
50m
1/650

第３図　全体遺構配置図

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　基本層序

調査区の表土を剥ぐと、Ａ区では第Ⅳ層～Ⅷ層が、Ｂ、Ｃ区では第Ⅱ層～Ⅳ層及び谷地形の埋没土第２層が現れた。これは、調査区全体が傾斜し、かつ、うねった状態であったものを、人為的要因で削平されて平らになったためと考えられる。

また、調査区の東側に埋没した谷地形（以下、谷部）の存在を確認しており、谷部第３層と第Ⅱ層が、第４層と第Ⅲ層、第５～７層と第Ⅶ～Ⅸ層がそれぞれ対応すると考えている。

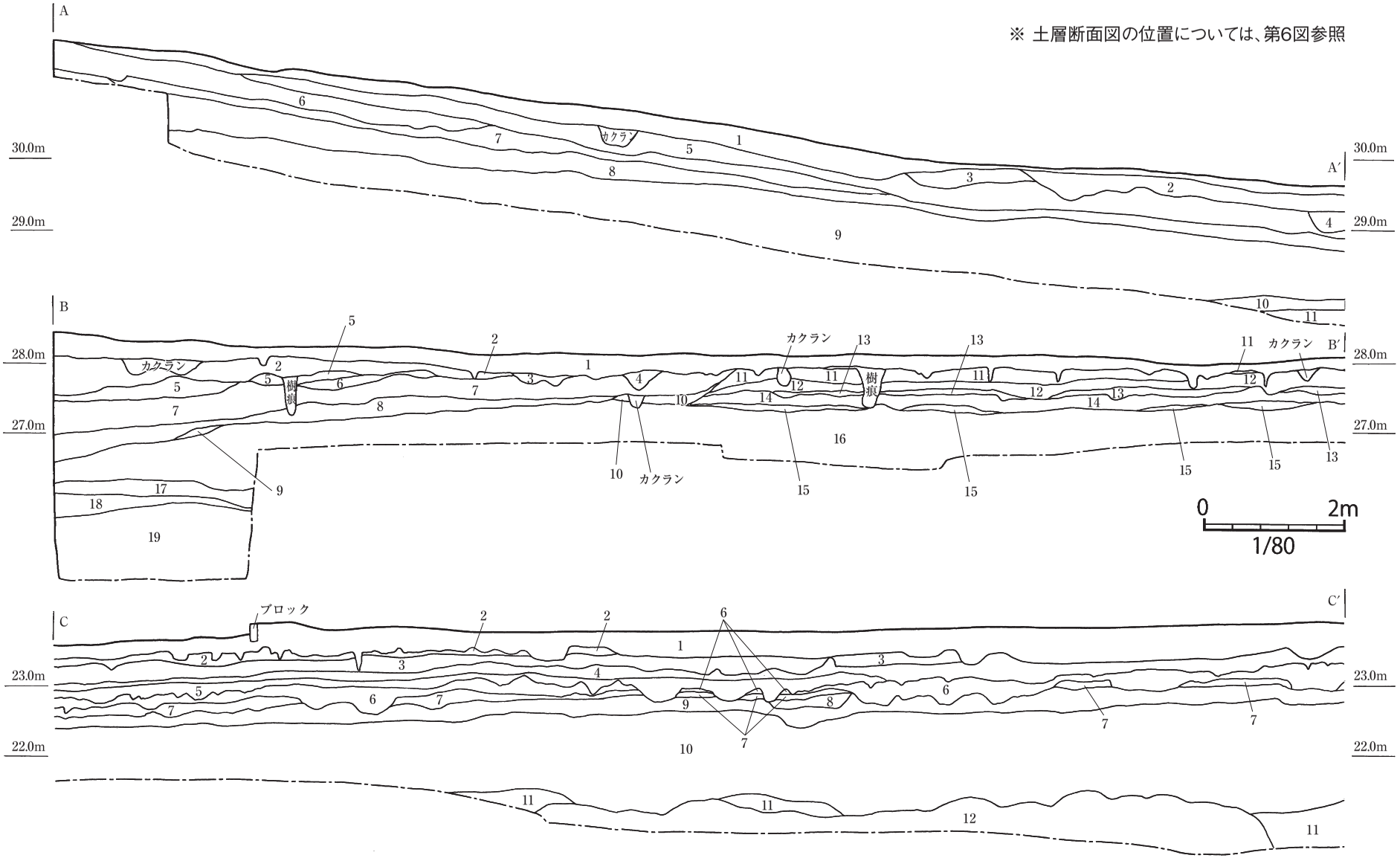
そこで、本遺跡の基本層序は平坦部と谷部の２つに大別できる。以下で各層ごとに概説する。

第１表　基本層序（平坦部）

層No.	層　名	特　　徴
第Ⅰａ層	表土	10YR3/4 暗褐色土。粘性はない。固くしまる。φ 5㎜程度の角礫を多く含む。現在の耕作土。
Ⅰｂ	黒褐色土層	10YR3/2 黒褐色土。粘性は弱い。固くしまる。第１ａ層に比べて角礫の含まれる量が少ない。平坦部にはほとんど残っていない。
Ⅱ	二次堆積鬼界アカホヤ火山灰層	7.5YR7/8 黄橙色土。粘性はない。しまりはややある。10YR3/3 暗褐色土が混ざる。鬼界アカホヤ火山灰の二次的堆積物。
Ⅲ	暗褐色土層	10YR3/4 暗褐色土。粘性ややある。しまりがある。
Ⅳ	褐色土層	10YR4/6 褐色土。粘性は第Ⅲ層に比べて強い。しまりがある。谷部にはない。
Ⅴ	白斑ローム層	10YR3/2 黒褐色土。粘性なし。非常に硬くしまり、10cm程度のブロック状の態をなす。φ 2㎜以下の白色のガラス質粒子を含む。谷部にはない。
Ⅵ	ＡＴ火山灰層（姶良Tn火山灰層）	10YR5/8 黄褐色土。粘性なし。しまりなし。谷部にはない。
Ⅶ	小礫混じり褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性ややあり比較的やわらかい。ＡＴ粒子が混ざるためサクサクしている。第Ⅵ層と第Ⅷ層の漸移層にあたる。
Ⅷ	褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性が非常に強い。固くしまる。最大４～５㎝の小角礫を多く含む。
Ⅸ	礫層	10YR4/4 褐色土。粘性非常に強い。固くしまる。φ 0.5cm～ 10cm大の礫を多く含む。

第２表　基本層序（谷部）

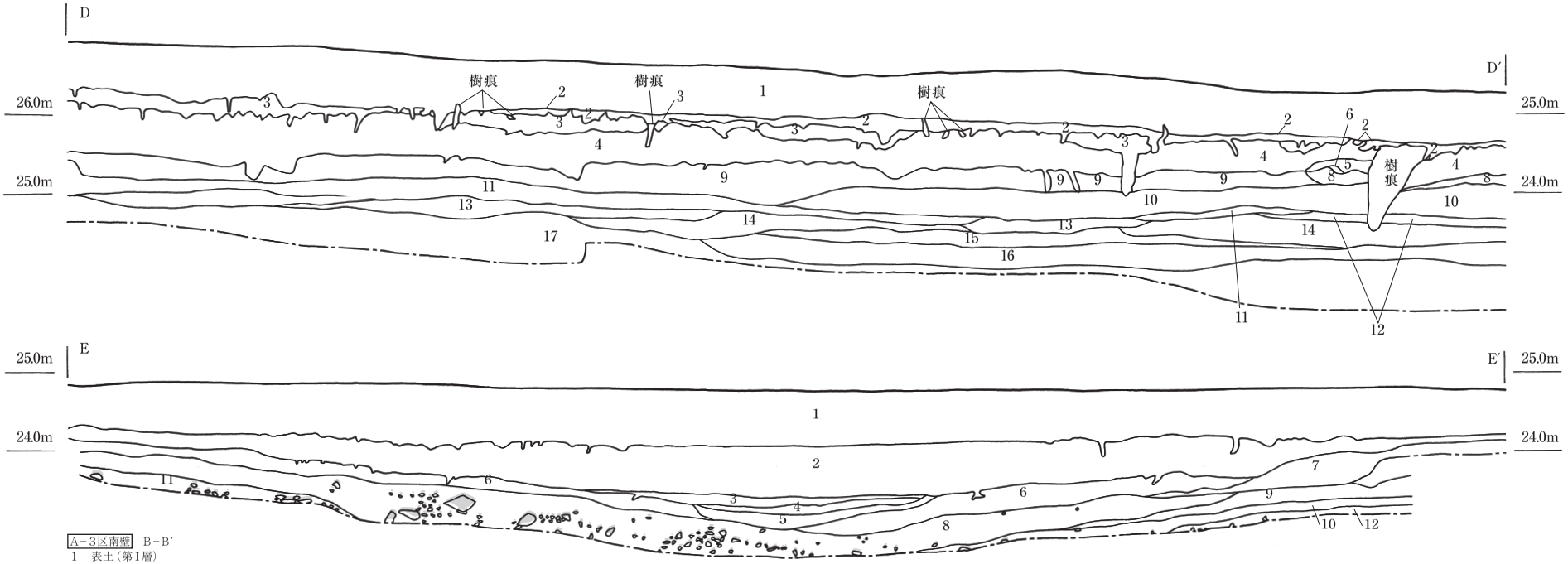
層No.	層　名		平坦部との対応関係	特　　徴
第１層	表土		第Ⅰａ層	平坦部と共通。現在の耕作土。
2	黒褐色土層		Ⅰｂ	平坦部と共通。平坦部にはほとんど残っていない。
3	二次堆積鬼界アカホヤ火山灰層		Ⅱ	10YR6/8 明黄褐色土。粘性ややあり。しまりが弱く、サクサクしている。
4	暗褐色土層	４ａ層	Ⅲ	7.5YR4/6 褐色土。φ １㎜の角礫を多量に含む。礫の間の土は粘性ある。
		４ｂ		7.5YR4/6 褐色土。粘性ややある。しっかりしている。φ １㎜の角礫の量は第４ａ層より少ない。
		４ｃ		7.5YR4/6 褐色土。粘性が弱い。角礫はほとんど入らない。
5	小礫混じり褐色粘質土層		Ⅶ	10YR7/6 褐色土。黄褐色の粘土中にφ ５～ 10㎜の小角礫を多く含む。小角礫が層状に堆積する部分がある。
6	褐色粘質土層		Ⅷ	10YR5/6 黄褐色土。粘土質。乾くとガチガチに固まるが、水分を含むとベタベタになる。
7	礫層		Ⅸ	10YR4/4 褐色土。第５層の土に大きな円礫が多量に入る。



A－2区東壁　A－A′

1　10YR3/2黒褐色土、しまりはなく粒子も粗い、小石、植物根を含む、表土
2　10YR5/4にぶい黄褐色土、しまりはあまりなく粒子はやや粗い、粘性は弱い、小石と5層のブロックを含む
3　7.5YR5/6明褐色土、しまりがあり粒子はやや粗い、粘性がある
4　10YR5/4にぶい黄褐色土、しまりはなく粒子はやや細かい、粘性は弱い
5　10YR7/4にぶい黄橙色土、固くしまり粒子は細かい、粘性をもつ、小石、山石を含む
6　10YR7/8黄橙色土、固くしまり粒子は細かい、粘性をもつ、小石、山石を多く含む
7　10YR7/3にぶい黄橙色土、固くしまり粒子は細かい、粘性をもつ、小石、山石を含むが所々に砂利層がわずかに入る
8　10YR8/3浅黄橙色土、固くしまり粒子は細かい、少し小石を含む、粘土層
9　5YR6/6橙色土、固くしまり粒子は細かい、粘質土と砂利層が交互に堆積する
10　2.5Y7/4浅黄色土、しまりがあり粒子は細かい、粘土層
11　2.5Y7/6明黄褐色土、固くしまる、砂利層

第４図　土層断面図（１）



A－3区南壁　B－B′

1　表土（第Ⅰ層）
2　10YR4/6褐色土、粘性弱くやわらかい、二次アカホヤと褐色土が混ざる土
3　10YR3/4暗褐色土、粘性弱くやわらかい、アカホヤが混ざり粘土ブロック含む
4　３層と類似するが粘土ブロックの占める割合が多い
5　二次アカがブロックで入る（第Ⅱ層）
6　10YR4/4褐色土、粘性ややあり固くしまる、φ2～3cm大のアカホヤブロックが少量混ざる
7　10YR3/4暗褐色土、粘性ややあり固くしまる、炭化物、アカホヤ粒子をごく少量含む
8　10YR4/3にぶい黄褐色土、粘性強く固くしまる７層が下の粘土層の影響を受け粘質化したものか
9　10YR5/3にぶい黄褐色土、粘性強く固くしまる、８層より白く小礫を含む水穴か
10　10YR4/4褐色土、粘性はやや弱く比較的やわらかい、ATブロック（φ1～2cm）、小礫、12の土が混ざり流れ込んでいる
11　10YR3/4暗褐色土、粘性ややありしまりあり（第Ⅲ層）
12　10YR4/6褐色土、粘性は11層に比べて強いしまりあり（第Ⅳ層）
13　褐色土のブロック、ATの上に層になるところがある、白斑ローム層（第Ⅴ層）
14　AT層（第Ⅵ層）
15　10YR4/6粘性ややあり比較的やわらかい、AT粒子が混ざるためサクサクしている、5㎜大の小礫を含む、Ⅵ層とⅧ層の漸移層（第Ⅶ層）
16　10YR4/6粘性非常に強く固くしまる、最大4～5cm大の小礫をまんべんなく含む（第Ⅷ層）
17　10YR4/4褐色土、粘性非常に強く固くしまる、φ0.5～10cm大までの礫が多く含まれる、砂利層（第Ⅸ層）
18　10YR4/6粘性非常に強く固くしまる、礫は少量になる
19　10YR5/6黄褐色土、粘性強くしまりあり、19層ほど密ではないが礫が多く含まれる

B－4区北壁　C－C′

1　5YR3/2暗褐色土、しまりがなく粒子が粗い、ボロボロしている、小石、植物根、2次アカを含む、表土（第Ⅰ層）
2　7.5YR5/6明褐色土、しまりややあり、粒子やや粗い、粘性なし、10YR4/6褐色土のブロック（2cm程度）を含む、2次アカホヤ(第Ⅱ層)
3　10YR3/3暗褐色土、しまりややあり、粒子やや粗い、粘性あり、下部は４層が混ざってくる(第Ⅲ層)、
4　7.5YR4/4褐色土、しまりややあり、粘性３層より強い、7.5YR6/6のブロックを含む（第Ⅳ層）
5　7.5YR4/6褐色土、しまりややあり、粘性３層より強い、7.5YR6/6のブロックを含む（第Ⅳ層）
6　10YR5/4にぶい黄褐色土、固くしまっている、ひび割れてブロック状となる、ひびの隙間に５層が入り込む（第Ⅴ層）
7　10YR6/8黄橙色土、固くしまっている、上部粒子が粗い、中部粒子が細かい、下部橙が強く粘性がある、AT（第Ⅵ層）
8　10YR4/6褐色土、しまりややあり、比較的やわらかい、ATや小礫を含む（第Ⅶ層）
9　10YR6/6明黄褐色土、しまっている、粘性が強い、小礫を含む、所々しまりが弱い部分がある（第Ⅷ層）
10　10YR6/6明黄褐色土、小礫が多量に混ざる、細かく分層する小礫層と粘土層が互層となり堆積している
11　10YR6/6明黄褐色土、しまっている、粘性が強い、10層より小礫が少ない
12　10YR6/4、にぶい黄橙色土、固くしまっている、AT下位黒色帯か

C－3区東壁　D－D′

1　耕作土a（谷１層＝第Ⅰa層）
2　耕作土b（谷２層＝第Ⅰb層）
3　１層・２層と４層の漸移層
4　二次アカホヤ（谷３層）
5　９層に大量の小角礫が入る
6　４層に角礫が入る
8　９層より角礫の量が多い
9　7.5YR4/4褐色土、1cm弱の角礫を多量に含む、礫間の土は粘性があり（谷４a層）
10　９層と11層の漸移層、11層よりしまりが弱い
11　９層より礫が少なくなり、しっかりしている（谷４b層）
12　11層と14層の漸移層、11層に小礫が入る
13　107.5YR4/6黒褐色土、11層より礫がほとんど入らない、粘性弱い（谷４c層）
14　10YR7/6明黄褐色土、13層にφ5㎜程度の角礫を多量に含む
15　ATと白斑ローム層の混合層
16　10YR7/6明黄褐色土、14層の角礫φ5～10㎜が層状に堆積する
17　10YR5/6黄褐色土、灰白色土と明褐色土の混合層、粘土質、乾燥すすると固くしまるが、湿ると粘り気を増す（地山）

B－7区北壁　E－E′

1　10YR4/4褐色土、粘性なし、しまりあり、小角礫多量に含む、耕作土a（第Ⅰa層）
2　7.5YR4/3黄褐色土、粘性なし、しまりあり、小角礫、炭化物を多く含む、褐色土ブロックも斑らに入る、耕作土b（第Ⅰb層＝谷２層）
3　7.5YR4/3褐色土、２層と４層の漸移層、炭化物の粒が２層より大きい
4　7.5YR3/2黒褐色土、大き目の炭化物（φ5㎜）を含む、角礫1cm以下を含む、粘性なし、しまりあり、一見黒い帯状に見える
5　7.5YR4/4褐色土、粘性無くしまりがある、土の中に4～5cm以下の角礫を多量に含む、大きめの角礫は角がやや丸い、炭化物も5㎜大のものも含む
6　7.5YR3/4暗褐色土、２層と８層の漸移層、２層が８層に入り込んでいる部分が多い
7　10YR4/4褐色土、６層にアカホヤのブロック（φ10㎜）が斑らに入る、粘性なし、しまりややあり
8　7.5YR4/6褐色土、粘性ややあり、しまりややあり、明褐色土のブロックが斑らに入る、炭化物ややあり、小角礫も入る（谷３層＝第Ⅱ層）
9　7.5YR4/3褐色土、粘性弱い、しまりがある、10㎜程度の角礫が多く入る
10　7.5YR3/4暗褐色土、粘性あり、固くしまる、小角礫が多量に入る（谷４a層）
11　7.5YR4/4褐色土、粘性強い、固くしまる、ガチガチ、20cm以下の砂岩の礫を含む、角がやや丸い（谷５層）
12　10YR3/4にぶい黄褐色土、粘性なし、固くしまる、礫層（谷７層）

第５図　土層断面図（２）

第２節　調査の方法

調査は１次と２次の２回に分けて行った。調査の便宜上、調査区をＡ～Ｃ区に区分した。また、Ａ区をＡ－１区～３区、Ｂ区をＢ－１区～８区とＢ－Ｐ区、Ｃ区をＣ－１区～４区に細区分した。

グリッド杭は、国土座標を基準とし10m間隔で設定した(第６図)。表土を重機で除去後、二次アカホヤ（第Ⅱ層）～褐色土層（第Ⅳ層）で遺構検出を行い、その後第Ⅱ～Ⅲ層を、谷地形部分においては第２層～３層を掘り下げ、縄文時代以降の調査を行った。調査区は以前畑地で栽培されていた柑橘類（ヘベズ）や根菜類（ごぼう）等の影響が多く見られ、至る所で攪乱を受けていた。Ａ区とＣ区の境界付近では、旧石器時代の遺物出土地点を中心にした範囲を、その他の場所においてはトレンチを設定し、第Ⅷ層を掘り下げ旧石器時代の調査を行った。

遺物包含層中の遺物はトータルステーションにより位置を記録して取り上げたほか、グリッド一括等により取り上げた。

遺構実測図は１/10を基本とし、一部１/20で記録した。写真記録は35mmモノクローム・リバーサル・カラー写真及びデジタルカメラを併用し適宜行った。

第３節　調査の経過

平成17年８月22日付けで調査に着手する。調査対象面積は21,960㎡である。

まず、１次調査においてトレンチを設定した後、重機で表土を剥ぎ、遺構検出を行った。調査の結果から旧石器時代、縄文時代早期、弥生～古墳時代を主体とする遺構と遺物が偏在していることが分かった。

２次調査においては、重機により全面的に表土を剥ぐことから始めた。その結果、表土直下に古墳時代の竪穴住居跡、縄文時代早期の散礫、集石遺構、炉穴、縄文時代後期の土坑、古代以降の掘立柱建物跡や多数の柱穴等様々な時期の遺構を検出した。しかし、一部の陥し穴状土坑や柱穴では時期が不確定なものも見られた。

調査を進める過程で、各時代の遺構の埋土と周辺の土質や土色の区別がつくようになり、特に縄文時代早期の炉穴群や古墳時代の竪穴住居跡を多数検出することができた。

散礫については、トータルステーションで全て位置を押さえ、特に耕作の影響を受けていないクリッドの散礫については縮尺１/20で実測している。

調査区の東側にはほぼ南北に埋没谷地形が存在し、その堆積土からは旧石器時代以降の遺物が多数出土した。その遺物の中には、１次調査では確認できなかった縄文時代後・晩期の土器や古代の土器が出土した。また、石器のうち石鏃や石斧、石錘等の大部分はこの谷地形部分から出土しており帰属時期が明確でないものも多い。

特に、平成18年４月27日には県内初の車輪石も出土し、遺跡の再評価が必要となった。車輪石のほとんどが古墳の副葬品として出土しているため、本遺跡に隣接した古墳からの流入を考えてみたが、近隣に古墳の存在は確認できなかった。

旧石器時代の調査は、遺構精査が終了したグリッドから順次進めた。１次調査で二次加工剥片が出土したＡ区とＣ区の境界付近はＡＴ下位を慎重に掘り下げ、剥片を検出した。その他のグリッドについてはトレンチを設定しＡＴ下位を掘り下げていったが、下層の礫層上面で石核が一点出土したに止まった。なお谷地形部分については重機で慎重に掘削したが、遺構・遺物は確認できなかった。

平成18年９月28日に器材等を撤収し、その後土層断面図等残りの実測を進め、10月４日遺跡全体の調査を終了した。

調査日誌抄

H17.08.22　１次調査開始。重機搬入。器材庫、駐車場の整地及びクラッシャーラン敷設。
08.23　トレンチ設定。作業員による掘削開始。プラント部、第Ⅳ層で炉穴検出。遺構第１号。
08.30　Ｃ区、第Ⅱ層で集石遺構を検出。

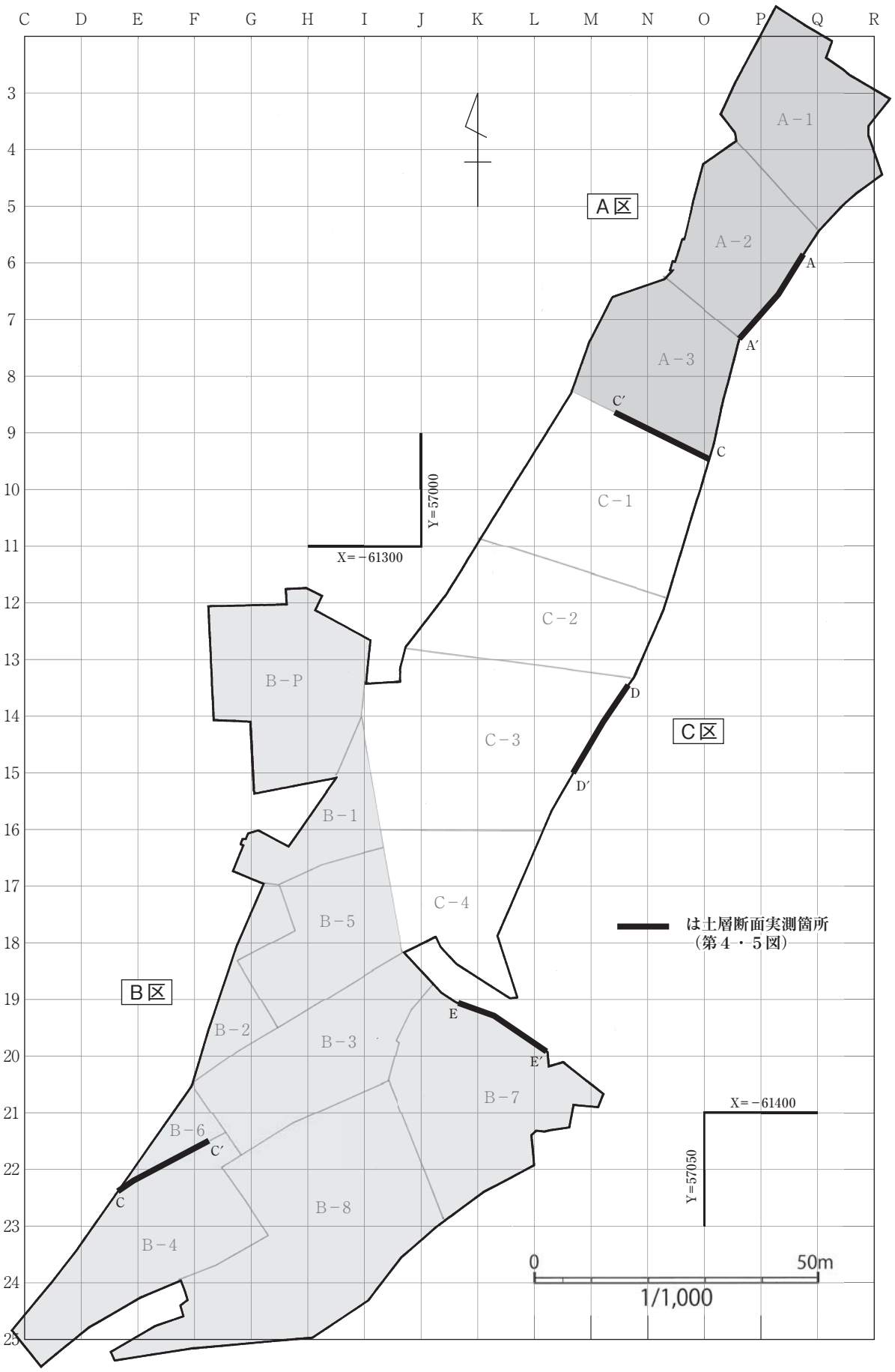
09.01　Ｂ区、埋没谷地形の存在を確認。
09.06　台風14号襲来。
09.08　遺構の確認できない日々が続く。
09.13　Ｂ区、谷地形部分より剥片や土師器片が多数出土。
09.16　Ａ区、ＡＴ下位Ⅷ層より旧石器時代の二次加工剥片出土。
09.20　Ａ区、古墳時代の高坏の脚部出土。
09.22　Ｃ区、古墳時代の竪穴住居跡検出。
09.29　重機による埋め戻し。Ｄ区を踏査するも遺物を確認できず。
10.03　１次調査終了。
H17.10.20　２次調査開始。重機搬入。重機によるＡ区の表土剥ぎ。炉穴検出。
10.21　事務所等の設置。Ｂ区の表土剥ぎ。
10.24　作業員投入開始。Ａ区、人力で表土攪乱除去。
10.25　Ａ区集石遺構検出。
10.27　重機による表土剥ぎ終了。
10.28　Ａ区、竪穴住居跡２軒検出。
11.01　測量杭設置。
11.10　Ａ区、陥し穴状土坑検出。
11.28　Ｂ区プラント建設予定地、人力で表土除去。
11.29　Ａ区里道撤去。
12.01　Ａ区、谷地形部分黒褐色土掘下げ。
12.02　Ｂ区、竪穴住居跡検出。
12.09　Ａ区、陥し穴状土坑合計11基検出。
12.14　Ａ区、古墳時代の土坑の礫の下から土師器出土。
12.15　Ａ区、空中写真撮影。
12.16　Ａ区、遺構配置図作成。
12.22　積雪を観測。調査区雪化粧。
12.27　Ａ区、等高線図作成。平成17年調査納め。
H18.01.05　Ａ区、ＡＴ下位旧石器調査開始。第Ⅷ層で剥片出土。Ｂ区プラント建設予定地、炉穴検出。
01.10　Ｂ区、重機による二次アカホヤ除去。
01.23　Ｂ区、遺構配置図作成。
02.02　Ｂ区、旧石器調査。ＡＴ下位で石核出土。
02.06　Ｂ区、柱穴実測。
02.08　Ｂ区、空中写真撮影。
02.15　Ｂ区、等高線図作成。
02.08　Ａ区、旧石器調査終了。
02.20　Ｂ区プラント建設予定地、竪穴住居跡検出。
02.22　Ａ区、土層実測。
02.27　Ｂ区、旧石器調査終了。作業員最終日。
03.01　重機による深掘り、土層確認。埋め戻し。
03.13　次年度の調査部分、先行して表土剥ぎ。
03.14　埋め戻し終了。
03.15　平成17年度調査終了。
03.23　延岡工事事務所との次年度の調査の打合せ。
H18.04.10　平成18年度調査開始。重機によるＣ区及びＢ区残部、表土剥ぎ。排土仮置き。
04.12　作業員開始。Ｃ区、竪穴住居跡検出。
04.17　谷地形部分、土層確認。遺物多量出土。
04.21　Ｃ区、東側で車輪石出土。
04.24　排土を斜面地へ移動。
04.25　Ｃ区、集石遺構、炉穴検出。
04.26　谷地形部分、縄文時代後期の土器片出土。
04.27　Ｃ区、表土剥ぎ終了。
05.01　蒸し暑さが増し、熱中症防止対策。
05.02　Ｃ区、石庖丁出土。
05.12　Ｃ区、掘立柱建物跡検出。
05.16　雨天が続き、さらに台風接近のため調査進まず。排土流出防止対策。
06.05　都農町役場職員東九州自動車道関連視察。(6/16まで５回)
06.13　SA9に一風変わった高坏等出土。Ｂ区で勾玉出土。
07.06　Ｃ区、等高線図作成。
07.07　またしても台風接近、調査進まず。
07.11　東臼杵郡町村会議員視察。
07.12　赤崎主査が土層等の調査。
07.14　Ｃ区、空中写真撮影。Ｃ区、縄文時代早期面へ掘下げ。
07.19　Ｃ区、縄文時代後期石組遺構検出。
07.24　Ｃ区、重機により二次アカホヤを掘削。湧水量が大きく水中ポンプ設置。
07.28　Ｃ区に散礫が広がる。
07.29　遺跡調査報告会で調査の成果を発表。
08.03　集石遺構の実測に調査員を増員。調査終了までこの作業が続く。
08.03　Ｃ区、旧石器調査開始。
08.04　Ｃ区、旧石器トレンチより剥片と石核出土。
08.06　現地説明会。猛暑の中も56名参加。NEXCOのトンネル工事も見学。
08.09　SC20より完形に近い縄文時代後期の深鉢出土。
08.23　Ｃ区、炉穴検出。重機による旧石器調査。
08.25　Ｂ区、農道撤去。
09.04　Ｃ区、農道の付け替え道路完成。Ｂ区で12軒目の竪穴住居跡検出。
09.05　Ｂ区とＣ区の間の農道撤去。農道下から炉穴と掘立柱建物跡検出。
09.06　SA12から瓔が出土。
09.14　Ｂ区、空中写真撮影。
09.15　Ｂ区、等高線図作成。礫重量計測。
09.21　Ｃ区、遺構配置図作成。
09.25　Ｂ・Ｃ区、重機による旧石器調査。
09.26　Ｂ区、遺構配置図作成。
09.28　作業員終了。発掘器材中山遺跡へ搬出。
10.03　遺構実測終了。
10.04　残りの土層断面図作成。板平遺跡の調査終了。

第４節　整理作業及び報告書作成

整理作業は、礫と遺物に分けて行った。

礫洗浄・注記・計測・接合等については中山遺跡発掘調査事務所にて平成18年12月～２月に実施した。

遺物の洗浄・注記・接合・実測・拓本・トレース等及び報告書作成は平成18年10月～平成19年11月の期間において埋蔵文化財センター本館で実施した。平成18年10月～11月に遺物の洗浄・注記を行い、12月～平成19年３月の間に接合を行った。その後４月から実測・拓本・遺物計測を行い、８月からはトレースを開始した。またそれと併行して図面レイアウト、文章作成を行い、11月には遺物の写真撮影を行った。


C D E F G H I J K L M N O P Q R
3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25
A区
A－1
A－2
A－3
A
A′
C′
C
C－1
C－2
C－3
C－4
C区
D
D′
Y＝57000
X＝－61300
B－P
B－1
B－2
B－3
B－4
B－5
B－6
B－7
B－8
B区
E
E′
C′
C
は土層断面実測箇所
（第４・５図）
X＝－61400
Y＝57050
0
50m
1/1,000

第６図　グリッド配置図

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　１次調査の概要

調査範囲は、高速道路本線部分と側道及びプラント建設予定地の21,960㎡である。調査区を便宜的にＡ～Ｃ区とした。現況はＡ区が果樹畑、Ｂ・Ｃ区が耕作地である（第７図）。

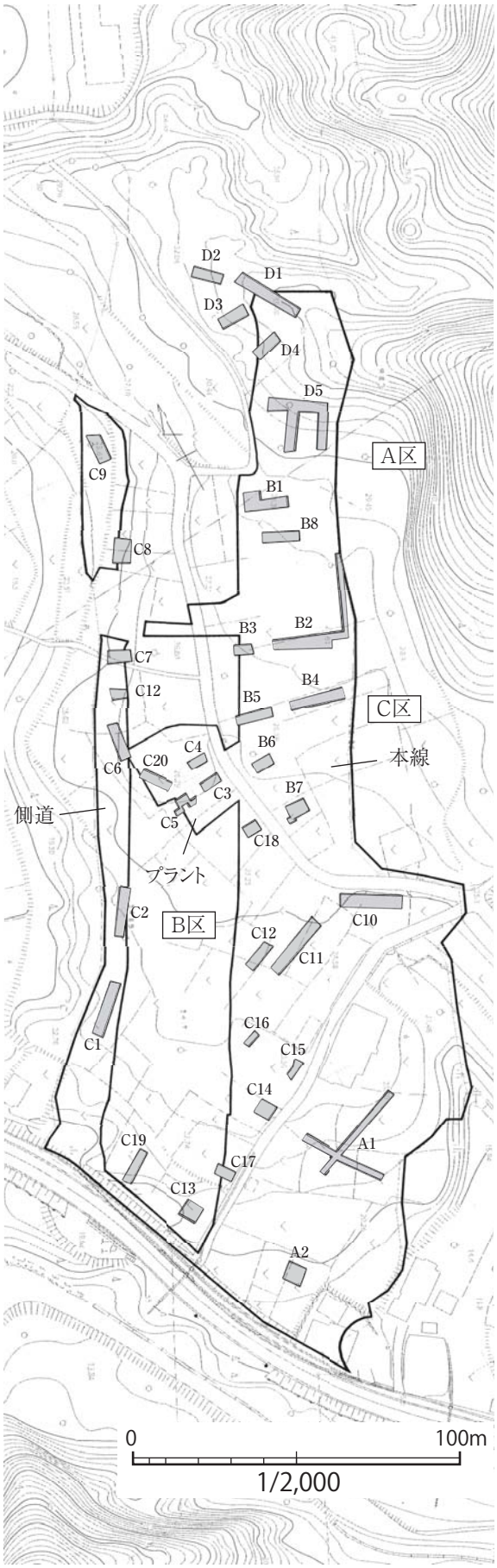
第７図のようにトレンチを設定した後、重機で表土を除去後、作業員による精査・掘削を行なった。

Ａ区では、尾根上のＤ１トレンチ（以下Ｄ１Ｔと記す）で表土下に第Ⅷ層が見られた。Ｄ４Ｔから高坏脚部が出土したが、遺構は検出できなかった。下層の掘削の結果、Ｂ８Ｔの第Ⅷ層下位からは旧石器時代と考えられる流紋岩製の二次加工剥片３（第９図）が１点出土した。

Ｂ区では、第Ⅱ層が残っている部分もあるが、大部分では表土下に第Ⅳ層が堆積しており、南端ではその下ですぐに礫層（第Ⅸ層）に達した。Ａ２Ｔの第Ⅰ層よりチャートの剥片が１点出土したが、その他の遺構・遺物は確認できなかった。西側のＣ１・２・６・７・９・12Ｔの側道部分については、ほとんどの土に小礫が混じり、遺構・遺物は確認できなかった。その他の場所においては、Ｃ10ＴはＣ区とつながる谷状地形の落ち込みで、第２層の礫を多く含む層よりチャートの剥片や土師器の小片が出土した。Ｃ11Ｔの第Ⅱ層から弥生～古墳時代の高坏等土器片が多数出土したが、遺構は検出できなかった。

Ｃ区では、現況は平場であるが、旧地形はＢ２Ｔ・Ｂ４Ｔの土層より調査区東側の山裾に沿って谷が南北に走り、西に向かって緩やかな上り斜面であったと思われる。遺構検出を第Ⅲ層上面で行なったところ、Ｂ５Ｔから縄文時代早期と考えられる集石遺構ＳＩ３、Ｂ７Ｔから古墳時代の竪穴住居跡ＳＡ10を検出した。

これらのことより、第６図のように10,600㎡について全面表土を剥ぎ、２次調査を実施した。次節以下は１・２次調査記録の詳細である。



第７図　１次調査トレンチ配置図

第２節　旧石器時代の遺物

１　概要

トレンチを設定（第10図）し、ＡＴ下位の第Ⅷ層を掘り下げたが、礫群などの遺構は全く確認できなかった。

遺物は41点と少数だが、Ａ区とＣ区の境界付近の、谷部への落ち込み際の第Ⅷ層でまとまって出土した。土層（第４図）から判断して、流れ込みの可能性が高い。

２　遺物

第Ⅷ層より出土した剥片や石核の石材はホルンフェルスと流紋岩の２種類である。流紋岩製18点、ホルンフェルス製23点出土したが、製品は出土しなかった。

流紋岩は淡黄白色を呈し、表面の風化が進んでいるため流理構造は明確ではない。新鮮な面は黒色緻密。五ヶ瀬川流域の旧石器時代に多用される石材と同種であると考える。他の時代にはほとんど見られない。また、ホルンフェルスはやや光沢のある黒色を呈し、風化はさほど進まず緻密である。時期は確定できないが、この石材の剥片が谷部分の埋没土から多量に出土している。

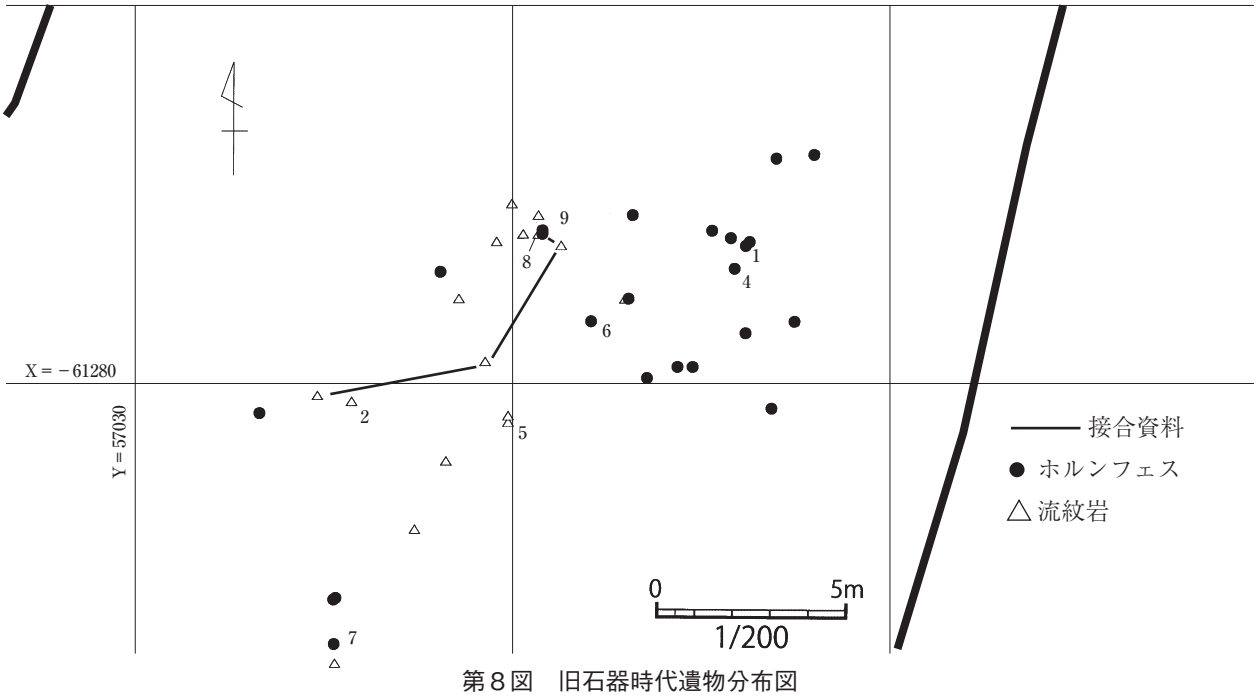
それらの遺物で接合を試みたが、剥片同士が数点接合したのみで、石核との接合は確認できなかった（第８図）。

以下、器種ごとに遺物の説明をする。

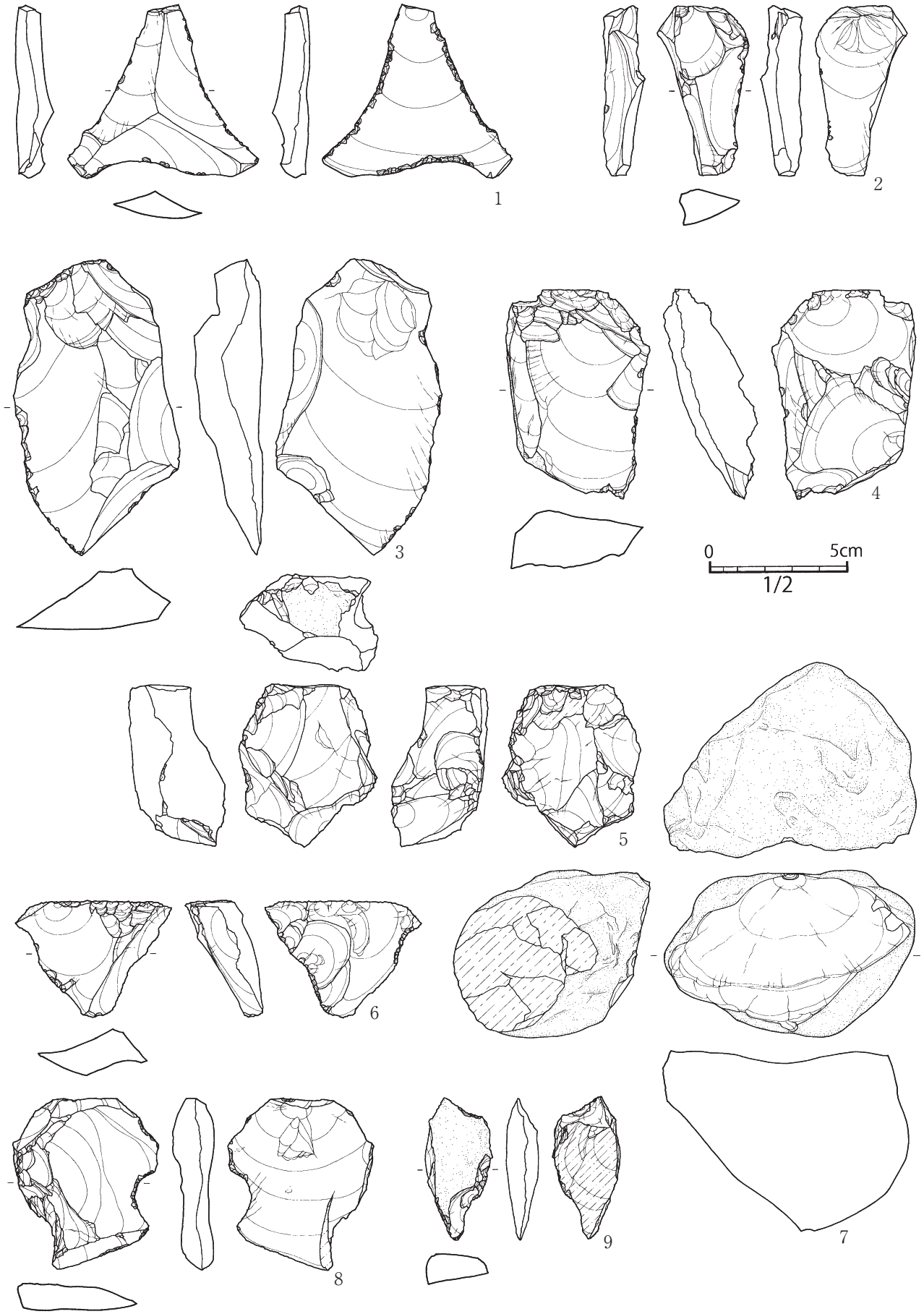
第９図、１～３は二次加工剥片。１はホルンフェルス製でほぼ正三角形の形状を呈し、その三辺に微細剥離が見られるが、用途は不明である。２と３は流紋岩製で縦長剥片素材の二次加工剥片である。４～７は石核である。５は流紋岩製、４･６･７はホルンフェルス製。４～６は頭部調整後、ランダムに剥片を剥離している。８は流紋岩製、９はホルンフェルス製の剥片である。

第3表　旧石器時代石器観察表

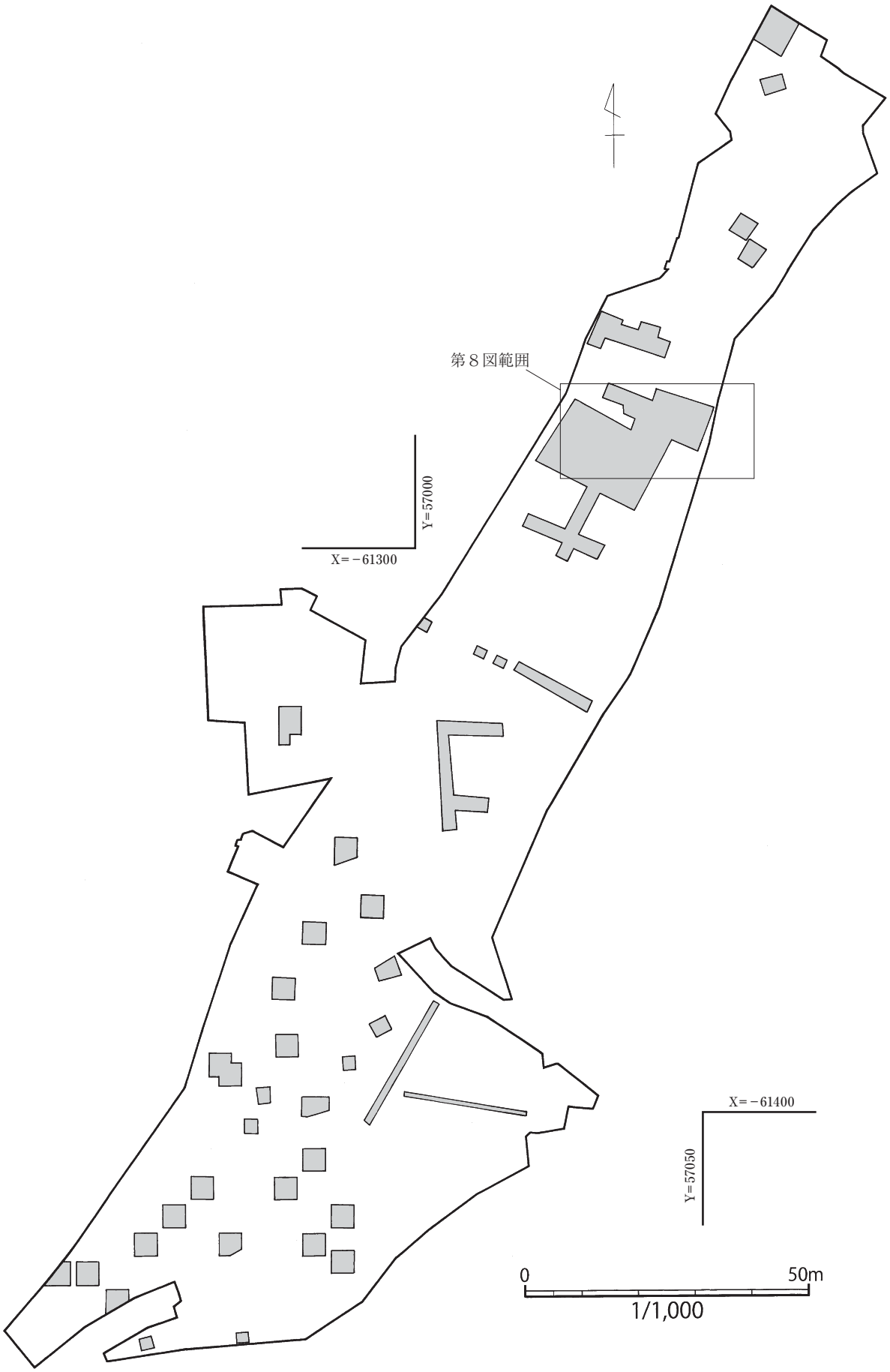
No.	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	
1	二次加工剥片	ホルンフェルス	A−3	6.3	6.9	1.3	25.7	
2	二次加工剥片	流紋岩	C−1	6.2	3.3	1.5	22.3	
3	二次加工剥片	流紋岩	B8tr	10.8	5.8	2.4	131.8	1次調査時に出土
4	石核	ホルンフェルス	A−3	7.7	5.3	3.4	98.0	
5	石核	流紋岩	C−1	5.9	5.1	3.5	92.0	
6	石核	ホルンフェルス	A−3	4.3	5.7	2.9	34.2	
7	石核	ホルンフェルス	C−1	6.1	9.2	6.6	449.0	
8	剥片	流紋岩	A−3	6.3	5.3	1.0	38.8	
9	剥片	ホルンフェルス	A−3	5.2	2.4	1.1	14.5	



第８図　旧石器時代遺物分布図



第９図　旧石器時代石器実測図



第 10 図　旧石器時代調査トレンチ配置図

第３節　縄文時代早期の遺構と遺物

出土層位や遺構・遺物等より、縄文時代は大きく3つの時期を確認できた。縄文時代早期、後期、晩期の３時期である。第３節～第５節にそれぞれの各時期の詳細を記述する。

縄文時代早期の調査の概要

表土を重機で剥ぎ、遺構検出を行っていくと、C区において第Ⅲ層（暗褐色土）から礫が多量に検出された。第Ⅲ層は縄文時代早期の遺物を含んでいた。今回の調査では礫が１～1.5m以内ぐらいの範囲に、周辺より密に集まっている状態を「集石遺構」と認定し、広範囲に広がる「散礫」と区別した。この結果、集石遺構を20基、散礫を２群確認できた。

また、第Ⅲ層～Ⅵ層で切り合った炉穴を５群（20基）、単独11基、の計31基検出した。

１　散礫（第11図）

散礫構成礫のほとんどは砂岩で、遺跡の近くを流れる富高川の河原で今日でも見かける河原石である。散礫構成礫の総重量は、992.6kgで、集石遺構構成礫の総重量1,206.1kgを加えると、2,198.7kg（約２ｔ）の礫が遺跡の外の河原、または付近の段丘礫層から持ち込まれていると考えられる。

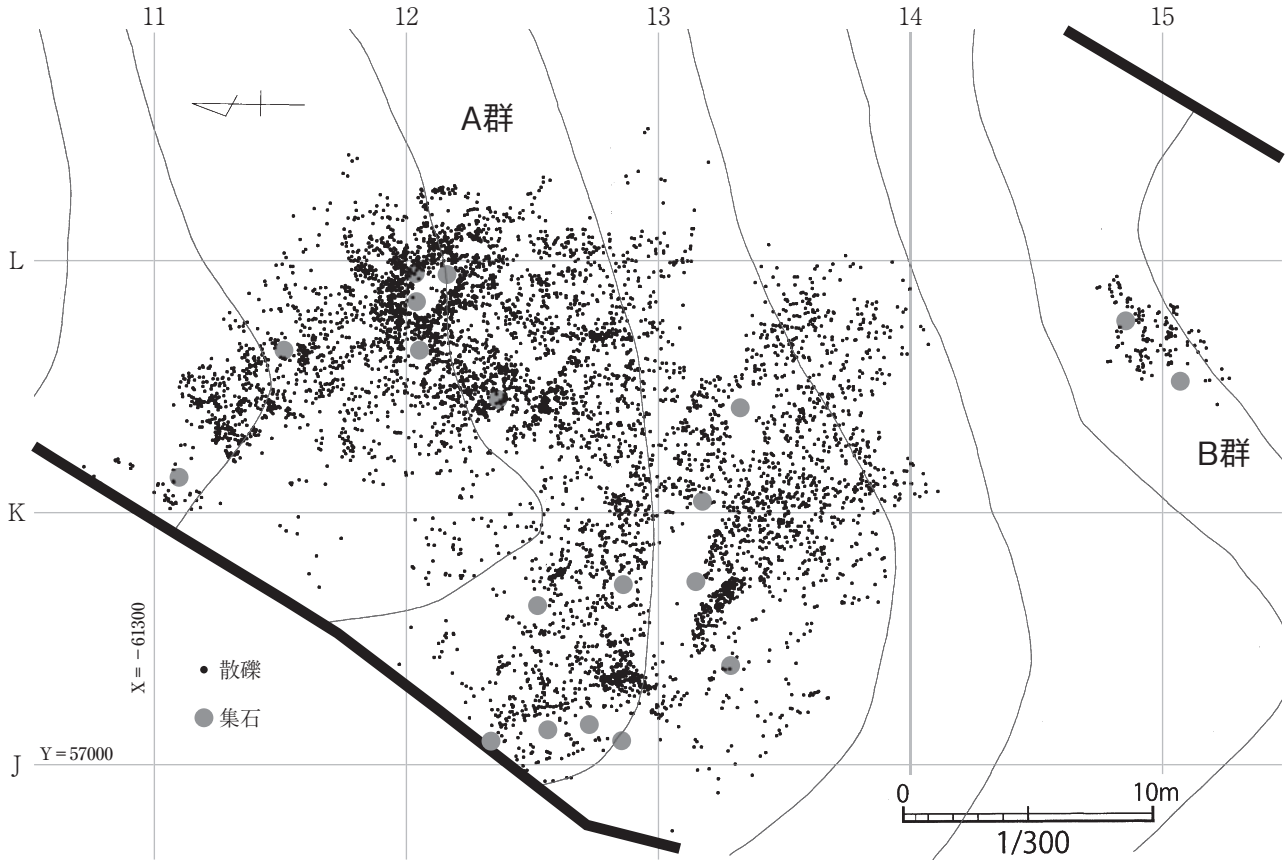
散礫Ａ群

C-１区～C-３区の第Ⅲ層で、半径約16mの広範囲にわたり検出された。散礫を構成する礫はほとんどが破砕しており、石材は砂岩で、ごくわずかにホルンフェルスが見られた。礫の分布は疎密があり、非常に密集している部分と疎な部分が確認できた。散礫の下より、集石遺構、炉穴、土坑を検出している。

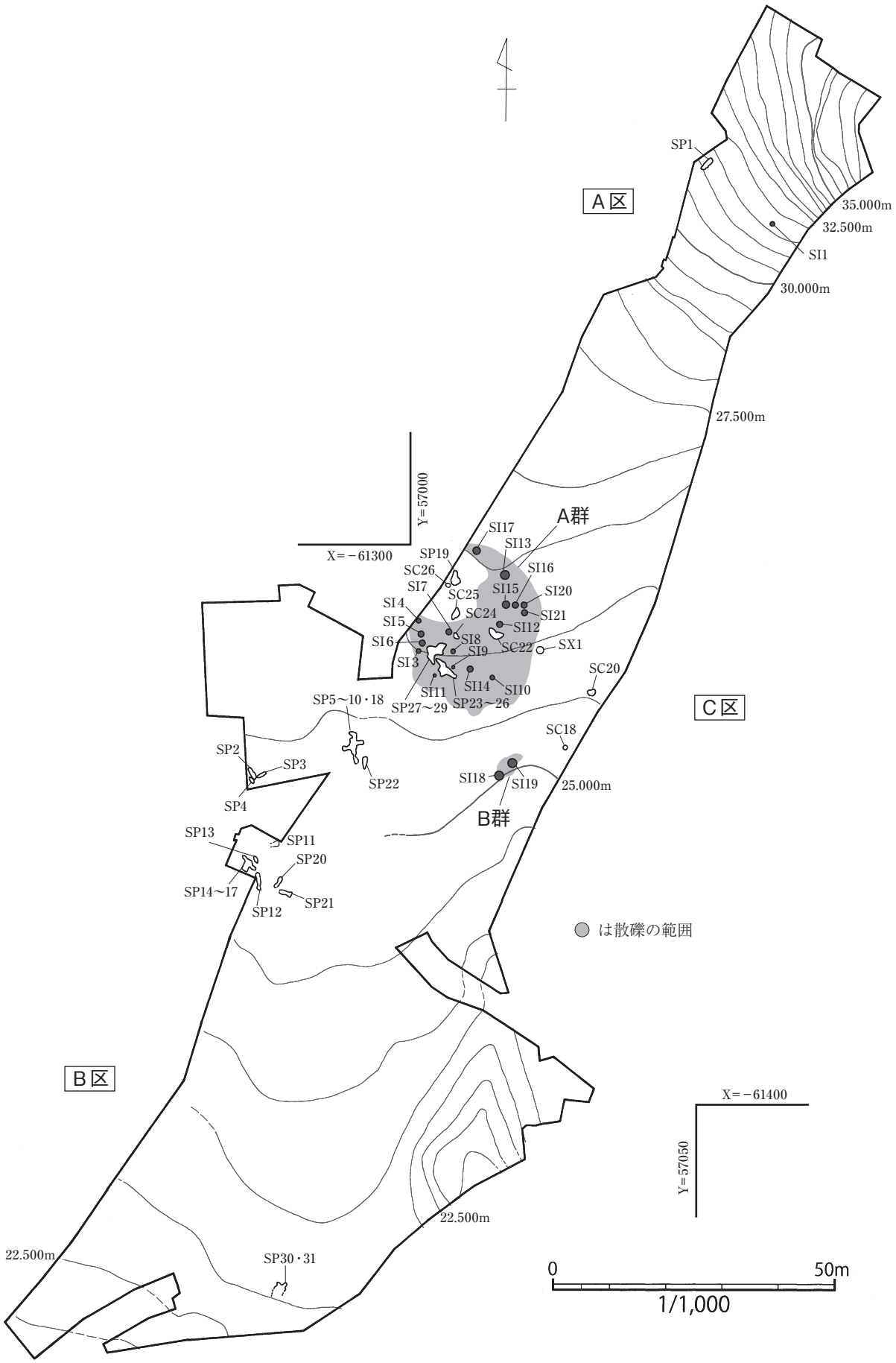
散礫の範囲については、B-P区付近において、集石遺構に使用したと思われる赤化した礫が表土中より多数出土しており、幾分西側に広がる可能性がある。

散礫Ｂ群

C-３区の東側、第Ⅱ層で検出した。半径約４ｍ狭い範囲ではあるが、熱を受け破砕・赤化した礫が広がる。ＳＩ19・ＳＩ20に伴うものと考えられる。



第 11 図　散礫分布図



第 12 図　縄文時代遺構配置図

２　集石遺構（ＳＩ　第４表）

主にＣ区の第Ⅲ層を中心に、集石遺構を20基検出している。礫はほとんどが砂岩で破砕している。配石を持つものが全体の半数以上を占める。配石は約30cm大の扁平な礫数個を主体として配置している。

次のＡ～Ｃ・Ａ′類に分類し、整理した。

Ａ類…掘り込みがあり、配石の有るもの（11基）
Ｂ類…掘り込みがあるが、配石の無いもの（４基）
Ｃ類…掘り込みが無いもの（３基）
Ａ′類…掘り込みが深く、配石の有るもの（２基）

この分類に従い、集石遺構の詳細を記述する。

なお、実測の過程で上部礫と配石の中心がずれている場合、断面線を配石の中心に合わせて移動している。その結果、ＳＩ５・８・10・12・13・18・19・20は上部礫と配石の断面線が一致していないため、図化していない部分がある。

＜Ａ類＞（第13・14図）

ＳＩ３

１次調査時にＢ３Ｔで検出。検出時から配石が露出しており、上部を削平されている。礫はほとんど熱を受けて破砕、赤化が見られる。配石は中央に40cm大の礫を置き、その周りに掘り込みに沿って斜めに大きめの礫を配置している。

ＳＩ５

ＳＩ４、６と隣接している。南西部を後世のピットに切られている。配石は20cm大の扁平な礫を掘り込みの底に敷き詰める配置をしている。

ＳＩ６

ＳＩ３、５と隣接している。配石は40cm大の扁平な礫を中心に配置している。中心の礫は赤化しており、その礫の下に15cm程度の礫を２枚並べている。

ＳＩ７

配石は10～30cm大の礫を掘り込み面に配置している。礫は熱を受けて破砕している。

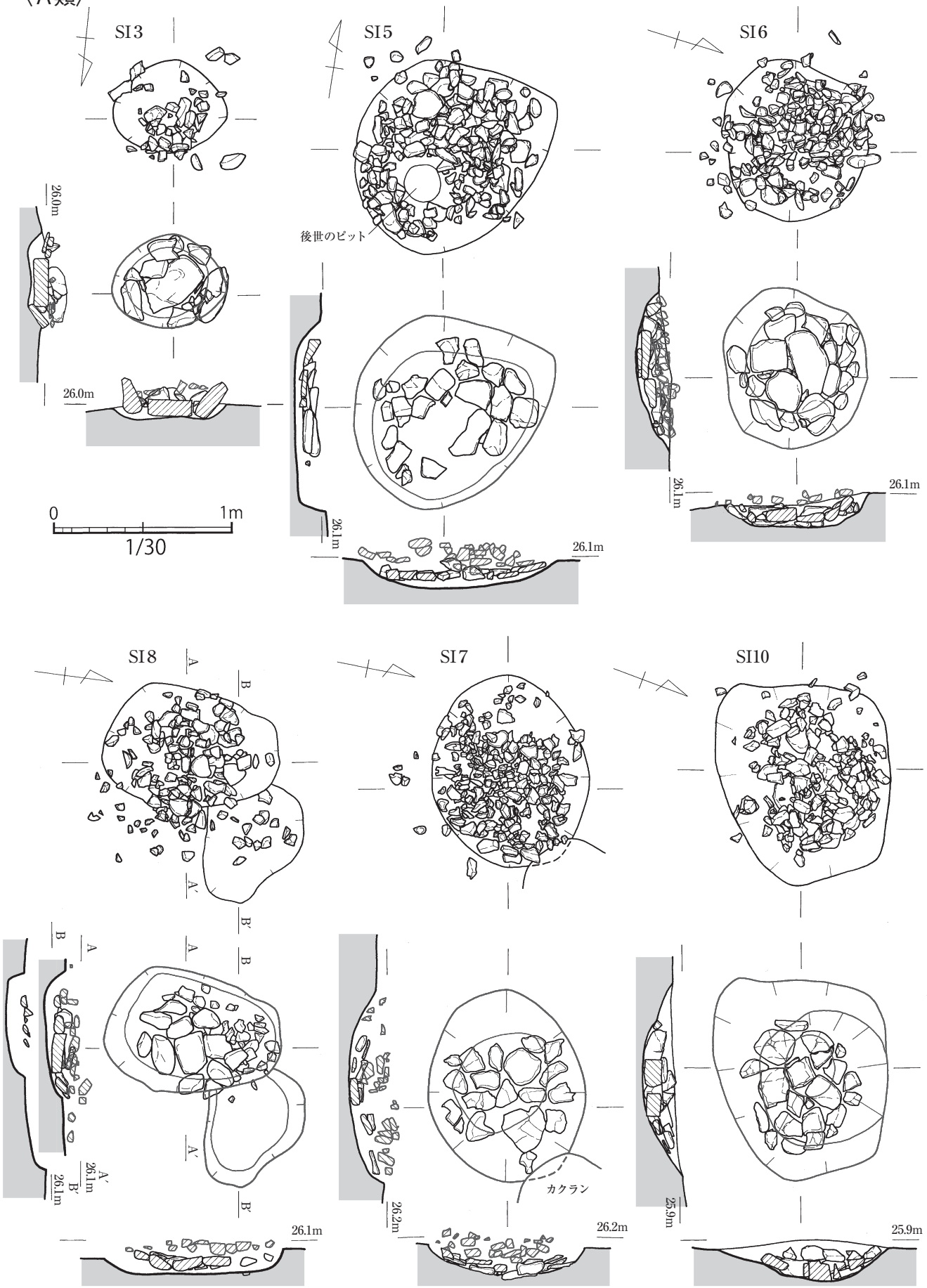
ＳＩ８

掘り込みが、浅い円形の落ち込みを切っている。礫はほとんどが赤化している。配石は30cm大を中心に扁平な礫を配置しており、配石の下から小礫の集まりを検出した。

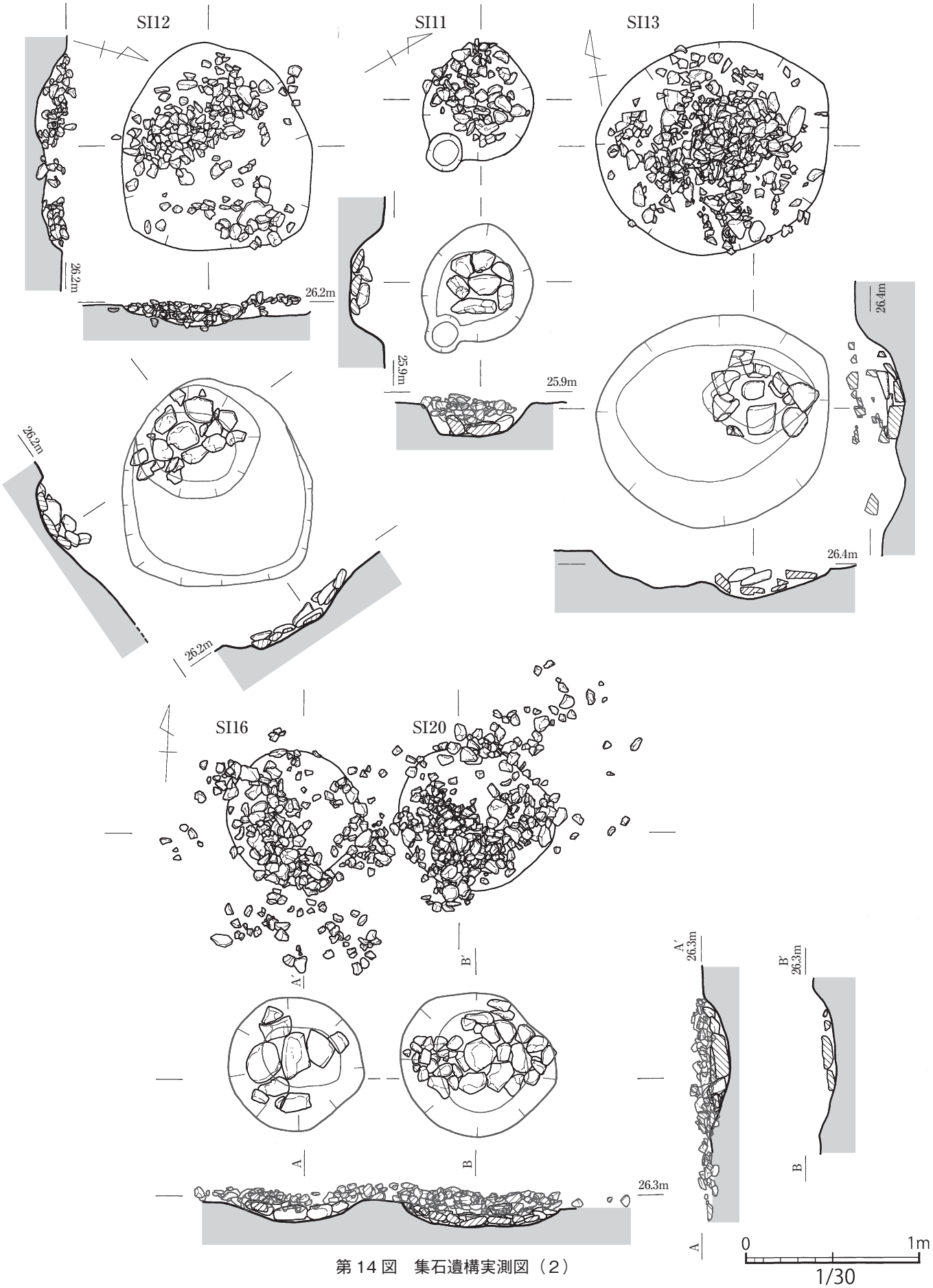
第４表　縄文時代早期集石遺構観察表

遺構	出土位置〔グリッド〕	検出面〔層〕	集石範囲〔cm〕		掘り込み〔cm〕			上部礫密度	配石有無	分類	礫重量〔kg〕	
			長径	×短径	長径	×短径	×深さ				上部礫	配石
SI1	A−2	Ⅷ	57	× 54	90	× 63	× 3	疎	×	B	−	0
SI3	C−2	Ⅲ	66	× 60	66	× 60	× 9	疎	○	A	0	36.0
SI4	C−2	Ⅲ	93	× 75	81	× 78	× 12	普	×	B	26.15	0
SI5	C−2	Ⅲ	114	×105	123	× 99	× 18	密	○	A	23.8	48.5
SI6	C−2	Ⅲ	105	× 90	93	× 78	× 18	普	○	A	32.5	31.22
SI7	C−2	Ⅲ	99	× 81	108	× 87	× 15	普	○	A	51.65	27.8
SI8	C−2	Ⅲ	102	× 78	99	× 69	× 15	疎	○	A	31.25	−
SI9	C−2	Ⅲ	66	× 45	−	−	−	疎	×	C	25.5	0
SI10	C−3	Ⅲ	90	× 81	126	× 96	× 15	普	○	A	45.3	31.36
SI11	C−3	Ⅲ	63	× 48	69	× 63	× 20	普	○	A	27.9	0
SI12	C−2	Ⅲ	120	×120	129	×105	× 12	密	○	A	31.35	15.6
SI13	C−2	Ⅲ	123	×117	126	×114	× 24	密	○	A	50.75	19.58
SI14	C−2	Ⅲ	165	×105	117	×117	× 5	疎	×	B	29.4	0
SI15	C−2	Ⅲ	135	× 90	−	−	−	疎	×	C	29.25	0
SI16	C−2	Ⅲ	150	×138	78	× 78	× 9	密	○	A	33.1	15.7
SI17	C−2	Ⅲ	138	×120	123	×108	× 5	疎	×	B	54.4	0
SI18	C−3	Ⅱ	150	×126	150	×120	× 42	密	○	A'	157.2	15.6
SI19	C−3	Ⅱ	129	×123	144	×123	× 45	密	○	A'	156.5	65.3
SI20	C−2	Ⅲ	165	× 90	90	× 78	× 12	密	○	A	37.85	35.5
SI21	C−2	Ⅲ	123	×105	−	−	−	普	×	C	20.1	0
										計	863.95	198.64

〈A類〉



第 13 図　集石遺構実測図（1）



第 14 図　集石遺構実測図（2）

ＳＩ10

配石は20㎝大の比較的厚めの礫を掘り込みに配置している。

ＳＩ11

上部礫は下方で密集している。埋土中に少量の炭化物が見られる。配石は約20cm大の砂岩の円礫を配置している。表面は熱を受けて変色し、破砕・剥離したりしている。

ＳＩ12

礫は熱を受け、破砕・赤化が著しい。北側に攪乱を受けており、配石も一部失われている。中央に20cm大の円礫を据え、その周りに小さめの礫を配置している。熱を受けておりヒビや剥離が見られる。配石直上の埋土中の炭化物の^{14}Ｃ年代測定では9,280±40年BP、樹種同定では広葉樹との結果が出ている。

ＳＩ13

破砕した礫が密に集まっている。配石の位置が、礫の集中部より東にずれており、上部礫は西の窪みに流れたものか、上部礫を別の集石遺構に二次利用した可能性がある。配石は20㎝程度の扁平な礫が配置され、ヒビや剥離が見られる。

ＳＩ16

礫は熱を受け、破砕・赤化しているものが多い。東側は礫が少ない。配石は砂岩で、扁平な円礫と角礫を使用し、熱を受けておりヒビや剥離がみられる。中央に核になる礫を置き、周りを囲み壁に沿わすように配置している。

ＳＩ20

ＳＩ16と隣接している。礫は熱を受けて破砕・赤化がみられる。北東側は礫が少ない。配石は中央に40cm大の礫を据え、周りに東側に大きめの円礫を、西側に小さな礫を配置している。貝殻条痕文土器の胴部片13（第22図）が一点出土している。

＜Ｂ類＞（第15図）

ＳＩ1

Ａ−２区斜面地、第Ⅷ層で検出。掘り込みはあるが削平を受け非常に浅い。埋土に炭化物をごく少量含む。

ＳＩ4

掘り込みは浅く、礫は10㎝弱のものが多く、ほとんど赤化している。北西と南東側では掘り込みの下部から礫が出土している。

ＳＩ14

掘り込みは非常に浅く、30cm大の礫の周囲に砂岩の小破砕礫が集まっている。早期の土器片の胴部10と底部付近12（第22図）が出土している。

ＳＩ17

散礫Ａ群の北端で検出し、砂岩の破砕礫が集まる。掘り込みは浅く、埋土に炭化物を含まない。

＜Ｃ類＞（第15図）

ＳＩ9

掘り込みを持たず、礫が集中している。炭化物がまばらに広がる。

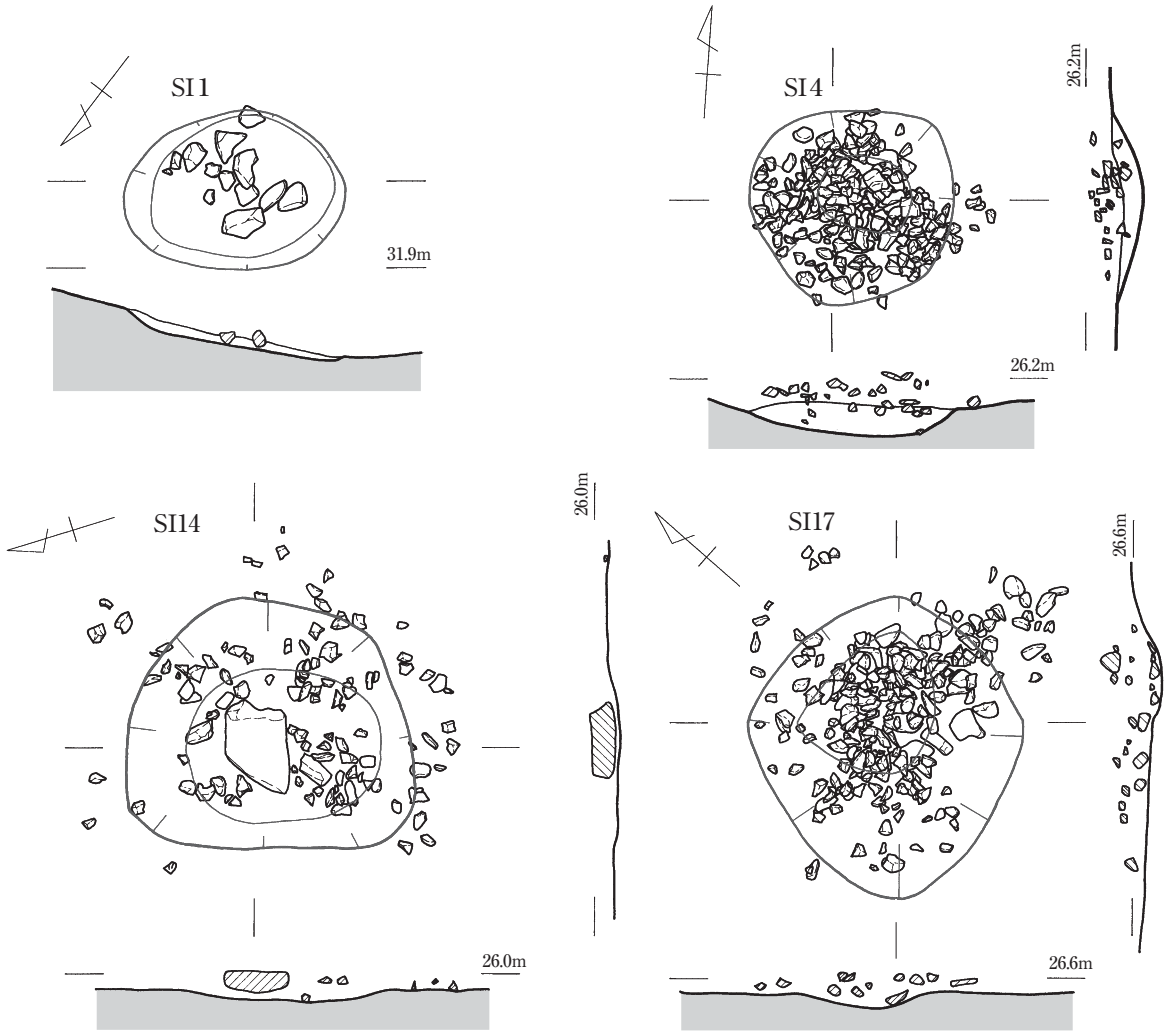
ＳＩ15

ＳＩ16、20、21に隣接している。掘り込みはなく、礫はほとんど破砕している。炭化物が微量に広がる。早期の土器片の頸部11（第22図）が出土している。

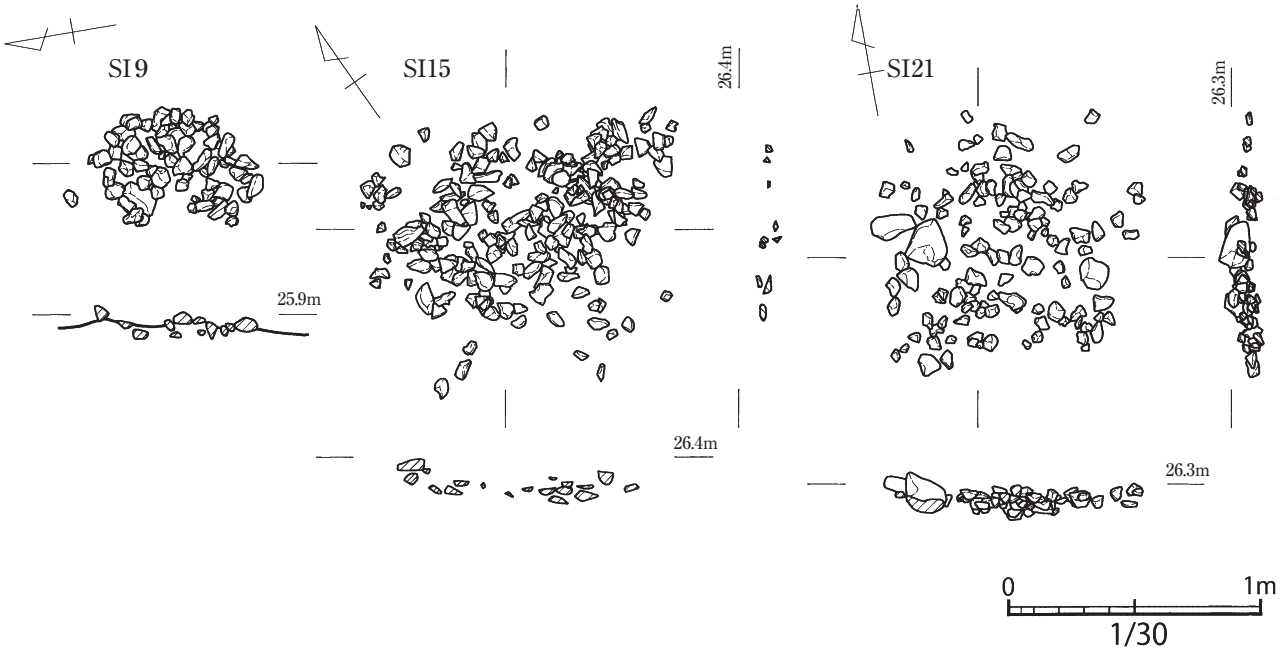
ＳＩ21

ＳＩ20の南に位置する。礫は疎らで掘り込みは持たない。破砕・赤化しているものは少ない。

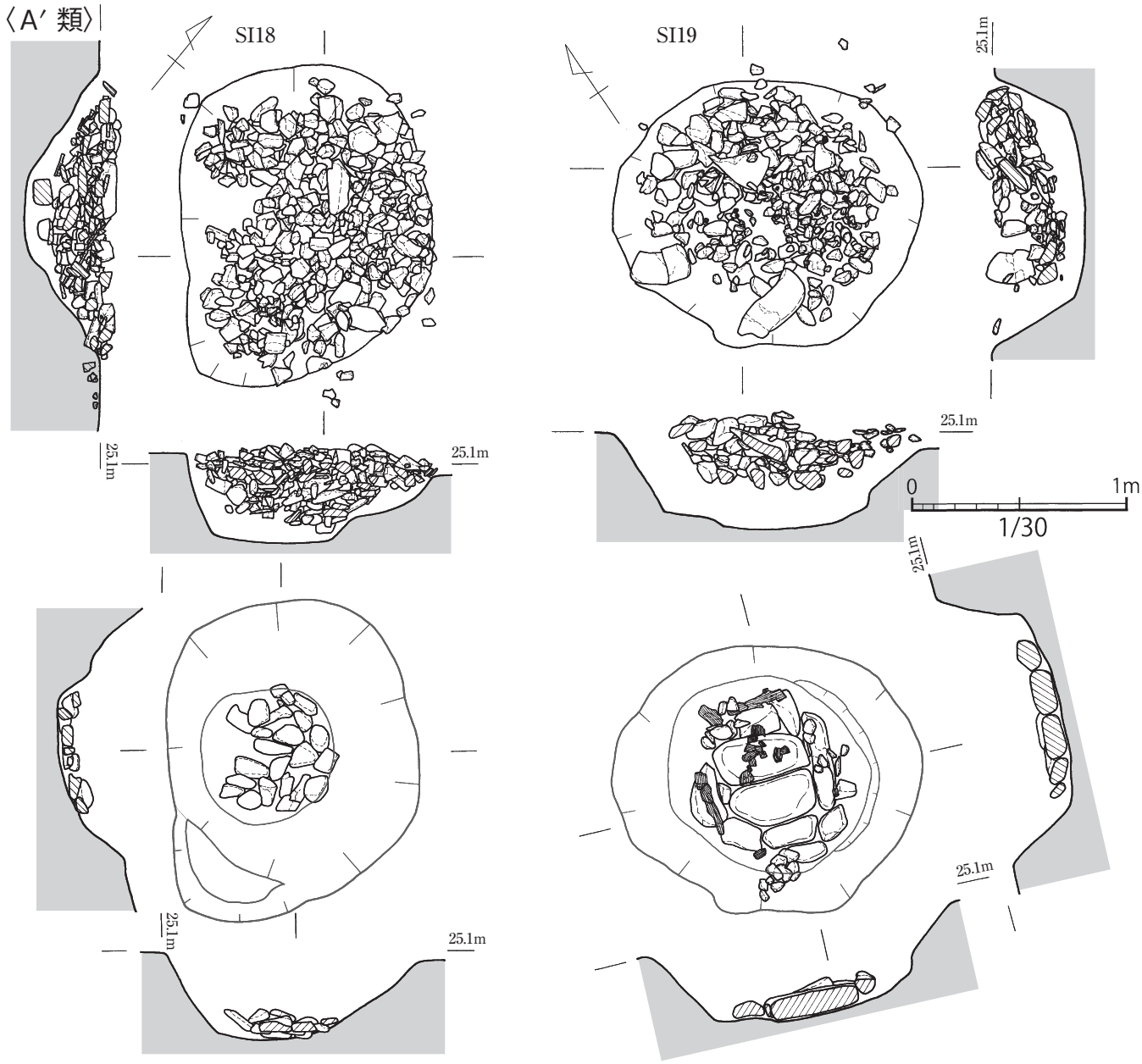
〈B類〉



〈C類〉



第 15 図　集石遺構実測図（3）



第 16 図　集石遺構実測図（4）

＜A´類＞（第16図）

ＳＩ18

散礫Ｂ群、第Ⅱ層で検出。Ａ～Ｃ類の集石遺構とやや離れた場所に位置し、規格が異なる。掘り込みが40㎝と深く、礫構成は砂岩を中心とするが、Ａ～Ｃ類より大きさが一回り以上大きい礫を使用しており、角礫も多いが破砕礫は少ない。配石は20m大の礫を底面に並べている。埋土中から炭化物を多量に確認した。埋土中の炭化物の^{14}Ｃ年代測定では8,215±25年BP、樹種同定ではコナラ属コナラ節との結果が出ている。

ＳＩ19

SI18と同様掘り込みが深く、規格が異なる。配石は長径約50cmの細長い巨大な礫を二列並べ、その周りを囲むように30cm大の礫を配置している。熱を受けて変色している様子は見られない。埋土中から炭化物が多量に確認でき、大きな炭化材については配石との間に埋土を1cm弱はさみ検出している。また炭化材の周りには褐色の粘質土が必ず見られ、配石の下にも若干炭化物が見られた。埋土中の炭化材の^{14}Ｃ年代測定では8,180±40年BP、樹種同定ではコナラ属コナラ節との結果が出ている。

3　炉穴（ＳＰ　第５表）

Ｂ・Ｃ区を中心に第Ⅲ層～Ⅵ層で、切り合った炉穴を５群（20基）、単独11基、の計31基を検出した。その多くが第Ⅵ層（ＡＴ）を床面とし、第Ⅵ層に焼土が広がっていた。また、２基の土坑をつなぐブリッジ部が残ったと思われる壁面の張り出しがが見られた。

炉穴同士が切り合っているものをＡ類、単独のものをＢ類として整理する。

＜Ａ類＞（第17～19図）

ＳＰ５～10・18

第Ⅳ層で検出し、すべての床面は第Ⅵ層で焼土面が広がる。ＳＰ５～７・18が長軸を南北にして連なり、その中心付近をＳＰ８・10が東西に直交する形である。ＳＰ８→５→６→７の順で作られている。ＳＰ９は削平が著しくかろうじて床面の焼土面が存在しているのみであるが、上記の炉穴と距離も近く床面が同じ第Ⅵ層であることからＳＰ８と連結した炉穴であると考えている。ＳＰ10はＳＰ５・18を切っているが、ＳＰ６～８との先後関係は不明である。ＳＰ18埋土中に貝殻条痕文の土器片14（第22図）が出土している。ＳＰ７・10・18の焼土面の先がくぼんでいる。

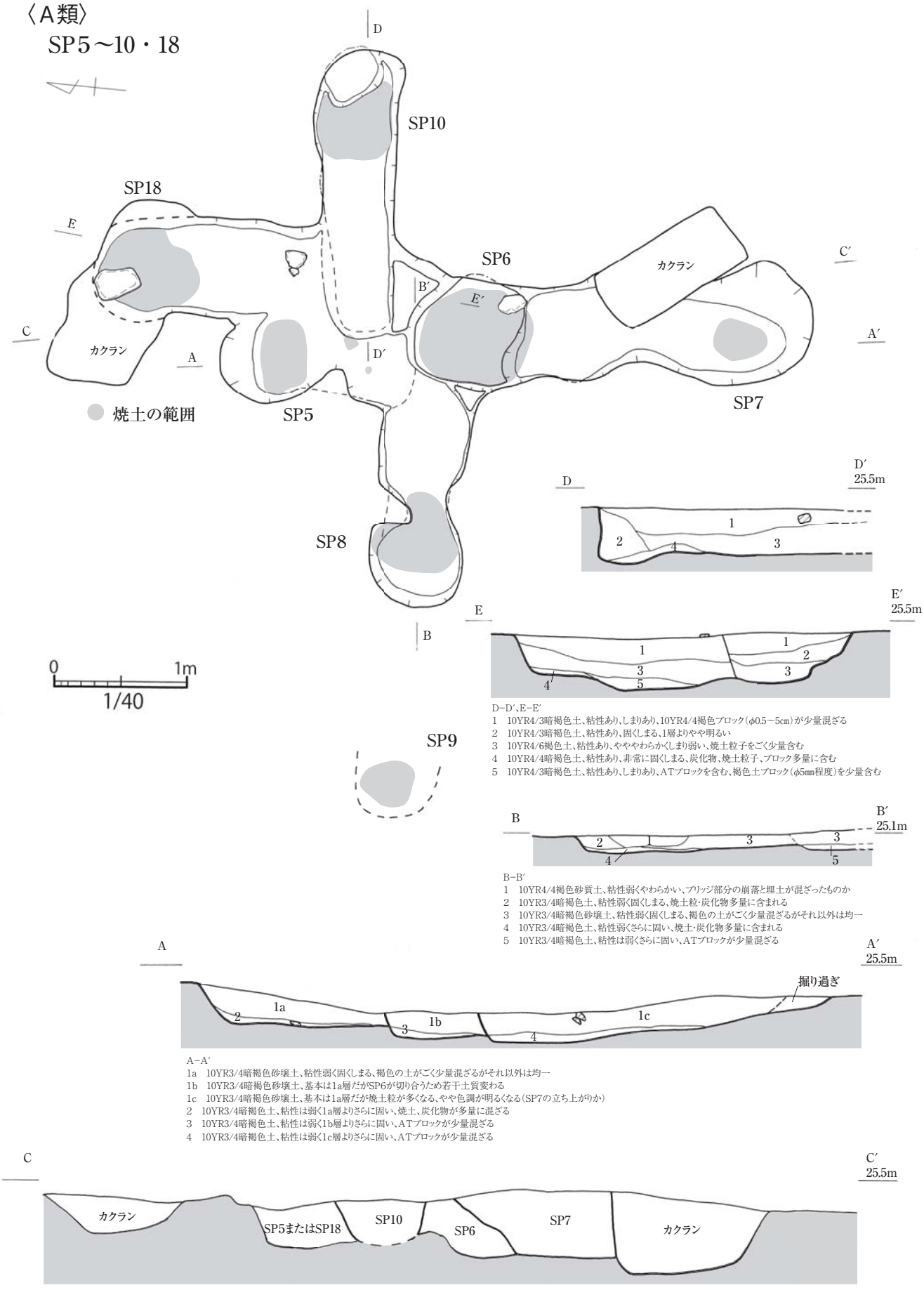
ＳＰ23～26

Ｃ-２区、散礫Ａ下で検出し、床面は第Ⅵ層（ＡＴ）である。一部、１次調査のトレンチにかかっていたが１次調査では検出できなかった。埋土には焼土や炭化物、礫等を含んでいる。ＳＰ25とＳＰ26は長軸が南北で並列し、ＳＰ23と24が東西に直交する形である。ＳＰ26→24→23の順で作られていることがわかるが、ＳＰ25に関してはＳＰ23の以前であることが確認できただけで、その他との先後関係は不明。ＳＰ24の埋土中より深鉢の底部15（第22図）が出土した。埋土１層の中の炭化種子を自然科学分析により種実同定したところイネの果実であることが分かった。ただし埋土１層は表土直下であること、１次調

第５表　縄文時代早期炉穴観察表

No.	出土位置〔区〕	検出面〔層〕	遺構規模〔m〕 長軸	×短軸	×深さ	床面〔層〕	焼土面有無	分類 A・B
SP5	B−P	Ⅳ	1.8	×0.6	×0.2	Ⅵ	×	A
SP6	B−P	Ⅳ	1.8	×0.6	×0.2	Ⅵ	○	A
SP7	B−P	Ⅳ	2.2	×0.6	×0.2	Ⅵ	○	A
SP8	B−P	Ⅳ	2.2	×0.7	−	Ⅵ	○	A
SP9	B−P	Ⅳ	2.2	×0.6	−	Ⅵ	○	A
SP10	B−P	Ⅳ	2.2	×0.6	×0.3	Ⅵ	○	A
SP18	B−P	Ⅳ	2.2	×0.8	−	Ⅵ	×	A
SP14	B−1	SA3下	1.6	×0.8	×0.1	Ⅵ	○	A
SP15	B−1	SA3下	1.4	×0.6	×0.1	Ⅵ	○	A
SP16	B−1	SA3下	1.6	×0.7	×0.1	Ⅵ	○	A
SP17	B−1	SA3下	1.3	×0.7	×0.1	Ⅵ	○	A
SP23	C−2	散礫A下	2.2	×0.6	×0.4	Ⅵ	○	A
SP24	C−2	散礫A下	2.2	×0.7	×0.2	Ⅵ	○	A
SP25	C−2	散礫A下	2.1	×0.6	×0.2	Ⅵ	○	A
SP26	C−2	散礫A下	2.8	×0.8	×0.2	Ⅵ	○	A
SP27	C−2	散礫A下	1.8	×0.6	×0.2	Ⅵ	○	A
SP28	C−2	散礫A下	2.9	×0.6	×0.4	Ⅵ	○	A
SP29	C−2	散礫A下	2.1	×0.8	×0.3	Ⅵ	○	A
SP30	B−8	SA11下	−	−	−	Ⅷ	○	A
SP31	B−8	SA11下	−	−	−	Ⅷ	○	A
SP1	A−2	Ⅳ	2.6	×0.9	×0.3	Ⅵ	○	B
SP2	B−1	Ⅵ	2.4	×0.8	×0.0	Ⅵ	○	B
SP3	B−1	Ⅵ	1.7	×0.5	×0.0	Ⅵ	○	B
SP4	B−1	Ⅵ	1.4	×0.6	×0.1	Ⅵ	×	B
SP11	B−1	Ⅳ	1.2+α	×0.8	×0.1	Ⅵ	○	B
SP12	B−1	Ⅳ	2.8+α	×0.8	×0.3	Ⅵ	○	B
SP13	B−1	SA3下	1.2	×0.9	−	Ⅵ	○	B
SP19	C−2	Ⅲ	2.6	×1.0	×0.3	Ⅵ	○	B
SP20	B−5	Ⅳ	2.2	×0.8	×0.2	Ⅵ	○	B
SP21	B−5	Ⅳ	2.4	×0.5	×0.3	Ⅵ	○	B
SP22	C−3	Ⅳ	2.2	×0.8	×0.3	Ⅵ	○	B

〈A類〉
SP5～10・18

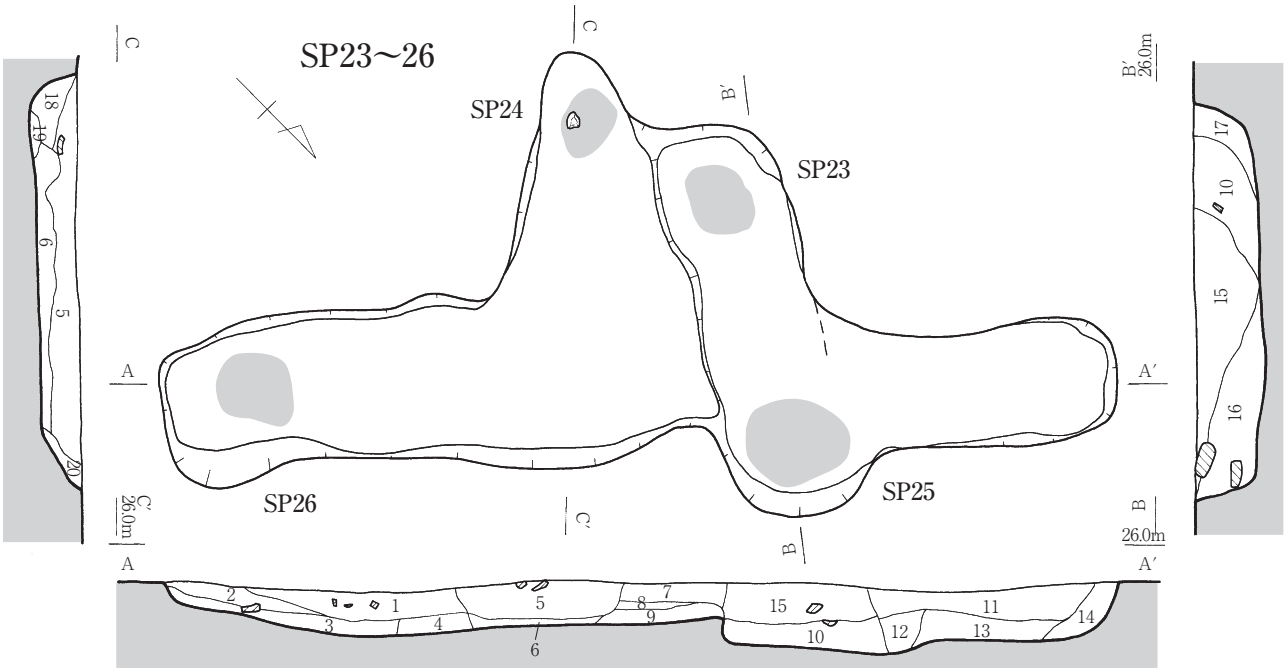


D−D′、E−E′
1　10YR4/3暗褐色土、粘性あり、しまりあり、10YR4/4褐色ブロック（φ0.5～5cm）が少量混ざる
2　10YR4/3暗褐色土、粘性あり、固くしまる、1層よりやや明るい
3　10YR4/6褐色土、粘性あり、やややわらかくしまり弱い、焼土粒子をごく少量含む
4　10YR4/4暗褐色土、粘性あり、非常に固くしまる、炭化物、焼土粒子、ブロック多量に含む
5　10YR4/3暗褐色土、粘性あり、しまりあり、ATブロックを含む、褐色土ブロック（φ5mm程度）を少量含む

B−B′
1　10YR4/4褐色砂質土、粘性弱くやわらかい、ブリッジ部分の崩落と埋土が混ざったものか
2　10YR3/4暗褐色土、粘性弱く固くしまる、焼土粒・炭化物多量に含まれる
3　10YR3/4暗褐色砂壌土、粘性弱く固くしまる、褐色の土がごく少量混ざるがそれ以外は均一
4　10YR3/4暗褐色土、粘性弱くさらに固い、焼土・炭化物多量に含まれる
5　10YR3/4暗褐色土、粘性は弱くさらに固い、ATブロックが少量混ざる

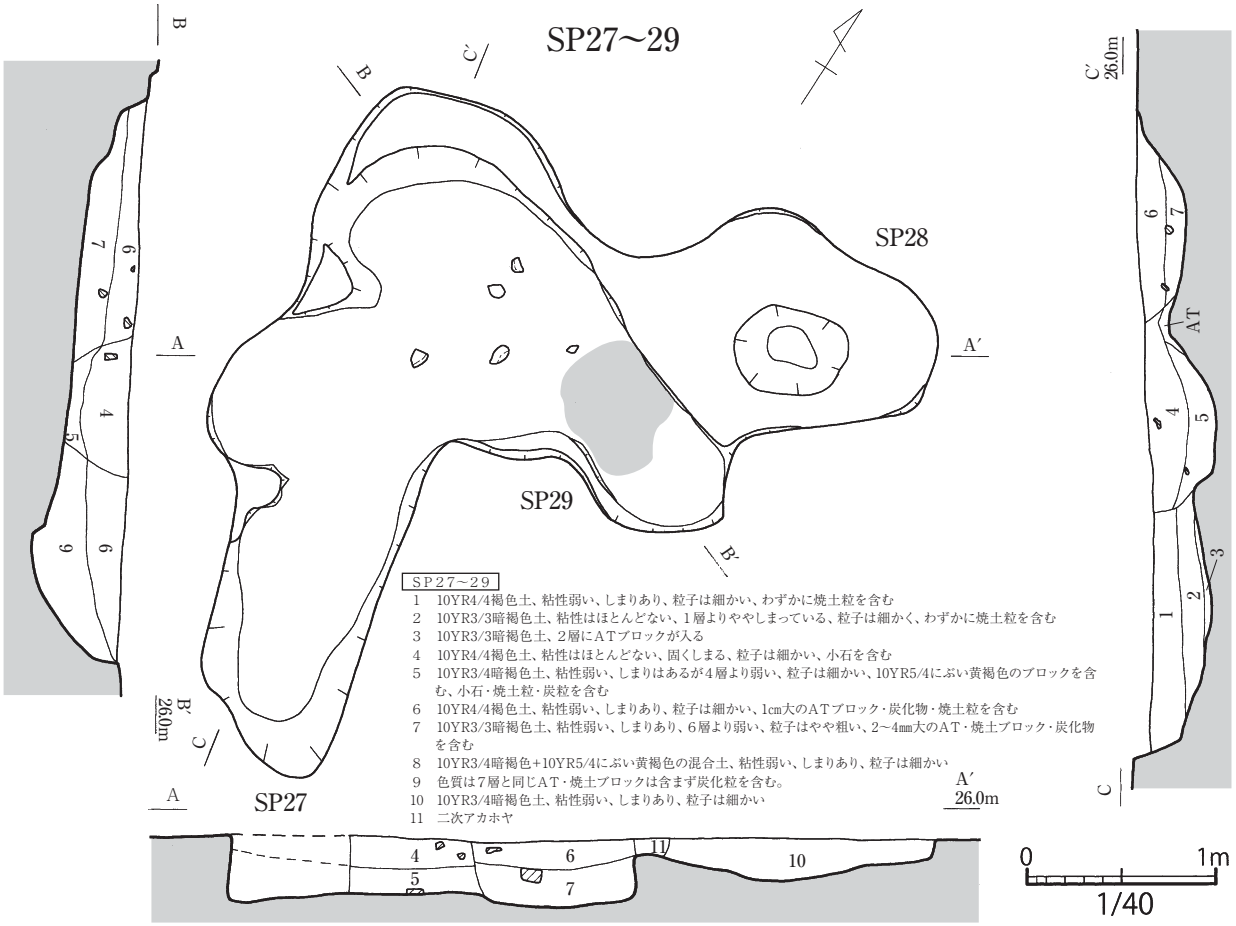
A−A′
1a　10YR3/4暗褐色砂壌土、粘性弱く固くしまる、褐色の土がごく少量混ざるがそれ以外は均一
1b　10YR3/4暗褐色砂壌土、基本は1a層だがSP6が切り合うため若干土質変わる
1c　10YR3/4暗褐色砂壌土、基本は1a層だが焼土粒が多くなる、やや色調が明るくなる（SP7の立ち上がり）
2　10YR3/4暗褐色土、粘性は弱く1a層よりさらに固い、焼土、炭化物が多量に混ざる
3　10YR3/4暗褐色土、粘性は弱く1b層よりさらに固い、ATブロックが少量混ざる
4　10YR3/4暗褐色土、粘性は弱く1c層よりさらに固い、ATブロックが少量混ざる

第17図　炉穴実測図（1）



SP23～26

1　10YR3/2黒褐色土、粘性なし、固くしまる、粒子は細かい、少量の炭化物・焼土粒・礫を含む
2　10YR3/2黒褐色土、粘性弱い、しまりあり、粒子はやや粗い、炭化物・焼土を含む
3　10YR5/4にぶい黄褐色土、粘性なし、しまりあり、粒子はやや粗い、２層が一部混ざる、焼土、炭化物を含む
4　３層の中で焼土が集中する
5　10YR3/3暗褐色土、粘性弱い、しまりあり、粒子は細かい、φ5㎜大の焼土ブロックを含む
6　10YR6/6明黄褐色+10YR3/3暗褐色の混合土、明黄褐色土がブロック状に混ざる、粘性なし、しまりなし、粒子は粗い
7　10YR4/4褐色土、粘性なし、しまりがあり、粒子は細かい、炭化物・焼土粒を含む
8　７層+10YR6/6明黄褐色の混合土、粘性なし、しまりあり、粒子はやや粗い
9　ＡＴ
10　10YR4/3にぶい黄褐色土、粘性なし、しまりあり、粒子はやや細かい、焼土粒を含む
11　10YR4/4褐色土、粘性なし、固くしまる、粒子は細かい
12　10YR5/6黄褐色土、粘性なし、しまりあり、粒子は細かい、ＡＴブロックを含む
13　10YR4/4褐色土、粘性なし、しまりあり、粒子は細かい、焼土粒を含む
14　10YR4/3にぶい黄褐色土、粘性弱い、しまりあり、粒子はやや細かい、焼土粒を含み、ＡＴブロックが入る
15　10YR3/3暗褐色土、粘性なし、固くしまる、粒子は細かい、10YR3/2黒褐色の非常に固いブロックを含む
16　10YR4/4褐色土、粘性なし、固くしまる、粒子は細かい、10YR3/2黒褐色の非常に固いブロックを含む、焼土粒を含み
17　10YR5/4黄褐色土、粘性なし、しまりあり、粒子はやや粗い、下部で焼土粒が集中する
18　10YR4/4褐色土、粘性なし、しまりあり、粒子は細かい
19　18層の中で焼土が集中する
20　10YR6/4にぶい黄橙色土、粘性弱い、しまりあり、粒子はやや細かい



SP27～29

1　10YR4/4褐色土、粘性弱い、しまりあり、粒子は細かい、わずかに焼土粒を含む
2　10YR3/3暗褐色土、粘性はほとんどない、１層よりややしまっている、粒子は細かく、わずかに焼土粒を含む
3　10YR3/3暗褐色土、２層にＡＴブロックが入る
4　10YR4/4褐色土、粘性はほとんどない、固くしまる、粒子は細かい、小石を含む
5　10YR3/4暗褐色土、粘性弱い、しまりはあるが４層より弱い、粒子は細かい、10YR5/4にぶい黄褐色のブロックを含む、小石・焼土粒・炭粒を含む
6　10YR4/4褐色土、粘性弱い、しまりあり、粒子は細かい、1㎝大のＡＴブロック・炭化物・焼土粒を含む
7　10YR3/3暗褐色土、粘性弱い、しまりあり、６層より弱い、粒子はやや粗い、2～4㎜大のＡＴ・焼土ブロック・炭化物を含む
8　10YR3/4暗褐色+10YR5/4にぶい黄褐色の混合土、粘性弱い、しまりあり、粒子は細かい
9　色質は７層と同じＡＴ・焼土ブロックは含まず炭化粒を含む。
10　10YR3/4暗褐色土、粘性弱い、しまりあり、粒子は細かい
11　二次アカホヤ

第18図　炉穴実測図（２）

査で一度表土を剥ぎ埋土１層が表出していたことを考えると、サンプリングエラーである可能性が高い。

ＳＰ14～17

ＳＡ３下で検出し、床面は第Ⅵ層。ＳＰ15・17・16が長軸を南北方向にして連なり、ＳＰ14が直交する形である。ＳＡ３によって削平されており上部は大部分が残っていない。ＳＰ15→17→16の順番で作られていることはわかるが、ＳＰ14に関しては土層ではこれらとの先後関係が確認できていない。

ＳＰ27～29

ＳＰ23～26に隣接する。Ｃ－２区、散礫Ａ下で検出し、床面はⅥ層である。長軸がＮ－45°－ＥのＳＰ27を基にしてＳＰ27→28→29の順に作られており、ヤツデ状に広がる。埋土には焼土粒を含むが、焼土面はＳＰ29に残存するのみである。ＳＰ28は床面の一部がくぼんでいる。

ＳＰ30・ＳＰ31

ＳＡ12が上に作られていて上部は不明。２基が切り合っているが先後関係も不明。床面はⅧ層。

＜Ｂ類＞（第19・20図）

ＳＰ１

Ａ－２区北東部斜面地、Ⅳ層（褐色土）検出。上部はほとんど削平を受けている。長軸は尾根の先端に向かって直交する。検出時は木の根が多く、少し濃い褐色のシミがぼんやりと認識できる程度であった。埋土中に炭化物、焼土が含まれているおり、床面（第Ⅷ層）の北端には焼土面が広がっている。中央より南の床面直上で、長径約45cmと約20cmの扁平の石が重なるように出土した。埋土中の炭化物の^{14}Ｃ年代測定では9,220±40年BP、樹種同定ではブナ科との結果が出ている。

ＳＰ２・ＳＰ３・ＳＰ４

Ｂ－Ｐ区南東部の第Ⅵ層で検出。暗褐色の攪乱土から同色の埋土への変化に気付くのが遅れ検出面が下がった。切り合いは見られないが、ほぼヤツデ状に広がる。ＳＰ２とＳＰ４は長軸が南北で、焼土面が北端に広がる。ＳＰ３はそれらと垂直で焼土面は東端に広がる。早期の土器片の胴部16（第22図）が出土している。

ＳＰ11

攪乱が激しく、一部埋土と焼土面が残るのみである。

ＳＰ12

Ｂ－２区、第Ⅳ層で検出。長軸方向は南北で、北端がＳＡ３に切られている。床面は第Ⅵ層。検出時、張り出し（ブリッジの残存部）部分の埋土の色が周りと違っていた。また、焚口付近（南側土坑）の埋土は非常に固くしまっている。

ＳＰ13

ＳＡ３下で検出。住居により削平を受けており、上部はほとんど残っていない。床面は第Ⅵ層。

ＳＰ19

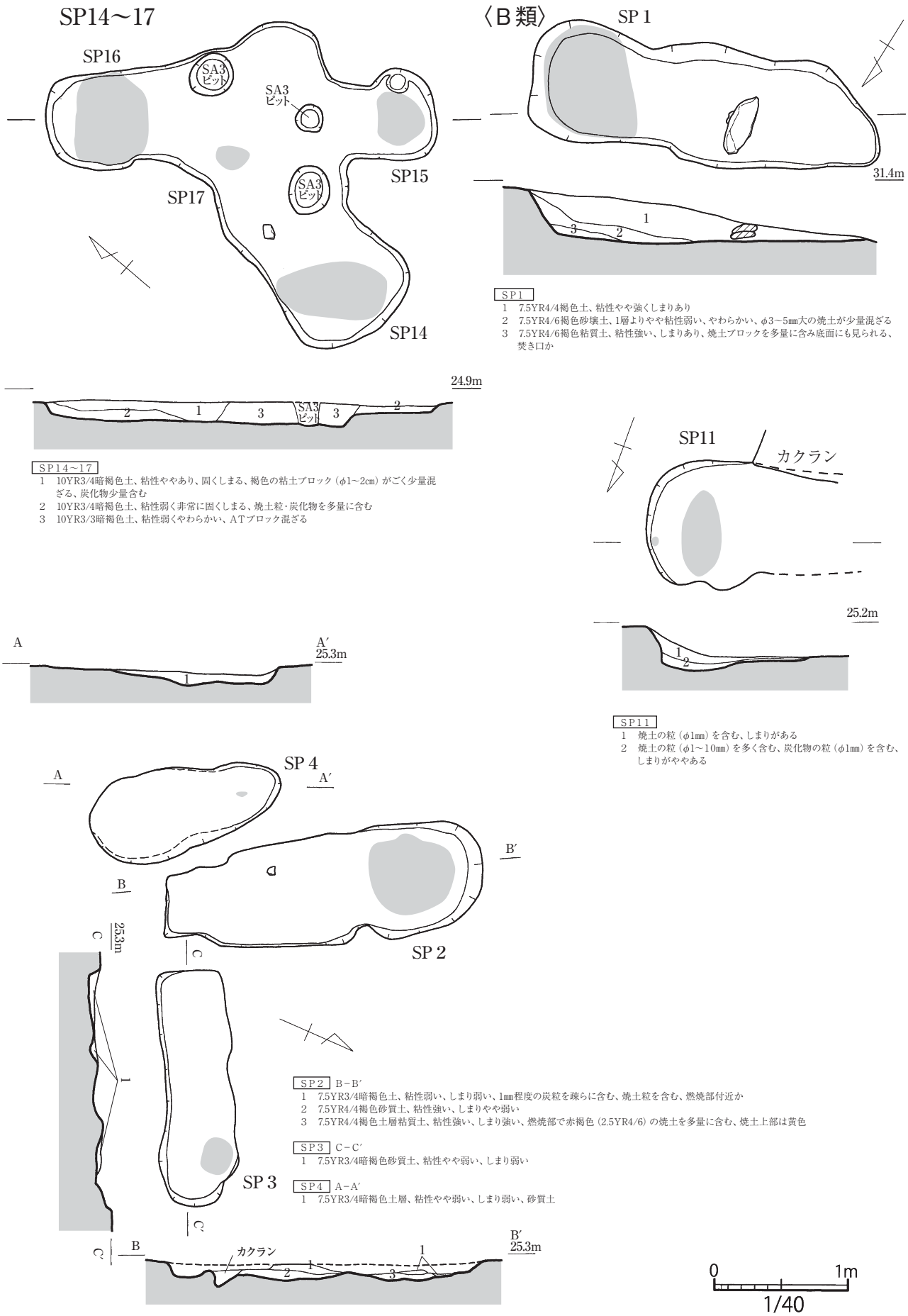
第Ⅲ層で検出。長軸は南北で、北端に焼土面が広がる。床面は第Ⅵ層。また、この炉穴も若干の張り出し（ブリッジの残存部）が見られ、土層でも第Ⅳ層の変色した土が堆積する層が張り出した部分と一致する。同時にＳＰ19の南東部に円形の土坑（ＳＣ26）も検出したが、切り合いは見られない。

ＳＰ20・ＳＰ21

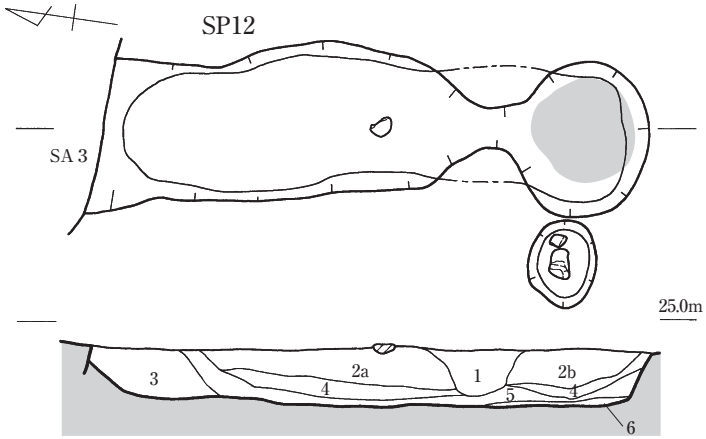
第Ⅳ層で検出。ＳＰ12と隣接する。ＳＰ20は長軸が南北で、ＳＰ21はそれと垂直方向に配置されるが、切り合いは見られない。ブリッジの残存部と考えられる張り出し部が見られ、ＳＰ21の土層にも張り出し部の崩落が見られる。

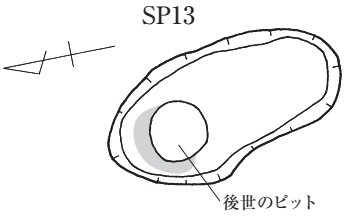
ＳＰ22

第Ⅲ層で検出。ＳＰ５～10・18に隣接する。長軸は南北で、北端に焼土面が広がる。床面は第Ⅵ層。また、この炉穴も若干の張り出し（ブリッジの残存部）が見られる。

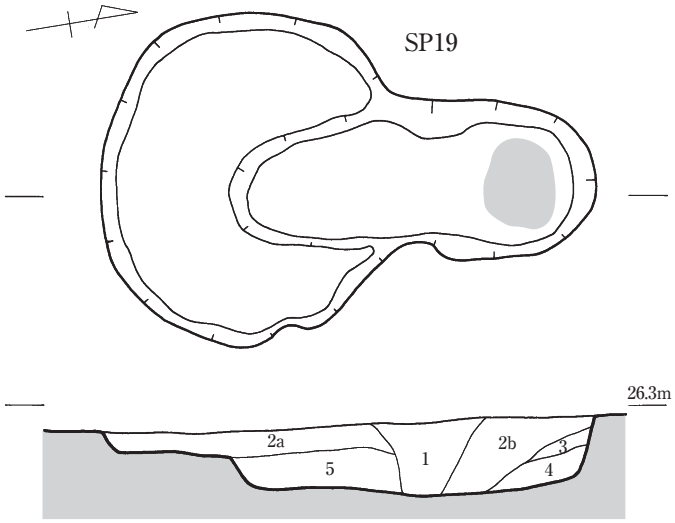

SP14～17
SP16
SA3 ピット
SA3 ピット
SA3 ピット
SP15
SP17
SP14
24.9m
SA3 ピット
〈B類〉
SP 1
31.4m
SP14～17
1　10YR3/4暗褐色土、粘性ややあり、固くしまる、褐色の粘土ブロック（φ1～2cm）がごく少量混ざる、炭化物少量含む
2　10YR3/4暗褐色土、粘性弱く非常に固くしまる、焼土粒・炭化物を多量に含む
3　10YR3/3暗褐色土、粘性弱くやわらかい、ATブロック混ざる
SP1
1　7.5YR4/4褐色土、粘性やや強くしまりあり
2　7.5YR4/6褐色砂壌土、1層よりやや粘性弱い、やわらかい、φ3～5mm大の焼土が少量混ざる
3　7.5YR4/6褐色粘質土、粘性強い、しまりあり、焼土ブロックを多量に含み底面にも見られる、焚き口か
SP11
カクラン
25.2m
A
A′
25.3m
SP11
1　焼土の粒（φ1mm）を含む、しまりがある
2　焼土の粒（φ1～10mm）を多く含む、炭化物の粒（φ1mm）を含む、しまりがややある
SP 4
A
A′
B′
B
25.3m
C
C
SP 2
SP 3
SP2　B－B′
1　7.5YR3/4暗褐色土、粘性弱い、しまり弱い、1mm程度の炭粒を疎らに含む、焼土粒を含む、燃焼部付近か
2　7.5YR4/4褐色砂質土、粘性強い、しまりやや弱い
3　7.5YR4/4褐色土層粘質土、粘性強い、しまり強い、燃焼部で赤褐色（2.5YR4/6）の焼土を多量に含む、焼土上部は黄色
SP3　C－C′
1　7.5YR3/4暗褐色砂質土、粘性やや弱い、しまり弱い
SP4　A－A′
1　7.5YR3/4暗褐色土層、粘性やや弱い、しまり弱い、砂質土
B′
25.3m
カクラン
0
1m
1/40

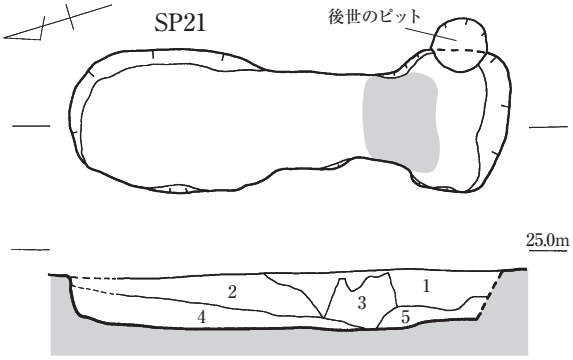
第19図　炉穴実測図（3）





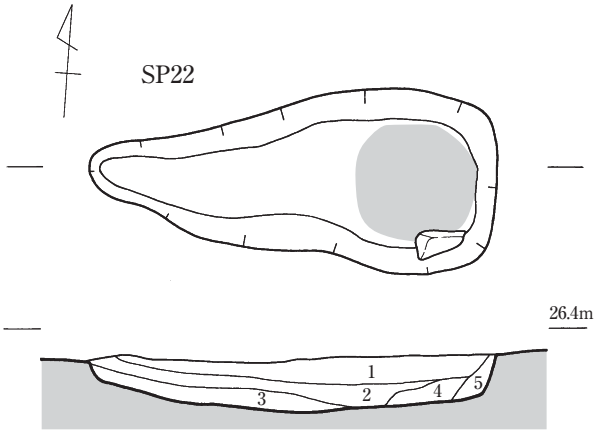
SP12
1　10YR4/4暗褐色土、地山（褐色土Ⅳ層）よりやや暗い、褐色ブリッジ部分が崩落し埋土と混ざったものか
2a　10YR3/4暗褐色土、粘性弱く、固くしまる、炭化物ごく少量含む
2b　2a層と基本的には同じ若干暗く、炭化物の量が多い
3　10YR3/4暗褐色土、2a層と同様の土だが褐色の土が混ざる
4　10YR3/4暗褐色土、粘性弱く、固くしまる、炭化物、焼土粒も少量含む
5　10YR3/3暗褐色土、粘性弱く、固くしまる、炭化物、焼土ブロック多量に含む
6　10YR3/4暗褐色土、5層より多くの炭化物、焼土がたまる、非常に固い

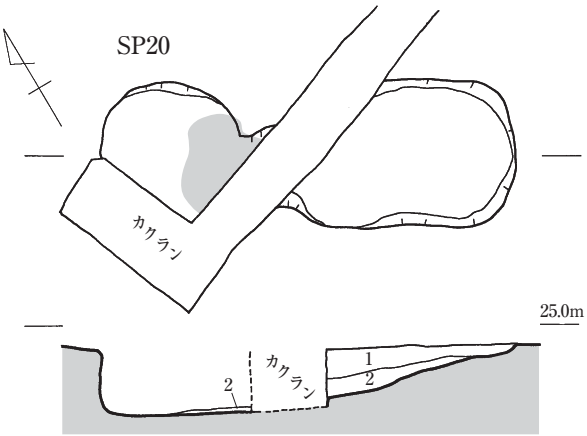




SP21
1　10YR5/3にぶい黄褐色土、粘性あり、しまりあり、粒子はやや粗い、3層のブロックを含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色土、粘性あり、ややしまりあり、粒子はやや粗い
3　10YR4/2灰黄褐色+10YR6/6明黄褐色の混合土、粘性はない、非常に固くしまる、粒子は細かい、ブリッジの崩落部分か
4　10YR3/3暗褐色+10YR4/3にぶい黄褐色の混合土、暗褐色部分は粘性なし、固くしまる、粒子は細かい、炭化物・焼土粒を含む、にぶい黄褐色は2層と同じ
5　10YR3/3暗褐色土、粘性なし、固くしまる、粒子は細かい、炭化物・焼土粒を含む

SP19
1　10YR4/4褐色土、粘性あり、しまりあり、ブリッジが崩落したものか、地山（Ⅵ層）の土を含んでいるためまわりの埋土より明るい
2a　10YR3/3暗褐色土、粘性2b層より固くしまる、焼土・炭化物は2b層より多い、10YR4/6褐色土を少量含む
2b　10YR3/3暗褐色土、粘性ややあり、しまりあまりない、焼土・炭化物がごく少量混ざる
3　10YR3/3暗褐色土、粘性弱くやわらかい、2b層より黒く、焼土の粒子が多く含まれる
4　10YR3/4暗褐色土、非常に固くしまる、炭化物・焼土ともに多量に含まれる
5　10YR3/3暗褐色土、粘性ややあり、ややしまる、焼土・炭化物含まない



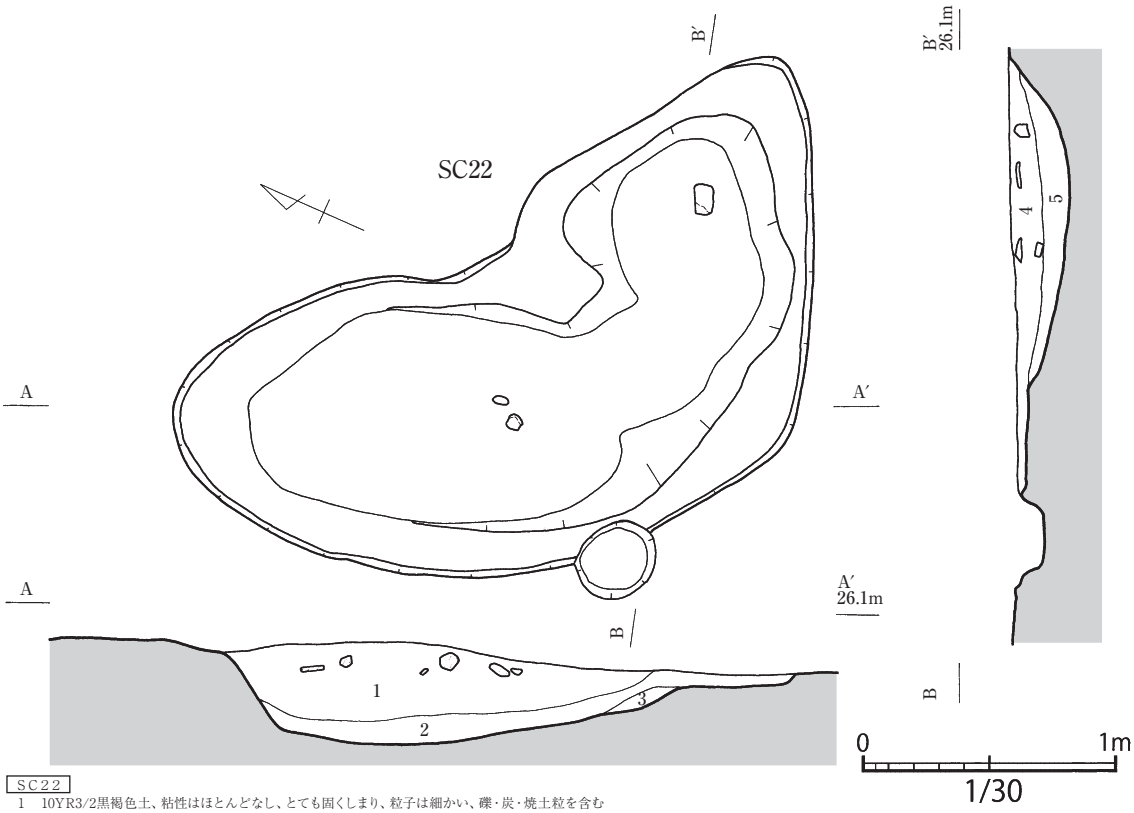


SP22
1　10YR4/4褐色土、粘性ややあり、固くしまる、粒子は細かい、わずかに焼土粒を含む
2　10YR3/2黒褐色土、粘性ほとんどなし、固くしまる、粒子は細かい、焼土粒・炭化物を含む
3　10YR3/2黒褐色土、粘性あり、しまりあり、粒子は細かい、ATが混合し、焼土粒・炭化物を含む
4　10YR3/1黒褐色土、粘性なし、非常に固くしまる、粒子は細かい、多くの焼土粒・炭化物を含む
5　10YR3/2黒褐色土、粘性なし、固くしまる、粒子は細かい、黄褐色土（壁面）が混合する

SP20
1　10YR4/3にぶい黄褐色土、粘性あり、ややしまりあり、粒子はやや粗い
2　10YR3/3暗褐色+10YR4/3にぶい黄褐色の混合土、暗褐色部分は、粘性なし、固くしまり、粒子は細かい、炭化物・焼土粒を含む、にぶい黄褐色部分は2層と同じ

0　1m
1/40

第20図　炉穴実測図（4）



SC22
1　10YR3/2黒褐色土、粘性はほとんどなし、とても固くしまり、粒子は細かい、礫・炭・焼土粒を含む
2　10YR3/3暗褐色土、固くしまるが1層より弱い、粒子は細かく、粘性はほとんどない、10YR 6/4にぶい黄褐色（地山）がブロックで入る、炭粒を含む
3　10YR4/9褐色土、しまりがあり粒子は細かい、粘性がある、にぶい黄褐色土が混ざる、その割合は2層より多い、立ち上がりがくずれたものか
4　10YR3/3暗褐色土、固くしまり、粒子は細かい、粘性はない、礫・土器・炭・炭化物を含む
5　10YR3/3暗褐色土、しまりがある、粒子は細かい、粘性がある、にぶい黄褐色（地山）を含む、礫・灰を含む

第21図　縄文時代早期土坑実測図

4　土坑（ＳＣ　第21図）

散礫Ａの下から集石遺構や炉穴とともに、土坑を４基検出している。

ＳＣ22

散礫Ａの下、第Ⅲ層で検出。埋土に散礫や集石遺構の破砕礫や炭化物、焼土を含んでいる。埋土中から縄文時代時代早期の土器片の口縁部17（第22図）が出土している。

5　遺物

縄文時代早期の土器は、集石遺構・炉穴・土坑から少量出土したほかは、殆どが包含層出土である。

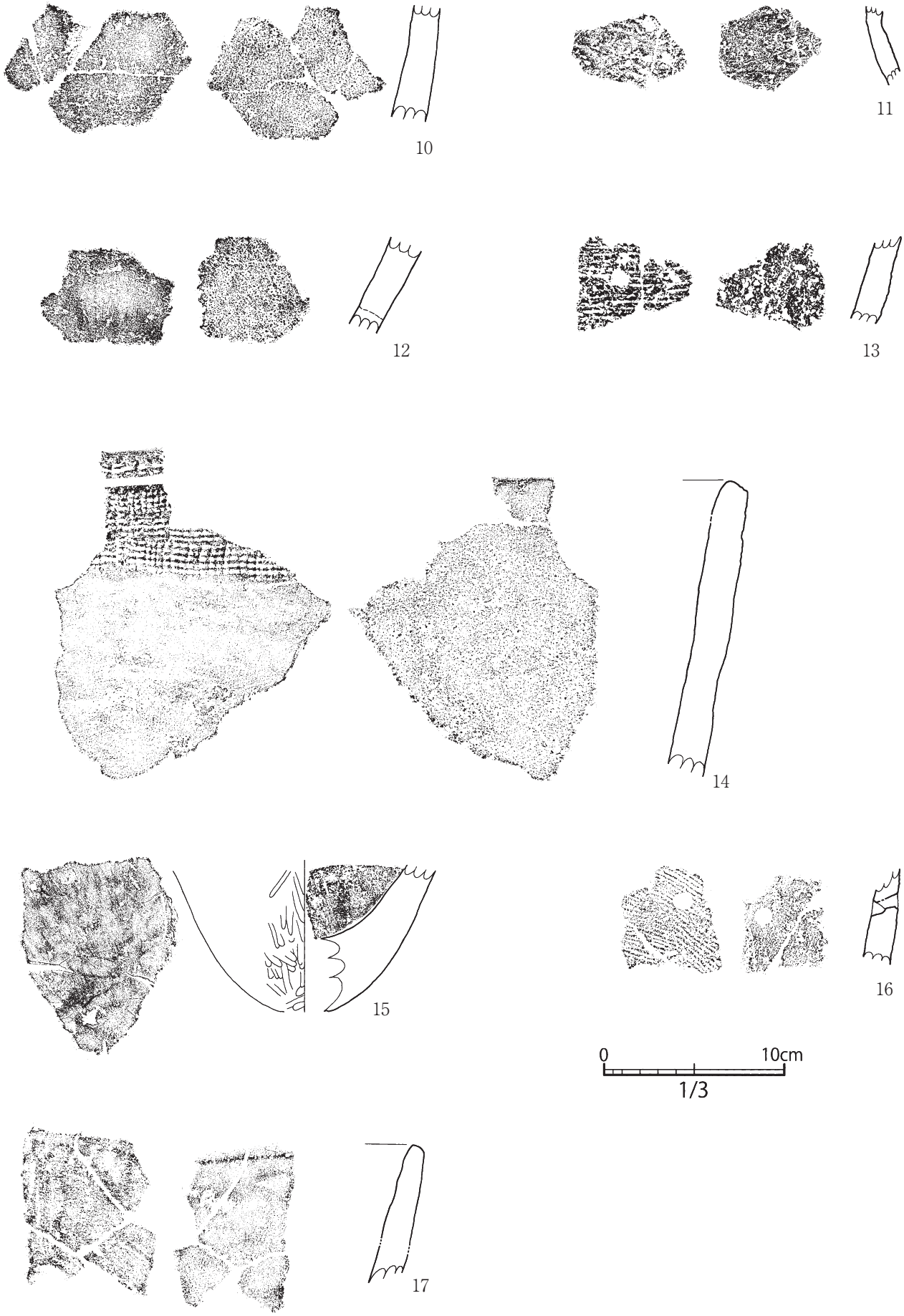
遺構に伴う遺物（第22図）

10～13は集石遺構出土遺物である。10・12はＳＩ14から出土。10は外面にミガキと思われる光沢のある胴下半部で、下面に粘土の接合面と考えられる浅い凹面が見られる。12も胴部の底部付近で外面にミガキ調整とススの付着が見られる。10・12は胎土・焼成・調整等から同一個体の可能性が強い。11はＳＩ15から出土。器形は不明であるが、薄手の内傾する頸部付近で斜方向のごく浅い条痕が見られる。13はＳＩ20から出土。胴部で横方向の貝殻条痕を施す。胎土に発泡性の降下軽石と思われる物質が多量に含まれ、器表面はその溶出痕と思われる穴が無数に見られる。

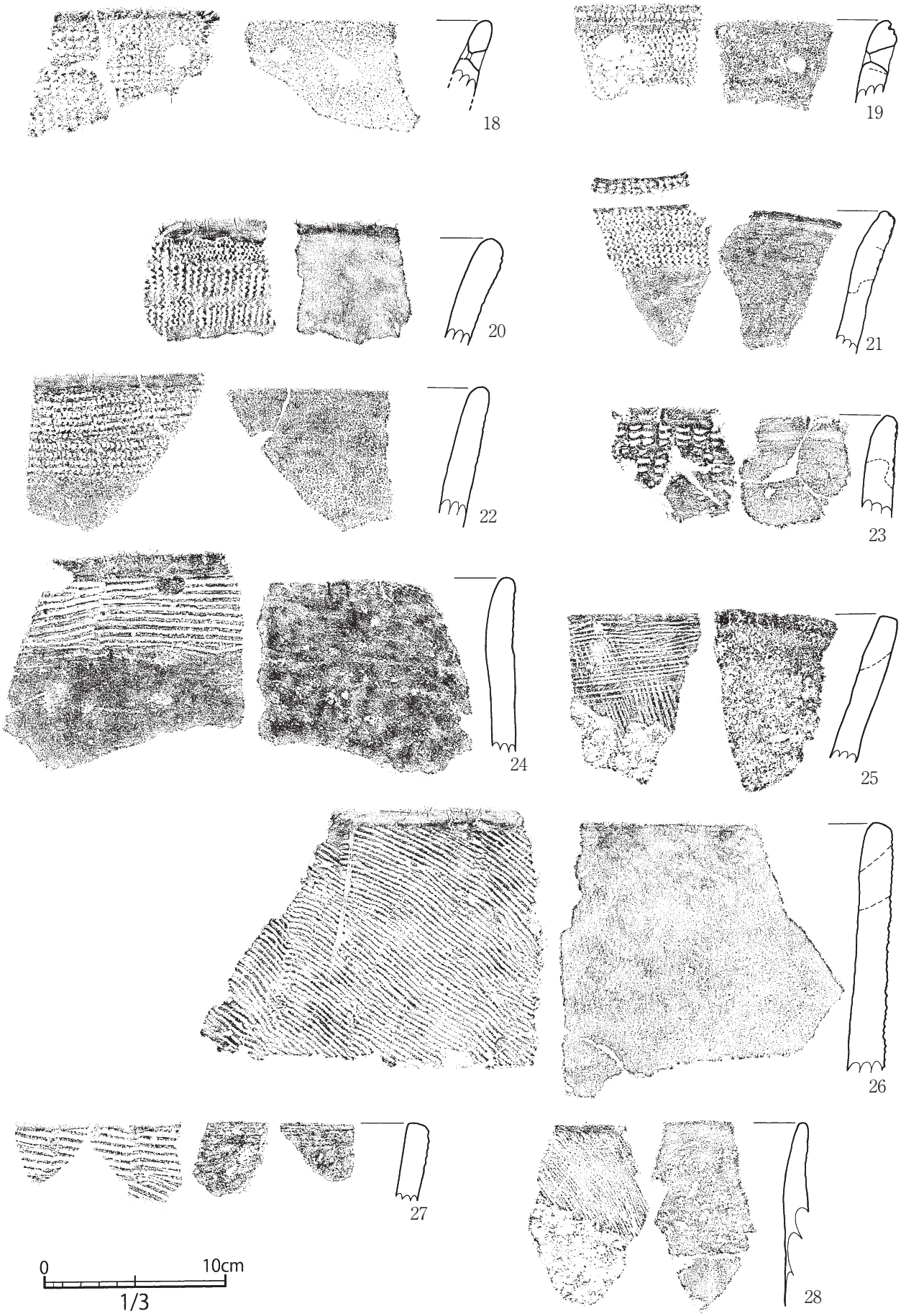
14～16は炉穴出土遺物である。14はＳＰ18から出土。口縁部付近の外面と口唇部に貝殻押引き文を施す。15はＳＰ24から出土。底部は尖底になると考えられ、内外面に縦方向のていねいなミガキを施す。16はＳＰ２から出土。胴部の外面に斜方向の貝殻条痕文を施し、補修孔と思われる斜め方向の穿孔が見られる。

17はＳＣ22から出土。器表面の摩滅が著しいが、外面の口縁端部付近に辛うじて斜位の貝殻腹縁刺突文が1列認められる。

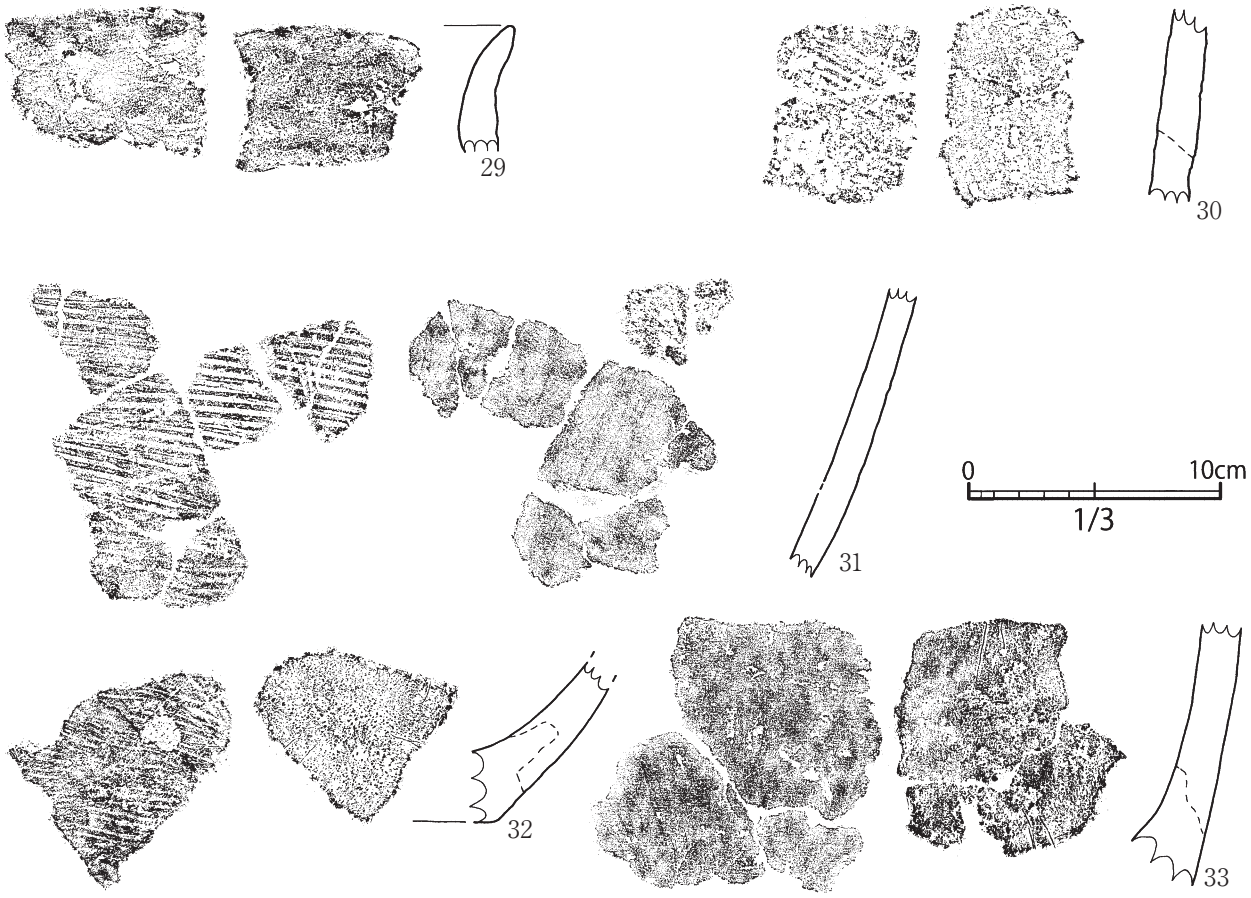
包含層中の遺物（第23・24図）



第 22 図　縄文時代早期遺構内出土遺物実測図



第 23 図　縄文時代早期土器実測図（1）



第24図　縄文時代早期土器実測図（２）

比較的量的にまとまっている包含層出土の土器について、その特徴から次の４類に分類した。

A類　口縁部付近に貝殻刺突文を施すもの

口縁部及び口縁端部のみ施文法が異なるものと、特別に施文法を変えないものの２類に分類できる。

B類　口縁部付近に貝殻押引き文を施すもの

C類　口縁部付近に貝殻条痕文（条痕文）を施すもの

以上A～C類の胴部は無文になると考えられる。

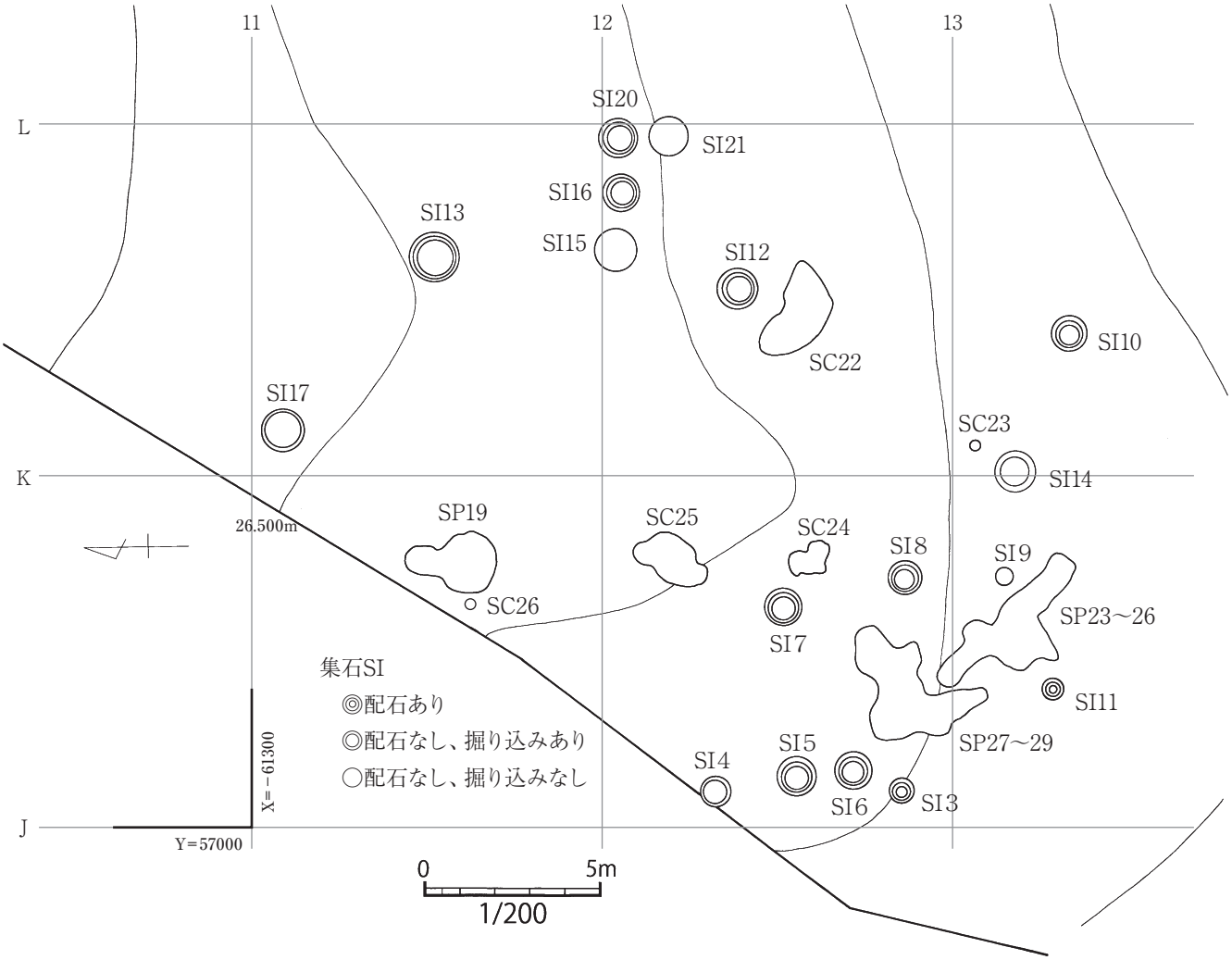
D類　全面に貝殻条痕文を施すもの

18～23はA類に相当し、外面の口縁部付近に貝殻腹縁刺突文を２～３段施す深鉢である。18・19は補修孔と考えられる焼成後穿孔をもつ。18はナデの後、３段の貝殻腹縁刺突文を施す。19は口唇部に貝殻腹縁刺突による刻目をもち、口縁部に２段の刺突文を施す。21は口唇部に貝殻腹縁刺突による刻み目をもち、その下に３段の刺突文を施す。20は間隔の狭い刺突文１段の下に、間隔の広い刺突文を２段施す。胴部の外面及び内面はミガキである。22は上下２段に間隔をあけた貝殻腹縁刺突文、23は上下２段に刺突文を施す。

24はC類に相当する。横方向の貝殻条痕文を上下２段に一部重なりながら施文される。

25～28はD類に相当する。26は円筒形の厚手の深鉢の口縁～胴部付近で全体に斜方向の貝殻条痕文を施す。27は斜方向の後やや横方向の貝殻条痕文を施す。25は縦方向の後横方向、28は斜方向に鋭利な工具で条痕を施す。

上記A～D類以外に無文土器、胴・底部片を一括して述べる。29は指押さえの痕が顕著に見られる無文土器で口縁部がやや外反する。30は風化が著しいが、斜方向の貝殻条痕文がわずかに見られる。胎土・焼成等からSI20出土の13と同一個体であると思われる。31はやや斜方向の貝殻条痕文であるが、焼成・胎土・調整等から27と同一個体であると考えている。32は平底の底部で底面付近まで貝殻条痕を施す。底面はミガキ調整である。33は底部付近で外面に縦方向の丁寧なミガキを施している。胎土



第 25 図　縄文時代早期遺構配置詳細図

や調整など15によく似ているが焼成が若干異なる。

6　小結

集石遺構の^{14}C年代測定の結果や形態等から、縄文時代早期は大きく２つの時期に生活の営みが確認できる。約9,200年BPと約8,200年BPを中心とした時期である。

耕作の影響の少ないL12グリッド近辺で、散礫と集石遺構の礫の接合を試み、この時期の集石遺構と散礫の関係を調べた。結果を次の①～③に記す。

① 集石遺構間の礫接合は確認できなかった。

② 集石遺構と散礫間の礫は12点接合した。最長接合距離は2.72mである。

③ 散礫間については10点接合した。最長接合距離は8.01mである。

近接するＳＩ16・20・21の上部礫が一点も接合しなかったことは、集石遺構の礫は他の集石遺構に二次的利用はしないか、または同時に存在していた可能性がある。

炉穴は、ほとんどがお互いを切り合っているか、または近接している。ＳＰ１は現況で完全に単独であるが、調査区の端であること、植林のために削平されている状況から他の炉穴も存在していた可能性がある。

散礫の下で検出されている炉穴があるが、集石遺構と炉穴はお互いを切り合っていない。特にＳＰ23～26とＳＰ27～29はＳＩ９やＳＩ11を避けるように掘り込まれていることや、炉穴の埋土下部にも集石遺構で使用されたと思われる破砕礫が多数出土することより、炉穴と集石遺構は併設して使用していた可能性がある（第25図）。

第６表　縄文時代早期遺構内出土土器観察表

No.	器種	部位	出土地点	法量(cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
10	深鉢	胴部	SI14		丁寧なナデ、ミガキと思われる光沢	ナデ	橙(7.5YR7/6)	黒褐(10YR3/2)	約6㎜以下の灰白、黒色光沢、黒褐、明赤褐、褐灰色粒を含む	12と同一か
11	深鉢	頸部	SI15		斜方向のごく浅い条痕、指押さえによる窪みあり	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	黄橙(10YR6/4)	約2㎜以下の浅黄橙、黒色光沢粒を含む	風化気味
12	深鉢	胴部	SI14		丁寧なナデ、一部ミガキ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	褐灰(7.5YR4/1)	約6㎜以下の灰白色、黒色光沢、黒褐、明赤褐、褐灰色粒を含む	10と同一か
13	深鉢	胴部	SI20		ナデの後、横方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙(10YR7/4)	灰黄橙(10YR6/2)	約2㎜以下の浅黄橙、黒色光沢粒を含む	器表面に無数の穴
14	深鉢	口縁部~胴部	SP18		口縁・口唇部に横方向の貝殻押引き文、胴部は丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	6㎜以下の白・黒色粒、3㎜以下の黒色光沢粒を多く含む	胴部にスス付着
15	深鉢	底部付近	SP24		ナデ後、縦方向の丁寧なミガキ	丁寧なナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	1~5㎜の灰白色粒、1~2㎜の黒色光沢粒を含む	内面：黒斑 33と似ている
16	深鉢	口縁部付近	SP2		斜方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	7㎜以下の白色粒、1.5㎜以下の黒色光沢粒を含む	補修孔と思われる穿孔
17	深鉢	口縁部~胴部	SC22		口縁端部に貝殻腹縁刺突文	ナデ、横ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	1㎜以下の灰白・乳白色粒、微細な光沢粒を含む	器表面の摩滅が著しい

第７表　縄文時代早期土器観察表

No.	器種	部位	出土地点	法量(cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
18	深鉢	口縁部	C-2		ナデの後、口縁部に貝殻腹縁刺突文を3段	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	4㎜以下の白色粒、3㎜以下の黒色光沢粒を多く含む	補修孔と思われる穿孔
19	深鉢	口縁部	C-3		口唇部は貝殻腹縁刺突による刻目、口縁部は縦位の貝殻腹縁刺突文2段	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	4㎜以下の灰・灰白・乳白色粒、3㎜以下の黒色光沢粒を多く含む	補修孔と思われる穿孔
20	深鉢	口縁部	C-3		ナデ後、口縁部は幅の狭い貝殻腹縁文1段、下に幅の広い貝殻腹縁文2段	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	5㎜以下のにぶい褐・灰白色粒、2㎜以下の黒色光沢・透明光沢粒を多く含む	
21	深鉢	口縁部	B-P		口唇部は貝殻腹縁刺突による刻目、口縁部は縦位の貝殻腹縁刺突文3段、胴部はミガキ、指頭痕	横・斜方向のナデ、指頭痕	橙(5YR6/8)	にぶい黄褐(10YR5/4)	4㎜以下の浅黄橙・明赤褐・黒褐・黒色光沢・透明光沢粒を含む	口縁部にスス付着、炭化物付着
22	深鉢	口縁部	C-3		ナデの後、口縁部に貝殻腹縁刺突文を間隔をあけて2段	口縁部は横ナデ、胴部はナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	4㎜以下の白・褐色粒、2㎜以下の黒色光沢粒を多く含む	
23	深鉢	口縁部	C-3		ナデの後、口縁部に刺突文を2段	横ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	4㎜以下の灰白・褐灰・黒褐・浅黄橙・黒色光沢粒を含む	スス付着
24	深鉢	口縁部	B4tr		ナデの後、口縁部は横方向の貝殻条痕文を一部重なりながら2段、胴部はナデ後に指押さえ	ナデ、指押さえ	浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	1~5㎜の灰白・赤褐・黒褐・黒色光沢粒を含む	
25	深鉢	口縁部	C-3		口縁部から胴部に斜方向の後、横方向の貝殻条痕文	ナデ、下半は剥落が激しい	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	4㎜以下の浅黄橙色、2㎜以下の黒色光沢粒を多く含む、3㎜以下の黒色・灰白色粒を含む	
26	深鉢	口縁部	B-P		口唇部はナデ、全体に斜方向の貝殻条痕文	丁寧なナデ	明黄褐(10YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1~4㎜の灰白色粒、1~2㎜の黒色光沢粒を含む	スス付着
27	深鉢	口縁部	C-3		口唇部はナデ、口縁部は横方向の後、やや横方向の貝殻条痕文	工具ナデ後にミガキ	浅黄(2.5Y7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1~2㎜の透明・灰白色粒を含む	外面：一部黒斑 31と同一個体か
28	深鉢	口縁部	C-3		口唇部は条痕後にナデ、口縁部は鋭利な工具で斜方向に条痕	ナデ後に指押さえ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	1~5㎜の灰白色粒、2㎜以下の黒色光沢粒を含む	
29	深鉢	口縁部	C-3		ナデ後に指押さえ痕	ナデ後に指押さえ痕	にぶい赤褐(5YR5/4)	橙(5YR7/6)	2~6㎜の赤褐・灰白・黒色光沢粒を含む	
30	深鉢	胴部	C-2		斜方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	3㎜以下の浅黄橙・灰白色粒を含む	風化が著しい 13と同一個体か
31	深鉢	胴部	C-3		ナデの後、やや斜方向の貝殻条痕文	工具ナデ後にミガキ	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1~2㎜の透明・灰白色粒を含む	27と同一個体か
32	深鉢	胴部~底部	B-P		底面付近まで斜方向の貝殻条痕文、底面はミガキ	縦・斜方向のナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	1㎝以下の褐灰・黒褐・明褐・にぶい褐色粒を含む	
33	深鉢	胴部~底部付近	C-3		縦方向の丁寧なミガキ	斜方向のナデ	明褐(7.5YR5/6)	にぶい黄橙(10YR6/3)	9㎜以下の褐灰・灰白・黒褐・黒色光沢粒を含む	15と似ている

第４節　縄文時代後期の遺構と遺物

縄文時代後期の調査の概要

表土（第Ⅰａ層）を重機で剥ぎ、遺構検出を行っていくと、Ｃ−２区の第４ａ層で土坑を１基、第Ⅱ層で石組遺構１基検出した。

また、谷部の埋没土からは多くの縄文時代後期の土器が出土している。石器についても当時期と思われる石鏃や石斧、石錘等が多数出土しているが、出土状況から時期が不明確であることから第８節に掲載している。

１　土坑（ＳＣ　第26図）

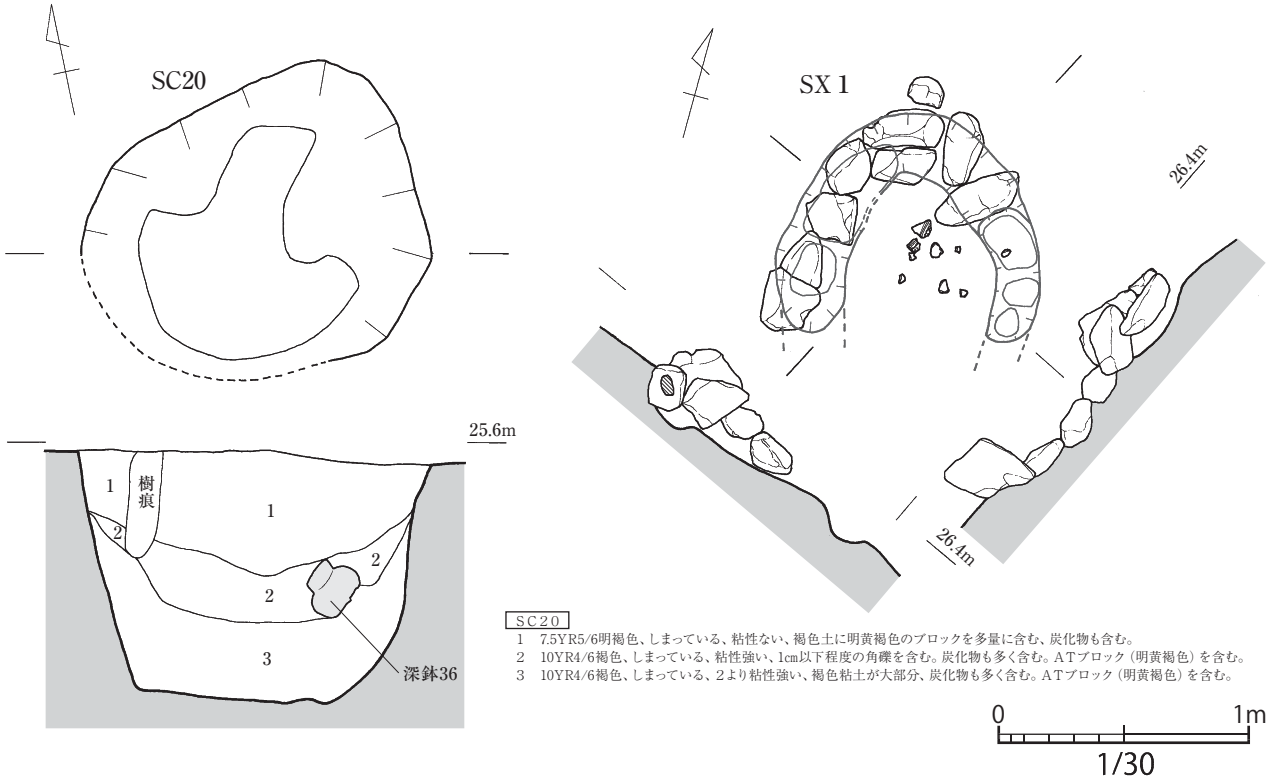
ＳＣ20

Ｃ−２区の1次調査のトレンチの壁面で断面の一部を確認し、谷部第４ａ層で検出。この土坑は一度雨が続くと、壁からも水が湧き出し、水がなかなか退かない。堆積状況から底面から中位までは土石流等で一気に埋まり、その後この時期の土器が流れ込んだと考えられる。大部分の土器が破片で出土している中で、深鉢36（第27図）は底部を欠くもののほぼ完形の状態で出土した。土器が出土している部分の炭化物の^{14}Ｃ年代測定では3,325±20BP年の結果が出ている。谷部の辺りに位置し、一度水が溜まるとなかなか退かない状況から、水の利用を考慮した土坑であった可能性がある。

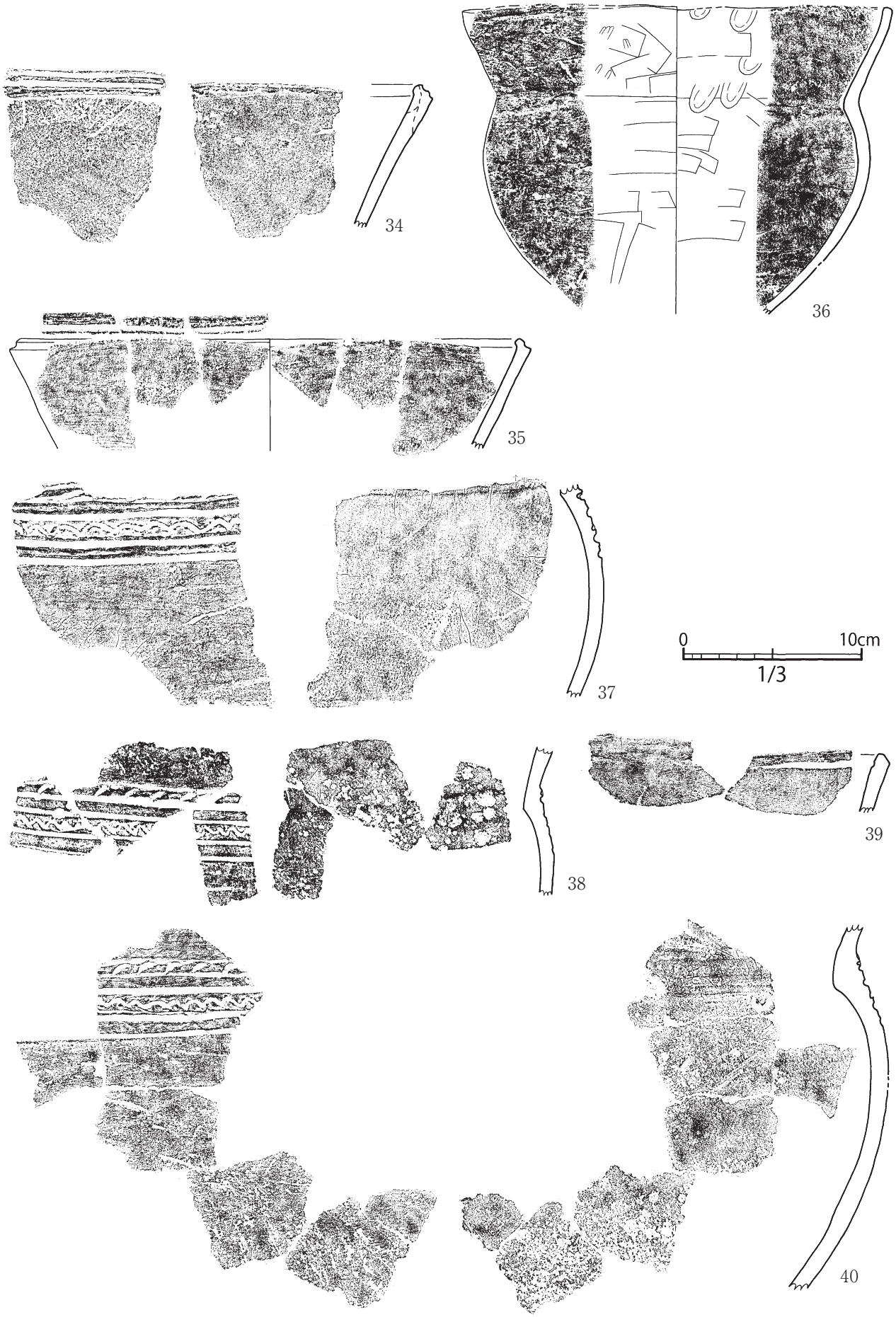
２　石組遺構（ＳＸ　第26図）

ＳＸ１

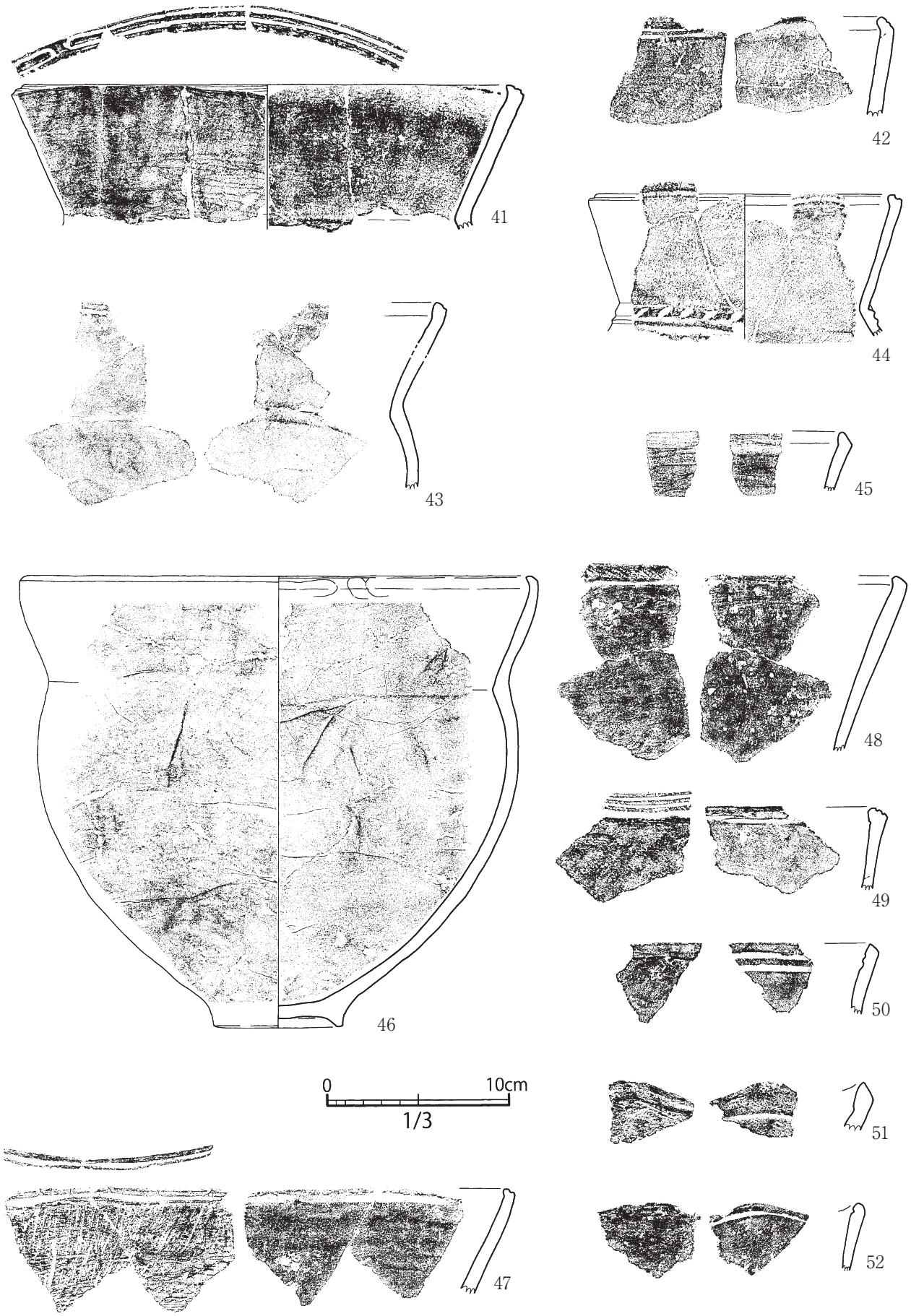
Ｃ区のⅡ層で検出された。現況では馬蹄形に深さ約５cmの掘り込みを持ち、掘り込みに沿って30cm大の砂岩の礫を配置している。中央の埋土から炭化物を確認していることから、石組炉として使用していた可能性がある。遺物は埋土中から縄文時代後期の土器38 ～ 40(第27図) が出土している。



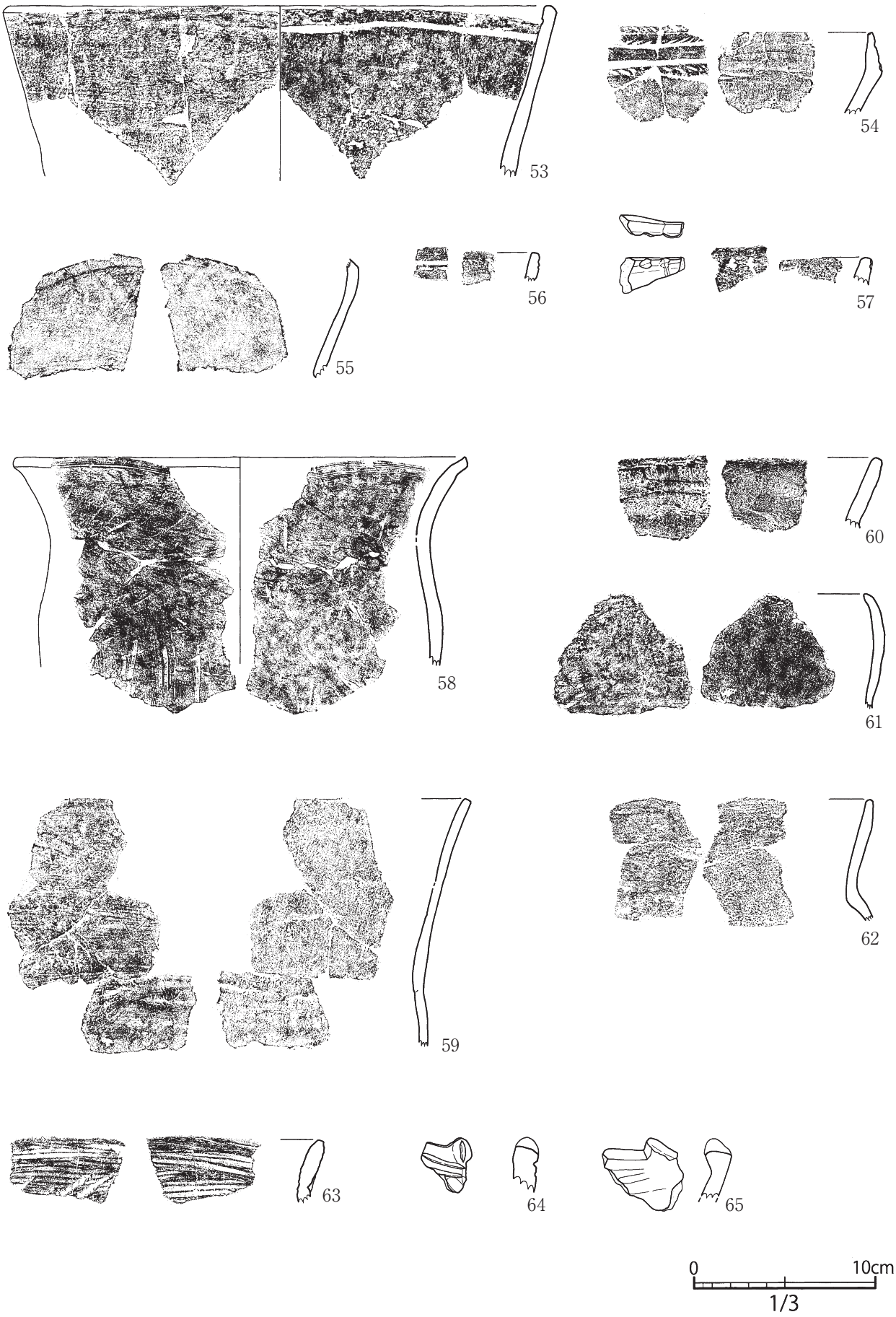
第 26 図　縄文時代後期土坑および石組遺構実測図



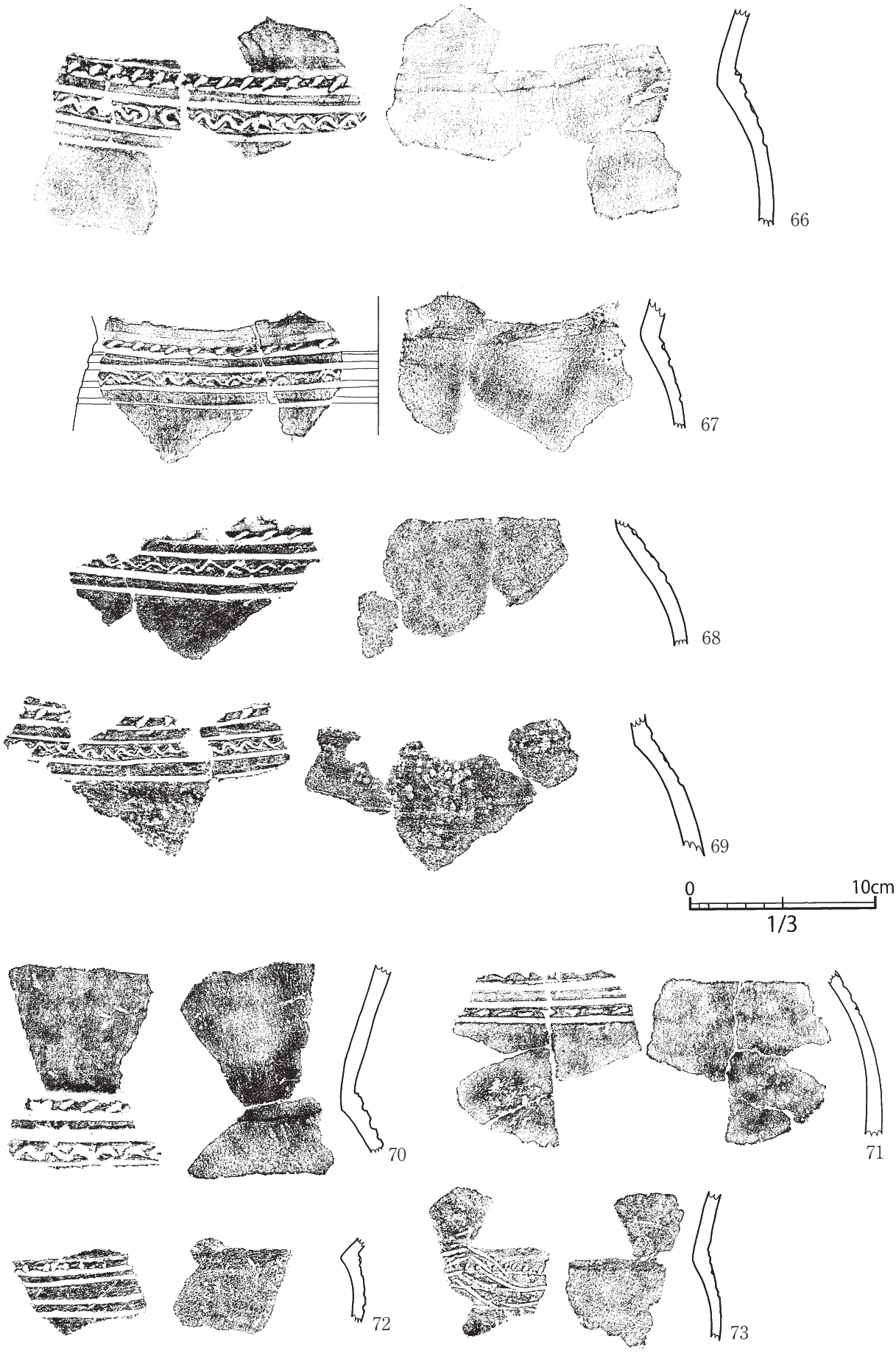
第 27 図　縄文時代後期遺構内出土遺物実測図



第 28 図　縄文時代後期土器実測図（1）



第 29 図　縄文時代後期土器実測図（2）



第 30 図　縄文時代後期土器実測図（3）

３　遺物

土器のほとんどは赤褐色を呈する。器形的には磨消縄文系の土器ではあるが、ほとんど磨消縄文は見られなかった。土器については、大きく口縁部、頸部付近～胴部、底部に分け、その詳細を次に述べる。口縁部～胴部のように部位が２つにまたがるものについては、上の部位を優先してグルーピングすることとする。

遺構に伴う遺物（第27図）

34 ～ 37はＳＣ20から出土。34は波状口縁で口唇部に２本の沈線をもち、内外面ともにナデを施す。35は平口縁で口唇部に１本の沈線をもち、内外面ともに丁寧なミガキを施す。37は頸部から胴部にかけて文様帯をもつ。３本の横走沈線を主とし、間に波状沈線を施す。頸部は上下２本の沈線の間に刺突列点文を施す。36は口縁部から頸部にかけてミガキが見られる半精製の深鉢で底部を欠いている。頸部は明瞭に屈曲し、内面にも段が見られる。口縁端部は指押さえ痕が多く見られ、やや内湾している。

また、38 ～ 40はＳＸ１から出土し、38・40は37とほぼ同一の文様帯の特徴をもつ。39は平口縁で内面の口縁端部付近に１本の沈線を施す。

これらの土器は、いずれも赤褐色の色調で、雑なミガキはあるが縄文は全く施されていない。

包含層出土遺物（第28 ～ 31図）

41 ～ 65は口縁部である。

41 ～ 46・48は内面の口唇部付近に凹線を施し、くの字状に屈曲している。45以外は口唇部に文様帯をもち、文様帯部分を肥厚させ断面三角形にしている。41は平口縁、42は波状口縁で口唇部に２本の平行沈線をもち、41は内外面に丁寧なミガキを施し、口唇部の２本の沈線がX字状に反転する。43 ～ 44は口唇部に１本の沈線をもち、43は頸部～胴部にかけては丁寧なミガキで無文、44は表面の風化が進んでいるが、頸部から胴部に40と同様の文様を施す。

45は内面の口唇部付近に凹線を施し、くの字に屈曲しているが、口唇部の文様帯をもたない。他と異なり暗褐色を呈している。48は口唇部に縄文をもつ。46はほぼ完形の深鉢、全体が無文で底部は上げ底である。

47・49 ～ 53は内面の口唇部付近に沈線を施す。47は粗製で口縁端部に１本の沈線をもつ。外面に縦方向の条痕文の後、横方向のミガキを施す。49は波状口縁で、色調が黒褐色でガラス質の粒子を多く含み、口唇部に２本の平行沈線と縄文を施し、内面に１本の沈線を施す。縄文を確認できたのは48とこの土器片だけである。50は内面に２本。51・52は波状口縁の波頂部で、波頂部に同調して１本の沈線を施す。53は口唇部に平坦面を有しない。内面には粘土の貼り付け部分があり、波頂部の名残であると考えられる。

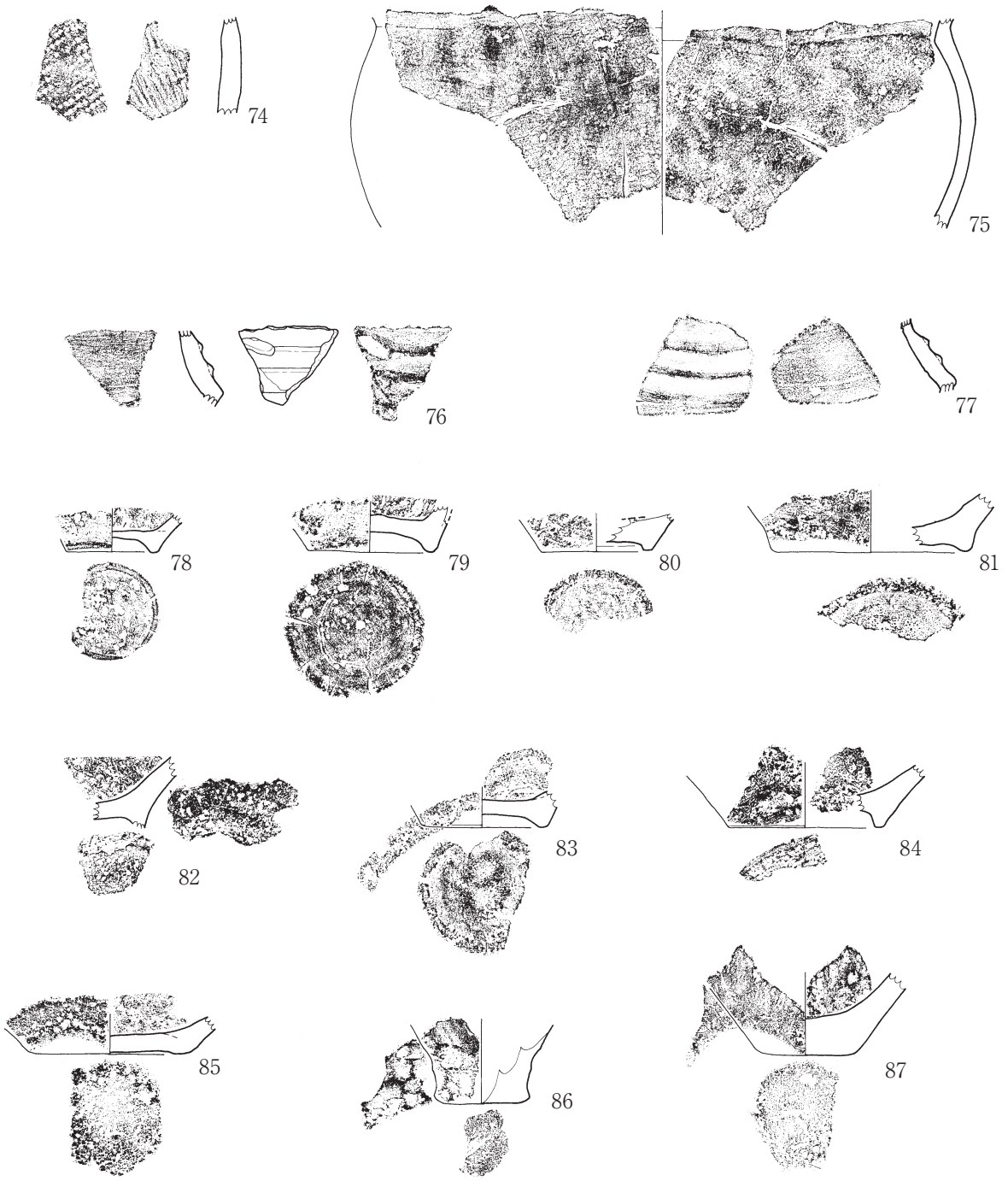
54は口縁部文様帯の２本の沈線の上下に羽状文を施す。56は口縁部外面の１本の短沈線文、その上に沈線が見られる。57は口縁端部に刺突文による刻目を施す。

55・58 ～ 62は無文の口縁部である。55は無文の波状口縁の波頂部である。58・59・62は頸部の屈曲が弱く、58は内外面の口唇部付近にていねいなナデを１巡施す。59は粗いミガキ、62は風化しているがミガキか。60･61は無文土器の口縁部である。

63は色調が赤褐色で内外面を貝殻条痕文調整後、外反する頸部付近に貝殻腹縁刺突文を施す。いわゆる丸尾式土器である。64は弧状の沈線と刺突のある突起が見られる。65は断面三角形のくの字状に屈曲する口縁部に粘土の貼付突起が見られる。

66 ～ 77は頸部付近～胴部である。

66 ～ 73は頸部付近～胴部に文様帯をもつ。66 ～ 72は頸部が屈曲し、内面に明瞭な稜をもつ。66は胴部の３本の横走沈線を主とし、上２本の沈線間に波状沈線を施す。波状沈線はX字状の反転文をもつ。沈線の上部には横走沈線間に刺突列点文を施す。67 ～ 70は66と同一の文様形態であるが、67は施文が浅く、X字状の反転部をもたない。68は波状沈線をへの字の連続で施文し、69はU字の連続で施文する。71は波状沈線の部分が刺突列点に置き換わり、施文の位置や沈線の数も異なる。72は沈線の数は同じであるが波状沈線をもた



第 31 図　縄文時代後期土器実測図（４）　0　10cm　1/3

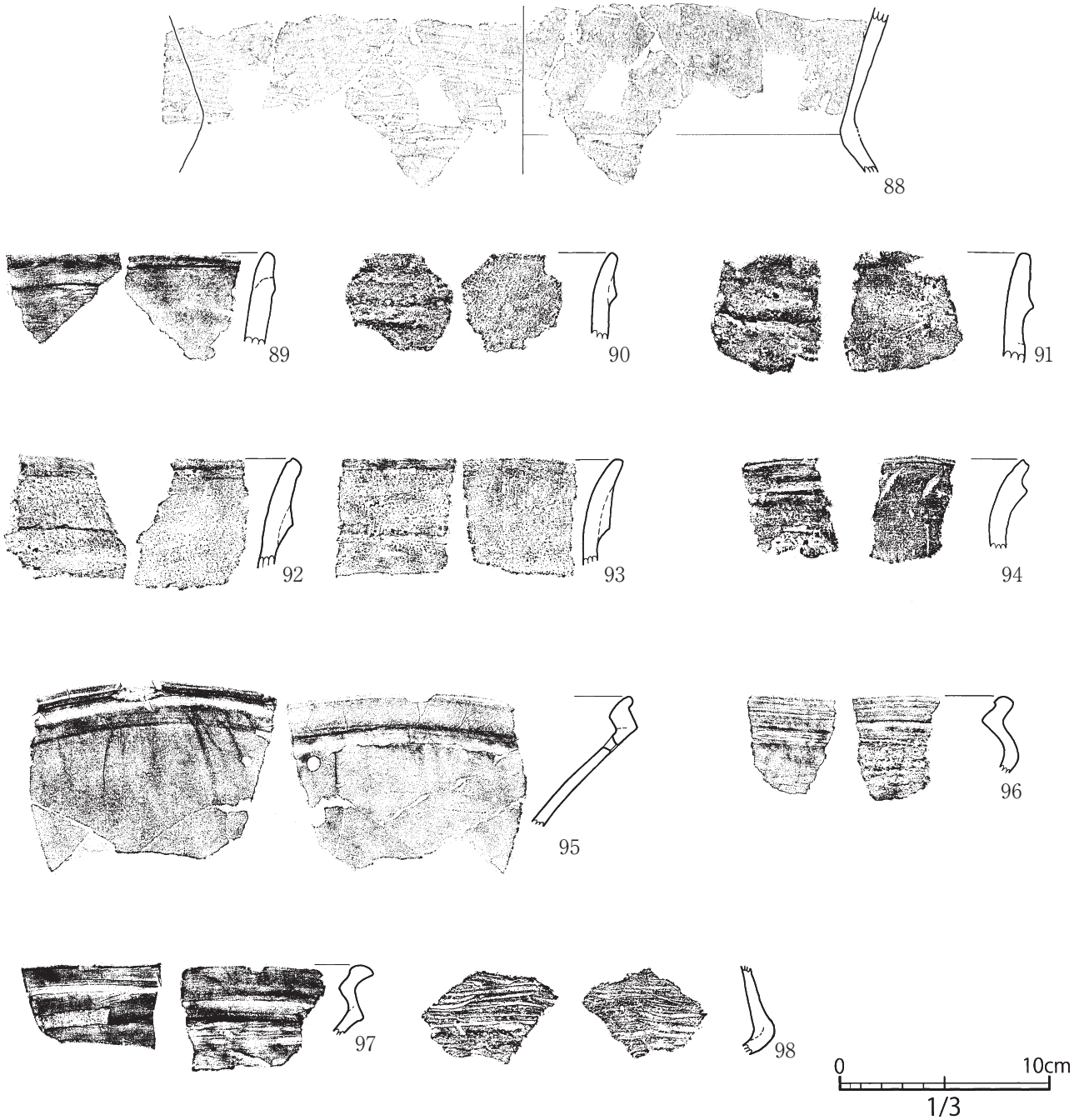
ない。73は色調が灰褐色で胎土に３㎜大の褐色の粒を含み、刺突列点文・横走沈線の上からヘラ状の工具で、大きく数本のへの字状の沈線を施す。波状沈線を意識したものか。74は胴部外面に縄文を施す。内面は貝殻条痕文である。75は頸部が屈曲するが無文である。76・77は注口土器あるいは浅鉢の肩部と思われる。凹線と凹線の間の突帯の上に刺突文を上下２段施している。

78 ～ 87は底部である。78 ～ 84は上げ底で、ミガキが底外面にもあるものが多い。接地面積が小さく、底面から外反しながら斜め上方に伸びる。85は浅い上げ底で、底面からなだらかに斜め上方に伸びる。86・87は平底で、86は底面付近の外面に指頭痕が強く残る。

第５節　縄文時代晩期の遺物

遺構はなく、深鉢や浅鉢など遺物のほとんどが谷部埋没土から出土した。

第32図88 ～ 94は深鉢である。88は頸部から折れ曲がって直に外傾する。89 ～ 94は口縁端部やや下部の外面に断面三角形の無刻目の突帯を貼り付けるか、または無文の口縁帯を作る。95 ～ 97は精製浅鉢である。95は長く伸びる胴部に頸部で屈曲し、短く外反する口縁部がつく。96・97は頸部と口縁部が一体化し短くなっており、口縁部の裏に段を施す。98は粗製鉢で内外面の調整は条痕である。



第 32 図　縄文時代晩期土器実測図

第８表　縄文時代後期遺構内出土土器観察表

No.	器種	部位	出土地点	法量(cm)	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
34	深鉢	口縁部	SC20		ナデ後、口唇部に沈線2本	口唇部付近に凹線横方向のナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(0.5YR6/6)	2mm以下の褐・灰白色粒を多く含む	波状口縁 外面黒変
35	深鉢	口縁部	SC20	口径(28.0)	口唇部は沈線1本、口縁部は横方向の丁寧なミガキ	口唇部付近に凹線丁寧なミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	3mm以下の褐・乳白色粒を含む	外面：一部黒変
36	深鉢	口縁部~底部付近	SC20	口径24.3	口縁部は工具による斜方向のナデ後に一部ミガキ、頸部は工具横ナデ、胴部は工具斜ナデ後に一部ミガキ	口縁部は横ナデ後に指押さえ、頸部から胴部は工具横ナデ	明赤褐(5YR5/6)	にぶい黄(2.5YR6/4)	3mm以下の黒・白色粒を多く含む	風化が著しい 炭化物付着
37	深鉢	頸部~胴部	SC20		ミガキ後、横走沈線3本,間に波状沈線、頸部は沈線間に刺突列点文	ミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	2mm以下の褐・灰・灰白色粒、微細な光沢粒を少し含む	一部スス付着
38	深鉢	頸部	SX1		ミガキ後、横走沈線3本,間に波状沈線、頸部は沈線間に刺突列点文	ミガキ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1~2mmの白色粒を含む	一部スス付着
39	深鉢	口縁部	SX1		ナデ後にミガキ	ナデ後にミガキ、沈線1本	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	1~3mmの灰白・褐色粒を含む	
40	深鉢	頸部~胴部	SX1		ミガキ後、横走沈線3本,間に波状沈線、頸部は沈線間に刺突列点文	頸部から胴部上部は丁寧なナデ、胴部下部は風化のため調整不明	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	4mm以下の灰・赤褐・灰白色粒を含む	頸部から胴部上部に一部スス付着

第９表　縄文時代後期土器観察表（1）

No.	器種	部位	出土地点	法量(cm)	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
41	深鉢	口縁部頸部	B-7	口径(28.7)	ナデ後に丁寧なミガキ、口唇部の沈線2本がX字状に反転	口唇部付近に凹線、横ナデ後にミガキ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(5YR6/4)	1~3mmの灰白・灰色粒を含む	
42	深鉢	口縁部	C-4		口唇部に沈線2本、ナデ	口唇部付近に凹線、横ナデ後に斜方向の工具痕	橙(2.5YR6/8)	明赤褐(2.5YR5/6)	5mm以下の灰白・灰赤色粒を含む	波状口縁
43	深鉢	口縁部~胴部	B-7 C-4		口唇部に沈線1本、横ナデ後にミガキ	口唇部付近に凹線、風化気味だがミガキ	にぶい赤褐(5YR5/4)	明赤褐(2.5YR5/6)	1~3mmの灰白・赤褐色粒を含む	スス付着
44	深鉢	口縁部~頸部	B-7	口径(17.2)	口唇部は深い沈線1本、頸部は横走沈線間に連続刺突文、その下の沈線間に波状沈線か	口唇部付近に凹線、口縁から頸部は風化気味だがナデ	明赤褐(5YR5/6)	灰(5Y6/1)	1~3mmの灰白色粒を多く含む	内面：口縁部一部黒斑
45	深鉢	口縁部	C-2		口唇部はナデ、工具による横方向の丁寧なナデ	口唇部付近に凹線、工具による横ナデ	黄灰(2.5Y4/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	微細な灰白・黒色光沢粒を含む	
46	深鉢	口縁部~底部	C-3	口径(27.6) 底径(7.1) 器高(24.85)	丁寧なナデ	口唇部付近に凹線、丁寧なナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	1mm以下の乳白色粒を含む	口縁から胴部にスス付着、胴部から底部に炭化物付着
47	深鉢	口縁部	C-3		口唇部は沈線1本、口縁部は工具による条痕文後、横ミガキ	口唇部付近に沈線1本、横ミガキ	にぶい褐(7.5YR5/4)	橙(5YR6/6)	2mm以下の乳白色粒を含む	一部スス付着
48	深鉢	口縁部	C-4		口唇部は縄文、口縁部は横方向のミガキ	口唇部付近に凹線、口縁部は横ミガキ	にぶい褐(7.5YR5/4)	橙(5YR6/6)	2mm以下の乳白・茶色粒を含む	スス付着
49	深鉢	口縁部	C-3		口唇部は平行沈線と縄文、横・斜方向のナデ、指頭痕	横ナデ、口唇部付近に沈線1本	褐(7.5YR4/4)	褐(7.5YR4/3)	3mm以下の黒褐・明褐・にぶい橙・黒色光沢粒を含む	波状口縁、スス付着、炭化物付着
50	深鉢	口縁部	C10tr		口唇部はナデ、口縁部は丁寧なナデ後にミガキ	口縁部は横ナデ、沈線２本、ナデ後にミガキ	赤褐(5YR4/6)	赤褐(5YR4/8)	1~2mmの灰白色粒を含む	
51	深鉢	口縁部	C-1		ナデ後にミガキ	口唇部付近に沈線1本、ミガキ	明赤褐(5YR5/6)	橙(5YR6/6)	2mm以下の灰白・乳白・赤褐色粒を含む	波状口縁、スス付着
52	深鉢	口縁部	C-1		口唇部はナデ、口唇部付近は指押さえ、口縁部はミガキ	口唇部付近に沈線1本、口縁部はミガキ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	2mm以下の灰白・乳白色粒を含む	波状口縁
53	深鉢	口縁部	C-1	口径(29.7)	口唇部はナデ、工具による横ナデ後にミガキ	口唇部付近に沈線１本、口縁端部に粘土の貼付、ナデ後にミガキ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	3mm以下の黒・灰色粒を多く含む	スス付着
54	深鉢	口縁部	C-1		口唇部は刻目、口縁部文様帯の2本の沈線の上下に羽状文、ナデ	丁寧なナデ、工具痕	明赤褐(5YR5/6)	橙(5YR6/6)	3mm以下の灰白・灰褐色粒を含む	スス付着、炭化物付着
55	深鉢	口縁部	B-7		ナデ後にミガキ	ナデ後にミガキ	明赤褐(5YR5/6)	橙(5YR6/6)	2mm以下の灰白色粒を含む	波状口縁
56	深鉢	口縁部	C10tr		短沈線文の上に沈線1本、横ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	2mm以下の灰・褐色粒を少し含む	

第10表　縄文時代後期土器観察表（2）

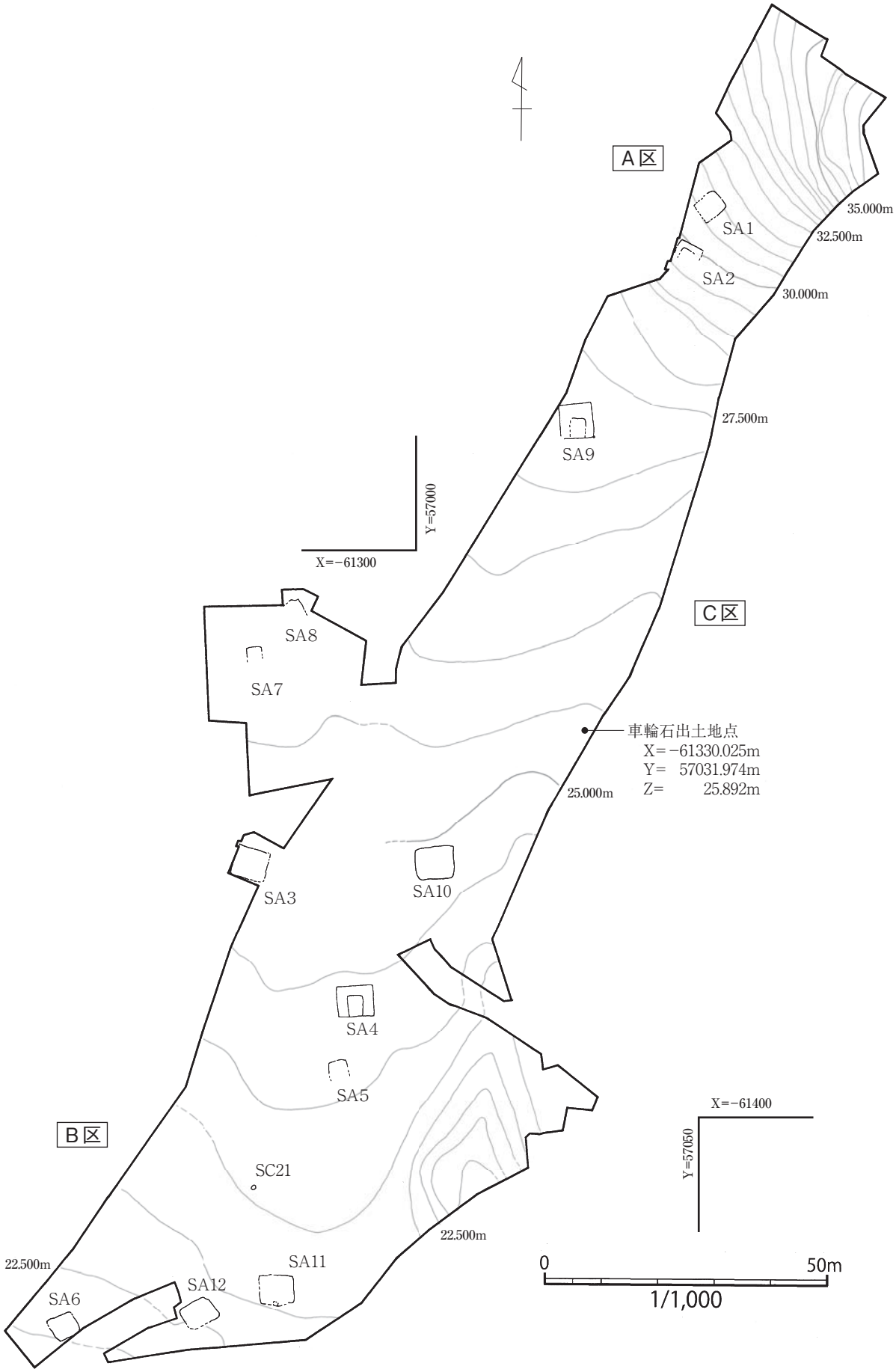
No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
57	深鉢	口縁部	B-2		口縁端部に刺突文による刻目、横ナデ	ナデ	にぶい橙（7.5YR6/4）	にぶい橙（7.5YR6/4）	2㎜以下の白・白色光沢粒を少し含む	
58	深鉢	口縁部~胴部	A-3 C-4	口径（24.7）	口唇部付近に丁寧なナデを1巡、口縁部は横ナデ、頸部はミガキ、工具痕、胴部は縦方向の粗いナデ	口唇部付近に丁寧なナデを1巡、口縁部から胴部はミガキ	橙（2.5YR7/6）	浅黄橙（7.5YR8/6）	4㎜以下の赤褐・透明光沢粒、2㎜以下の乳白色粒、微細な光沢粒を含む	スス付着
59	深鉢	口縁部~頸部	C-1 C-2		横ミガキ	口縁部はミガキ?、頸部は横ミガキ	橙（5YR6/6）	橙（5YR6/6）	3㎜以下の乳白・茶色粒を含む	スス付着
60	深鉢	口縁部	SA1		ナデ	横ナデ	明黄褐（10YR7/6）	にぶい黄橙（10YR7/4）	3㎜以下の褐灰・にぶい褐色粒を含む	外面：黒斑
61	深鉢	口縁部	SA10		口唇部はナデ、口縁部は風化気味だがナデ後にミガキ、指頭痕	ナデ後にミガキ	明赤褐（5YR5/6）	橙（5YR6/6）	3㎜以下のにぶい橙・灰白色粒を含む	
62	深鉢	口縁部	C-3		全体的に風化気味だがミガキか、頸部に指押さえ	横ナデ	明赤褐（5YR5/6）	明赤褐（5YR5/6）	1~2㎜の灰白色粒を多く含む	外面:一部黒斑、内面:口縁部に黒斑
63	深鉢	口縁部	C-3		口唇部はナデ、横方向の貝殻条痕文の後、頸部に貝殻腹縁刺突文	横・斜方向の貝殻条痕文	明赤褐（2.5YR5/6）	明赤褐（2.5YR5/6）	1~3㎜の赤褐・黄白・黒色粒を含む	
64	深鉢	口縁部	SA10		弧状の沈線、刺突のある突起、口唇部はナデ、口縁部はミガキ	ミガキ	にぶい橙（5YR6/4）	にぶい橙（2.5YR6/6）	2㎜以下の赤褐色粒を少し含む	
65	深鉢	口縁部	SA10		粘土の貼付突起、口唇部はナデ、口縁部はミガキ	横ミガキ	にぶい橙（7.5YR6/4）	にぶい橙（5YR6/4）	2㎜以下の褐色粒を少し含む	
66	深鉢	頸部~胴部	C-2		ミガキの後、横走沈線3本、間に波状沈線、X字状の反転、頸部沈線間に刺突列点文	頸部はミガキ、胴部は風化気味だが一部ミガキ	にぶい橙（7.5YR6/4）	橙（7.5YR6/6）	2㎜以下の白・褐色粒を多く含む	70と同一個体か
67	深鉢	頸部~胴部	B-7 C-2 C-3		66と基本的には同じだが、X字状の反転文を持たない	風化気味だが一部ミガキ、指頭痕	にぶい褐（7.5YR6/4）	にぶい褐（5YR6/4）	1~3㎜の灰白・赤褐粒を含む	
68	深鉢	頸部~胴部	C-2		66と基本的には同じだが、への字状の波状沈線文	横方向のナデ	にぶい橙（7.5YR6/4）	にぶい褐（5YR6/4）	2㎜以下の乳白色粒を多く含む	
69	深鉢	頸部~胴部	C-2		66と基本的には同じだが、Uの字状の波状沈線文	横方向のナデ、一部剥離	にぶい橙（7.5YR6/4）	にぶい橙（7.5YR6/4）	3㎜以下の乳白色粒を多く含む	
70	深鉢	頸部	B-7		66と基本的には同じ	ミガキ	橙（5YR6/6）	明赤褐（5YR5/6）	1~2㎜の灰白色粒を含む	66と同一個体か
71	深鉢	胴部	B-7		66と基本的には同じだが、波状沈線が刺突列点に置き換わる	ミガキ	にぶい橙（7.5YR6/4）	明赤褐（5YR5/6）	1㎜以下の乳白色粒を含む	スス付着
72	深鉢	頸部	C		66と基本的には同じだが、波状沈線を持たない	ナデ	にぶい赤褐（5YR5/4）	橙（5YR6/6）	2㎜以下の乳白色粒を含む	スス付着
73	深鉢	頸部	C-3		刺突列点文・横走沈線の上からヘラ状の工具で、大きく数本のへの字状の沈線	横ナデ	灰褐（5YR5/2）	灰黄（2.5Y6/2）	3㎜以下の茶色粒を含む	炭化物付着
74	深鉢	胴部	SA10		縄文	貝殻条痕文	橙（2.5YR6/6）	橙（5YR6/6）	2㎜以下の灰白・赤褐色粒、1㎜の黒色光沢粒を含む	
75	深鉢	頸部~胴部	C-4		風化気味だが工具による横ナデ後にミガキ	風化気味だが一部ミガキ、工具ナデ	橙（5YR6/6）	橙（7.5YR6/6）	2㎜以下の白・灰色粒を多く含む	
76	注口土器か浅鉢	肩部	C-4		肩部は横ナデ・指押さえ後に横ナデ、突帯の上に刺突文を上下2段	横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	浅黄（2.5Y7/3）	2㎜以下の黒色光沢粒を多く含む、2㎜以下の灰褐・茶褐色粒を含む	
77	注口土器か浅鉢	肩部	SA10		肩部は横ナデ・指押さえ後に横ナデ、突帯の上に刺突文を上下2段	横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	浅黄（2.5Y7/4）	2㎜以下の黒色光沢粒を少し、2㎜以下の灰褐・茶褐色粒を多く含む	
78	深鉢	底部	C-1	底径4.3	風化気味だが一部ミガキ	風化気味だが一部工具ナデ、ミガキ	にぶい橙（5YR6/4）	にぶい橙（5YR6/4）	3㎜以下の白・褐色粒を多く含む	スス付着
79	深鉢	底部	C-3	底径5.9	ナデ	粗いナデ、指頭痕	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい黄褐（10YR5/3）	1㎜以下の浅黄橙色・灰・褐色粒を含む	
80	深鉢	底部	C-4	底径（5.0）	ナデ	ナデ	橙（5YR6/6）	橙（2.5YR6/8）	3㎜以下の灰・褐・乳白色粒を含む	
81	深鉢	底部	C18tr	底径（8.8）	ナデ、指押さえ	風化が著しいがナデ	にぶい橙（7.5YR7/6）	にぶい橙（7.5YR7/4）	1~3㎜の灰白・褐灰色粒を含む	

第11表　縄文時代後期土器観察表（3）

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
82	深鉢	底部	C-4		ナデ、風化気味だが工具痕あり	斜方向のナデ	明赤褐（5YR5/6）	にぶい黄橙（10YR6/4）	2㎜以下の黒・褐色粒を多く含む	
83	深鉢	底部	B-5	底径5.9	ナデ	ナデ、工具痕	にぶい褐（7.5YR5/4）	橙（5YR6/6）	3㎜以下の乳白色粒、2㎜以下の橙色粒を含む	
84	深鉢	底部	B-7	底径（7.0）	工具による縦ナデ?、その後に横ナデ?	ナデ	にぶい橙（7.5YR6/4）	褐灰（10YR5/1）	3㎜以下の褐色粒を含む	
85	深鉢	底部	B-7	底径（6.9）	ナデ	風化気味だがナデ	褐（7.5YR4/6）	暗褐（7.5YR3/4）	2㎜以下の黒色光沢・灰白・灰褐色粒を含む	
86	深鉢	底部	C-2	底径（3.6）	工具による斜方向のナデ、深い指押さえ	調整不明	橙（2.5YR6/8）	明赤褐（2.5YR5/8）	6㎜以下の橙・赤灰・黒色光沢・半透明光沢粒を含む	
87	深鉢	底部	C-1	底径（4.35）	工具ナデ	ナデ	にぶい橙（7.5YR6/4）	橙（7.5YR6/6）	5㎜以下の乳白色粒、2㎜以下の灰褐色粒を含み、2㎜以下の黒色光沢粒を多く含む	

第12表　縄文時代晩期土器観察表

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
88	深鉢	口縁部~頸部	SA1		工具による横ナデの後、一部ミガキ	風化気味だが横ナデ後、一部ミガキ	灰黄褐（10YR5/2）	にぶい褐（7.5YR5/4）	2㎜以下の白色・褐色粒を多く含む	一部スス付着
89	深鉢	口縁部	C-1		ナデ、無文の貼付突帯	斜方向のナデ、浅めの指押さえ痕	暗灰（N3/）	暗灰（N3/）	1㎜以下の淡赤橙・赤灰・黒色光沢粒を含む	
90	深鉢	口縁部	B		ナデ、無文の貼付突帯	横ナデ	にぶい橙（7.5YR6/4）	にぶい橙（7.5YR6/4）	3㎜以下の橙・黒色光沢粒、2㎜以下の乳白色粒を含む	
91	深鉢	口縁部	C-2		ナデ、無文の貼付突帯、突帯下に強い指ナデ	横・斜方向のナデ	橙（5YR6/6）	橙（5YR6/8）	8㎜以下の橙・赤褐色・にぶい橙・暗赤褐・黒色光沢粒を含む	
92	深鉢	口縁部	C-1		ナデ、無文の貼付突帯	横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	3㎜以下の灰・白色粒を多く含む	
93	深鉢	口縁部	C-1		ナデ、無文の貼付突帯、指押さえ	横・斜方向のナデ	黄灰（2.5Y4/1）	黄灰（2.5Y6/1）	2㎜以下の黄灰色粒を含む	
94	深鉢	口縁部	C-1		ナデ、無文の貼付突帯	横ナデ、口唇部に工具痕	にぶい褐（7.5YR5/4）	にぶい褐（7.5YR5/4）	1~3㎜の褐灰・乳白色粒を含む	
95	浅鉢	口縁部	B2tr		ミガキ、補修孔あり	ミガキ	灰黄褐（10YR5/2）	灰黄褐（10YR5/2）	2㎜以下の乳白色粒、微細な黒色光沢粒を含む	スス付着
96	浅鉢	口縁部	C-1		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙（10YR7/4）	黄灰（2.5Y6/1）	2㎜程度の黒色粒を多く含む	スス付着
97	浅鉢	口縁部	C-3		ミガキ	ミガキ	明黄褐（10YR6/6）	にぶい黄橙（10YR6/4）	1㎜以下の黒色粒を含む	
98	鉢	胴部	C-3		条痕文	条痕文	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい黄橙（10YR6/3）	3㎜以下の乳白・赤褐・黒色光沢粒を含む	スス付着

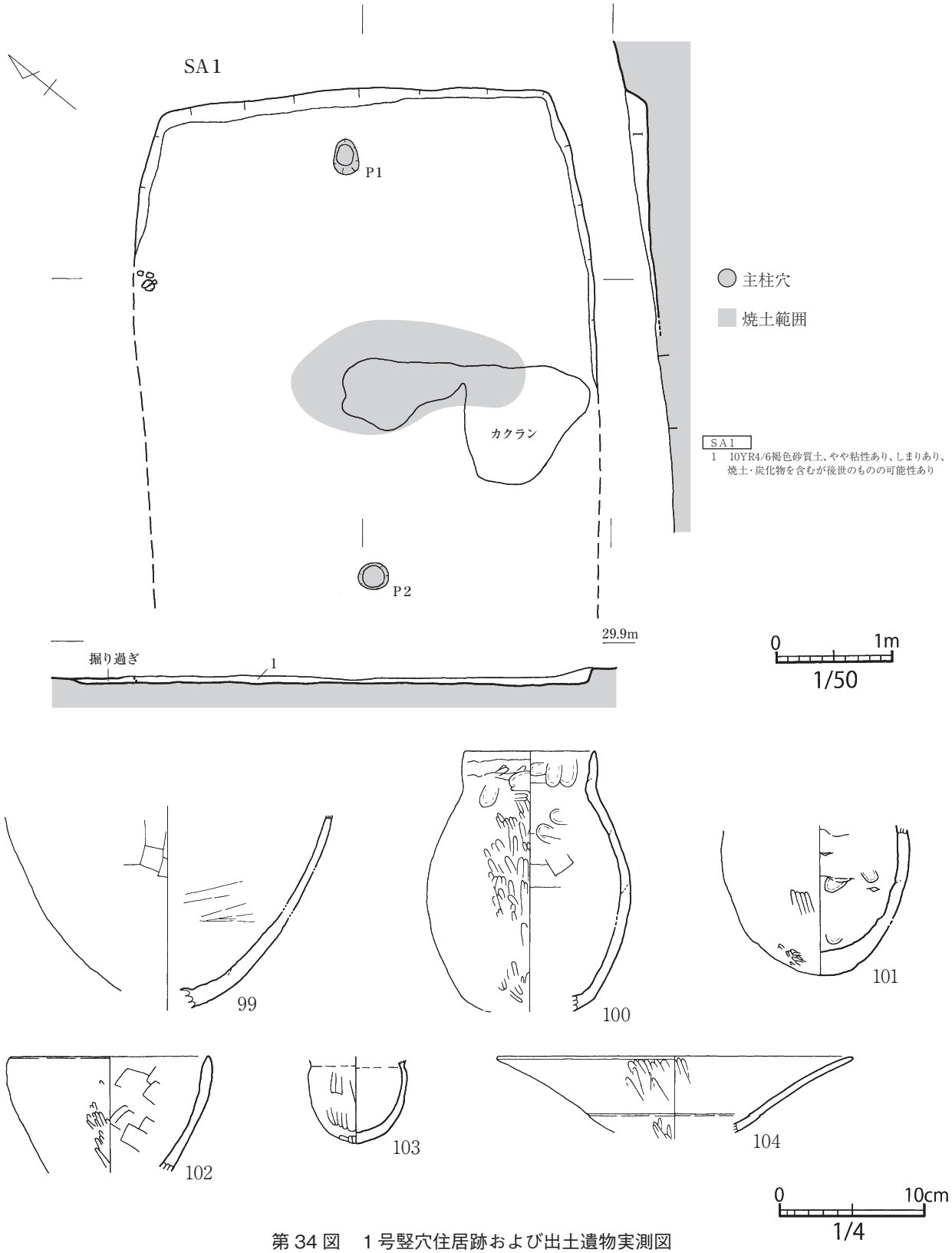


第 33 図　古墳時代遺構配置図

第６節　古墳時代の遺構と遺物

表土除去後、第Ⅱ層～Ⅳ層で竪穴住居跡12軒、土坑２基を検出している。遺構内や包含層から出土している遺物の大半は土師器である。その中には在地系に混ざり、外来系のものも出土している。また、谷部の埋没土谷２層（第Ⅰｂ層）最下部から古墳時代前期の車輪石が出土している。

以下に、遺構とそれに伴う遺物の詳細を述べる。



第 34 図　１号竪穴住居跡および出土遺物実測図

1　竪穴住居跡（ＳＡ　第13表）

竪穴住居跡は古墳時代前期の住居がＳＡ１～４・６～10の９軒、後期がＳＡ５・11・12の３軒である。切り合いは無く、比較的間隔を空けて立地している（第33図）。どの住居も明確な貼床を持たず、ベッド状の段を持つものが多い。柱穴が後世の柱穴と混在し、竪穴住居に伴う柱穴であると認定できないものもある。

ＳＡ１（第34図）

Ａ－２区斜面地の北東部、第Ⅳ層で検出したが、斜面を下るに従い削平の影響で残存率が低く、南端は確認できなかった。平面形は推定4.5m×4mの長方形である。土層断面では貼床は確認できなかった。埋土中の遺物は土師器の小片が多く、床面からも土師器の破片が見られるが、破片は大きくない。主柱穴は２本であった可能性が高い。

・ＳＡ１出土遺物

99は丸底の甕の胴部片である。100はほぼ完形の直口壺で、内面の口縁部は指押さえ痕が明瞭に残る。外面は口縁部に粘土のつなぎ目が残るものの丁寧な縦方向のミガキが施されている。101は壺の底部で器厚が厚い。102は鉢で口縁部はやや内湾しながら直立する。103は小型丸底壺で頸部がやや締まり、口径が胴部最大径より大きくなると考えられる。104は高坏で口縁部は長く外反しながら大きく開き、受部との境には内面には明瞭な段を、外面には沈線を施す。

ＳＡ２（第35図）

Ａ－２区斜面地の中腹、北東部、第Ⅳ層で検出。西側は大きな攪乱（ミカン穴）によって壊されて残存しておらず、北東隅の一角しか確認できていない。ＳＡ１同様に明確な貼床は無い。遺物は土師器の小片を埋土中に確認でき、床面で敲石105が出土している。埋土掘削後、中央部に焼土面を確認したが掘り込みはなく、地床炉と考えられる。壁際が一段高く、中央が少し低くなっているベッド状遺構をもつ住居である可能性がある。柱穴は１本しか確認できていない。

・ＳＡ２出土遺物

105は敲石で、石材は砂岩である。磨石から転用したものか。

ＳＡ３（第36図）

Ｂ－１区、第Ⅲ層下層～Ⅳ層で検出。北東部及び南東部が攪乱で欠損している。平面形は約6.0m×5.5mの方形である。この住居も明瞭な貼床をもたない。西部と南東部の壁際が一段低く、北部から東部の壁際が一段高い構造をしている。主柱穴は４本確認している。北東の壁際で大型壺113の胴部が出土している。

・ＳＡ３出土遺物

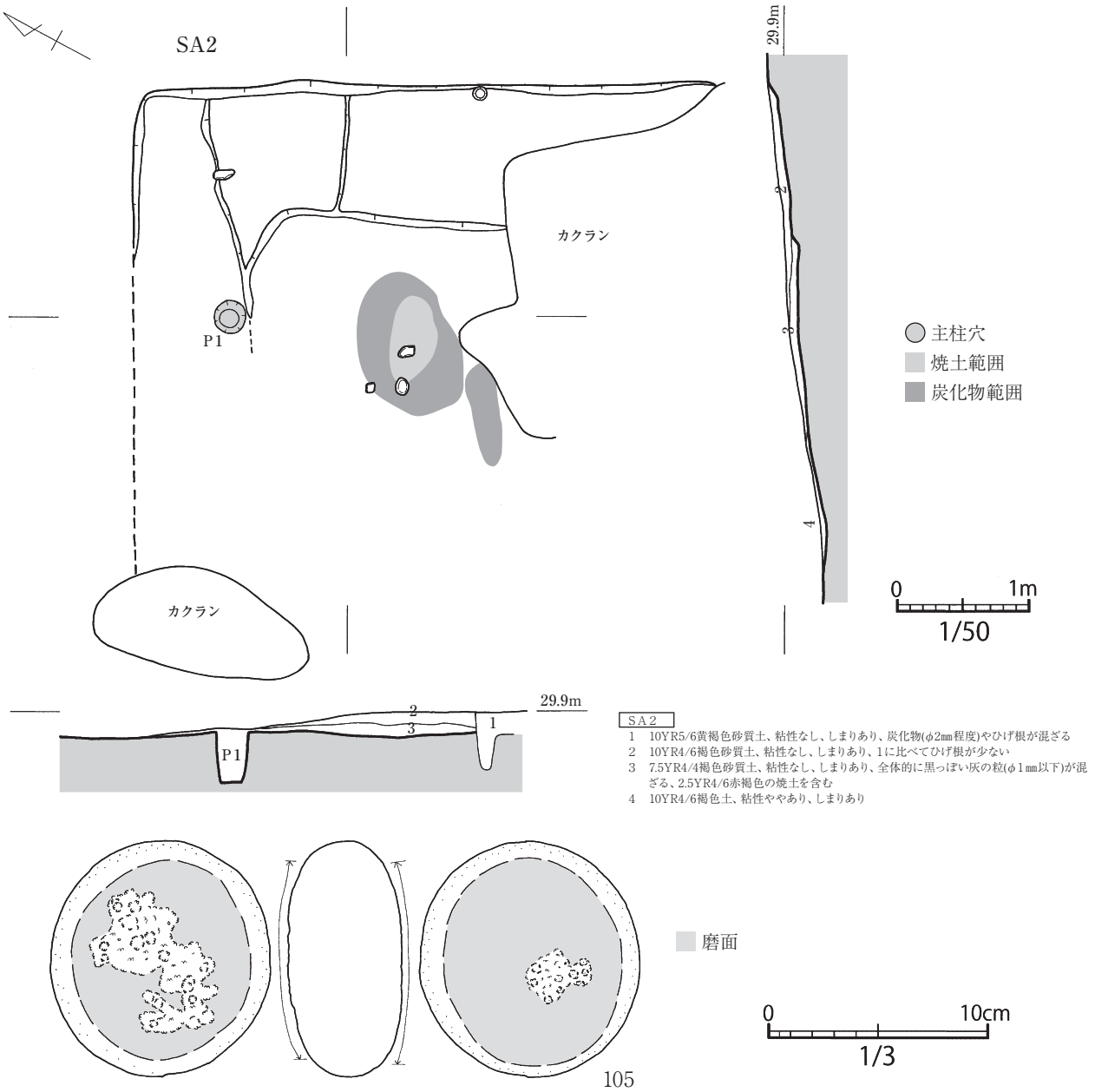
106～108・111・113は壺で、113は球胴壺の胴部である。109・110は小型丸底壺で頸部が締まり、口縁部はやや内湾しながら外傾している。109は胴部最大径が口径よりやや大きい。外面を丁寧なミガキで調整している。114・115は甕の底部で、平底で側面がやや外傾しながら立ち上がる。112は鉢で底部はやや平坦面を残し、口縁部を指で摘まみ出し尖らしている。116は高坏の坏部で、受部の内面に平坦面をもつ。

ＳＡ４（第37図）

Ｂ－３区北東部、第Ⅲ層で検出。平面形は東西6.5m×南北5.5mの長方形である。床面は第Ⅵ層で貼床はない。中央部から南方の１区画が一段低くなり、周囲はベッド状になっている。埋土１層除去後、中央～南側は２層が堆積し、２層上面の中央部分で焼土と炭化物が集中している部分（炉１）を検出し、その面を床面１とした。さらに中央部の２層を掘り下げると、中央部に２つ目の炉（炉２）を検出し、その床面を床面２とした。中央部は二段階に床が存在したと考えている。炉1の埋土中より採取した炭化種実がツブラジイの子葉であると同定された。また、１層を掘り下げて床面１にそろえた段階で柱穴を多数検出し、主柱穴はＰ２・３・４・７の４本と考えている。柱が４本より多い住居の可能性もあるが、中央部の床が２面あることを考慮すると建替えによるものである可能性が高い。中央部は南に緩やかに低くなっており南端には窪みがある。その窪みの中に多数の石器や礫とともに１個体の土師器の甕117が潰れた状態で出土している。

・ＳＡ４出土遺物

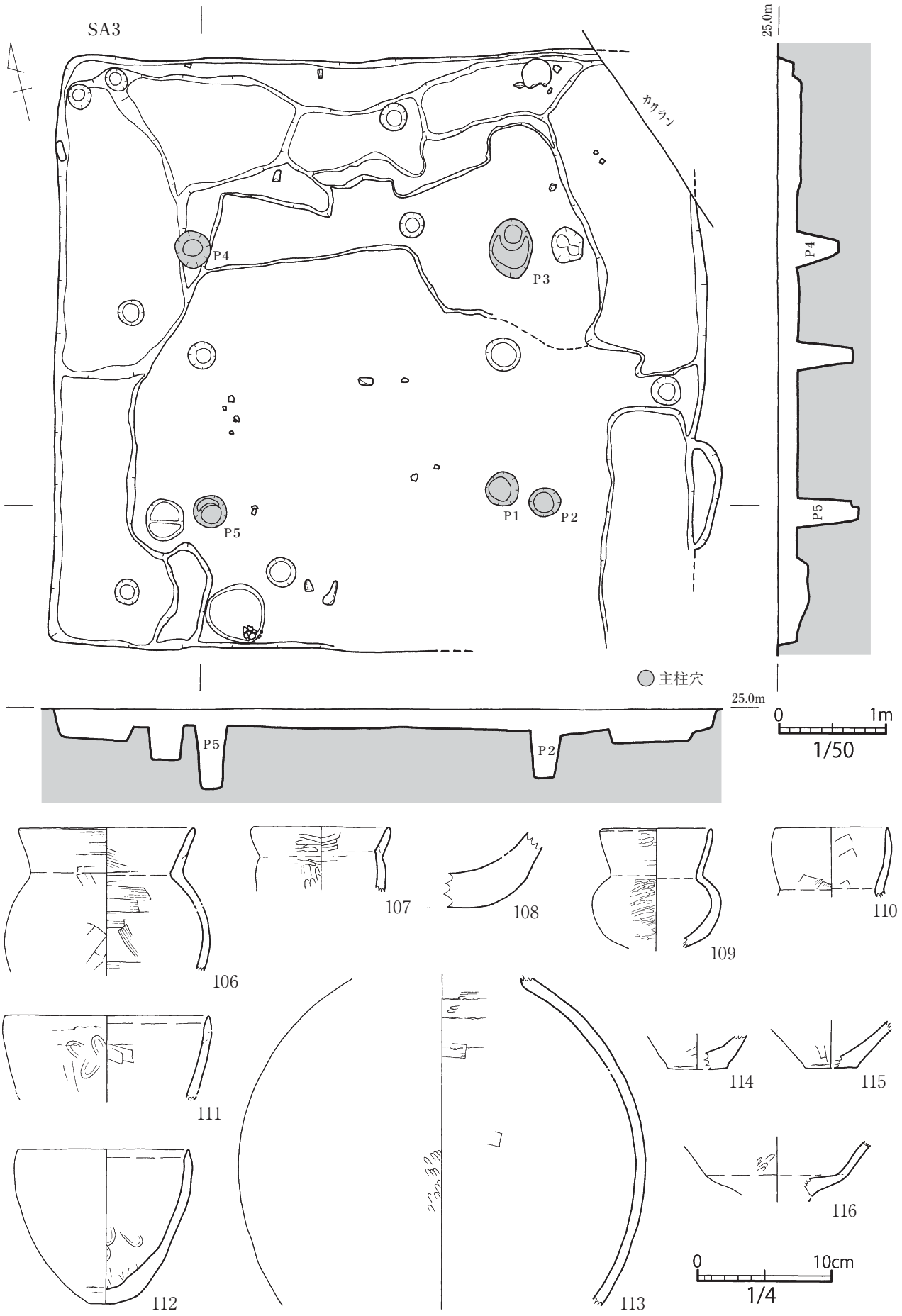
117はほぼ完形の甕で、底部は上げ底である。頸部は緩やかに屈曲し、長い口縁が外反する。118・120は敲石、119は石皿である。



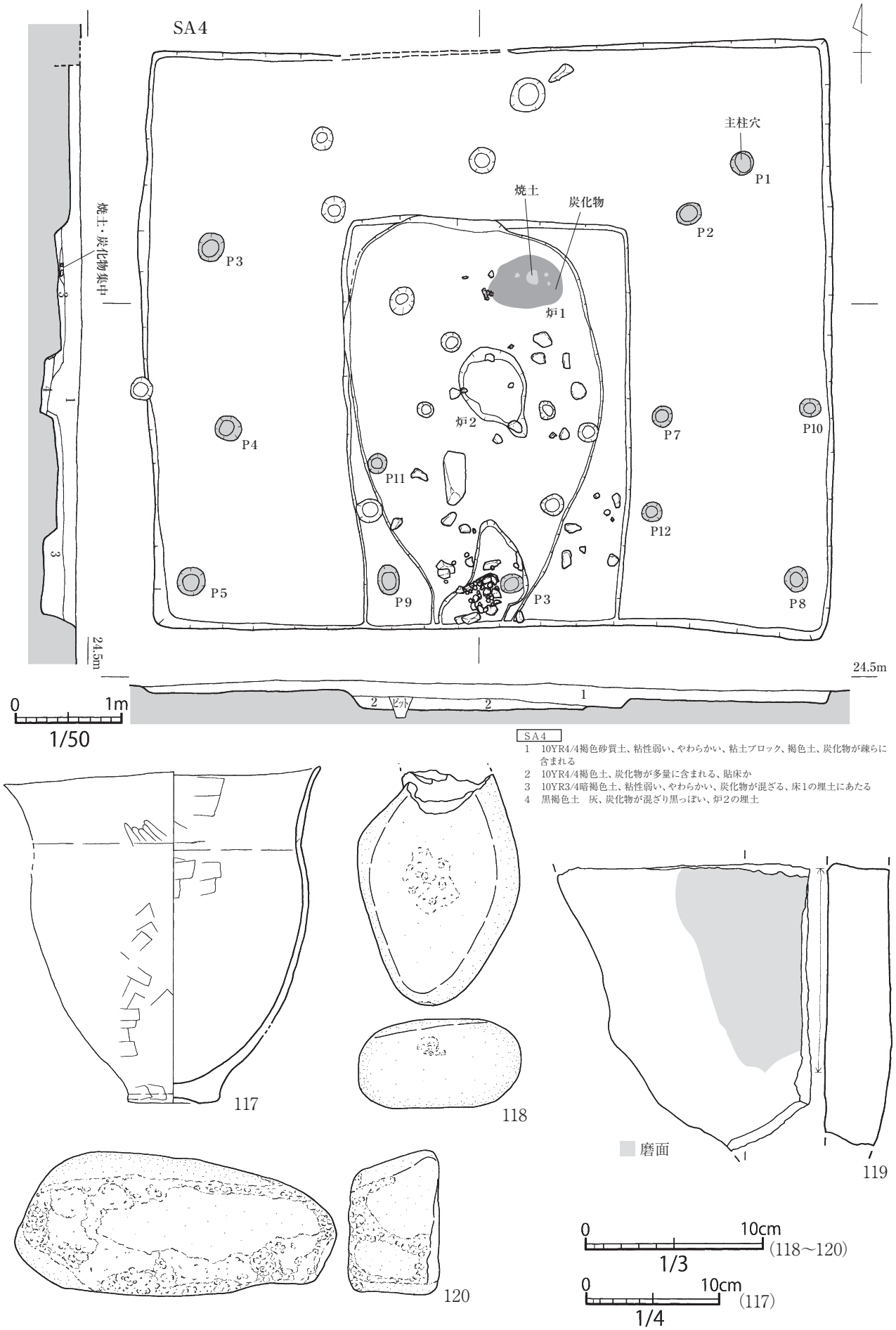
第 35 図　２号竪穴住居跡および出土遺物実測図

第13表　古墳時代竪穴住居跡観察表

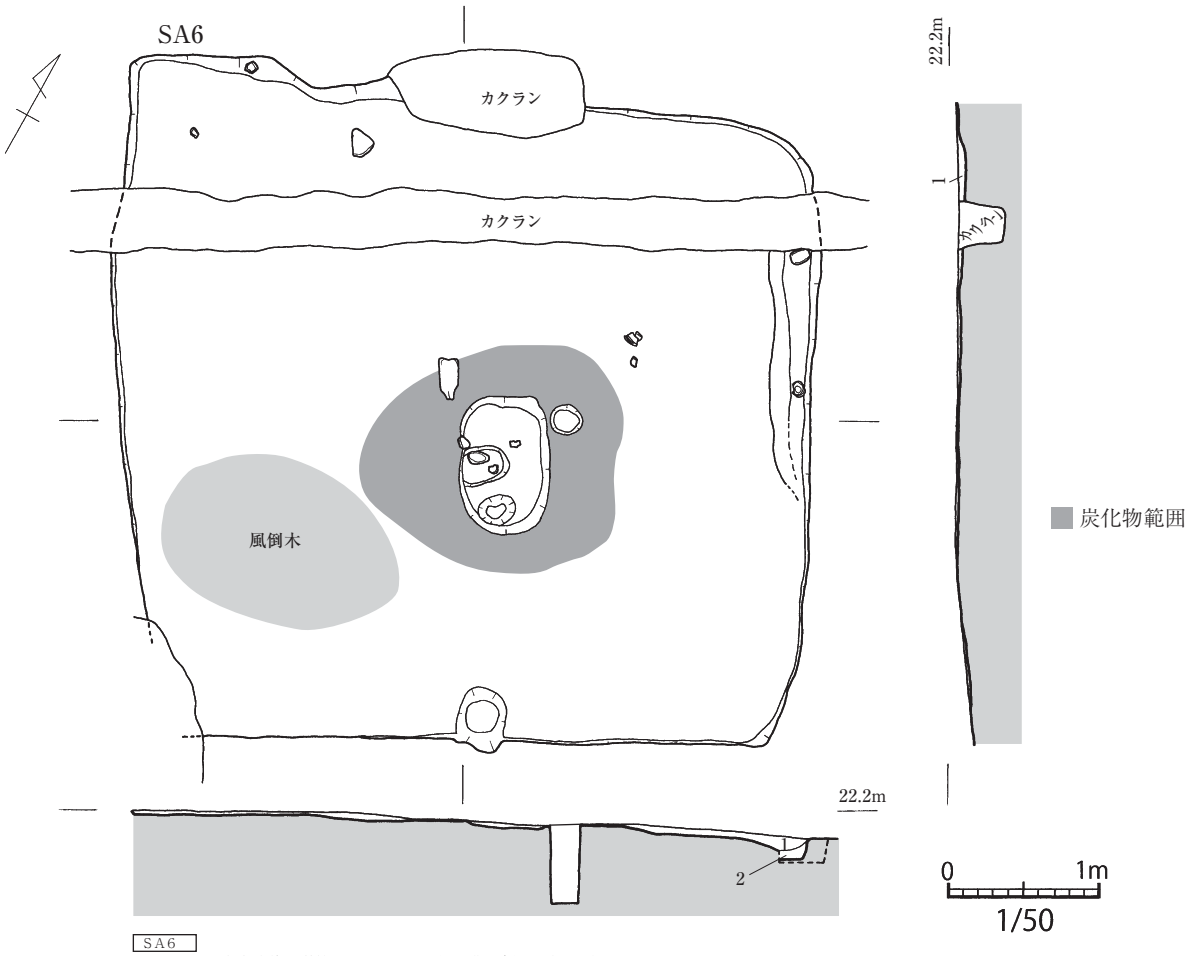
No.	位置〔区〕	層位〔層〕	主軸方位	形状	規模 横〔m〕	規模 縦〔m〕	構造〔本柱〕	備考
SA1	A−2	Ⅳ	N-53°-W	(長方形)	4.0	(4.5)	2	
SA2	A−2	Ⅳ	N-28°-E	(方形)	4.5	(4.5)	−	ベッド状遺構　地床炉
SA3	B−1	Ⅲ	N-14°-E	長方形	6.0	5.5	4	
SA4	B−3	Ⅲ	N- 1°-E	方形	6.5	5.5	4	ベッド状遺構　炉
SA5	B−3	Ⅲ	N-17°-W	(方形)	3.5	(3.5)	−	須恵器
SA6	B−4	Ⅳ	N-30°-W	方形	4.5	4.3	−	壁帯溝　炉
SA7	B−P	Ⅳ	N- 6°-W	(方形)	3.0	(3.0)	−	壁帯溝
SA8	B−P	Ⅳ	N-28°-W	(方形)	(3.75)	(3.75)	−	地床炉
SA9	C−1	Ⅲ	N- 3°-W	長方形	6.0	6.2	4	ベッド状遺構
SA10	C−4	Ⅲ	N- 2°-W	長方形	6.8	5.7	−	炭化材
SA11	B−8	Ⅳ	N-28°-W	長方形	6.0	5.5	4	須恵器
SA12	B−8	Ⅳ	N- 1°-E	長方形	5.7	4.2	4	瑯



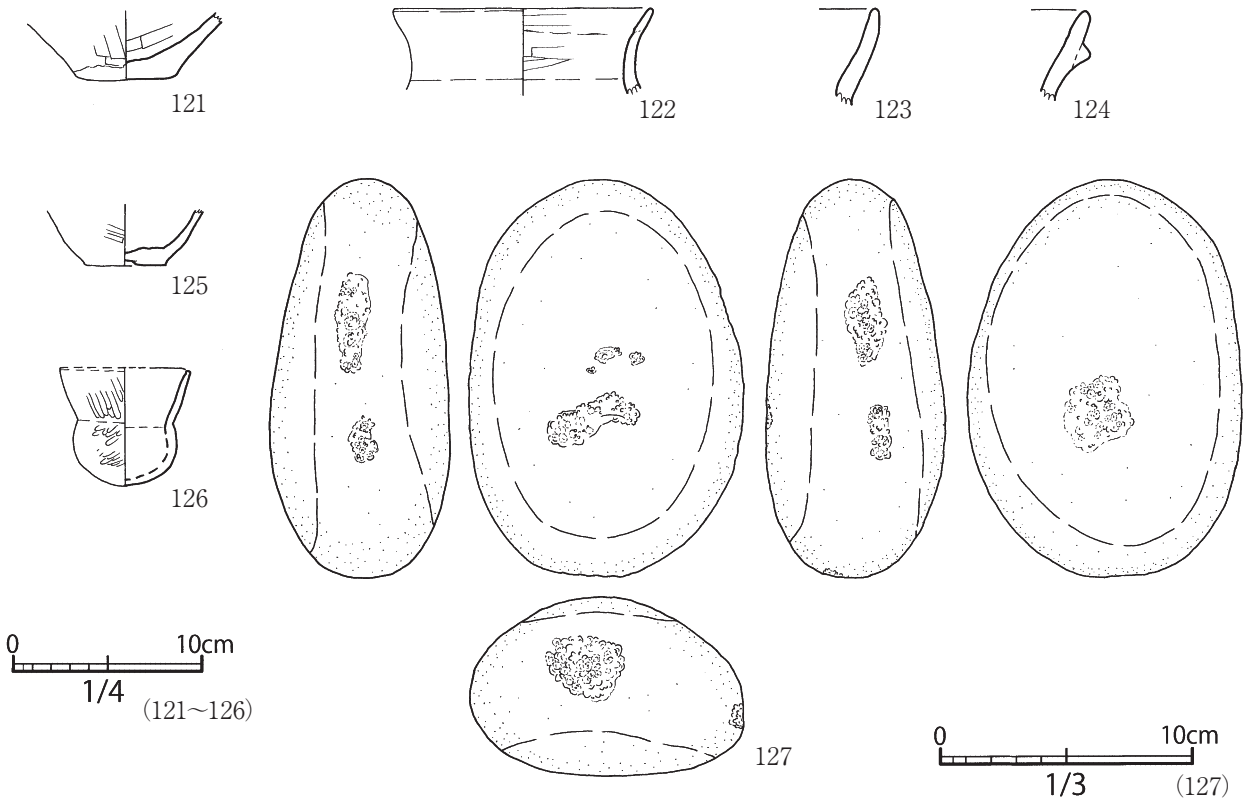
第 36 図　３号竪穴住居跡および出土遺物実測図



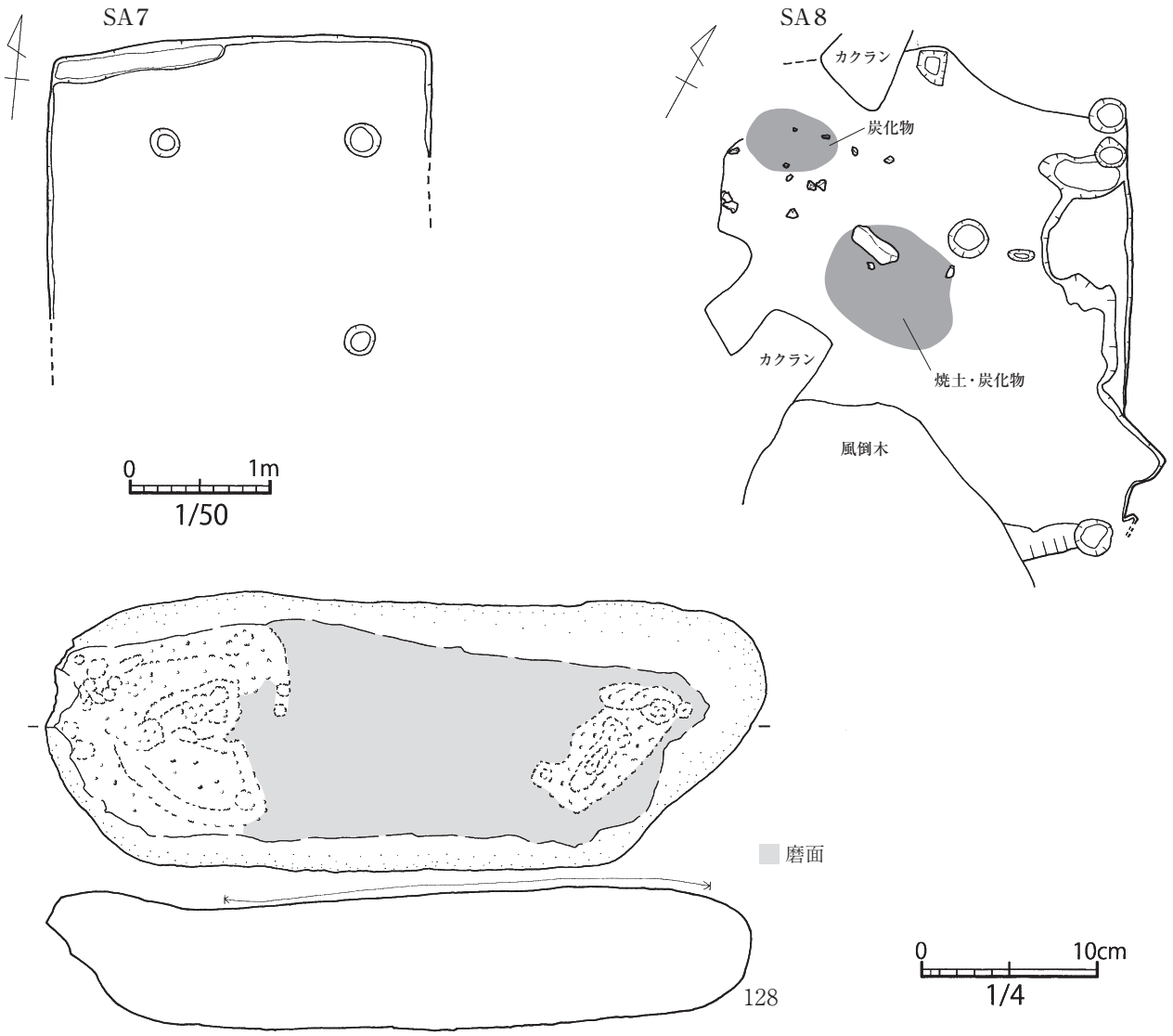
第 37 図　4 号竪穴住居跡および出土遺物実測図



SA6
1　7.5YR4/6褐色砂質土、粘性はややあり、しまり弱い、住居内埋土。粒子が細かい
2　7.5YR4/6褐色砂質土、粘性はあるが、しまり強い、貼床



第 38 図　6 号竪穴住居跡および出土遺物実測図



第 39 図　７号・８号竪穴住居跡および出土遺物実測図

ＳＡ６（第38図）

Ｂ－４区南端、第Ⅳ層で検出。風倒木で南西角を欠損しており、北側は東西にトレンチャー痕が横断する形で攪乱を受けている。東側の壁際に壁帯溝と考えられる窪みが見られる。中央部に掘り込みを持つ炉跡を検出している。住居に伴う柱穴は確認できていない。

・ＳＡ６出土遺物

121は甕の底部で平底、125は鉢の底部である。122～124は壺の口縁で124は断面三角形の突帯が貼り付く。126は小型丸底壺で頸部がやや締まり、口径が胴部最大径より大きい。127は敲石で石材は砂岩である。

ＳＡ７（第39図）

Ｂ－Ｐ区、第Ⅵ層検出。北端の一辺は2.5mで、他の住居と比較して規模が小さい。表土除去後、すぐに露出した第Ⅳ層上面で検出した。削平が著しく、北辺と北側両隅が残っている。埋土は他の竪穴住居跡と同様に暗褐色の砂質土である。北東側に壁帯溝と思われる窪みが一部見られる。検出段階から柱穴も検出できていたが、住居に伴うものかどうかは確認できていない。遺物は土師器の小片が数点出土したのみである。

ＳＡ８（第39図）

Ｂ－Ｐ区北端、第Ⅳ層で検出。風倒木や重機での削平による攪乱が著しく部分的に残存している。

中央部に地床炉と思われる焼土と炭化物の集中区が見られる。ピットも検出しているが、ＳＡ8に伴う柱穴の特定はできていない。

・ＳＡ８出土遺物

台石128が１点出土している。石材は砂岩で両端に敲打痕が見られ、中央部付近は擦痕が見られる。

ＳＡ９（第40図）

Ｃ−1区、第Ⅲ層検出。平面形は東西6.2m×南北6.0mの長方形で大きめの竪穴住居跡である。北西部の隅がA区にかかっているが、17年度調査時には検出できなかったため欠損している。

埋土は他の住居跡と同様に暗褐色の砂質土で、分層ができず、貼床は確認できていない。

中央部は埋土の残りが悪いものの、北西部が一段高くなる段差が確認できたことから、この住居跡も中央が低く三方にベッド状遺構を持つタイプのものと推測される。中央部には掘り込みを持つ炉が確認されている。西側にも焼土面とその周りが黒く変色している部分が見られるが、この住居跡に伴うものかは不明である。主柱穴は4本確認している。

また、北西隅の床直上に土師器の甕、高坏、鉢や台石等がまとまって出土しており、出土状況から埋没時の位置を留めていると考える（第40図右下）。住居内の南東部に礫と縄文時代後期の土器と土師器が混在している土坑を検出している（同左下）。土坑の埋土にアカホヤ火山灰が混ざること、かつ縄文時代後期以前及び古墳時代前期以降の遺物が入らないことから、縄文時代後期から古墳時代前期の間に掘られた土坑であると考えている。

・ＳＡ９出土遺物（第41・42図）

133・138 ～ 140・142・143・145・149は住居内土坑から出土したものである。

129 ～ 137は甕である。129は丸底で緩やかに立ち上がる。頸部がくの字に屈曲し、口縁部は内湾しながら外傾する。130は129と同一形式で、丁寧なナデにより頸部の内面に段を施す。内外面にケズリを施す。131は丸底で緩やかに立ち上がり、口縁部は頸部から外反しながら立ち上がる。132は平底に近い丸底で、胴部最大径が上位にあるため肩部が張り、口縁部は頸部から外反しながら立ち上がる。133は口縁が外反しながらやや外傾し、口径が胴部最大径より大きい。135は口唇部に面取りが見られる。136は平底気味の丸底、137は器厚が厚い丸底である。

138 ～ 140・143・144は壺である。138は複合口縁壺の２次口縁部が直に立ち上がり、櫛描波状文を施す。140は壺の頸部に貼付刻目突帯を施す。141・142は鉢である。141は口縁部は短く、やや外反し、口径が器高より大きい。142は口縁が長く、やや外反し、口径と器高がほぼ等量である。

145は手捏ね土器で口縁端部を摘まみ上げ尖らしている。

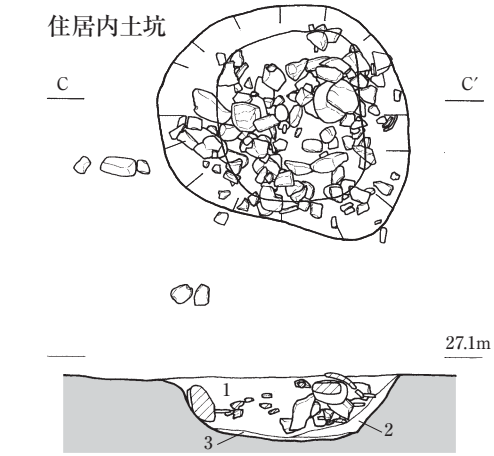
146 ～ 149は高坏である。146はいわゆる有段高坏で坏部は口縁部が真っ直ぐ外傾し、内外面に縦方向のミガキを施す。有段部は外に大きく張り出し、脚部は中ほどで強く屈曲し内湾する。坏部と脚部の接合部には半球形の粘土塊が充填される。147は受部と口縁部境に段をもたず、口縁部はなだらかに外反し開く。内面に暗文を施す。148は受部内面が平坦で、口縁部との境に明瞭な段をもち、内外面ミガキを施す。149は脚部で横方向のミガキを施す。

150は敲石、151・153は台石で、153は縁辺部に縦長の敲打痕が多数見られる。152は打欠石錘である。

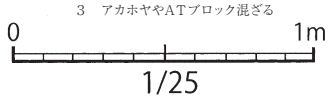
ＳＡ10（第43図）

Ｃ−４区西側、第Ⅲ層で検出。南西部は風倒木の影響を受けている。中央部付近に炭化物や焼土を伴う浅い掘りこみを２基確認し、炉跡であると考えられる。炉1の底面から敲石193が出土した。フローテーション法により炉２の埋土から採取した炭化種実を同定するとイネが認められた。南東部から中央部にかけて３～４㎝大の炭化材を検出し、周辺には炭化物や焼土が広がっている。この炭化材を樹種同定した結果、ミズキ属の可能性が高い。住居内の土坑を４基検出しており、北東部の土坑からほぼ完形の壺170が出土している。柱穴は10基検出しているが、住居跡に伴うものであるかは確認できてない。遺物は北西部を中心として出土しており、そこからは複合口縁壺64も出土している。

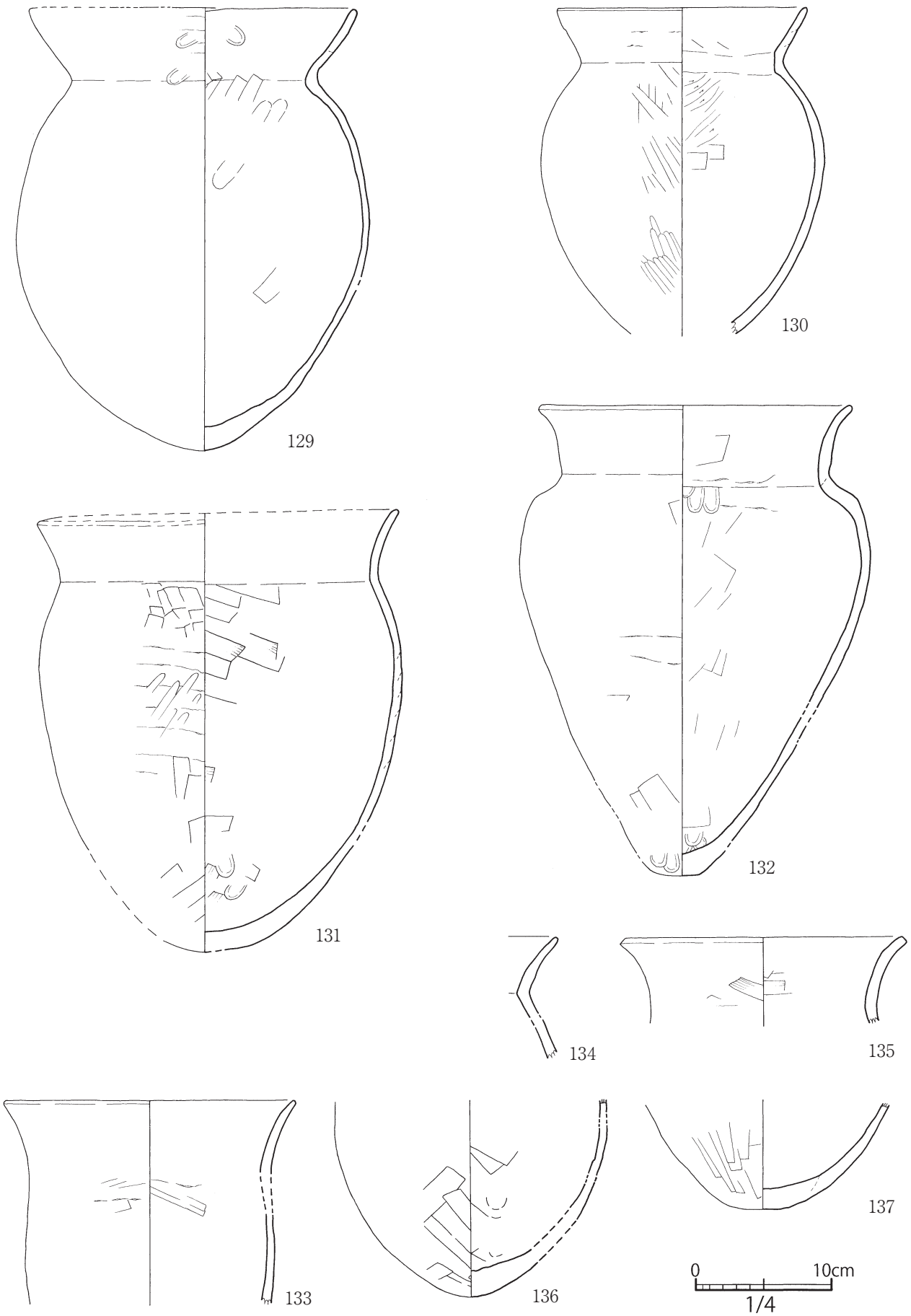
SA9
1　粘性弱くサクサクしている、10YR4/6褐色土ブロック・アカホヤが混ざる、炉付近には炭化物が多い



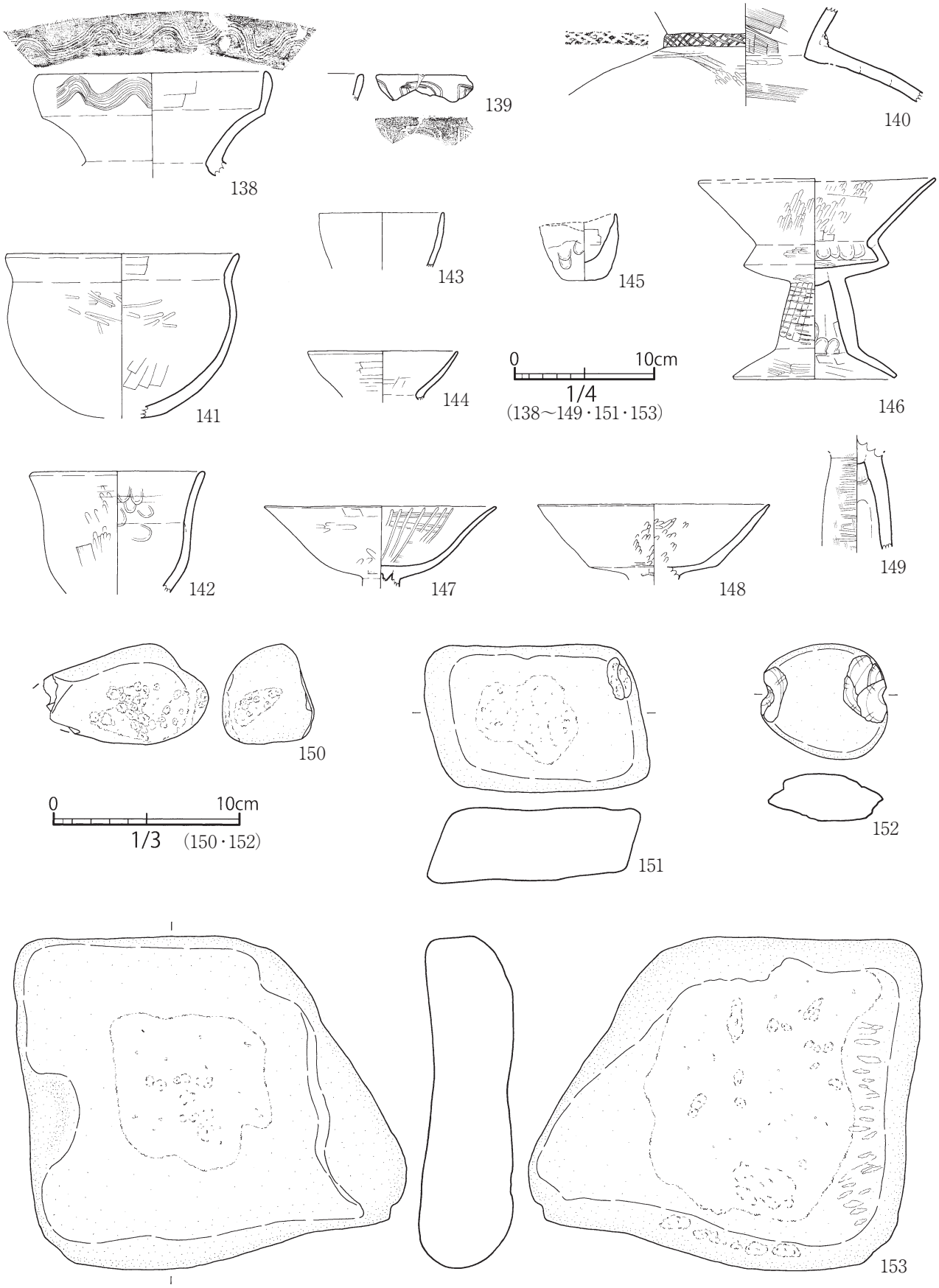
住居内土坑
1　10YR3/4暗褐色土、住居の埋土よりやや暗い
2　ATブロック含む、地山が崩れたものか
3　アカホヤやATブロック混ざる



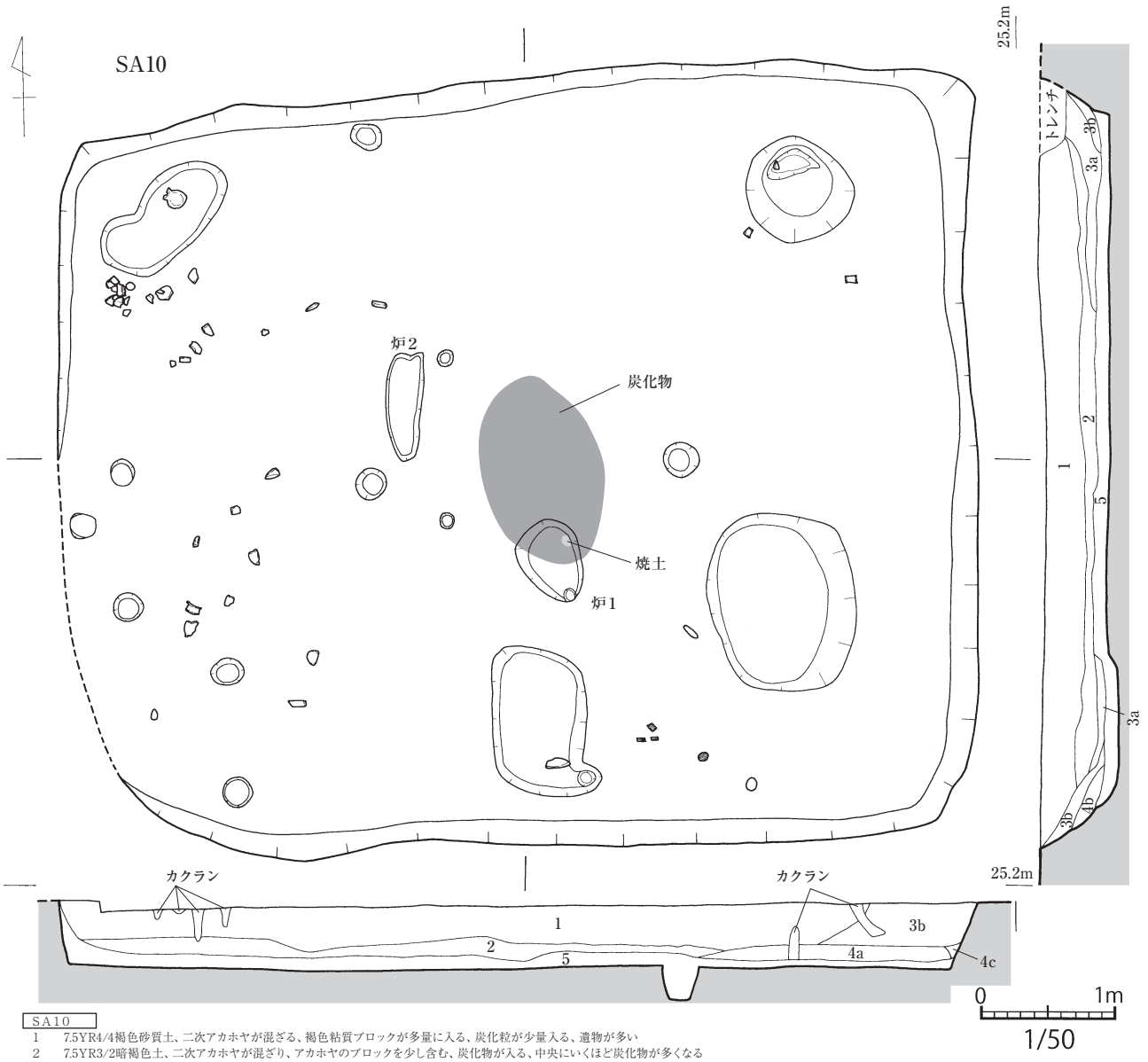
第40図　9号竪穴住居跡および住居内土坑、遺物集中区実測図



第 41 図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（１）



第 42 図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（２）



SA10
1　7.5YR4/4褐色砂質土、二次アカホヤが混ざる、褐色粘質ブロックが多量に入る、炭化粒が少量入る、遺物が多い
2　7.5YR3/2暗褐色土、二次アカホヤが混ざり、アカホヤのブロックを少し含む、炭化物が入る、中央にいくほど炭化物が多くなる
3a　7.5YR3/4暗褐色砂質土、二次アカホヤが混ざり、アカホヤのブロックを少量含む、さらさらしている、粘質土が少し混ざる、小さな炭化物の粒も入る
3b　7.5YR4/4褐色土砂質土、二次アカホヤが混ざる、褐色粘質ブロックが多く入る、小さな炭化物の粒も入る
4a　7.5YR3/3暗褐色土、粘性あり、固くしまる、アカホヤブロックを含む
4b　7.5YR3/3暗褐色、粘性あり、固くしまる、粘土が混ざる
4c　7.5YR3/3暗褐色土、4aに二次アカが混ざる、壁帯溝か
5　10YR3/4暗褐色、粘性あり、しまりあり、褐色土・ATブロック（φ3cm）が混ざる

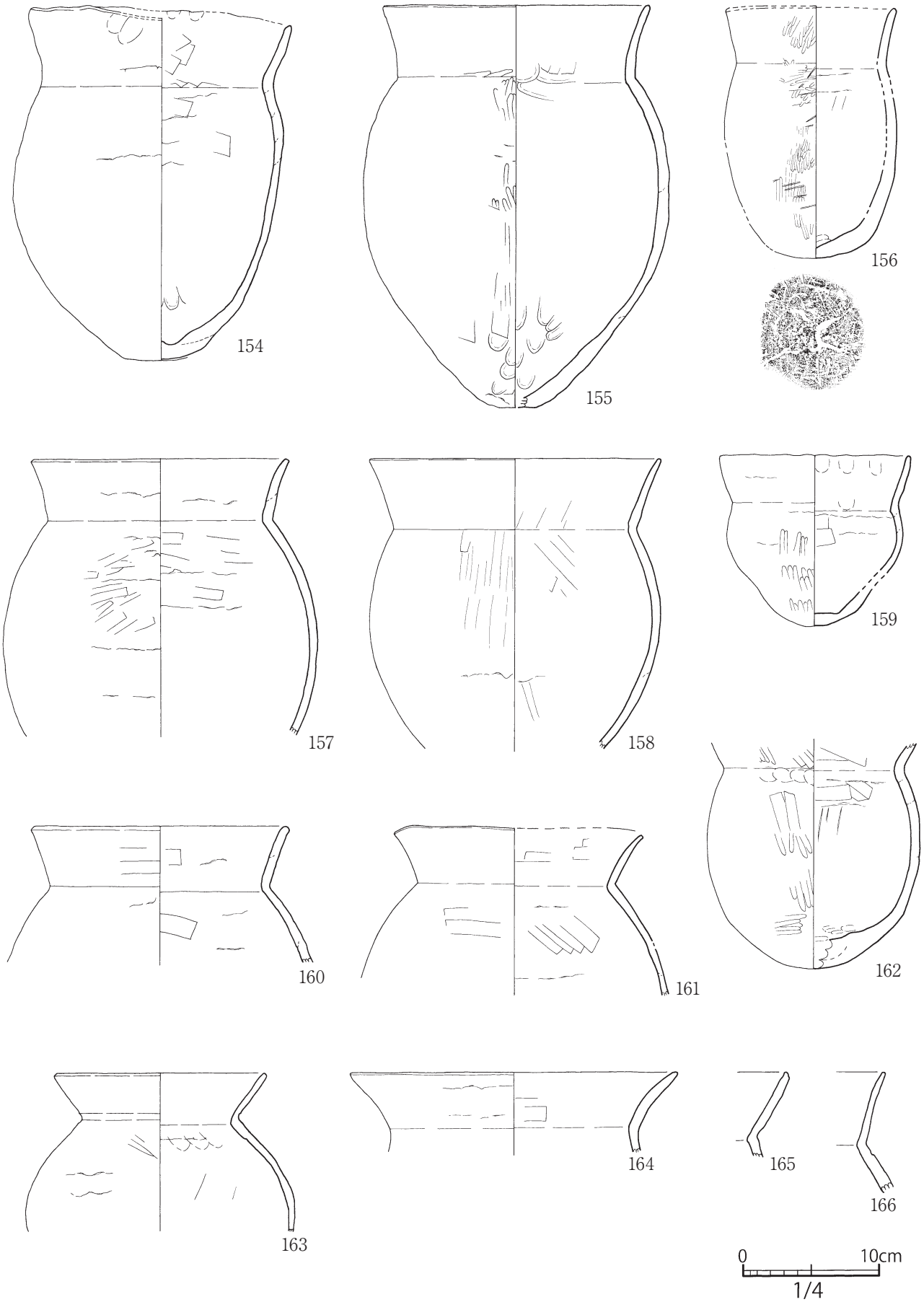
第43図　10号竪穴住居跡実測図

・SA10出土遺物（第44～46図）

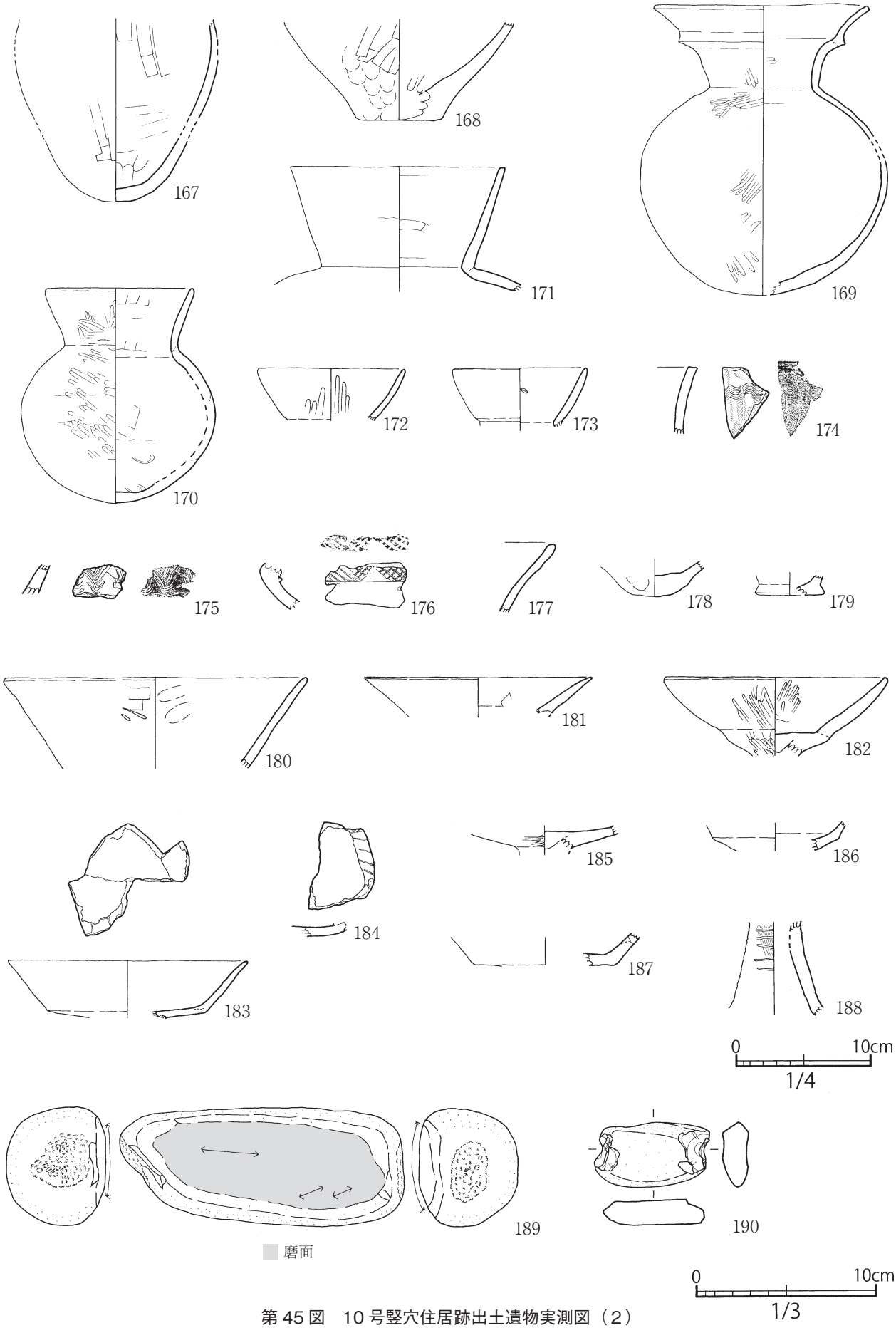
154～168は甕である。154はやや平底で緩やかに立ち上がる。口縁部は内湾しながら外傾する。155～161は頸部がくの字に屈曲し、やや外反しながら緩やかに立ち上がる。155は頸部から胴部にかけて外面にミガキを施す。163は胴部が張り、頸部外面を強いナデにより明瞭な稜を作る。口縁部はやや内湾しながら外傾する。156～162は小型の甕である。156は主にタタキの後に縦方向のミガキを施す。159は口径が胴部最大径より大きく、口縁端部に指押さえが見られる。162は丸底で器厚が厚い。167は丸底、168は平底で外面の底部付近に指押え痕が多数残る。

169～177は壺である。169は複合口縁壺で、球胴を呈し、頸部から外反しながら立ち上がり、２次口縁も外反する。170は器壁が全体的に薄く、外面にミガキを施す。171は頸部がＬ字状に屈曲する。172・173は壺の口縁部でやや内湾しながら外傾する。174・175は口縁部に櫛描波状文を施し、176は頸部に貼付刻目突帯を施す。

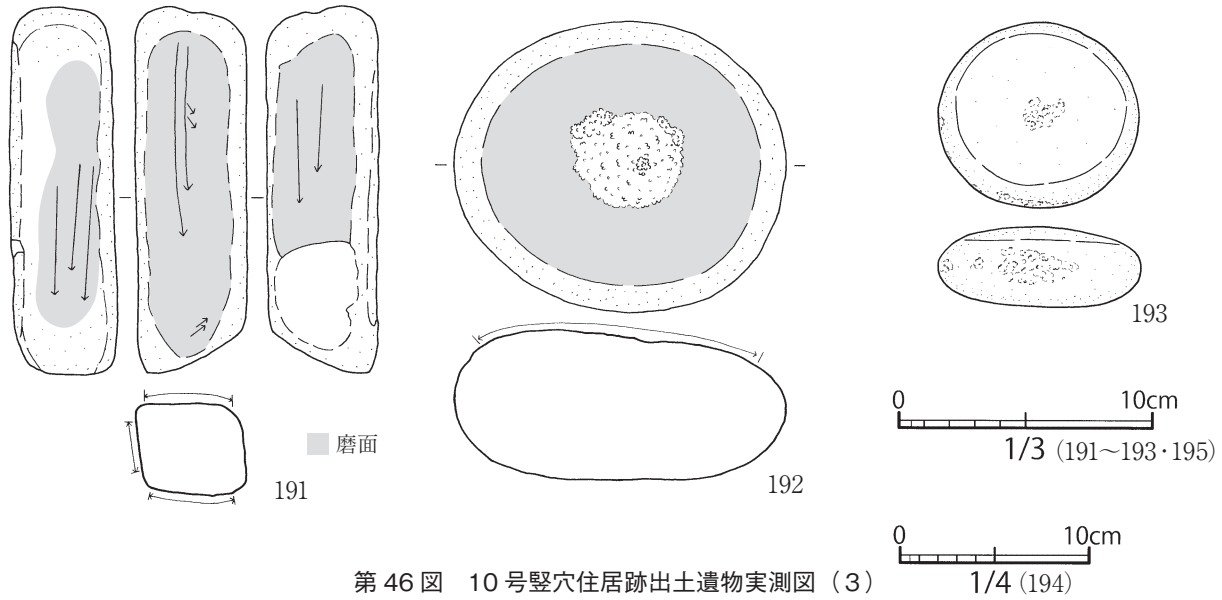
178はやや丸底、179は平底の鉢である。



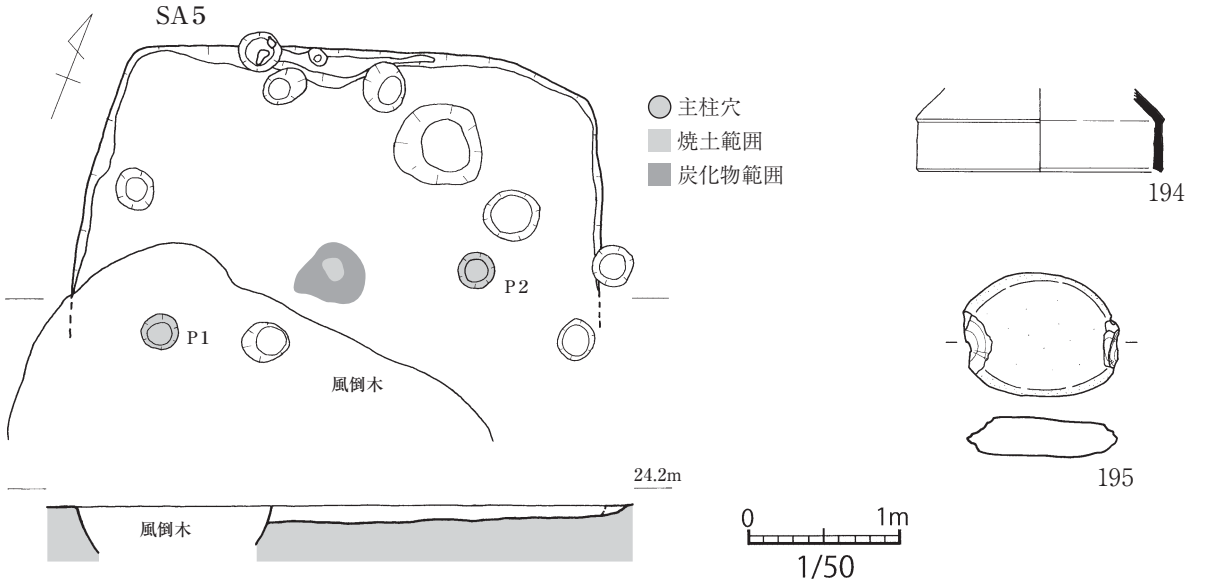
第 44 図　10 号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）



第 45 図　10 号竪穴住居跡出土遺物実測図（2）

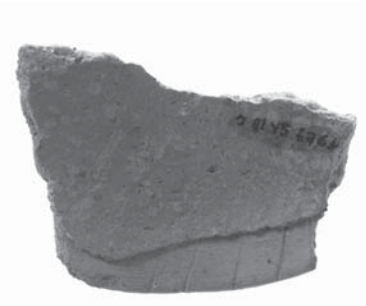


第46図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図（３）



第47図　５号竪穴住居跡および出土遺物実測図

180～188は高坏である。183・184は受部の接合部に刻みを等間隔で施し、坏部との接合技法が見られる。



高坏（184）接合部写真

188はハケ目の後に暗文に類似した横方向のミガキが見られる。

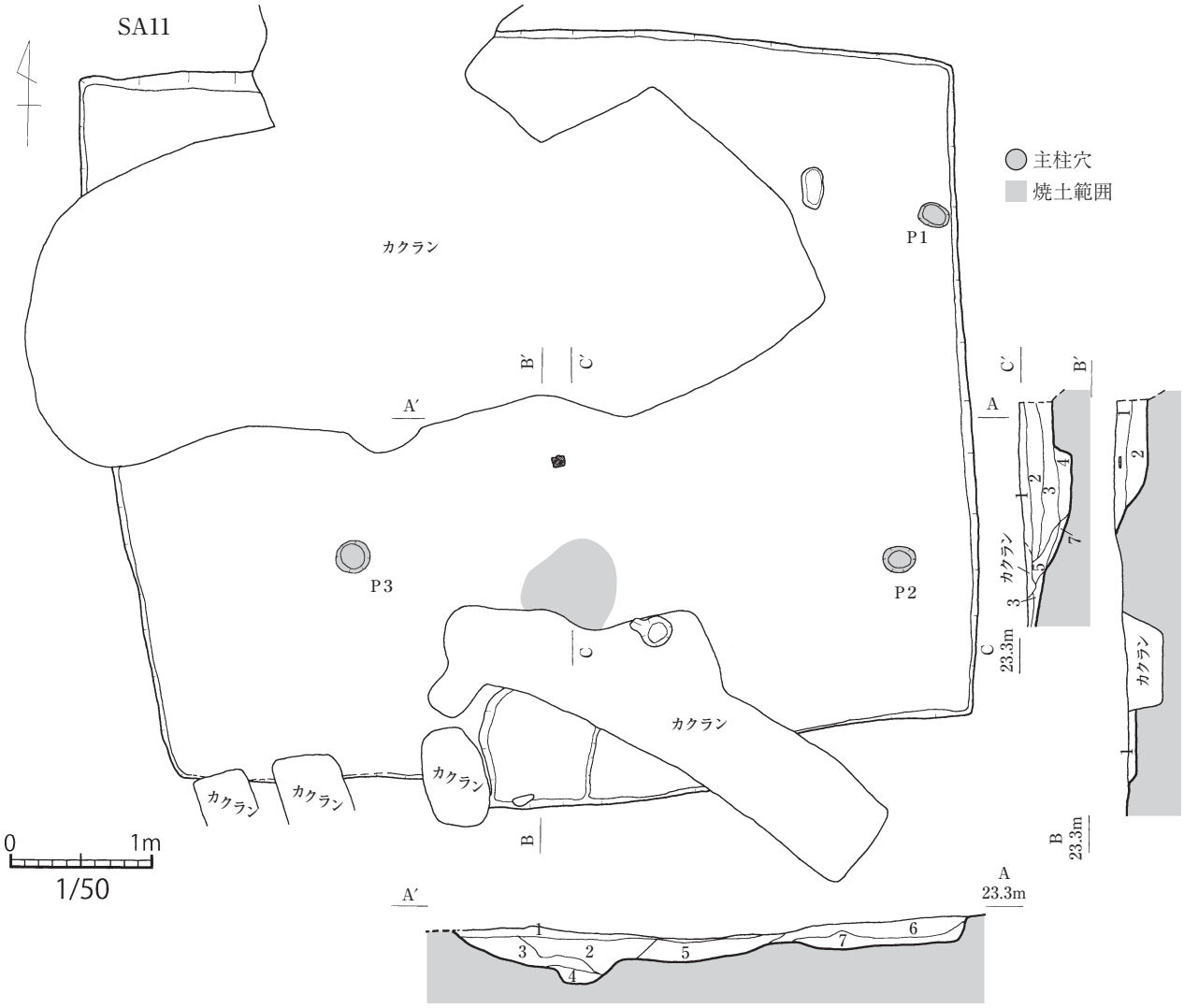
192は敲石で、表面には敲打痕の前に磨面が見られる。磨石からの転用か。

ＳＡ５（第47図）

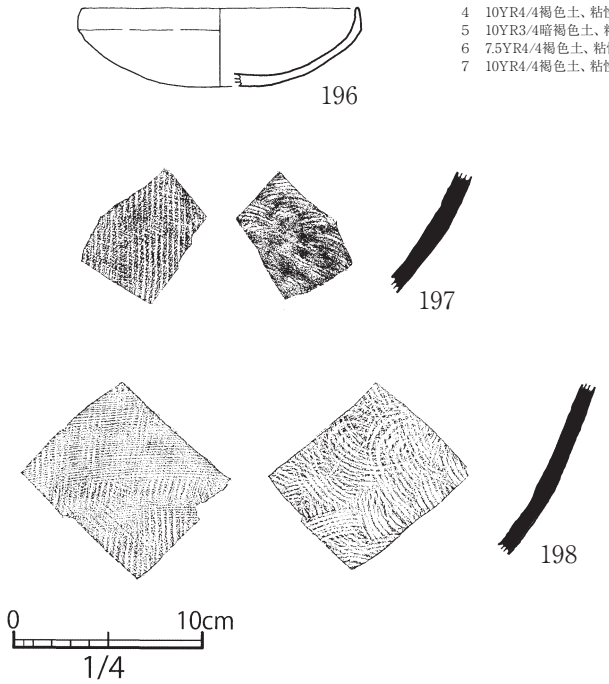
Ｂ－３区、第Ⅳ層検出。規模は東西3.5mであるが、南下するとともに削平が激しく南端が確定できない。埋土はほとんど残っておらず、柱穴と思われるピットが多数検出できたが、後世のものと混在している。主柱穴は２本確認している。主柱穴Ｐ１から須恵器の坏蓋194が出土している。

・ＳＡ５出土遺物

194は古墳時代後期の須恵器の坏蓋で肩に段があり、195は尾鈴山酸性岩類製の打欠石錘である。



SA11
1　10YR4/6褐色土、粘性弱くやわらかい、粘土ブロック、褐色土が混在する、根が多い
2　10YR4/6褐色土、粘性弱くやわらかい、10YR3/3粘土ブロックがごく少量混ざる、ATブロック(φ2㎜)少量入る、6層よりやや暗い
3　10YR3/4暗褐色土、粘性弱くやわらかい、焼土粒、褐色土疎らに含む
4　10YR4/4褐色土、粘性あり、しまりあり、焼土ブロック(φ2～4㎜)が疎らに入る、ATブロック少量含む、炉穴の埋土か
5　10YR3/4暗褐色土、粘性弱くややしまる、10YR3/3粘土ブロックが多く含まれる、ATブロック少量含む
6　7.5YR4/4褐色土、粘性弱くパサパサしている、しまりややあり、ATブロック(φ3～5㎜)が少量入る。比較的混ざり気が少ない
7　10YR4/4褐色土、粘性弱くやわらかい、ATブロック(φ5～40㎜)が中量混ざる、貼床



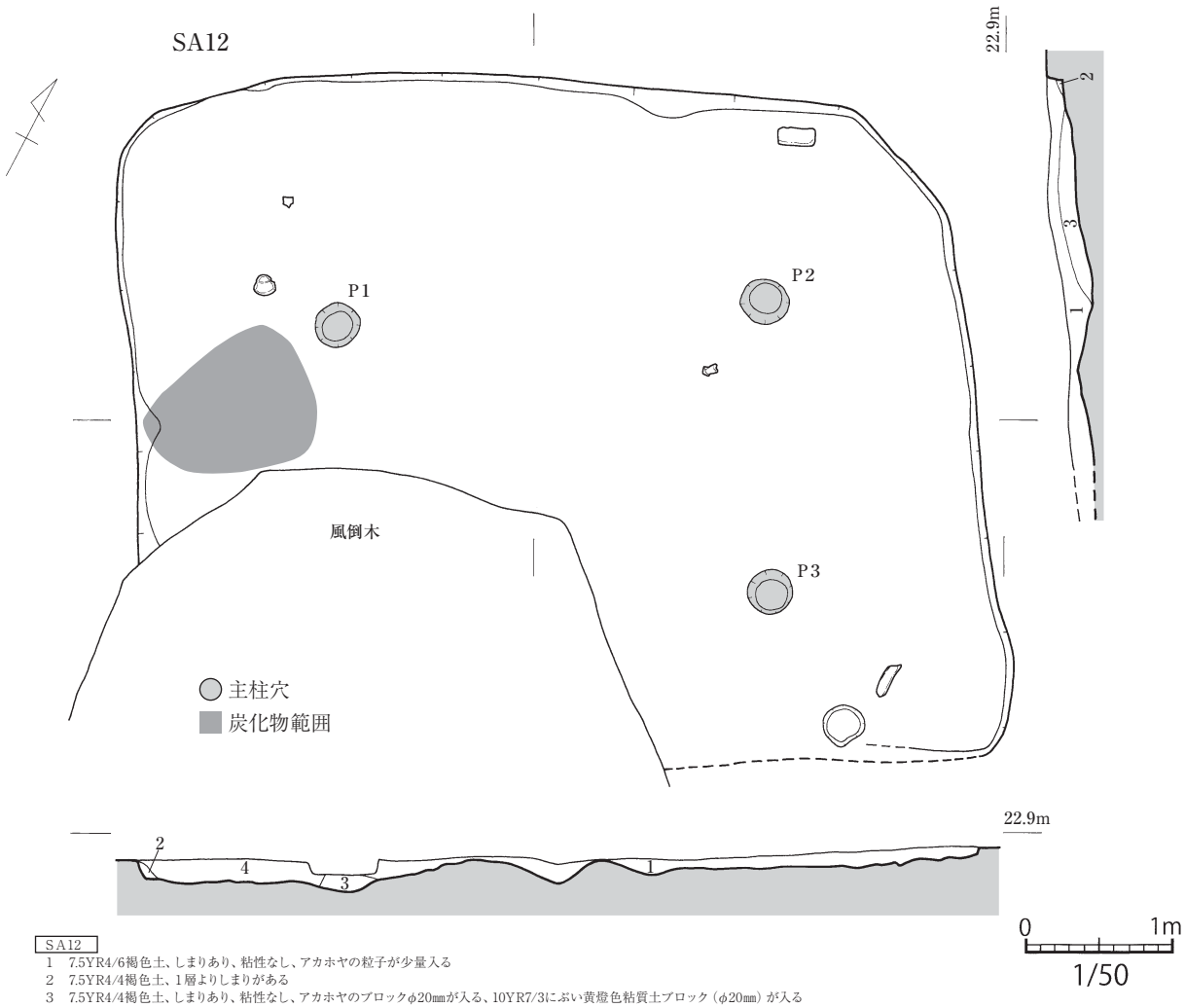
第48図　11号竪穴住居跡および出土遺物実測図

ＳＡ11（第48図）

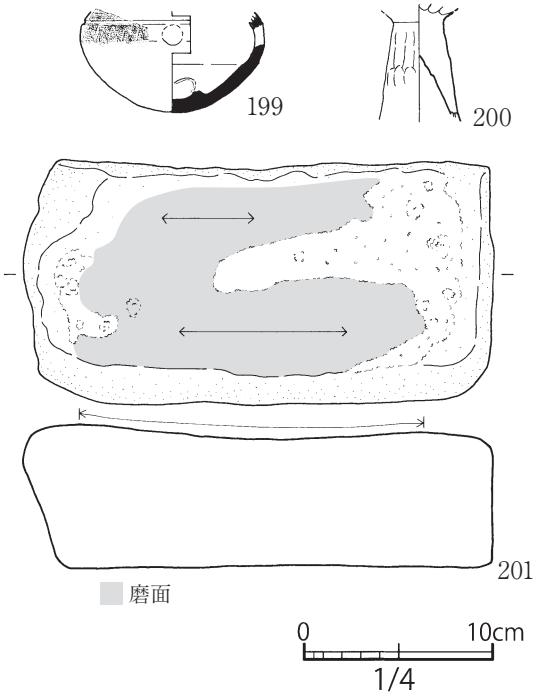
Ｂ－８区南端、第Ⅳ層検出。現況で建築物があったため、複合浄化槽や耕作による攪乱が著しい。平面形は長方形5.5m×6.0mを基調とするが、やや歪である。埋土は住居埋土と貼床に分層できる。貼床は住居の掘り方でできた底面の凹凸を掘削時の土で平らにしたと考えられる。主柱穴は攪乱や削平により３本しか検出できなかったが、配置から４本柱の竪穴住居であると推測できる。須恵器の甕の破片が１層から出土している。

・ＳＡ11出土遺物

196は土師器の坏で口縁部がほぼ直立し、口唇部が尖る。197・198は古墳時代中期後葉の須恵器の甕の胴部でタタキ目が明瞭に残る。



SA12
1　7.5YR4/6褐色土、しまりあり、粘性なし、アカホヤの粒子が少量入る
2　7.5YR4/4褐色土、1層よりしまりがある
3　7.5YR4/4褐色土、しまりあり、粘性なし、アカホヤのブロックφ20㎜が入る、10YR7/3にぶい黄燈色粘質土ブロック（φ20㎜）が入る
4　10YR5/8黄褐色土、アカホヤ、炭化物、粘土ブロック等が入る、粘性なし、カクランか



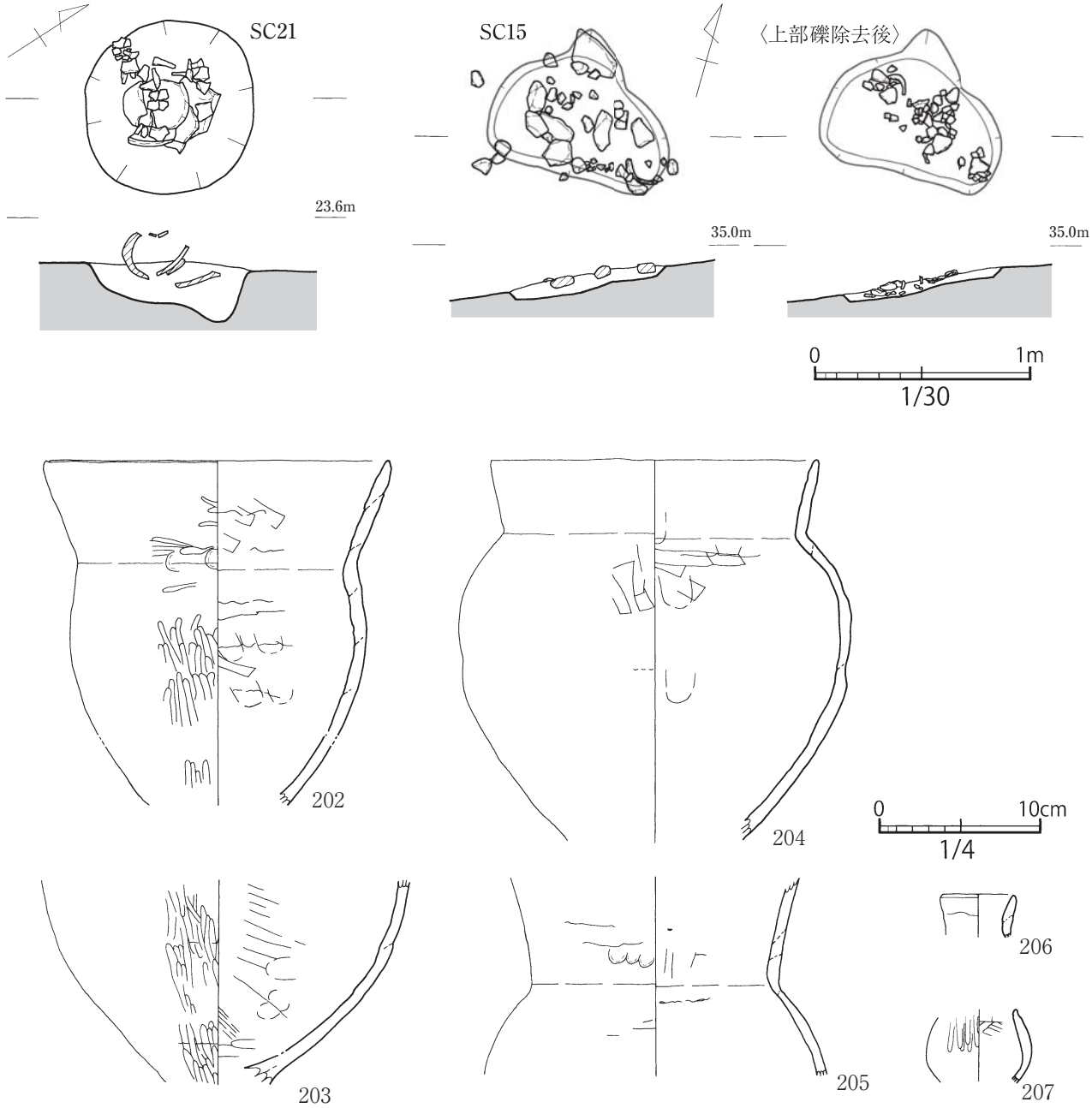
第 49 図　12 号竪穴住居跡および出土遺物実測図

ＳＡ12（第49図）

Ｂ－８区南端、第Ⅳ層検出。風倒木により南西部1／4が欠損しており、南端は削平によりほとんど確認できなかった。平面形は長方形5.7m×4.3mを基調とするが、やや歪である。表土直下で床面を検出し、遺物や柱穴を確認した。主柱穴は3本検出しているが、配置から4本柱の竪穴住居であると推測できる。検出面からの主柱穴の深さは約50㎝を測る。

・ＳＡ12出土遺物

199は瑳で口縁部が欠損しているものの肩部に円孔と波状文が見られる。胴部最大径は9.8㎝である。200は高坏の脚部で、坏部と脚部の接合部の内面を先が鋭利な工具で刺突している。201は台石である。正面には敲打痕と磨面が見られる。石皿としても使用していたと考えられる。



第 50 図　古墳時代土坑および出土遺物実測図

2　土坑（ＳＣ　第50図）

ＳＣ21

Ｂ－８区東側、第Ⅳ層で検出。深さ25cmの掘り込みに土師器片が集中して出土した。

・ＳＣ21出土遺物

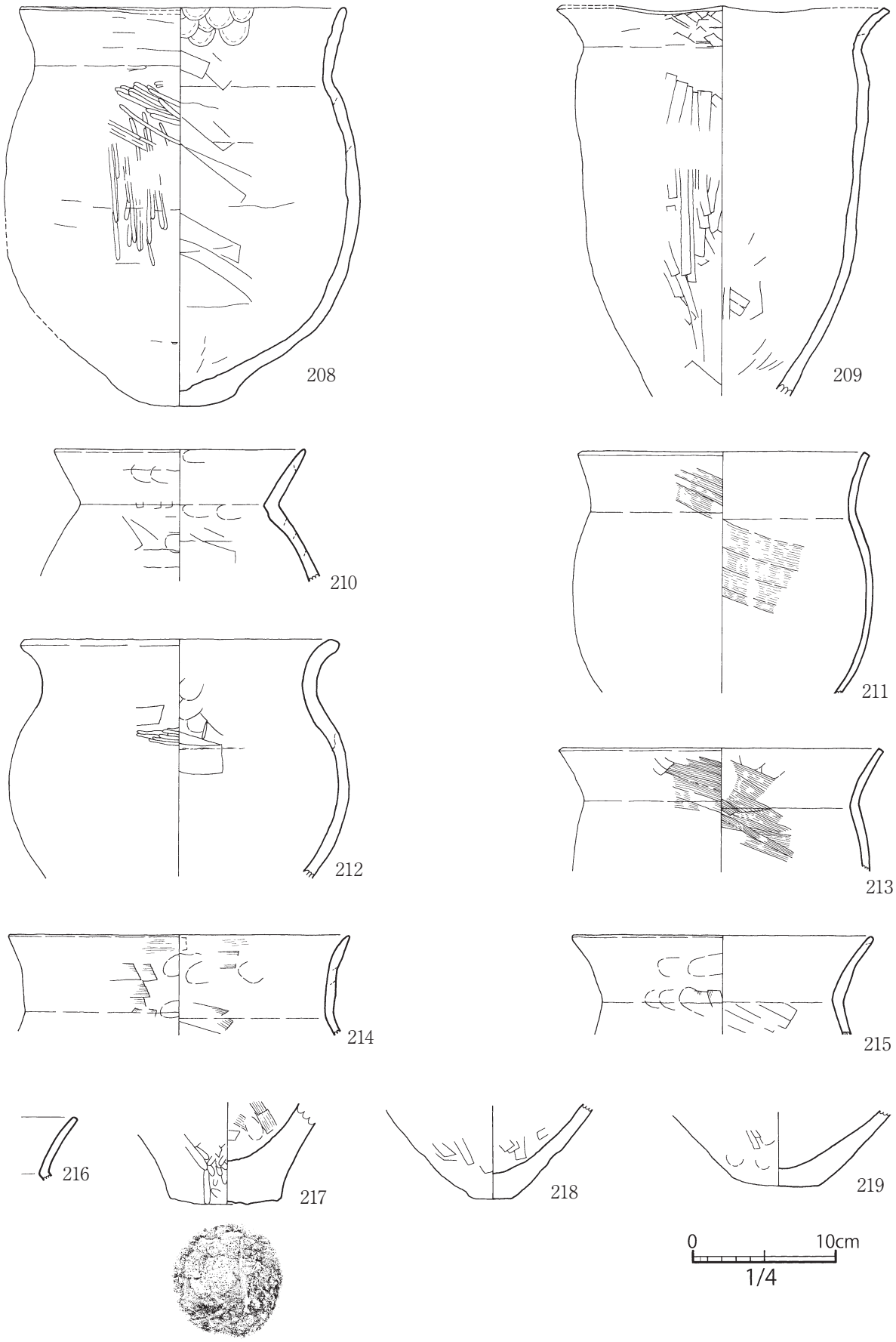
202・203は甕で、外面にミガキ調整を施す。202は口縁部が長く直線的に外傾し、口径も胴部最大径より大きい。内面は粘土のつなぎ目が明瞭に残る。203は平底で側面が外反しながら立ち上がる。

ＳＣ15

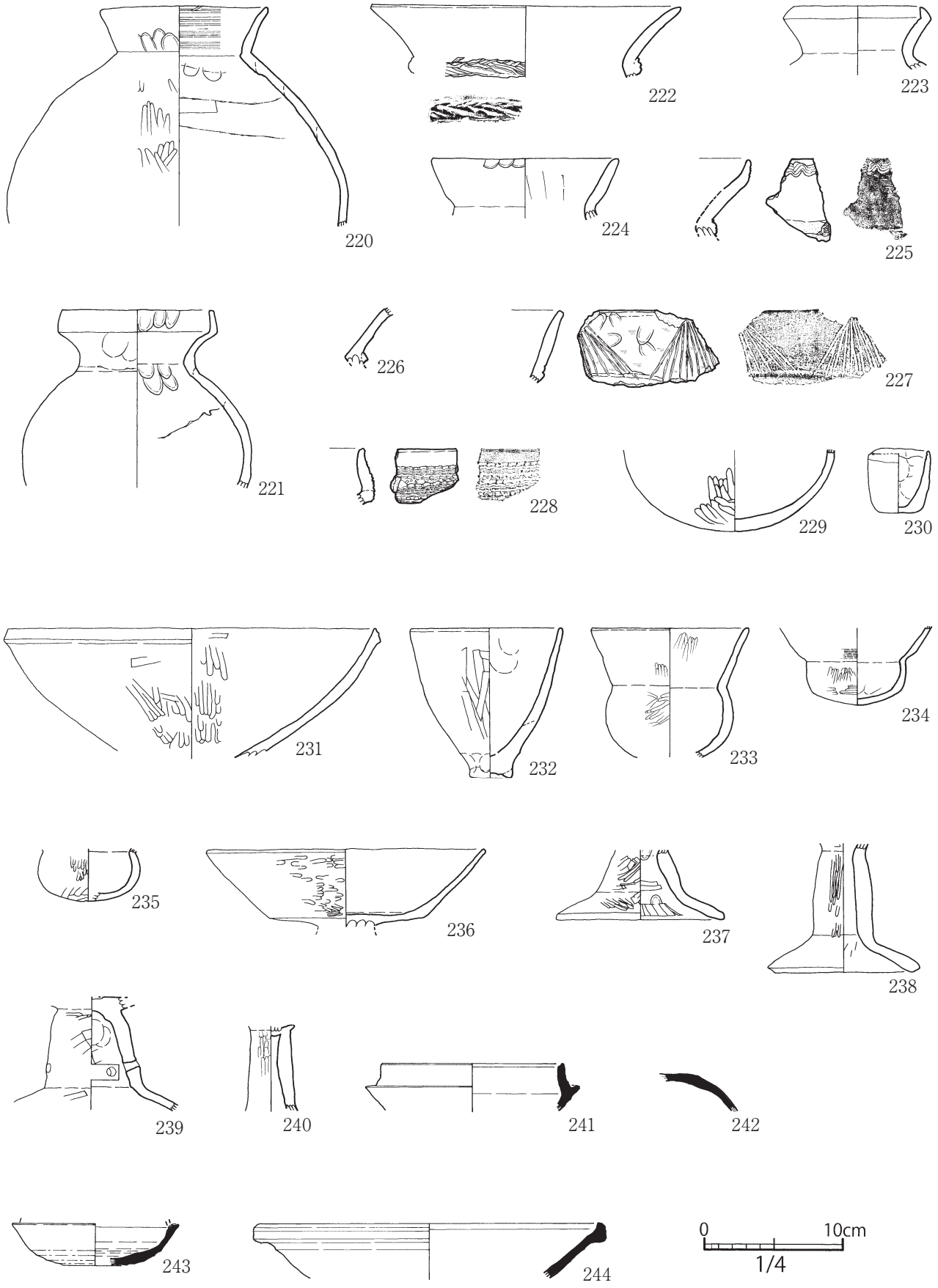
Ａ－１区斜面地、第Ⅳ層で検出。検出時は礫の間に土器がはまっている状態であると考えていたが、上部の礫を取り除くと、浅い掘り込みを持ち、礫に押し潰される形で土師器片が出土した。

・ＳＣ15出土遺物

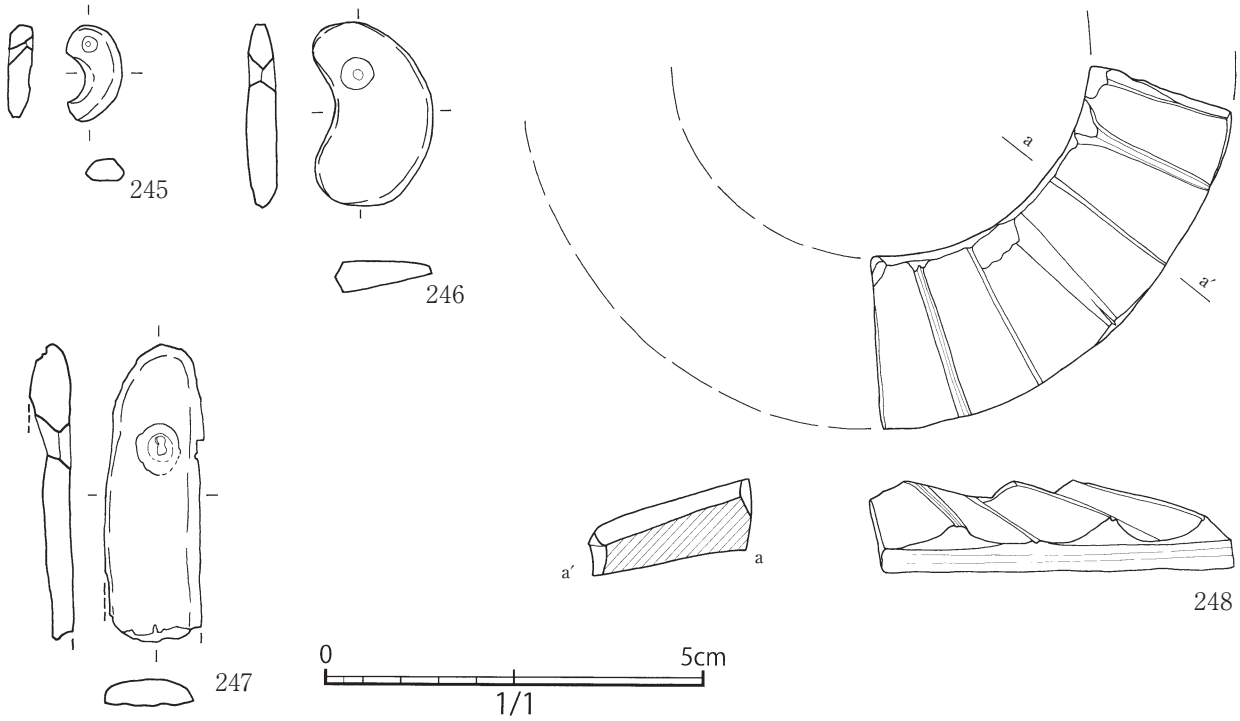
204・205は甕である。204は口縁部は頸部がくの字状に屈曲し、直線的に開く。205は口縁部が長く直線的に開く。206は小型壺の口縁部、207は小型丸底壺で頸部がやや締まっている。



第 51 図　古墳時代土器実測図（1）



第 52 図　古墳時代土器実測図（2）



第 53 図　石製装飾品実測図

3　遺物

包含層出土遺物（第51・52図）

208 ～ 219は甕である。208は底部がやや凸レンズ状で、底面との境が不明瞭である。胴部には縦方向のミガキを、頸部付近には横方向のミガキを施す。209は長胴で、口縁部がやや波打ち平坦でない。210は頸部がくの字に屈曲し、内面の稜も明瞭である。211・213は内外面にハケ目の痕が顕著に見られる。212は口縁部が大きく外反し、口縁端部を丸く収める。214は口縁部が長く、直立気味に緩やかに外反する。217は器厚の厚い平底で最下部にミガキを施す。

220 ～ 229は壺である。220は口縁が短く外傾する。222は広口で頸部に貼付刻目突帯を施す。221・223・225・226・228は複合口縁壺で内傾する口縁部をもつ。227は外傾する口縁部に山形の鋸歯文をもつ複合口縁壺で、228は２段の櫛描波状文を施す。

231は鉢で内外面にミガキを施す。232も鉢で上げ底の底部で器厚が厚く、外に開きながらやや上方に立ち上がる。233 ～ 235は小型丸底壺である。233・234は口径が胴部最大径より大きい。236 ～ 240は高坏である。脚部は中ほどから屈曲し、脚裾は内湾している。236は受部に平坦面をもつ。237は脚部が短く、239は脚部に円形の透かし穴をもつ。241・243が古墳時代中期、242・244は古墳時代後期の須恵器である。

石製装飾品（第53図）

245 ～ 248は石製装飾品である。245は蛇紋岩製の勾玉、246はホルンフェルス製の勾玉、247は赤色頁岩製で用途は不明である。

248は緑色凝灰岩製の車輪石で淡緑色を呈する。C－３区東壁付近の谷第２層（第Ⅰb層）最下部から出土。C－４区谷第２層（第Ⅰb層）最下部の炭化物の^{14}C年代測定では、960±40年BPとの結果が出ている。残存率が1/5であるが、平面形及び内孔形はともに卵形、放射状匙面は15 ～ 16面であると推定する。外端の輪郭線はほぼ滑らかな曲線を呈する。底面は外側面下部で接地し、内孔に向かい約10°の角度で立ち上がる。匙面の頂部と凹部ともに沈線をもち、外側面はやや窪み、内側面はほぼ直立する。表裏面の一部に放射状に擦痕が見られるが、全体を丁寧に研磨している。

第14表　古墳時代遺構内出土土器観察表（1）

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
99	甕	胴部~底部付近	SA1		工具縦ナデ、ミガキに近い	工具による不定方向のナデ、底部付近に工具痕	橙（7.5YR6/6）	明赤褐（2.5YR5/6）	3㎜以下の灰白・明赤褐・黒褐色粒を含む	スス付着、外面：一部黒斑
100	直口壺	口縁部~底部付近	SA1	口径（9.0）	全体に強い工具ナデ、ミガキ	口唇部はナデ、口縁から底部は横・斜方向の工具ナデ、粘土のつなぎが多い	黒褐（7.5YR3/2）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~5㎜の灰白粒、微細な黒色光沢粒を含む	スス付着、内面：口唇部に黒変
101	壺	胴部~底部	SA1		胴部は縦ミガキ、底部付近は横ミガキ、底部は一部ミガキ	胴部は横ナデ、指押さえ、底部はナデ後に指押さえ、粘土のつなぎが多い	にぶい黄褐（10YR5/3）	明黄褐（10YR7/6）	5㎜以下の茶褐・白色粒、2㎜以下の黒色光沢粒を多く含む	スス付着
102	鉢	口縁部~胴部	SA1	口径（13.6）	口唇部はナデ、全体に縦ミガキ、一部風化気味	斜方向の工具ナデ	褐灰（10YR4/1）	褐灰（10YR5/1）	6㎜以下の茶褐・白色粒を多く含む	
103	小型丸底壺	頸部~底部	SA1		全体的に縦ミガキ、一部横ミガキ、底部に工具痕	胴部は横ナデ、底部は丁寧な工具ナデ	黒（7.5YR1.7/1）	にぶい黄橙（10YR5/4）	2㎜以下の黒・灰・褐色粒を含む	
104	高坏	坏部	SA1	口径（24.4）	口唇部はナデ、全体的にナデ後にミガキ、沈線あり	全体的にナデ後に縦ミガキ	明黄褐（10YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	1㎜以下の褐・にぶい褐・褐灰色粒をわずかに含む	外面：口縁部に一部黒斑
106	壺	口縁部~胴部	SA3	口径（13.0）	口唇部はナデ、一部つまみ、口縁部は横方向のハケ目、頸部付近から縦・斜方向のハケ目	口縁部は斜方向のハケ目、頸部から横・斜方向のハケ目	橙（5YR7/6）	橙（5YR6/6）	1~3㎜の灰白色粒を含む	一部スス付着・頸部に炭化物付着
107	壺	口縁部~胴部	SA3	口径（10.0）	口縁部～頸部は横ナデ後に横ミガキ、胴部は縦ミガキ	斜方向の工具ナデ後に横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	浅黄橙（10YR8/4）	1~5㎜の赤褐・灰白色粒を多く含む	
108	壺	底部	SA3		縦方向のミガキ	風化気味だがハケ目か	にぶい橙（7.5YR7/4）	灰白（10YR7/1）	1~3㎜の褐・黒色粒を多く含む	
109	小型丸底壺	口縁部~底部付近	SA3	口径（8.1）	全体的に横ミガキ	口縁部は横ナデ、上半は横・斜方向の工具ナデ、下半は縦・斜方向の工具ナデ	にぶい褐（7.5YR5/4）	にぶい黄橙（10YR6/3）	1~5㎜の褐・灰色粒を含む	
110	小型丸底壺	口縁部~頸部	SA3	口径（8.4）	全体的に風化のため調整不明、頸部付近にハケ目か	全体的に風化のため調整不明だがナデか	橙（5YR6/8）	橙（5YR6/6）	きめ細かい	
111	壺	口縁部	SA3	口径（15.2）	口唇部はナデ、口縁部は横ナデ、一部指押え、一部工具による縦ナデ	斜方向工具ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	灰白（10YR7/1）	8㎜以下の茶・白色粒を多く含む	
112	鉢	口縁部~底部	SA3	口径（12.6） 底径2.3 器高11.5	全体的に風化気味だが丁寧な縦ナデ	口唇部に指押さえ、全体的に指ナデ、底部付近に工具痕	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	1~8㎜の灰白・褐色粒を含む	スス付着
113	壺	頸部~胴部	SA3		風化気味だが一部斜方向のミガキ	風化気味だが横ナデ、頸部付近に横方向のミガキ、胴部に工具ナデ	にぶい黄橙（10YR6/4）	浅黄橙（10YR8/4）	1~3㎜の灰白・灰・褐色粒を含む	一部スス付着
114	甕	底部	SA3	底径（4.4）	全体的にナデ、底部付近は工具斜方向のナデ、底部は丁寧なナデ	工具斜方向のナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/3）	5㎜以下の茶褐・灰褐色粒を多く含む	
115	甕	底部	SA3	底径（4.0）	全体的にナデ、底部付近は工具縦ナデ、底部は丁寧なナデ	風化気味だが工具斜方向のナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/3）	5㎜以下の茶褐・灰褐色粒を多く含む	底部にスス付着
116	高坏	坏部	SA3		横ナデ後にミガキ、不定方向のナデ	風化著しく調整不明	橙（5YR6/6）	橙（5YR6/6）	1~3㎜の灰白・褐灰色粒を少し含む	
117	甕	完形	SA4	口径23.65 底径6.85 器高25.3	全体的に風化気味だが、口縁部は横ナデ後一部ミガキ、胴部は斜方向ナデ、底部はナデ	全体的に風化気味だが、口縁から胴部上部は一部横方向のナデ	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/4）	1~3㎜の褐色粒を多く含む	スス付着、外面：一部・内面：胴部から底部に一部黒斑
121	甕	底部	SA6	底径（5.4）	底部付近は強い工具縦ナデ、底部は丁寧なナデ	斜方向のナデ	にぶい黄褐（10YR5/4）	にぶい黄橙（10YR6/4）	4㎜以下の褐灰・橙・黒褐色粒を含む	スス付着
122	壺	口縁部~頸部	SA6	口径（13.5）	口唇部はナデ、口縁から頸部は工具による横ナデ	工具による横ナデ	灰黄（2.5Y6/2）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~3㎜の赤褐色粒を多く含む	
123	壺	口縁部~頸部	SA6		口唇部はナデ、口縁部は工具横ナデ	工具横ナデ	褐灰（10YR4/1）	明黄褐（10YR7/6）	1~3㎜の赤褐色粒、1㎜以下の黒色光沢粒を含む	
124	壺	口縁部	SA6		口唇部はナデ、口縁部は工具横ナデ、貼付突帯	工具横ナデ、一部風化	明黄褐（10YR6/6）	明黄褐（10YR6/6）	1~4㎜の灰白・黒色光沢粒を含む	内面：一部黒変
125	鉢	底部	SA6	底径（4.3）	斜方向のナデ、工具痕、中心部約1㎝幅の上げ底、丁寧なナデ	底部付近は斜方向のナデ、底部はナデ	にぶい黄橙（10YR6/4）	明黄褐（10YR7/6）	2㎜以下の灰白・明褐・灰褐色粒を含む	
126	小型丸底壺	ほぼ完形	SA6	口径6.8 底径2.0 器高6.2	口縁部は横ミガキ後、部分的に斜方向のミガキ、頸部は工具横方向ミガキ、下半は斜方向ミガキ	口縁部は横ナデ、頸部は指頭痕、胴部から底部はナデ、指押さえ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/3）	4㎜以下の橙・黒褐色粒、2㎜以下の黒色光沢粒を少し含む	外面：一部黒斑
129	甕	口縁部~底部	SA9	口径（23.7） 底径2.0 器高32.25	口唇部はナデ、口縁部は指押さえ、頸部は指押さえ後にナデ、胴部から底部は風化気味だが斜方向のナデ	口縁部は横ナデ、頸~胴部は工具斜方向のナデ	黄橙（10YR7/8）	にぶい黄橙（10YR6/4）	5㎜以下の黒・茶褐色粒を多く含む	
130	甕	口縁部~底部付近	SA9	口径（18.4）	口縁部は横ナデ、頸部から底部付近はケズリ後、ミガキ	口縁部は工具横ナデ、頸部は横ナデ、胴部はケズリ、横ナデ、工具痕	橙（7.5YR7/6）	明黄褐（10YR7/6）	1~4㎜の明赤褐色粒、1~2㎜の黒色光沢粒を含む	胴部にスス付着、外内面：胴部に黒斑
131	甕	ほぼ完形	SA9	口径26.4 器高32.5	口縁部は横ナデ、頸部付近は縦方向のハケ目、胴部から底部は縦・斜方向のハケ目後にナデ	口縁部は横ナデ、胴部上部は斜方向のハケ目、胴部下部は工具ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~4㎜の灰白色粒を多く含む	スス付着、胴部~底部に炭化物か
132	甕	口縁部~頸部	SA9	口径（22.6） 底径（3.8） 器高34.35	口縁～胴部上部は横ナデ、下半は斜方向のナデ、底部付近に指頭痕	口縁部は工具横ナデ、頸部は指押さえ、胴~底部は斜・縦方向の工具ナデ	灰白（10YR8/2）	にぶい黄橙（10YR7/3）	4㎜以下の橙・褐灰色粒、微細な光沢粒を多く含む	口縁~胴部にスス付着、胴部~底部に炭化物付着
133	甕	口縁部~胴部	SA9	口径（21.1）	口縁部は横ナデ、頸部から胴部は風化著しく調整不明	口縁部は横ナデ、頸部から胴部は斜方向ナデ	明黄褐（10YR7/6）	明黄褐（10YR7/6）	1~4㎜の灰白・褐色粒を含む	

第15表　古墳時代遺構内出土土器観察表（2）

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
134	甕	口縁部~頸部	SA9		口縁部は横ナデ、一部工具ナデ、胴部はナデ	口縁部は横ナデ、胴部は横ナデ後に一部工具ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	にぶい黄橙（10YR7/4）	3㎜以下の茶褐・灰色粒を多く含む	スス付着
135	甕	口縁部~頸部	SA9	口径（20.3）	口縁部は工具横ナデ、頸部付近は斜方向のハケ目	口縁部から頸部は工具横ナデ	橙（5YR7/6）	橙（7.5YR6/4）	1~2㎜の灰・褐色粒を含む	口唇部に一部スス付着
136	甕	胴部~底部	SA9		胴部~底部付近は工具斜方向ナデ、底部は粗いナデ	不定方向のナデ	にぶい褐（7.5YR5/3）	明黄褐（10YR6/6）	5㎜以下の明黄褐・橙・褐灰・淡橙・褐色粒を含む	胴部から底部にスス付着、底部付近から底部に赤化気味
137	甕	胴部~底部	SA9		工具による斜方向のナデ	胴部はナデ、一部工具ナデ、底部は一部ハケ目	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	6㎜×3㎜のにぶい橙色粒1個、5㎜以下のにぶい橙・灰白・黒褐色粒、微細な黒色光沢粒を多く含む	外面：胴部から底部に黒変
138	壺	口縁部~頸部	SA9	口径(16.15)	口唇部はナデ、複合口縁、口縁部は横ナデ後に櫛描波状文	口縁部は横ナデ後に縦ミガキ、頸部は斜方向ナデ	明黄褐（10YR7/6）	明黄褐（10YR6/6）	2㎜以下の灰白・褐色粒を少し含む	
139	壺	口縁部	SA9		口唇部に凹線、口縁部は横ナデの後に櫛描波状文	横ナデ	浅黄橙（10YR8/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~3㎜以下の灰黄・褐・黒色光沢粒を含む	
140	壺	頸部~胴部	SA9		頸部は横ナデ、刻目貼付突帯文、胴部は横・斜方向ミガキ	頸部は斜方向のハケ目、胴部は斜方向ナデ	明赤褐（5YR5/6）	明褐（7.5YR5/6）	1㎝大の灰褐色粒、6㎜大の灰白色粒、5㎜以下の黒褐・明赤褐・灰褐・灰白色粒を含む	口縁部にスス・炭化物付着
141	鉢	口縁部~底部付近	SA9	口径（16.8）	口縁部は横ナデ、ミガキ、胴部は斜方向ハケ目後横ミガキ、底部付近は縦ハケ目	口縁~頸部は横ナデ後に横ミガキ、胴部は横・斜方向のナデ後に横・斜方向ミガキ、底部付近は工具縦ナデ	浅黄（2.5Y7/4）	明黄褐（2.5Y7/6）	1~4㎜の灰白色粒、1㎜の褐色粒を含む	口縁~胴部にスス付着、胴~底部に炭化物付着
142	鉢	口縁部~胴部	SA9	口径（12.2）	口唇部は横ナデ、口縁部は横ナデ後にミガキ、頸部から胴部は縦ミガキ	口縁部は横ナデ、頸部~胴部は工具斜方向丁寧なナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~7㎜の灰白色粒を含む	一部スス付着、胴部に炭化物付着
143	壺	口縁部	SA9	口径（8.95）	風化のため調整不明	風化のため調整不明	橙（7.5YR7/6）	橙（5YR7/8）	1~2㎜の明赤褐色粒を含む	
144	壺	口縁部	SA9	口径（10.8）	工具による横ナデ	横ナデ	橙（7.5YR7/6）	橙（5YR6/6）	1㎜以下の浅黄橙・にぶい黄橙色粒を少し含む	
145	手捏ね土器	ほぼ完形	SA9	底径2.7 器高4.8	口縁から底部付近は粗いナデ、胴部に指押さえ痕、底部はナデ	口縁部は指押さえ、胴部は工具ナデ、底部は指押さえ痕	浅黄橙（10YR8/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	4㎜以下の灰白色粒を含む	外面：口縁から胴部に一部黒斑
146	高坏	ほぼ完形	SA9	口径（16.8） 底径11.5 器高14.3	口唇部は横ナデ、坏部から脚部は縦または横ミガキ、裾部は横ミガキ	坏部は縦ミガキ、受部はミガキ、裾部は横・斜方向の工具痕ナデ	にぶい黄橙（10YR6/4）	橙（7.5YR6/6）	1㎜以下の褐色粒を含む	外・内面：裾部に一部黒斑
147	高坏	坏部	SA9	口径（16.6）	坏部はハケ目後に横ナデ、更にミガキ	横ミガキ後、縦ミガキによる暗文	明赤褐（2.5YR5/6）	明赤褐（2.5YR5/6）	1~2㎜の灰白色粒を含む	一部スス付着
148	高坏	坏部	SA9	口径（16.7）	坏部は横ナデ後に斜方向のミガキ	横ナデ後に斜方向のミガキ	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	1~2㎜の灰・褐・灰白色粒を含む	
149	高坏	脚部	SA9		縦方向のハケ目後に横ミガキ	強い縦ナデ	明黄褐（10YR7/6）	明黄褐（10YR7/6）	1㎜以下の橙・黒褐色粒を少し、1㎜以下の無色透明光沢粒を含む	
154	甕	口縁部~底部	SA10	口径18.85 底径4.8 器高25.75	口縁部は工具斜方向ナデ、頸部付近~胴部は工具斜方向のナデ、底部は工具粗いナデ	口縁部は工具ナデ、胴部上部は斜方向ナデ、胴部下部~底部は指押さえ	浅黄（2.5Y7/3）	浅黄橙（10YR8/3）	1~6㎜の赤褐色粒を多く含む	口縁~底部付近にスス付着、胴部~底部に炭化物付着
155	甕	口縁部~底部	SA10	口径（19.6） 底径（2.75）	口縁部は工具横ナデ、胴部は縦ミガキ、底部は粗いナデ	口縁部は横後に斜方向ナデ、胴部斜方向ナデ	灰白（10YR8/2）	にぶい黄橙（10YR7/3）	1~4㎜の灰白・灰・褐色粒を多く含む	頸部から胴部にスス付着
156	小型甕	口縁部~底部	SA10	口径（12.0） 底径6.6 器高18.35	口縁部は縦・斜方向のミガキ、頸部から底部付近はタタキ後にミガキ、底部はタタキ	口縁部は横ナデ、頸部は工具ナデ、胴部は縦ナデ、底部に指頭痕	赤褐（5YR4/8）	明赤褐（5YR5/6）	4×3㎜の灰色粒、3㎜以下のにぶい橙・黒褐・乳白色粒、微細な黒色光沢・透明光沢粒を含む	外面：口縁から底部付近に黒変
157	甕	口縁部~胴部	SA10	口径（18.4）	口縁部は工具横ナデ、頸部は一部ミガキ、胴部は工具斜方向のナデ	口縁~胴部は工具横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~7㎜の褐・灰白・にぶい黄橙色粒を多く、1~2㎜の黒色光沢粒を少し含む	スス付着、内面：口縁部に黒変
158	甕	口縁部~胴部	SA10	口径（21.0）	口縁部は工具横ナデ、胴部は工具縦ナデ	口縁部は工具横ナデ、胴部は工具斜方向ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/3）	1~5㎜の赤褐・黒・乳白色粒を含む	頸~胴部にスス付着
159	小型甕	口縁部~底部	SA10	口径（14.0） 器高12.45	口縁部は工具横ナデ、胴部は縦ミガキ	口唇部は指で尖らす、口縁部は横ナデ、胴部は斜方向のナデ	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/3）	3㎜以下の灰白粒を含む	外面：口縁~胴部にスス付着、内面：胴部に炭化物付着
160	甕	口縁部~胴部	SA10	口径（18.4）	工具横ナデ	口縁部は工具横ナデ、胴部は斜方向の工具ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	6㎜以下の灰白・黒褐・赤褐色粒を少し含む	スス付着
161	甕	口縁部~胴部	SA10	口径（15.2）	工具横ナデ、風化著しい	口縁部は工具横ナデ、胴部は斜方向のナデ	淡黄（2.5Y8/4）	淡黄（2.5Y8/3）	4㎜以下の茶褐・灰色粒を多く含む	
162	小型甕	頸部~底部	SA10		頸部は工具ナデ後に指押さえ、斜方向のタタキ後に縦ミガキ	頸部は横・斜方向の工具ナデ、胴部は工具斜方向のナデ、底部に指頭痕	にぶい黄橙（10YR7/2）	にぶい黄橙（10YR7/3）	6㎜以下の赤褐・灰白色粒を少し含む	頸部から胴部にスス付着、底部に被熱
163	甕	口縁部~胴部	SA10	口径18.0	口縁部は工具横ナデ、頸部は横ナデ、胴部斜方向ナデ	口縁部は工具横ナデ、胴部は工具縦ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	浅黄（2.5Y7/4）	1~10㎜の明赤褐色粒を多く含む	スス付着、内面:口縁・胴部に黒変
164	甕	口縁部~頸部	SA10	口径（23.8）	口縁部は横ナデ、指押さえ、頸部は指ナデ、ナデ	口縁部は横ナデ、指押さえ、頸部はナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	淡黄（10YR8/3）	4㎜以下の茶褐・灰色粒を多く含む	口縁部にスス付着
165	甕	口縁部	SA10		口縁部は工具斜方向のナデ	斜方向の横ナデ後、一部縦ナデ	灰褐（7.5YR4/2）	にぶい黄橙（10YR6/4）	5㎜以下のにぶい赤褐・灰褐・褐灰色粒を含む	スス付着

第16表　古墳時代遺構内出土土器観察表（3）

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
166	甕	口縁部~頸部	SA10		口縁部は工具横ナデ、頸部は横ナデ後に指押さえ、胴部は斜方向のナデ	口縁部は横ナデ、横ナデ後に指押さえ、胴部は風化著しいため調整不明	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	4㎜以下の黒・茶褐・白色粒を多く含む	
167	甕	胴部~底部	SA10		全体的に風化気味、胴部は横・縦ナデ、底部付近は斜方向のナデ、底部はナデ	胴部は工具縦ナデ、下半横ナデ、底部付近は指頭痕	橙（5YR6/6）	橙（2.5YR6/8）	5㎜以下のにぶい赤褐・灰褐・赤・灰白色粒を含む	スス付着、内面：胴部に炭化物付着
168	甕	胴部~底部	SA10	底径（6.3）	胴部は工具縦ナデ、底部は工具ナデ	胴部は風化気味だがナデ、底部に深い工具痕	にぶい黄橙（10YR7/4）	明黄褐（10YR7/6）	1~3㎜の赤褐・黒褐色粒を多く含む	炭化物付着
169	壺	口縁部~底部	SA10	口径15.6 器高(21.45)	口縁部は工具横ナデ、頸部~胴部は横・斜方向のミガキ、底部付近~底部はナデ	口縁~頸部は横ミガキ、胴部~底部は斜方向ナデ	にぶい橙（7.5YR7/3）	にぶい黄橙（10YR6/3）	5㎜以下のにぶい褐・灰白・褐灰色粒を含む	内面：底部付近黒斑
170	壺	ほぼ完形	SA10	口径10.8 器高15.9	口縁部は工具横ナデ後に縦・斜方向のミガキ、胴部は横・斜方向のミガキ、底部は風化のため調整不明	口縁部は工具横ナデ、胴部~底部は斜方向工具ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	浅黄橙（10YR8/3）	1~4㎜の褐色粒を多く含む	外・内面：底部付近に黒斑
171	壺	口縁部~頸部	SA10	口径（15.95）	口唇部に凹面、口縁部は風化のため調整不明、頸部は工具による横ナデ	風化気味だが工具横ナデ	黄橙（7.5YR8/8）	黄橙（7.5YR7/8）	4㎜以下の明褐色粒を含む	
172	壺	口縁部	SA10	口径（10.8）	横ナデ、一部縦ミガキ	横ナデ後に縦ミガキ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	3㎜以下の褐・灰色粒を少し含む	
173	壺	口縁部~頸部	SA10	口径（9.6）	口縁部は工具横・斜方向のナデ	口縁部は工具ナデ後に指押さえ、圧痕	淡黄（2.5Y8/3）	淡黄（2.5Y8/3）	1~5㎜の赤褐・にぶい黄褐色粒を含み、1㎜以下の黒色光沢・無色透明粒を少し含む	
174	壺	口縁部	SA10		櫛描波状文	横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	橙（7.5YR7/6）	微細な灰・灰白色粒を多く含む	
175	壺	口縁部付近	SA10		横ナデ後に櫛描波状文	横ナデ	橙（7.5YR6/6）	にぶい黄橙（10YR6/4）	3㎜以下の灰・茶褐色粒を多く含む	
176	壺	頸部	SA10		刻目貼付突帯文、横ナデ	ナデ、風化気味だが斜方向のナデ後ミガキ	にぶい橙（7.5YR6/4）	橙（7.5YR6/6）	3㎜以下の白・茶褐・灰色粒を多く含む	
177	壺	口縁部	SA10		横ナデ	風化気味だが横ナデ	橙（5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	1~4㎜の灰白・褐色粒を多く含む	スス付着、炭化物付着
178	鉢	底部	SA10		浅めの指押さえ、工具ナデ後に丁寧なナデ	工具横粗いナデ	にぶい黄（2.5Y6/3）	灰白（2.5Y7/1）	1㎜程度の黒色光沢粒を含む	外面：黒変、内面：黒斑
179	鉢	底部	SA10	底径（4.9）	工具横ナデ	工具による横ナデ後に指ナデ、工具痕	橙（5YR7/6）	橙（5YR7/6）	1~2㎜の黒色光沢粒、1㎜程度の赤色粒を含む	
180	高坏	坏部	SA10	口径（22.2）	坏部は工具横ナデ	風化気味だが横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	橙（5YR6/6）	5㎜以下の褐灰・灰白色粒を少し含む	内面：一部黒斑
181	高坏	坏部	SA10	口径（17.0）	口縁部は工具横ナデ	口縁部は工具横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	浅黄（2.5Y7/3）	1㎜程度の褐色粒を多く含む	内面：黒斑
182	高坏	坏部	SA10	口径（16.6）	縦ミガキ、	工具横ナデ後に横・斜方向のミガキ	にぶい橙（7.5YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/6）	1~5㎜のにぶい赤褐色粒を多く含む	外・内面：一部黒斑
183	高坏	坏部	SA10	口径(17.05)	坏部は工具横・斜方向のナデ	接合部に刻み、工具横ナデ	橙（7.5YR6/6）	橙（7.5YR7/6）	2㎜以下の赤褐色粒を含む	外面：口縁部に黒斑
184	高坏	坏部	SA10		縦ミガキ	接合部は横ナデ後に刻み、斜方向のミガキ	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/4）	3㎜以下の茶褐・灰色粒を多く含む	
185	高坏	坏部	SA10		横ミガキ	横ミガキ	明赤褐（5YR5/6）	にぶい黄褐（10YR5/4）	1~2㎜の灰白色粒を多く含む	
186	高坏	坏部	SA10		工具横ナデ	工具横ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	浅黄橙（10YR8/3）	1㎜程度の褐色粒を含む	
187	高坏	坏部	SA10		工具斜方向のナデ後、斜方向の弱いミガキ	横ナデ後、斜方向の弱いミガキ	浅黄橙（10YR8/4）	橙（7.5YR7/6）	7㎜以下のにぶい橙・にぶい赤褐・明赤灰色粒を含む	
188	高坏	脚部	SA10		斜方向のハケ目後、暗文風の横ミガキ	部分的にケズリ、粗いナデ	橙（5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	6㎜以下の橙・灰白・黒褐・明赤褐・褐灰色粒、2㎜以下の黒色光沢粒を含む	
194	坏蓋	口縁部	SA5	口径（12.8）	回転ナデ、自然釉	回転ナデ	灰（N5/0）	黄灰（2.5Y6/1）	精良（1~3㎜の灰白色粒、1㎜の黒色粒を含む）	須恵器
196	坏	坏部	SA11	口径（14.4）	工具横ナデ	横ナデ、風化気味だがミガキ	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	1㎜以下の黒・褐色粒を含む	内面：黒斑
197	甕	胴部	SA11		平行タタキ	同心円当て具痕、自然釉	灰（N4/-）	灰（7.5Y6/1）	精良（1㎜以下の乳白色粒を含む）	須恵器
198	甕	胴部	SA11		平行タタキ後に横方向のかき目	同心円当て具痕、自然釉	灰（5Y4/1）	灰黄（2.5Y6/2）	精良（3㎜以下の乳白色粒を含む）	須恵器
199	甕	胴部~底部	SA12		胴部は回転ナデ、沈線、透かし、櫛描波状文、底部付近から底部はナデ	胴部はナデ、底部は自然釉、指頭痕	黄灰（2.5Y6/1）	黄灰（2.5Y6/1）	精良（2.5㎜以下の白色粒を含む）	須恵器、胴部最大径（推定9.8cm）
200	高坏	脚部	SA12		縦の後横ミガキ	ケズリ、充填部を鋭利な工具で刺突	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい黄橙（10YR6/4）	5㎜以下の灰白・明赤褐・灰褐色粒を含む	
202	甕	口縁部~底部付近	SC21	口径（21.0）	口縁部は工具ナデ一部横ミガキ、胴部は縦ミガキ	口縁部は工具横ナデ後に横ナデ、胴部は工具斜方向のナデ	にぶい黄橙（10YR6/4）	橙（7.5YR7/6）	1~2㎜の褐灰色粒、1㎜の乳白色・赤褐色粒を含む	胴部上部にスス付着、内面：一部黒斑あり
203	甕	胴部~底部付近	SC21		縦ミガキ	工具斜方向のナデ・ミガキ	にぶい黄橙（10YR7/4）	明黄褐（10YR6/6）	3~5㎜の褐色粒を多く含む	一部スス付着、内面：底部付近に黒斑・炭化物、胴部に黒変

第17表　古墳時代遺構内出土土器観察表（4）

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
204	甕	口縁部~底部付近	SC15	口径（20.0）	口縁部は風化のため調整不明、胴部は工具縦ナデ	口縁部は風化のため調整不明、胴部は工具横・斜方向のナデ	灰白（10YR8/2）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~5㎜の赤褐・褐灰色粒を少し含む	胴部にスス付着、内面:底部付近に一部黒斑
205	甕	頸部	SC15		工具横ナデ、指押さえ痕	工具横ナデ	灰白（2.5Y8/2）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~5㎜の赤褐・白灰色粒を少し含む	
206	小型壺	口縁部	SC15	口径（4.4）	ナデ	口唇部に指押さえ、ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	4㎜以下の明赤褐・灰白色粒、微細な光沢粒を含む	外・内面：黒変
207	小型丸底壺	頸部~胴部	SC15		工具による縦ナデ後にミガキ	頸部は工具ナデ、胴部はナデ	浅黄（2.5Y7/3）	浅黄橙（10YR8/4）	2㎜以下の灰・橙色粒、微細な光沢粒を含む	

第18表　古墳時代包含層出土土器観察表（1）

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
208	甕	口縁部~底部	C-4 C-3 C-2	口径22.4 底径5.7 器高28.05	口縁部は工具横ナデ、胴部は斜方向のミガキ、底部は工具ナデ	口縁部は横・斜方向ナデ後に指頭痕、胴部は工具斜方向ナデ、底部は工具ナデ	浅黄（2.5Y7/4）	浅黄（2.5Y7/3）	7㎜以下の橙色粒を多く、4㎜以下の灰白粒、微細な黒色光沢粒・透明光沢粒を少し含む	口縁部にスス付着、外面:全体黒変、内面:胴~底部に黒変
209	甕	口縁部~胴部	C-1	口径（22.5）	口唇部はナデ、口縁部は工具による斜方向のナデ、胴部はナデ後に工具による縦ナデ、工具による斜方向のナデ	口縁から胴部は横ナデ、胴部は工具による縦・斜方向のナデ	橙（2.5YR6/6）	橙（2.5YR6/8）	4㎜以下の橙・灰・灰白色粒、1㎜以下の光沢粒を含む	外胴部に黒変、内面：口縁から胴部に黒変
210	甕	口縁部~胴部	B-7	口径（17.6）	口縁部は横ナデ、胴部は工具斜方向のナデ	口縁部は横ナデ、頸部~胴部は工具斜方向のナデ	橙（5YR7/6）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~3㎜の褐・灰色粒を含む	
211	甕	口縁部~胴部	B-7	口径(19.75)	口縁部は斜方向のハケ目、胴部は工具斜・横ナデ	風化気味だが斜方向のハケ目	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	4㎜以下の灰黄褐・黒褐・にぶい橙・灰白色粒を含む	スス付着
212	甕	口縁部~胴部	C-4	口径（21.4）	口縁部は横ナデ、胴部上部は横ミガキ、胴部下部は風化著しく調整不明	口縁部は横ナデ、胴部は工具斜方向のナデ	黒（7.5YR2/1）	橙（7.5YR6/6）	1~4㎜の黒褐・褐灰色粒を多く含む	胴部に一部スス付着、内面：胴部に黒斑
213	甕	口縁部~胴部	B-7 C10tr	口径（22.0）	口縁部は斜方向のハケ目、胴部は風化気味だが工具横ナデ	口縁部~胴部は斜方向のハケ目	にぶい黄橙（10YR7/4）	明黄褐（10YR7/6）	3㎜以下のにぶい褐・褐灰・黒褐色粒を含む	スス付着
214	甕	口縁部~頸部	C11tr	口径（24.0）	口縁部は工具横ナデ	口縁~頸部は横・斜方向の工具ナデ、胴部は工具斜方向ナデ	灰黄褐（10YR5/2）	にぶい橙（7.5YR7/4）	1㎜程度の灰白・褐色粒を含む	スス付着
215	甕	口縁部~頸部	C11tr	口径（21.2）	口縁部は工具横ナデ	口縁部は工具横・斜方向のナデ	浅黄（2.5Y7/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	1~2㎜の褐・灰白色粒を多く含む	一部スス付着、内面：一部黒斑
216	甕	口縁部	C-4		工具横ナデ	風化著しく調整不明	にぶい黄橙（10YR6/4）	浅黄橙（10YR8/6）	3㎜以下の茶・灰色粒を多く含む	スス付着
217	甕	底部	B-2	底径7.75	縦・斜方向のミガキ、底部は工具ナデ	工具不定方向のハケ目、底部は縦ナデ	橙（7.5YR6/6）	橙（5YR7/6）	1~6㎜の灰白色粒、1㎜の黒色光沢粒を含む	外・内面：一部黒斑
218	甕	底部	B-7	底径2.6	風化気味だが工具縦ナデ	工具斜方向のナデ	黄橙（7.5YR7/8）	橙（7.5YR7/6）	5㎜以下の茶褐・灰・白色粒を多く含む	内面：黒変
219	甕	底部	B	底径5.1	丁寧な工具縦ナデ	底部付近は風化著しく調整不明、底部は斜方向のナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	浅黄（2.5YR7/3）	5㎜以下の茶褐・灰褐・白色粒を多く含む	スス付着
220	壺	口縁部~胴部	B-7	口径（11.7）	口縁部は丁寧なナデ、胴部は縦ミガキ	工具横ナデ、胴部下半は風化のため調整不明	橙（5YR6/6）	にぶい橙（7.5YR6/4）	4㎜以下の赤褐・褐灰色粒を少し含む	内面：一部炭化物付着、外面：一部黒斑
221	壺	口縁部~胴部	C-4	口径（10.9）	口縁部はナデ、胴部は斜方向の工具ナデ	工具横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	2㎜ ~7㎜の赤褐・灰白・浅黄色粒を含む	胴部にスス付着
222	壺	口縁部~頸部	B-7	口径（22.4）	工具横ナデ、刻目突帯文	工具横ナデ	にぶい橙（7.5YR6/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~3㎜の灰白・褐色粒を含む	スス付着、内面：一部黒斑
223	壺	口縁部~頸部	C-1	口径（9.2）	口縁部は横ナデ、頸部は縦ナデ	口縁部は横方向に指ナデ、横ナデ、頸部はナデ	にぶい赤褐（5YR5/4）	明赤褐（5YR5/6）	1~3㎜の乳白色粒を多く、1㎜以下の黒色粒を含む	
224	壺	口縁部~頸部	C-1	口径（13.2）	工具横ナデ	工具横ナデ、頸部は横ナデ後に一部縦ナデ	浅黄（2.5Y7/4）	にぶい黄（2.5Y6/3）	5㎜以下の明赤褐色粒、微細な黒色光沢・透明光沢粒を含む	
225	壺	口縁部	C-4		口縁端部に4条の櫛描波状文、工具による横ナデ、縦ナデ	横ナデ、風化のため調整不明	橙（7.5YR7/6）	浅黄（2.5Y7/4）	6㎜以下の灰色、5㎜以下のにぶい黄色粒を含む	スス付着
226	壺	口縁部付近~頸部	C-4		斜方向の工具ナデ、貼付刻目突帯	工具横ナデ	橙（7.5YR7/6）	明黄褐（10YR7/6）	1㎜以下のにぶい赤褐・灰・黒色光沢・透明光沢粒を含む	スス付着
227	壺	口縁部	C-4		横ナデ後に山形の鋸歯文	横・斜方向のナデ	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい黄褐（10YR5/4）	4㎜以下の灰白・明赤褐・黒褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	内面：一部黒変
228	壺	口縁部	C-1		横ナデ後に5条の櫛描波状文が2段、強い押圧痕	横ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	3㎜以下の橙・灰白・褐灰色粒を含む	内面：一部黒変
229	壺	胴部~底部	B-8		斜方向のミガキ	風化気味だが胴部は丁寧な横ナデ	橙（5YR6/6）	橙（5YR6/6）	4㎜以下の赤褐・灰色粒を少し含む	炭化物付着、外面：底部一部黒斑
230	手捏ね土器	ほぼ完形	B	口径4.1 底径2.6 器高4.65	口縁から胴部は縦ナデ、底部は粗いナデ	指でなであげている	橙（5YR7/6）	橙（5YR7/6）	2㎜以下の灰・明赤褐・灰白色粒、微細な黒色光沢・透明光沢粒を含む	外面:一部黒変、内面:黒変
231	鉢	口縁部~底部付近	C-4	口径（26.5）	口縁部付近に工具横ナデ、胴部は風化気味だが縦ミガキ	風化気味だが縦ミガキ	橙（5YR7/8）	橙（5YR7/8）	1~2㎜の褐灰・赤褐色粒を多く含む	外・内面：一部黒変
232	小型鉢	口縁部~底部	C-4	口径（10.75） 底径2.9 器高10.8	口縁部は工具横ナデ、胴部は工具横・縦ナデ	口縁部は工具横ナデ、胴部は工具斜方向のナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	明黄橙（10YR7/6）	4㎜以下のにぶい橙色粒、2mm以下の灰・灰白・黒色粒、微細な黒色光沢・透明光沢粒を含む	胴部から底部にスス付着、外面：一部黒変

第19表　古墳時代包含層出土土器観察表（2）

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
233	小型丸底壺	口縁部~底部付近	B-3	口径（11.2）	口唇部はナデ、口縁部は斜方向のナデ、一部ミガキ、ナデ後に縦ミガキ、胴部はナデ後に横ミガキ	口縁部は横ナデ後に縦ミガキ、胴部は風化気味だが横ナデ	明赤褐（2.5YR5/6）	明赤褐（2,5YR5/6）	2㎜以下の黒・灰白・褐灰色粒を含む	
234	小型丸底壺	口縁部付近~底部	C11tr		胴部は横方向のハケ目、底部付近は横ナデ後に縦・横ミガキ、底部はナデ、工具痕が多い	風化気味だが頸部は指ナデ、底部は指押さえ	にぶい橙（7.5YR6/4）	橙（5YR6/6）	2㎜以下の黒・赤褐色粒を少し含む	スス付着
235	小型丸底壺	頸部~底部	C-2		縦ミガキ、底部付近は工具による不定方向のナデ	頸部付近は横ナデ、底部付近はナデ	明黄褐（10YR6/6）	にぶい黄橙（10YR6/4）	1~3㎜の赤褐・褐灰色粒を含む	内面：炭化物付着、外面：一部黒斑
236	高坏	坏部	C11tr	口径（19.8）	横ミガキ	横ミガキ・丁寧なナデ	にぶい橙（7.5YR6/4）	にぶい橙（7.5YR6/4）	3㎜以下のにぶい褐・明赤褐・赤・黒褐色粒を含む	外・内面：黒斑・黒変
237	高坏	脚部~裾部	C-3	底径（12.2）	不定方向のミガキ	脚部は工具横ナデ、裾部は工具横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR6/6）	1~2㎜の黒色光沢・赤褐色粒を含む	外・内面：黒斑
238	高坏	脚部~裾部	C-4	底径（10.0）	脚部は縦ミガキ、裾部は工具横・縦ナデ	脚部は縦ナデ、裾部は工具横ナデ	浅黄（2.5Y8/4）	浅黄橙（10YR8/4）	4㎜以下のにぶい橙・灰・灰白色粒、微細な黒色光沢・透明光沢粒を多く含む	外面：黒変、内面：一部黒変
239	高坏	脚部~裾部	B-7		工具による斜方向のナデ・透かし穴	脚部は工具ナデ、裾部は強いナデ	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（7.5YR8/6）	1.7㎝×1.4㎝の灰白色粒、5㎜以下の赤褐・灰白色粒、微細な透明光沢粒を含む	
240	高坏	脚部	B-7		縦ミガキ	ナデ	橙（5YR7/6）	明黄褐（10YR7/6）	3~7㎜の黄褐色粒、2~3㎜の褐灰色粒を含む	
241	坏身	受部	B	受部径(13.0)	回転ナデ	回転ナデ	灰（5Y5/1）	灰（5Y5/1）	精良（1㎜の黒・灰白色粒を含む）	須恵器
242	坏蓋	天井部	C-3		天井部はヘラ切り、回転ナデ	回転ナデ	灰（5Y6/1）	灰（5Y6/1）	精良（1㎜以下の灰白色粒を含む）	須恵器
243	坏身	受部~底部付近	B	受部径(12.0)	回転ナデ、受部付近は回転ナデ、底部付近はヘラ切り、受部は径12.0㎝	回転ナデ	灰（5Y6/1）	灰（5Y6/1）	精良（3㎜以下の灰白色粒を含む）	須恵器
244	鉢	口縁部	B4tr +C-2	口径（24.4）	回転ナデ、灰被り	回転ナデ、灰被り	緑灰（10GY5/1）	オリーブ灰（2.5GY5/1）	2㎜以下の灰白・緑灰色粒を含む	須恵器

第20表　古墳時代遺構内出土石器観察表

No.	器種	石材	出土地点	計測値 最大長（cm）	計測値 最大幅（cm）	計測値 最大厚（cm）	計測値 重量（g）	備考
105	敲石	砂岩	SA2	10.80	10.00	5.30	866.5	磨石からの転用か
118	敲石	砂岩	SA4	13.28	9.12	5.00	799.6	
119	石皿	尾鈴山酸性岩類	SA4	16.20	14.30	3.70	1434.7	
120	敲石	砂岩	SA4	18.15	8.15	5.10	1185.2	
127	敲石	砂岩	SA6	15.80	10.80	7.10	1668.2	
128	台石	砂岩	SA8	41.00	16.00	7.90	8100.0	
150	敲石	砂岩	SA9	8.90	5.40	4.90	270.3	
151	台石	ホルンフェルス	SA9	16.20	10.65	5.50	1680.6	
152	石錘	砂岩	SA9	6.80	6.30	2.50	138.5	
153	台石	砂岩	SA9	28.40	24.00	6.80	7000.0	
189	敲石	砂岩	SA10	15.90	6.60	5.50	823.9	磨石からの転用か
190	石錘	砂岩	SA10	6.40	3.60	1.40	51.3	
191	砥石	ホルンフェルス	SA10	14.50	4.40	4.20	501.8	
192	敲石	尾鈴山酸性岩類	SA10	13.10	11.65	6.00	1321.8	磨石からの転用か
193	敲石	砂岩	SA10	7.95	7.35	3.20	263.4	
195	石錘	尾鈴山酸性岩類	SA5	6.20	5.00	1.60	75.3	
201	台石	砂岩	SA12	24.80	13.10	7.65	4797.1	石皿としても使用か

第21表　古墳時代包含層出土石製装飾品観察表

No.	器種	石材	出土地点	計測値 最大長（cm）	計測値 最大幅（cm）	計測値 最大厚（cm）	計測値 重量（g）	備考
245	勾玉	蛇紋岩	B-5	1.28	0.73	0.31	0.4	
246	勾玉	ホルンフェルス	B-7	2.40	1.60	0.40	1.8	
247	装飾品	赤色頁岩	B-7	4.90	1.30	0.50	2.6	
248	車輪石	緑色凝灰岩	C-3	―	―	―	(16.0)	残存率1/5

第７節　古代～近世の遺構と遺物

古代～近世の調査の概要

表土（第Ⅰ層）を剥いだ後、遺構検出を行っていくと、表土直下で調査区全体にわたり多数のピットを検出し、掘立柱建物跡を11棟確認した。また、柱穴の埋土中や周囲の包含層から古代の土器や中世の土器・陶磁器・古銭、近世の陶磁器・古銭が出土している。

次に掘立柱建物跡と遺物の詳細を記述する。

１　掘立柱建物跡（ＳＢ　第22表）

表土（第Ⅰ層）を剥いだ後、遺構検出を行っていくと、表土直下で多数のピットを検出した（第54・55図）。そのピットの大半は円形で、径は約30㎝を測る。そのピットの中で、配置や埋土等を検討した結果、Ｃ－１区を中心に掘立柱建物跡を11棟を確認した。ただし、検出面が表土直下であり、柱穴から出土する遺物についても古代～近世の遺物が出土しており、時期が不明確である。

ＳＢ１（第56図）

Ｂ－２区で検出され、主軸は北から15°西に振れる。他の建物ＳＢ２～11から南に離れて位置しており、主軸の方位も異なる。桁行２間（約4.66m）、梁行２間（約3.92m）で、身舎の面積が約18.27㎡を測る。Ｐ６が方位軸から東に振れているが、全体的に均整のとれた配置となっている。柱穴Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５の上部から根固めの石と考えられる石が出土した。

ＳＢ２（第56図）

Ｃ－１区で検出され、主軸は北から23°東に振れる。Ｐ３～Ｐ７は１次調査のトレンチで検出され、検出面が下がっている。桁行３間（約5.9m）、梁行２間（約3.6m）で、身舎の面積が約21.24㎡を測る。桁行のＰ２～Ｐ３間がＰ１～Ｐ２間とＰ３～Ｐ４間に比べて間隔が狭い特徴が見られ、後述するＳＢ７と対照的である。梁行のＰ５・Ｐ10は他の柱穴と比較して浅い。柱穴Ｐ３・Ｐ６の底面にしまった土が見られた。

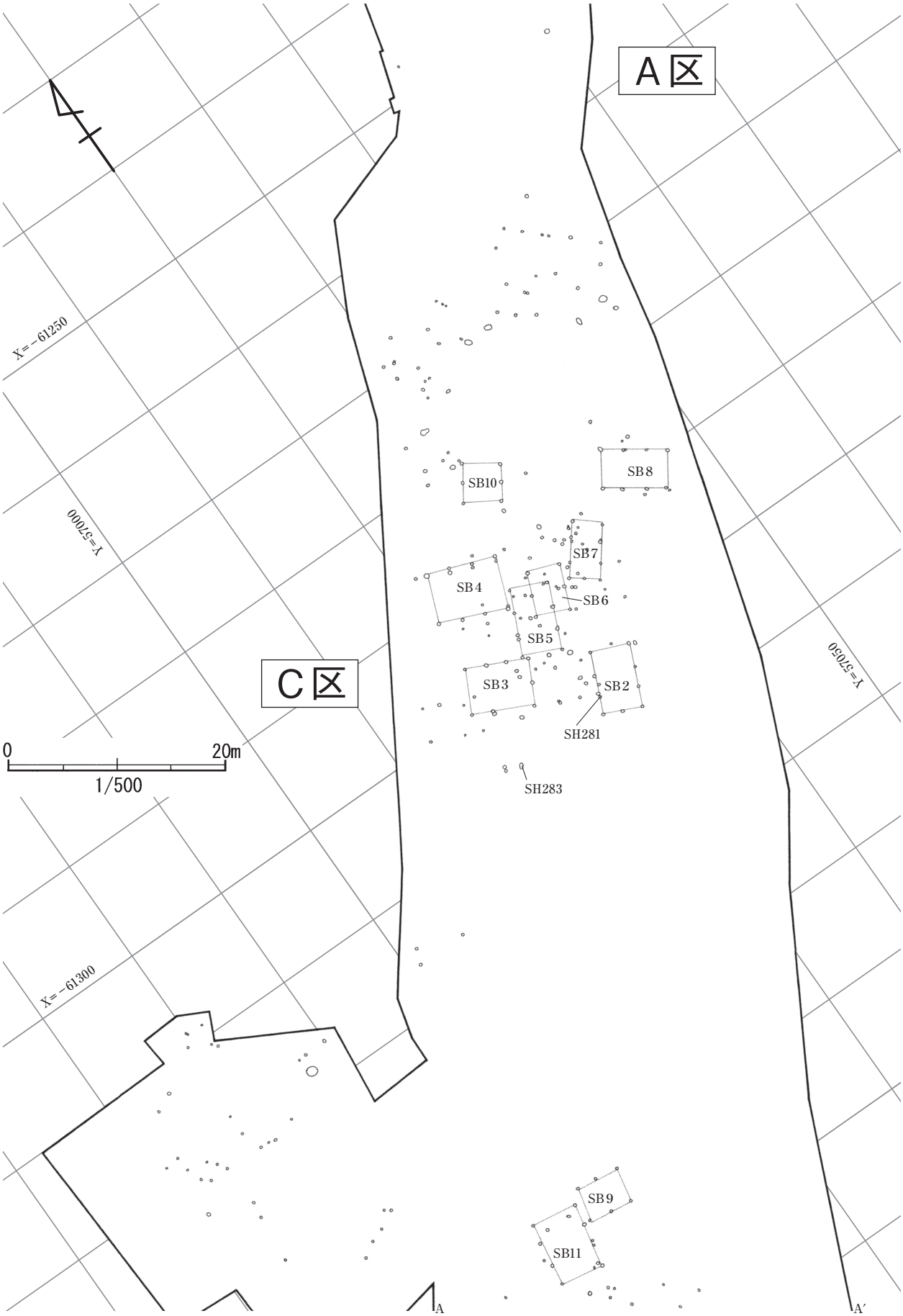
ＳＢ３（第57図）

Ｃ－１区で検出され、主軸は北から65°西に振れる。桁行３間（約5.96m）、梁行２間（約4.3m）である。身舎の面積が約25.63㎡を測る。柱穴は西側の中央の１本を検出していないものの、均整のとれた柱穴の配置となっている。Ｐ６を除く柱穴から根石や根固め石と考えられる礫が出土した。Ｐ５の底には30㎝大の扁平な礫が敷かれている。

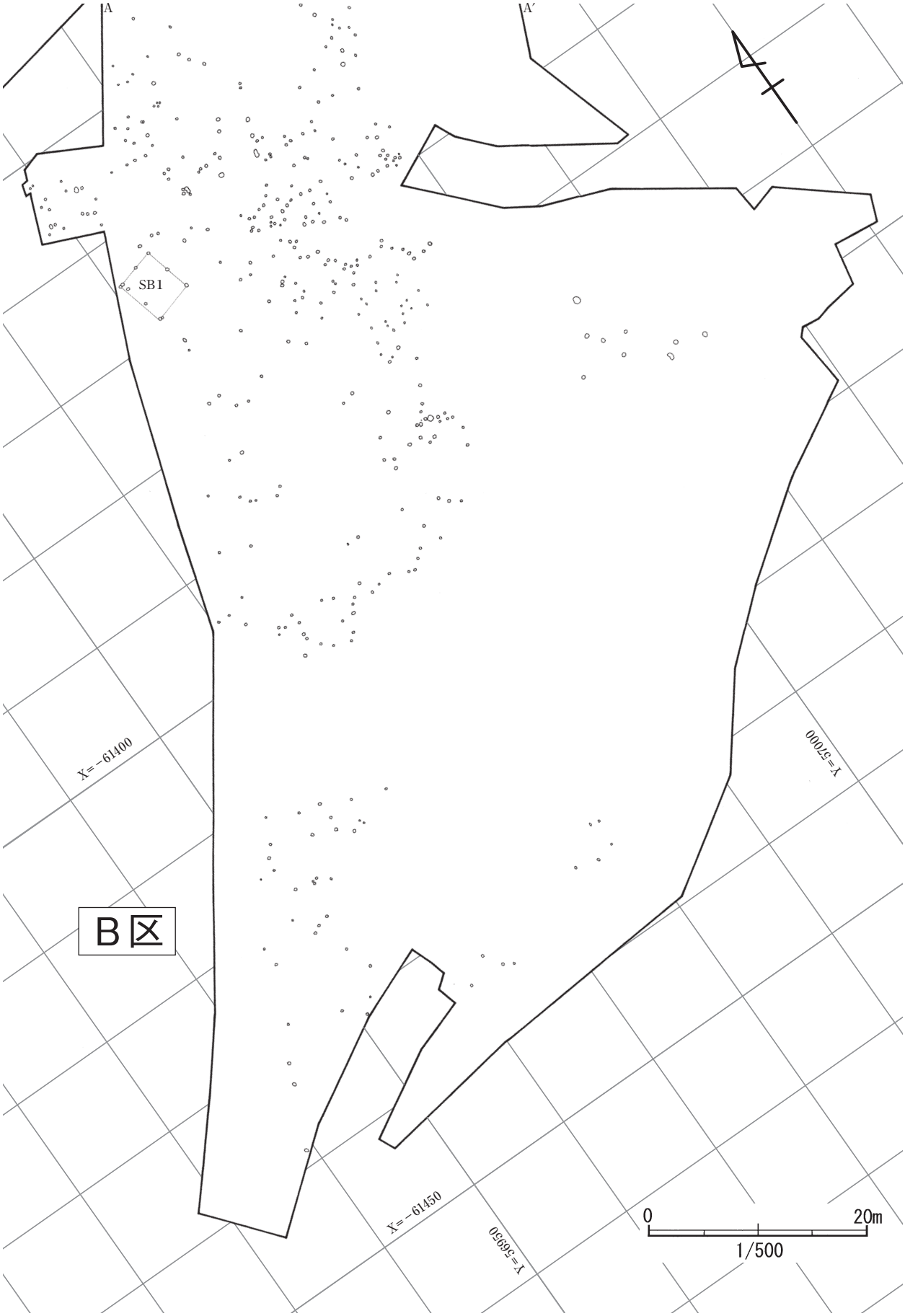
第22表　掘立柱建物跡観察表

	出土位置〔区〕	主軸	グループ	身舎面積〔㎡〕	桁 規格	桁 桁行〔m〕	桁 平均柱間〔m〕	梁 規格	梁 梁行〔m〕	梁 平均柱間〔m〕	備考
SB1	B-2	N-15°-W	D	18.27	2間	4.66	2.33	×2間	3.92	1.96	P2・P3・P5に根固め石
SB2	C-1	N-23°-E	A	21.24	3間	5.90	1.97	×2間	3.60	1.80	P3・P6の底面に固くしまった土あり、P6から土師器片
SB3	C-1	N-65°-W	A	25.63	3間	5.96	1.99	×2間	4.30	2.15	P6を除く柱穴に根石や根固め石、P7から土師器片
SB4	C-1	N-20°-E	A	34.00	3間	6.80	2.27	×1間	5.00	5.00	P4から近世の椀、P3・8から土師器片
SB5	C-1	N-23°-E	A	23.56	3間	6.30	2.10	×1間	3.74	3.74	P2に根固め石、P4の底に硬化面、P5・7から土師器片
SB6	C-1	N-22°-E	A	13.52	2間	4.20	2.10	×1間	3.22	3.22	P3に根固め石、P6から土師器片
SB7	C-1	N-37°-E	B	15.38	3間	5.34	1.78	×2間	2.88	1.44	P2から中世の滑石製石鍋、P4・8から土師器片
SB8	C-1	N-55°-W	B	23.44	3間	6.30	2.10	×1間	3.72	3.72	P4・6から土師器片、P7から中世青磁、P8から古代土師器
SB9	C-3	N-80°-W	C	12.80	2間	4.00	2.00	×1間	3.20	3.20	P6柱痕跡あり
SB10	C-1	N-34°-E	B	12.04	2間	3.50	1.75	×1間	3.44	3.44	P2から土師器片
SB11	C-3	N-10°-E	C	13.04	3間	6.12	2.04	×1間	2.13	2.13	

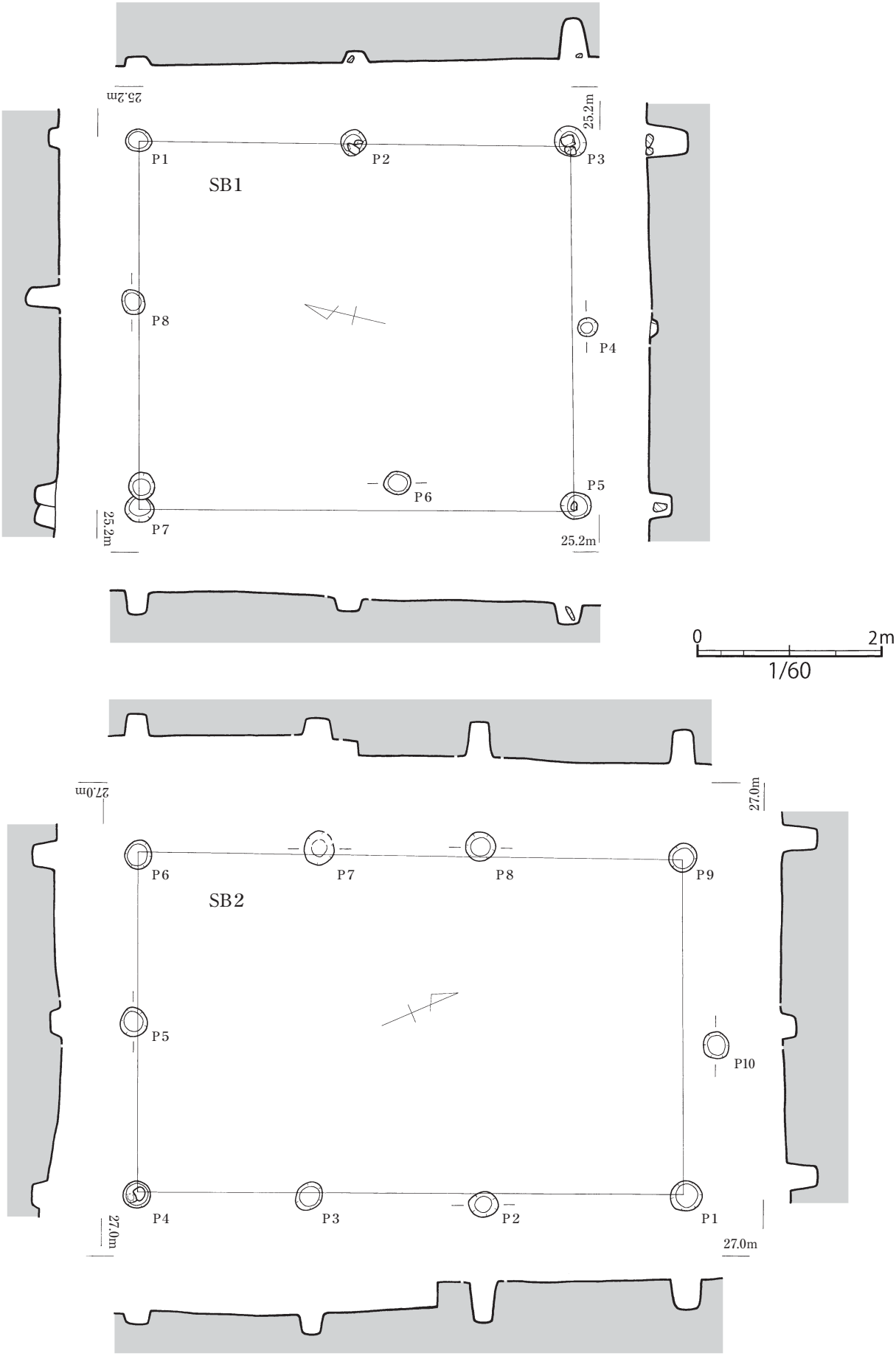
※この節で扱う柱間は、柱穴の上端の中心を結んだものである。



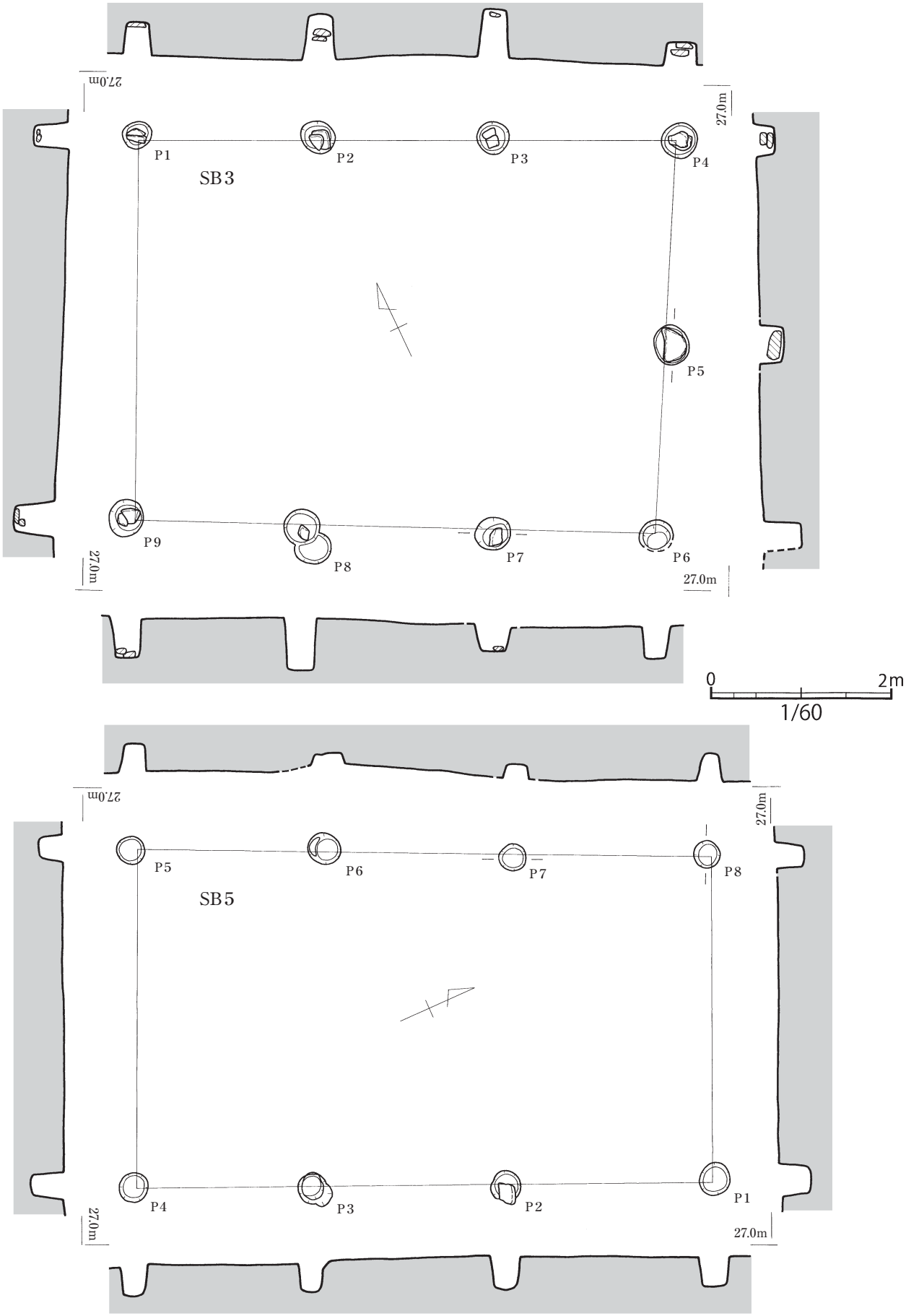
第 54 図　古代・中世・近世遺構配置図（1）



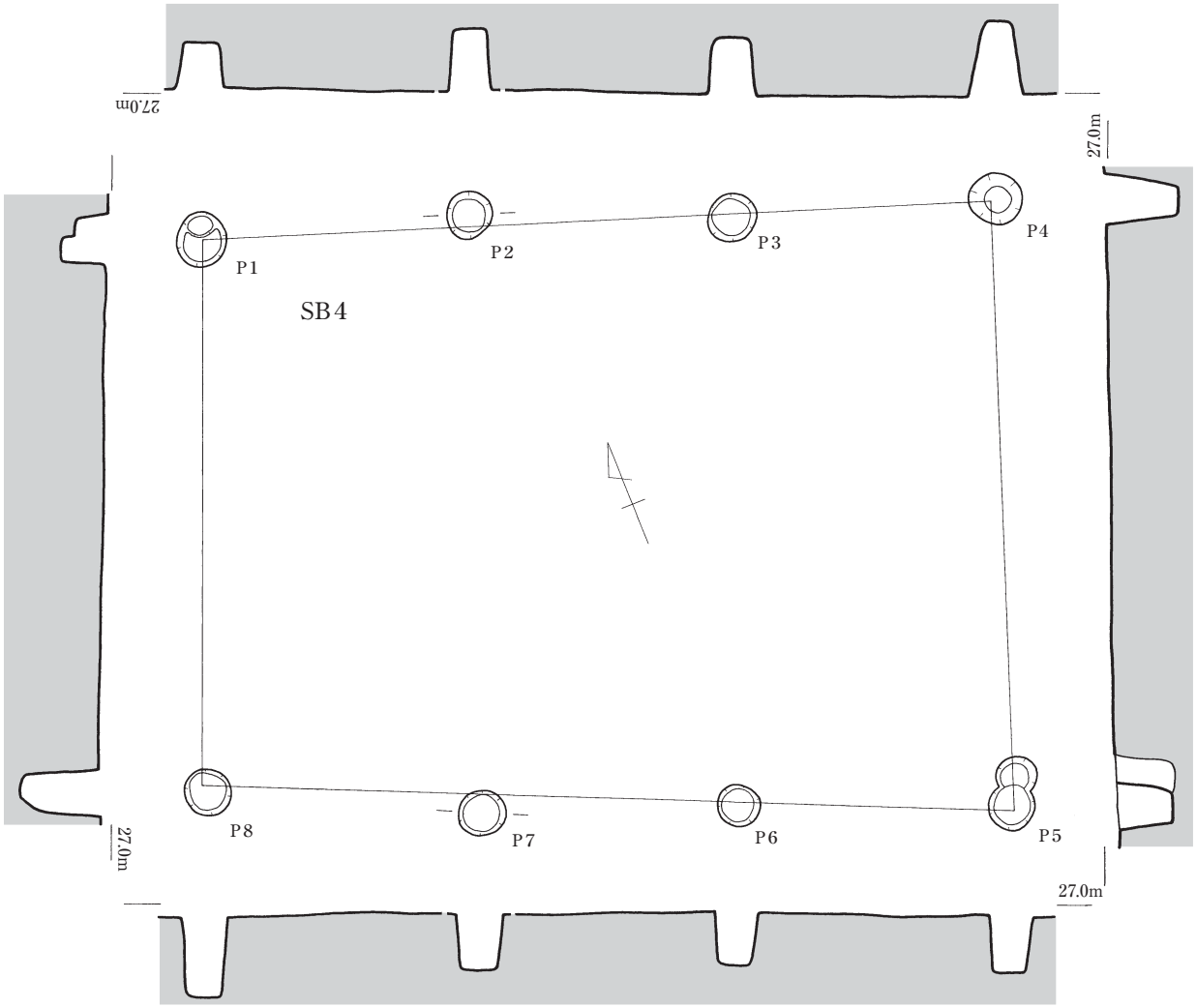
第 55 図　古代・中世・近世遺構配置図（2）

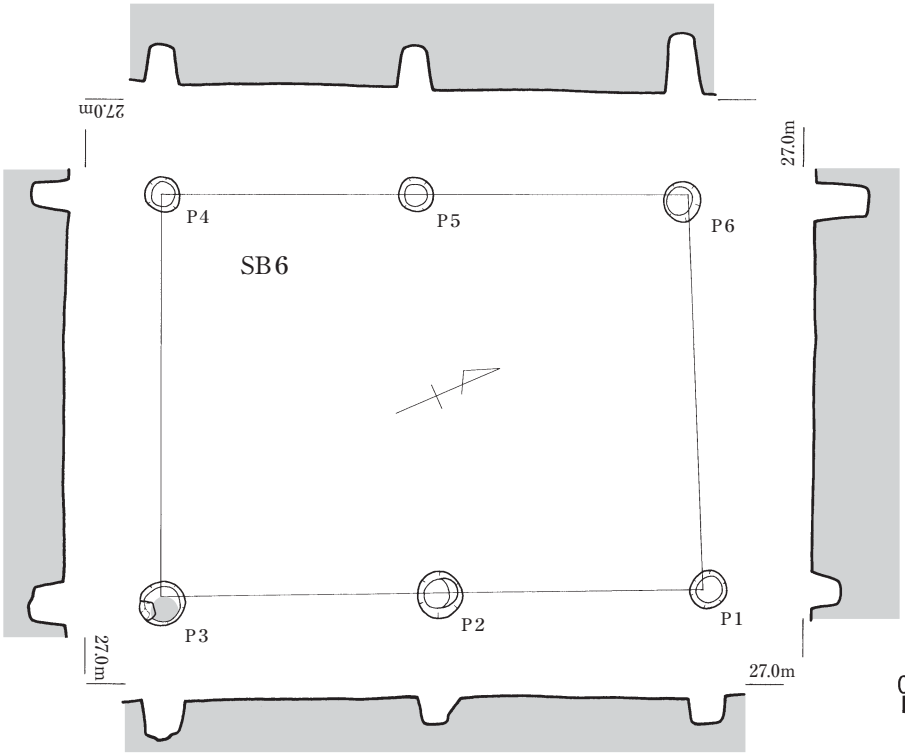


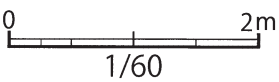
第 56 図　1 号・2 号掘立柱建物跡実測図



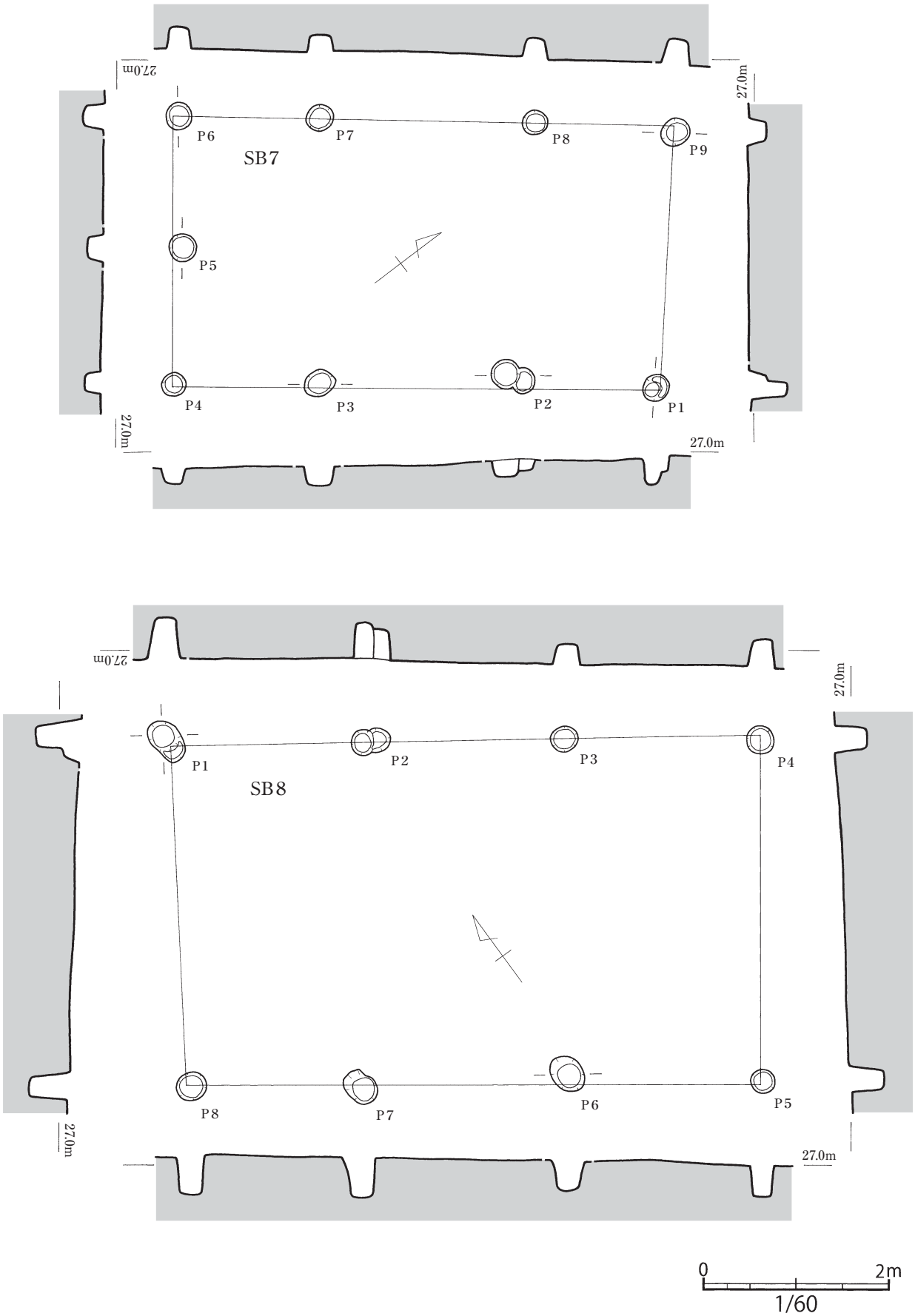
第 57 図　3 号・5 号掘立柱建物跡実測図







第 58 図　4 号・6 号掘立柱建物跡実測図



第 59 図　7 号・8 号掘立柱建物跡実測図

ＳＢ４（第58図）

Ｃ－１区で検出され、身舎の面積が約34.0㎡を測り、今回確認された掘立柱建物跡11棟の中で最大である。主軸は北から20°東に振れる。桁行３間（約6.8m）、梁行１間（約5.0m）で、西側の梁行間が東側と比較して約0.5m短いために歪な形を呈する。Ｐ１は途中にテラスをもつ２段ピットである。ＳＢ４と近接して並ぶピットもあり（第54図）、庇をもつ建物である可能性もある。Ｐ２から中世の石鍋の胴部片293（第63図）が出土している。

ＳＢ５（第57図）

Ｃ－１区で検出され、主軸は北から23°東に振れる。ＳＢ６とほぼ平行方向に切り合う。梁行１間（約3.74m）、桁行３間（約6.3m）である。身舎の面積が約23.56㎡を測る。柱穴Ｐ２から根固めの石と考えられる石が出土し、Ｐ３の底に硬化面が見られる。Ｐ３の口の部分が東側に開いており、柱を抜き取るときに生じたものであると考えられる。

ＳＢ６（第58図）

Ｃ－１区で検出され、主軸は北から22°東に振れる。ＳＢ５とほぼ垂直方向に切り合う。桁行２間（約4.2m）、梁行１間（約3.22m）である。身舎の面積が約13.52㎡を測る。柱穴Ｐ３から根固めの石と考えられる石が出土している。

ＳＢ７（第59図）

Ｃ－１区で検出され、主軸は北から37°東に振れる。桁行３間（約5.34m）、梁行２間（約2.88m）であるが、柱穴は梁行東側の中央の１本を検出していない。Ｐ７が方位軸からわずかに振れるものの、桁行８基の柱穴が対辺の柱穴と均整よく対峙して配置されている。桁行のＰ２～Ｐ３間がＰ１～Ｐ２間とＰ３～Ｐ４間に比べて間隔が広い特徴が見られ、ＳＢ２と対照的である。身舎の面積が約15.38㎡を測る。Ｐ７は途中に三日月状のテラスをもつ２段ピットである。Ｐ４から近世の碗の高台297（第63図）が出土している。

ＳＢ８（第59図）

Ｃ－１区で検出され、主軸は北から55°西に振れる。桁行３間（約6.3m）、梁行１間（約3.72m）で、身舎の面積が約23.44㎡を測る。Ｐ６が方位軸からわずかに振れる。Ｐ１は２段ピットである。Ｐ７から青磁の皿277（第63図）、Ｐ８から古代の土師器が出土している。

ＳＢ９（第60図）

Ｃ－３区で検出され、ＳＢ11と隣接するが、他の堀立柱建物群からは離れて位置する。主軸は北から80°西に振れ、桁行２間（約4.0m）、梁行１間（約3.2m）である。身舎の面積が約12.80㎡を測る。Ｐ１の位置が東方向にややずれており、梁行と桁行の軸が直交せず、やや歪である。柱穴Ｐ６では柱痕跡を検出している。

ＳＢ10（第61図）

Ｃ－１区で検出されたが、ＳＢ10は１棟だけやや北に離れて位置する。身舎の面積が約12.0㎡を測り、今回確認された掘立柱建物跡11棟の中で最小である。主軸は北から34°東に振れる。桁行１間（約3.50m）、梁行２間（約3.44m）である。Ｐ４が方位軸からわずかに振れる。

ＳＢ11（第60図）

ＳＢ９と同様にＣ－３区で検出され、主軸は北から10°東に振れる。桁行３間（約2.04m）、梁行１間（約2.13m）である。身舎の面積が約13.04㎡を測る。桁行の柱穴が方位軸からわずかに振れるものの、８基の柱穴が対辺の柱穴と均整よく対峙して配置している。

ここで、掘立柱建物跡の特徴を整理する。

建物の間取りについては、

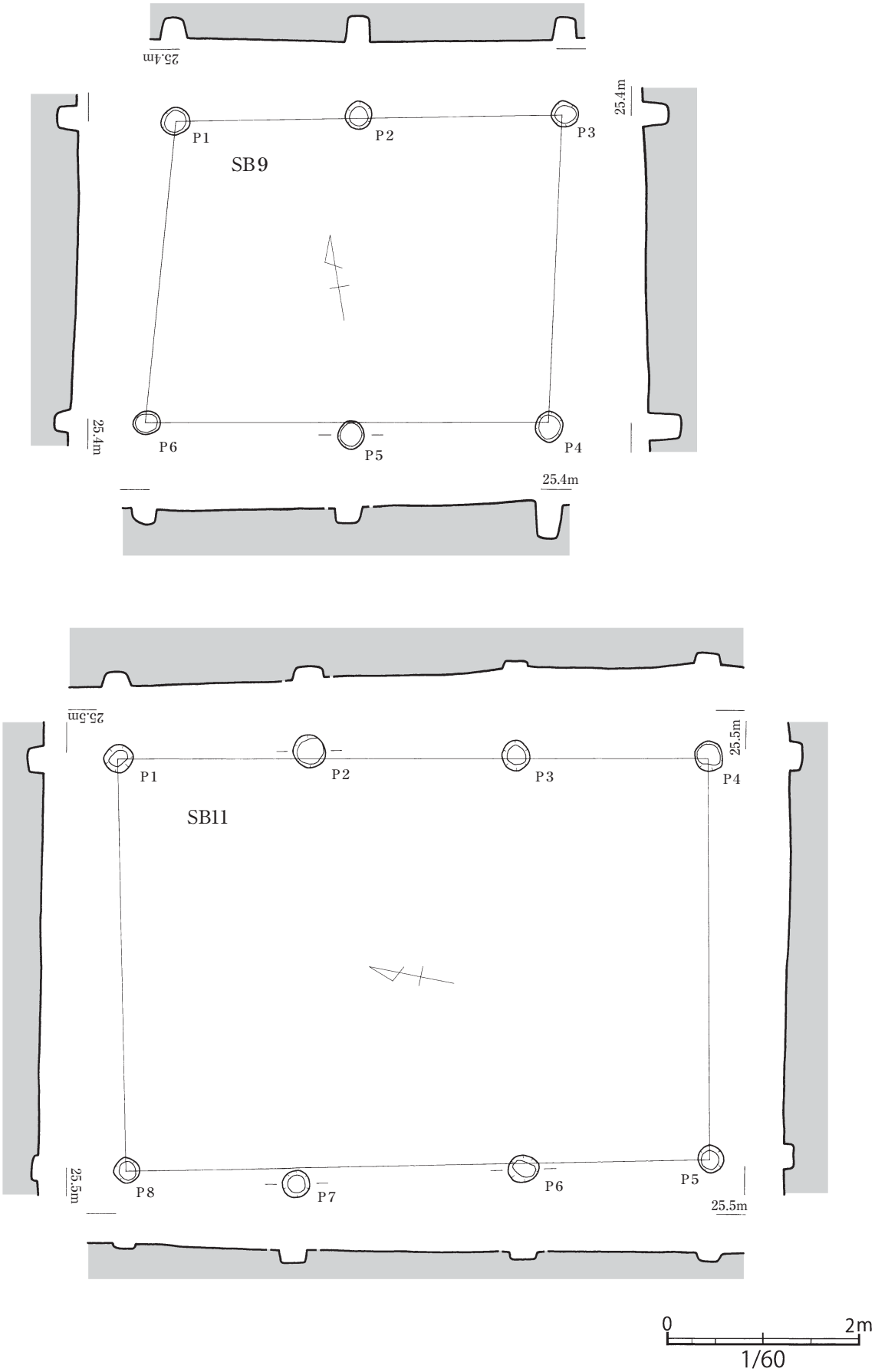
桁行３間×梁行２間が３棟（SB2・3・7）

３間×　　１間が４棟（SB4・5・8・11）

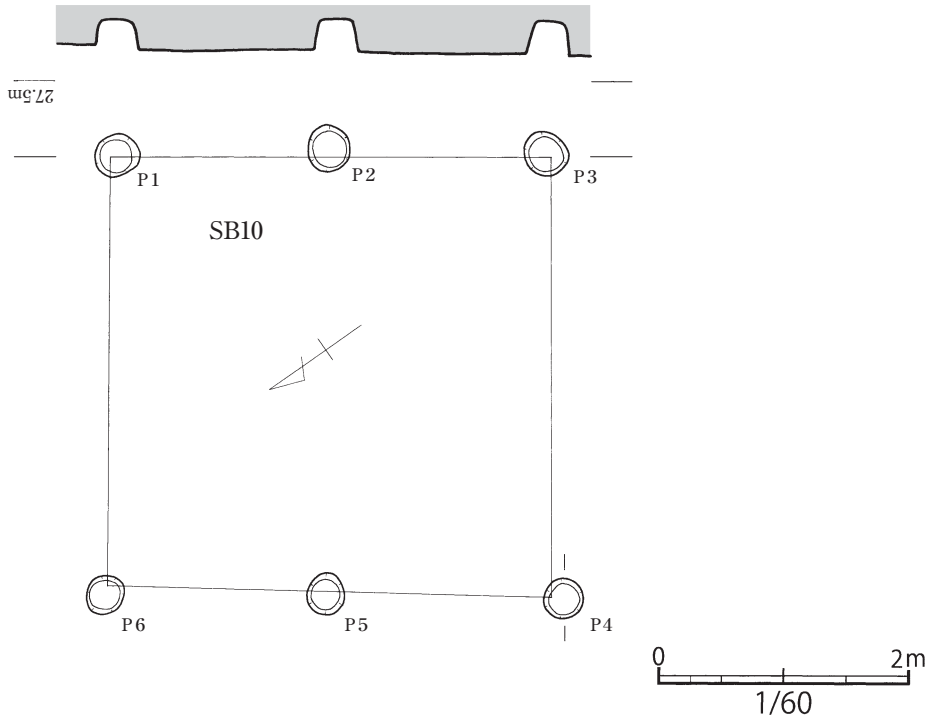
２間×　　２間が１棟（SB1）

２間×　　１間が３棟（SB6・9・10）である。

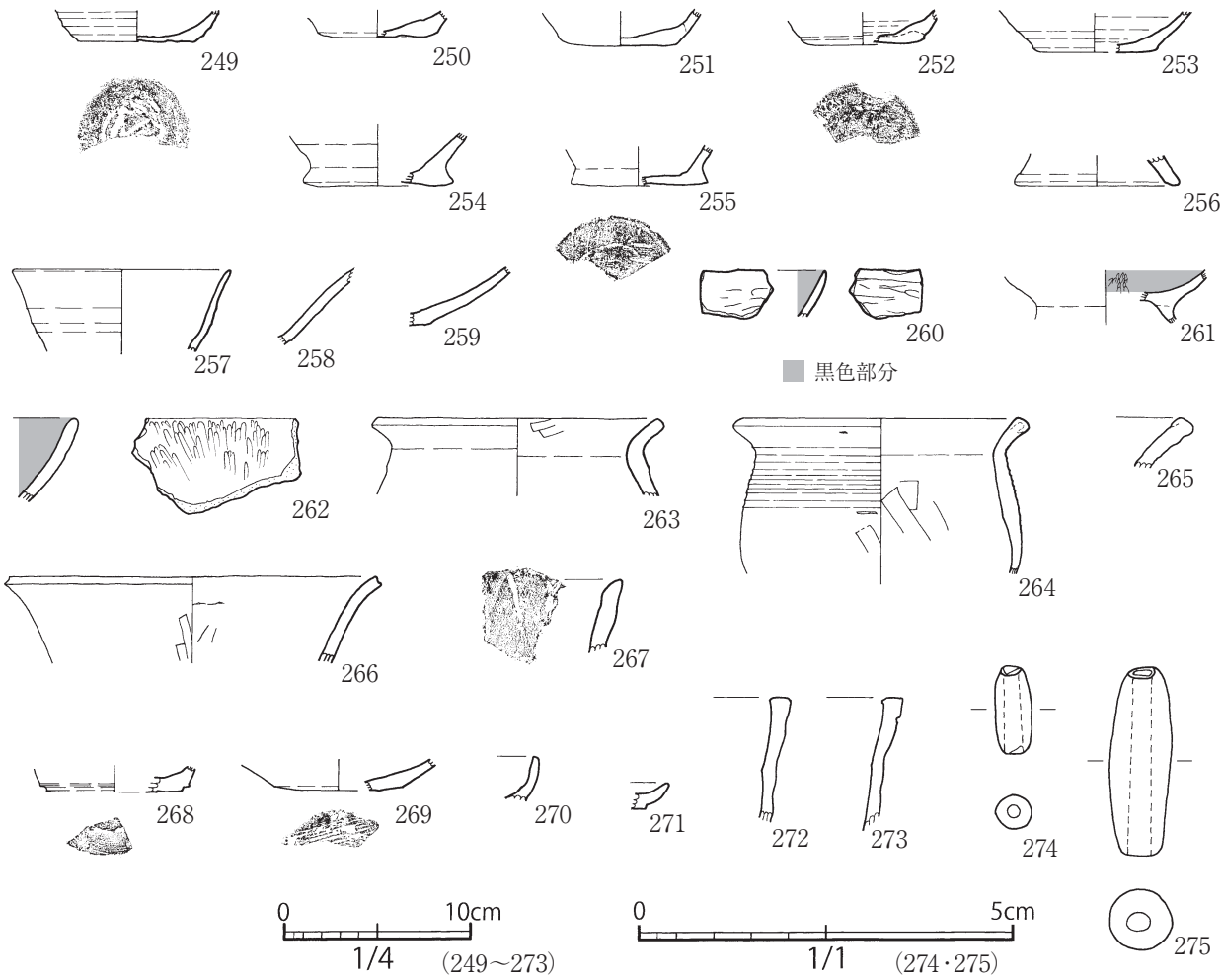
桁行３間の間取りの割合が高い。



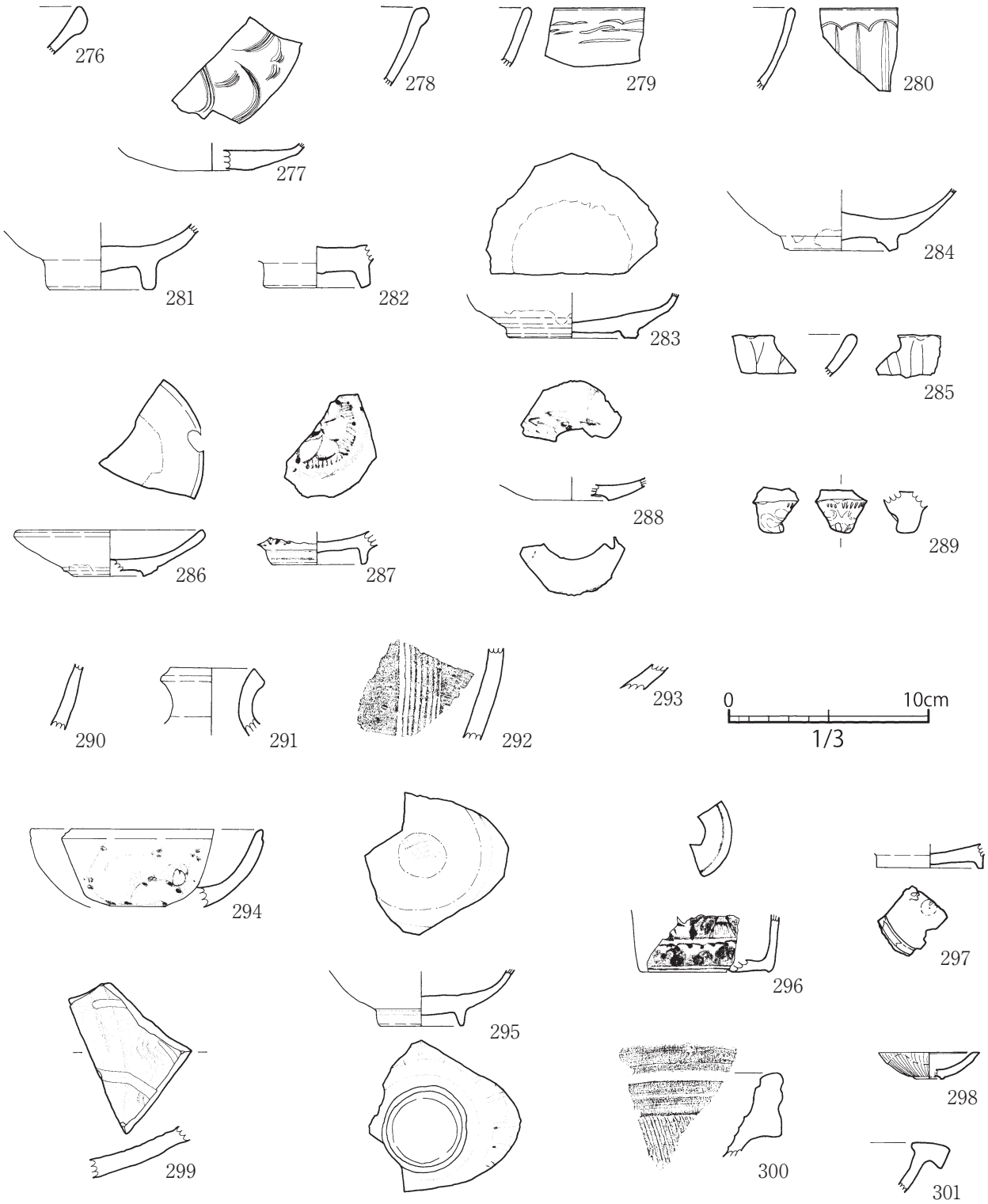
第 60 図　9 号・11 号掘立柱建物跡実測図



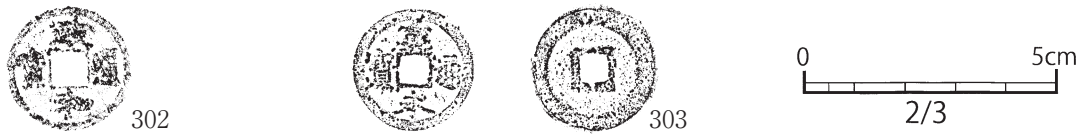
第 61 図　10 号掘立柱建物跡実測図



第 62 図　古代および中世出土土器実測図



第 63 図　中世および近世出土陶磁器および石製品実測図



第 64 図　中世および近世銭貨拓影

建物の構造については、梁行の長さが桁行柱間より長いにもかかわらず、梁行の間に柱を入れないものが多く存在する。（６棟　SB4・5・6・8・9・10）。また、梁行の一方が２間であるものの、対となる柱を間に入れないものもある（２棟　SB3･7）。

建物の方向については、主軸が概ねN-10°-E（北から東に10°振れる）、 N-20°-E、N-35°-E、N-15°-W、N-55°-W、N-65°-W、N-80°-Wの８グループに分類でき、主軸が概ね垂直に交わるものを同一グループとすると、

グループＡ　N-20°-E、N-65°-W（SB2 ～ 6）
　　Ｂ　N-35°-E、N-55°-W（SB7・8・10）
　　Ｃ　N-10°-E、N-80°-W（SB9・11）
　　Ｄ　N-15°-W　　（SB1）

の４グループに集約できる。

２　遺物

表土中や谷部埋没土、ピットから古代・中世・近世の遺物が出土している。出土量は、古代と中世の土師器が3,420ｇ、中世と近世の陶磁器が3,378ｇ（中世1,232ｇ、近世2,146ｇ）出土している。古代と中世の土師器は多くが細片で時期が不明確なものが多いため一括で重量を測定している。土師器と陶磁器について、時代ごとに詳細を記述する。

＜土師器＞（第62図）

古代の土師器

249 ～ 253は坏である。249 ～ 251は底部中央が薄い。252・253は外面体部下端に明瞭な段が見られる円盤状の底部である。254・255は円盤高台付埦で、底部側面が外方に張り出す。256は高台付埦の高台部片で、端部が外反し、その内面が斜め上方に浮き加減となりやや高めである。260 ～ 262は黒色土器で、260・262は坏の口縁部、261は高台付埦の高台である。器内面に炭素を吸着させた後ミガキを施している。263・264は甕で口縁部が短く外反しＬ字状を呈し、口唇部を丸く収める。263は外面がナデで、内面はナデとケズリが認められるが判然としない。264は内面胴部にケズリが見られる。265・266は鉢である。266の口唇部は凹線状に窪む。ナデにより窪ませたものである。267は布痕土器である。型作りによる軟焼成の非常に脆い土器である。外器面に指押さえ痕が残り、内器面には布の圧痕を残す。

中世の土師器

268・270・271の底部の切り離しはヘラ切りである。268は坏で、外面体部下端に明瞭な段が見られる円盤状の底部である。269は土師器の皿の底面に板状工具の木口で調整した痕が見られる。270・271は小皿で、270は内湾しながら上方に立ち上がり、271は口縁部が内湾しながら横に開く。272・273は土鍋の口縁部で、外面にススの付着が顕著である。274・275は管状土錘で、274は最大長2.35cmと短く、重さ2.1g、275は最大長5.0cm、重さ12.4gで外面を丁寧なナデで調整している。

＜陶磁器＞（第63図）

中世の陶磁器

276 ～ 289は中国産の貿易陶磁器である。276は白磁の碗で、口縁端部を外側に折り返し玉縁状を呈する。277は青磁の皿で高台を持たず、見込みに草花文が施されている。糸切り底の底部のみ無釉である。

278 ～ 282は青磁の碗である。278は玉縁状の口縁部を有する丸碗である。279は簡略化された波状の雷文帯を描く。280の外面は簡略化された蓮弁文が施されている。281は見込みに印花文が見られ、高台内面まで釉を施している。282は高台内面にケズリが見られる。見込み部分には釉剥ぎが見られる。

283 ～ 288は皿である。283は青磁で、削り出し高台で体部下位から高台内まで無釉である。見込み部分には釉剥ぎが見られる。284は白磁で、高台内面に高台を削り出した際の工具の痕が明瞭に残る。285は白磁の菊皿である。286は白磁で、やや焼成不良である。287・288は青花で、287は高台側面に二重界線、見込みに花文を描く。畳付のみ無釉である。288は碁笥底で、見込みに唐

人図を描く。289は青磁の香炉の脚である。

290は天目茶碗の体部である。291は古瀬戸の瓶子または水注の口縁部である。292は備前系の擂鉢である。293は滑石製石鍋片である。鑿状工具による調整痕が見られる。

近世の陶磁器

294・295は染付の茶碗である。296は蕎麦猪口で蛇ノ目高台をもつ。297は肥前系京焼風陶器で、高台内面の中央部に浅い円刻と「清水」の印銘を施す。298は紅皿で外面は上位に一部釉が内面から流れ出ているものの、基本的には無釉である。299は肥前系の皿で、内面は白泥を塗布した後掻き落として波状文を施す。また一部に銅緑釉が走る。300は堺の擂鉢、301は薩摩焼の鉢または擂鉢の口縁部である。

銭貨（第64図）

302は政和通宝（初鋳1,111年）、303は寛永通宝（初鋳1,697年）で、C－1区のピットから出土している。

第23表　古代～中世出土土器観察表

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
249	坏	体部~底部	SH281	底径（6.1）	体部は回転ナデ、底部はヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙（7.5YR8/6）	浅黄橙（10YR8/4）	4mm以下の灰・灰褐・橙色粒を含む	
250	坏	底部	C-4	底径（6.5）	体部は回転ナデ、底部はヘラ切り後にナデ	回転ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	淡橙（5YR8/4）	1~3mmの橙色粒を多く含む	
251	坏	底部	C-3	底径6.0	回転ナデ、底部はヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙（7.5YR8/6）	淡橙（5YR8/4）	3mm以下のにぶい橙・灰白・橙色粒、微細な光沢粒を含む	
252	坏	体部~底部	C-3	底径（6.6）	体部は回転ナデ、底部付近は工具による横方向のケズリ、底部はヘラ切り後に丁寧なナデ	回転ナデ	橙（5YR7/6）	橙（5YR7/6）	2mm以下の灰褐・褐灰・黒色光沢粒を含む	
253	坏	体部~底部	C-3	底径（6.7）	坏体部は回転ナデ、底部はヘラ切り後にナデ	横ナデ	黒（2.5Y2/1）	にぶい黄橙（10YR6/4）	1mm以下の茶色粒を含む	
254	椀	底部	C-3	底径（8.1）	回転ナデ、底部はヘラ切り後にナデ	回転ナデ、底部はナデ	にぶい褐（7.5YR6/3）	橙（7.5YR7/6）	2mm以下の白・褐色粒を多く含む	円盤高台付
255	椀	底部	C-3	底径（7.4）	回転ナデ、底部はヘラ切り後にナデ	回転ナデ、底部はナデ	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	3mm以下の白・褐色粒を多く含む	円盤高台付
256	高台付椀	脚部	C10tr	底径（8.3）	回転ナデ、畳付部はナデ	回転ナデ	橙（7.5YR7/6）	橙（5YR6/6）	1mm以下の褐・灰白・黒色光沢粒を含む	
257	椀	口縁部~体部	C-2	口径（11.4）	回転ナデ	横ナデ、斜方向のナデ	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/4）	1~2mmの茶色粒を含む	
258	椀	体部	C-3		ナデ	ナデ	明黄褐（10YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	1mm以下の灰・橙・灰白色粒を含む	
259	椀	体部	C-1		縦ナデ、不定方向のナデ、ナデ、工具痕	不定方向の丁寧なナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	橙（7.5YR7/6）	3mm以下の灰白・黒褐・灰褐色粒を含む	外・内面：一部黒変
260	坏	口縁部	C-4		口唇部は横ナデ、胴部は横ミガキ	横ナデ後に横ミガキ	にぶい黄褐（10YR5/3）	黒（2.5Y2/1）	0.5mm以下の乳白色粒を含む	内黒土器
261	高台付椀	底部	C-2		横ナデ	内黒、縦ミガキ	にぶい橙（7.5YR7/4）	黒（N1.5/）	1mm以下の褐色粒を含む	内黒土器
262	坏	口縁部	C-1		口唇部はナデ、口縁部は横ナデ、工具による横ナデ後にミガキ、一部工具痕	内黒、ミガキ	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	4mm以下の白・茶褐色粒を多く含む	内黒土器
263	甕	口縁部~頸部	C-4	口径（15.0）	口縁部は横ナデ、横ナデ後に指ナデ、頸部は横ナデ	工具ナデ、風化気味だが工具による横ナデ	黄橙（7.5YR7/6）	黄橙（7.5YR7/6）	4mm以下の茶褐・灰褐色粒を多く含む	
264	甕	口縁部	C-3	口径（14.6）	口縁部は指押さえ後に横ナデ、カキ目か、胴部は風化気味だが工具による斜方向のナデ	口縁部は横ナデ、頸部付近は工具横ナデ、胴部は工具斜方向のナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	浅黄橙（10YR8/4）	2mm以下の茶褐色粒を多く、透明光沢粒を少し含む	
265	鉢	口縁部	C-4		口縁部は横ナデ	口縁部は不明瞭な横ナデ	橙（5YR6/6）	にぶい橙（7.5YR6/4）	4mm以下の赤褐・赤灰色粒を含む	口唇部から内面にかけて一部黒変
266	鉢	口縁部	C-2	口径（19.7）	口唇部は凹線状に窪む、口縁部は横ナデ、頸部付近は斜方向のナデ	口縁部は横ナデ、工具による横ナデ、工具痕	にぶい橙（7.5YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	4mm以下の白・灰・茶褐色粒を多く、2mm以下の黒色光沢粒を少し含む	
267	布痕土器	口縁部	C-4		口唇部は指頭痕、口縁部はナデ	布目痕	にぶい黄橙（10YR6/4）	橙（7.5YR6/6）	3mm以下の白・茶色粒を含む	
268	坏	底部	B-7	口径（7.3）	体部は回転ナデ、底部ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/4）	1mm以下の橙、明赤褐、灰褐色粒を含む	
269	皿	体部~底部	B-7	底径（4.4）	体部は回転ナデ、底部はヘラ切り、板状圧痕	回転ナデ、見込みは回転ナデ後に工具ナデ	にぶい橙（7.5YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1~2mmの橙色粒を少し含む	
270	小皿	口縁部~体部	C-1		回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/3）	1mm以下の黒色粒を少し含む	
271	小皿	口縁部	B-7		回転ナデ、底部はヘラ切り	ナデ	淡橙（5YR8/4）	にぶい橙（5YR7/4）	1mm以下の褐色粒を含む	
274	土錘	完形	C10tr		丁寧なナデ、指紋か、最大長2.35㎝,最大幅0.9㎝,重さ2.1g	－	橙（2.5YR6/6）	－	2mm以下の黒色粒を含む	
275	土錘	完形	C-3		丁寧なナデ、最大長5.0㎝,最大幅1.6㎝,重さ12.4g	－	にぶい黄橙（10YR7/4）	－	1mm以下の橙・褐色粒、微細な光沢粒を含む	

第24表　中世～近世出土陶磁器および石製品観察表

No.	種別	器種	部位	出土地点	法量（cm）	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
272	土師器	土鍋	口縁	B-7		ナデ、指押さえ	回転ナデ	良	堅緻	にぶい黄（2.5Y6/3）	浅黄（2.5Y7/3）	スス付着
273	土師器	土鍋	口縁	B-7		横方向の指ナデ	横ナデ	良	堅緻	黒（10YR2/1）	にぶい黄（2.5Y6/3）	スス付着
276	白磁	碗	口縁	C-1		施釉、口縁端部玉縁状	施釉	精良	堅緻	灰白（5Y7/2）	灰白（5Y7/2）	
277	青磁	皿	底部	SB8 P-7		回転ナデ、施釉、糸切り底の底部のみ無釉	施釉、見込み草花文	精良	堅緻	緑灰（10GY6/1）	緑灰（10GY6/1）	
278	青磁	碗	口縁	SH283		施釉、貫入、口縁端部玉縁状	施釉、貫入	精良	堅緻	オリーブ灰（10Y5/2）	オリーブ灰（10YR6/2）	
279	青磁	碗	口縁	C表採		施釉、簡略化された雷文帯	施釉	精良	堅緻	オリーブ灰（10YR6/2）	オリーブ灰（10YR6/2）	雷文帯
280	青磁	碗	口縁	B-7		施釉、貫入、蓮弁	施釉、貫入	精良	堅緻	灰オリーブ（7.5Y5/3）	オリーブ灰（10Y5/2）	蓮弁文
281	青磁	碗	底部	C-4	底径（5.0）	施釉、貫入、底部は回転ナデ	施釉、貫入、見込み印花文	精良	堅緻	明オリーブ灰（5GY7/1）	明オリーブ灰（5GY7/1）	
282	青磁	碗	底部	B-5	底径（5.2）	施釉、削り出し高台	施釉、見込み釉剥ぎ	精良	堅緻	灰オリーブ（5Y5/3）	灰オリーブ（5Y5/3）	
283	青磁	皿	底部	B-7	底径（6.3）	施釉、貫入、回転ナデ、削り出し高台、底部は無釉	施釉、貫入、見込み釉剥ぎ	精良	堅緻	明緑灰（5GY7/1）	明緑灰（5GY7/1）	
284	白磁	皿	底部	B-5	底径（5.0）	施釉、高台内は削り出しの工具痕	施釉	精良	堅緻	明オリーブ灰（5GY7/1）	明オリーブ灰（5GY7/1）	
285	白磁	皿	口縁	C-4		施釉	施釉	精良	堅緻	明オリーブ灰（2.5GY7/1）	明オリーブ灰（2.5GY7/1）	菊皿
286	陶器	皿	口縁~底部	B-7	口径（9.2）底径（4.7）器高（2.3）	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	精良	堅緻	灰白（5Y8/1）	灰白（5Y8/1）	焼成不良
287	染付	皿	底部	B	底径（4.5）	施釉、高台側面二重界線	施釉、見込み花文	精良	堅緻	明緑灰（7.5GY7/1）	明緑灰（7.5GY7/1）	青花、高台内面釉色調：灰白
288	染付	皿	底部	B-7	底径（3.7）	施釉、底部は削り出し	施釉、貫入、見込み唐人図	精良	堅緻	淡黄（5Y8/3）	淡黄（5Y8/3）	青花、碁笥底
289	青磁	香炉	脚部	C-2		施釉	施釉	精良	堅緻	明緑灰（7.5GY7/1）	明緑灰（7.5GY7/1）	
290	陶器	碗	胴部	B4tr		回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	精良	堅緻	灰黄褐（10YR4/2）	灰黄褐（10YR4/2）	天目茶碗
291	陶器	瓶子または水注	口縁部	C-1	口径4.2	回転ナデ後に施釉	回転ナデ	精良	堅緻	灰白（7.5Y7/2）	―	古瀬戸
292	陶器	擂鉢	胴部	Btr		回転ナデ	一単位8条の擂目	良	堅緻	灰白（7.5Y5/2）	灰白（5Y7/1）	備前系
293	石製品	石鍋	胴部	SB4 P-2		鑿状工具痕	鑿状工具痕	―	―	黒褐（2.5Y3/1）	灰黄褐（10YR6/2）	滑石製、スス付着
294	染付	碗	口縁~体部	B	口径（11.4）	施釉、文様あり	施釉	精良	堅緻	灰白（N8/）	灰白（N8/）	
295	染付	碗	底部	B-7	底径4.1	施釉、文様あり	施釉、文様あり、見込み釉剥ぎ	精良	堅緻	明緑灰（5GY7/1）	明緑灰（5GY7/1）	
296	染付	蕎麦猪口	体部~底部	B-7	底径（6.4）	体部は施釉、文様あり	施釉	精良	堅緻	明緑灰（10GY8/1）	明緑灰（10GY8/1）	蛇ノ目高台
297	陶器	碗	底部	SB7 P-4		高台は削り出し、円刻、「清水」印銘	施釉	精良	堅緻	浅黄橙（10YR8/3）	浅黄（2.5Y8/3）	肥前系京焼風
298	陶器	紅皿	口縁~底部	C-1	底径（1.2）口径（5.0）器高1.3	無釉、一部施釉	施釉	精良	堅緻	灰白（N8/）	灰白（N8/）	
299	陶器	皿	体部	B-8		回転ナデ	施釉	良	堅緻	にぶい赤褐（5YR5/4）	にぶい黄橙（10YR7/3）	肥前系
300	陶器	擂鉢	口縁部	C-3		施釉、擂目	施釉	精良	堅緻	暗赤褐（2.5YR3/2）	暗赤褐（2.5YR3/2）	
301	陶器	鉢または擂鉢	口縁	B-8		施釉	施釉	良	堅緻	明赤褐（2.5YR3/3）	オリーブ黒（7.5Y2/2）	薩摩焼

第25表　中世～近世銭貨観察表

No.	銭名	材質	出土地点	計測値 銭径（cm）	計測値 孔径（cm）	計測値 厚さ（cm）	計測値 重量（g）	備考
302	政和通宝	銅	C-1ピット	2.45	0.71	0.15	2.3	北宋銭　1111年初鋳
303	寛永通宝	銅	C	2.45	0.54	0.13	1.8	新寛永　1697年初鋳

第８節　その他の遺構と遺物

表土（第Ⅰａ層）を重機で剥ぎ、遺構検出を行っていくと、Ａ区の斜面から平坦面にかけて陥し穴状土坑を11基検出した。また、その他の時期不明土坑についても数基検出している。

また、谷部の埋没土を中心に剥片や石核、石鏃、石斧、石錘等の石器が多数出土しているが、時期が不明確なものが多いので、第Ⅵ層（ＡＴ）下位の旧石器時代の石器と遺構から出土した石器以外は、この節にまとめて記述する。

１　陥し穴状土坑（ＳＣ　第26表）

Ａ区の陥し穴状土坑については、検出面はすべて第Ⅳ層で第Ⅷ層まで掘り込む。ただし検出面が表土直下であり、埋土に遺物がほとんど絡まないことから時期不明とした。また、立地が谷部の辺の斜面地で、近くにその他の遺構も無いことから狩り場としての陥し穴状の土坑であると考えている（第３図・第65図）。

検出面の平面形態をもとに、

Ａ類…楕円形のもの（９基）

Ｂ類…円形もの（２基）

の２類に分類して、次に詳細を記述する。

＜Ａ類＞（第66 ～ 68図）

ＳＣ１

Ａ－３区の平坦面で検出し、等高線に直交する。平面形態は長軸1.5m×短軸0.6mの楕円形で、断面形態は深さ0.9mのやや下膨れの長方形である。底面の両端に径50cm×深さ30cmほどの掘り込みをもつ。埋土中部に第Ⅵ層（ＡＴ）を含む。

ＳＣ２

Ａ－３区の平坦面で検出し、等高線に平行する。平面形態は長軸1.2m×短軸0.7mの楕円形である。断面形態は深さ0.8mの台形で中ほどが膨らむ。底面の両端に径50cm×深さ30cmほどの掘り込みをもつ。埋土中部に第Ⅵ層（ＡＴ）を含む。

ＳＣ３

Ａ－３区の平坦面で検出し、等高線に平行する。平面形態は長軸2.1m×短軸1.0mの楕円形で、断面形態は深さ1.3mの逆三角形である。中ほどにテラス状の平面を設け，そこから更に深く掘下げている。埋土中部に第Ⅵ層（ＡＴ）を含む。埋土から貝殻条痕文の土器片304（第66図）を出土した。

ＳＣ４

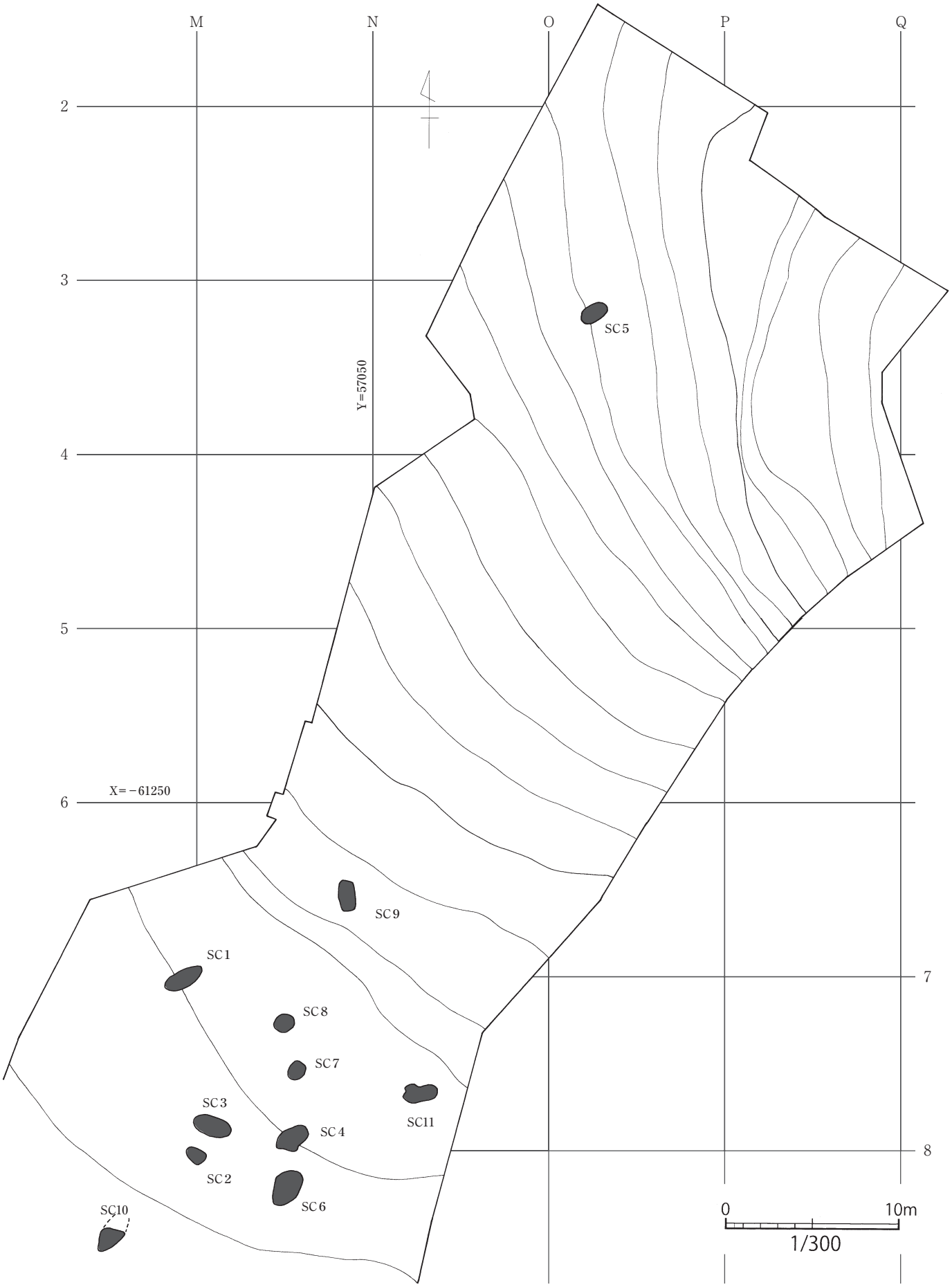
Ａ－３区の平坦面で検出し、等高線に直交する。平面形態は長軸1.7m×短軸1.1mの楕円形である。断面形態は深さ1.2mの台形で中ほどが大きく膨らむ。底面の東側に長径95cm×短径25cm×深さ20cmの掘り込みをもつ。埋土中部から下部に第Ⅵ層（ＡＴ）を含む。

ＳＣ５

Ａ－１区の斜面で検出し、他の陥し穴とはやや離れて位置する。等高線に直交する。平面形態は長軸1.6m×短軸1.0mの楕円形で、断面形態は深さ0.9mの長方形である。埋土に小礫（φ1 ～ 2mm）を含む。

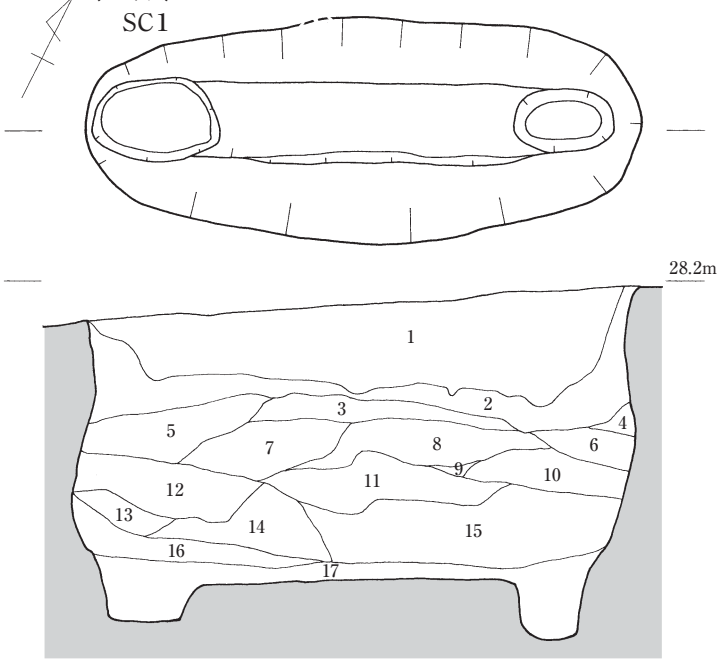
第26表　陥し穴状土坑観察表

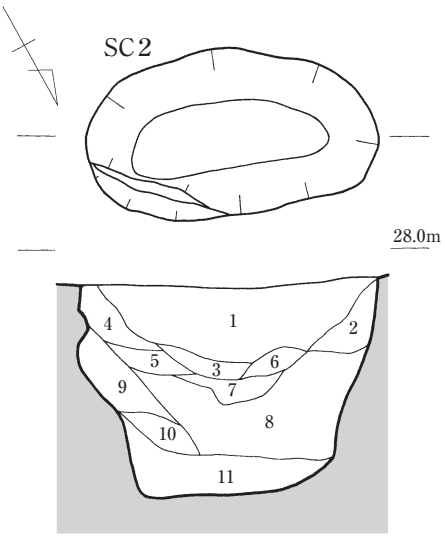
遺溝	出土位置〔区〕	検出面〔層〕	検出面規模〔m〕			等高線との位置	平面形態	断面形態長軸方向	備考
			長軸	×短軸	×深さ				
SC1	A-3	Ⅳ	1.5	×0.6	×0.9	直交	楕円	長方形	底面の両端に掘り込み
SC2	A-3	Ⅳ	1.2	×0.7	×0.8	平行	楕円	台形	
SC3	A-3	Ⅳ	2.1	×1.0	×1.3	平行	楕円	逆三角形	中央部に深い掘り込み
SC4	A-3	Ⅳ	1.7	×1.1	×1.2	直交	楕円	台形	底面の中央から東側に掘り込み
SC5	A-1	Ⅳ	1.6	×1.0	×0.9	直交	楕円	長方形	他と離れて位置する
SC6	A-3	Ⅳ	2.2	×1.4	×1.0	直交	楕円	台形	底面に20cm大の礫が４個
SC7	A-3	Ⅳ	1.1	×1.1	×0.7	－	円	逆三角形	ＳＣ８と隣接
SC8	A-3	Ⅳ	1.1	×0.9	×1.0	－	円	台形	ＳＣ７と隣接
SC9	A-2	Ⅳ	1.8	×0.9	×0.5	直交	楕円	逆三角形	
SC10	A-3	Ⅳ	推定2.4	×1.1	×1.4	直交	楕円	逆三角形	
SC11	A-3	Ⅳ	1.9	×0.7	×0.5	直交	楕円	長方形	



第 65 図　陥し穴状土坑配置図

〈A類〉



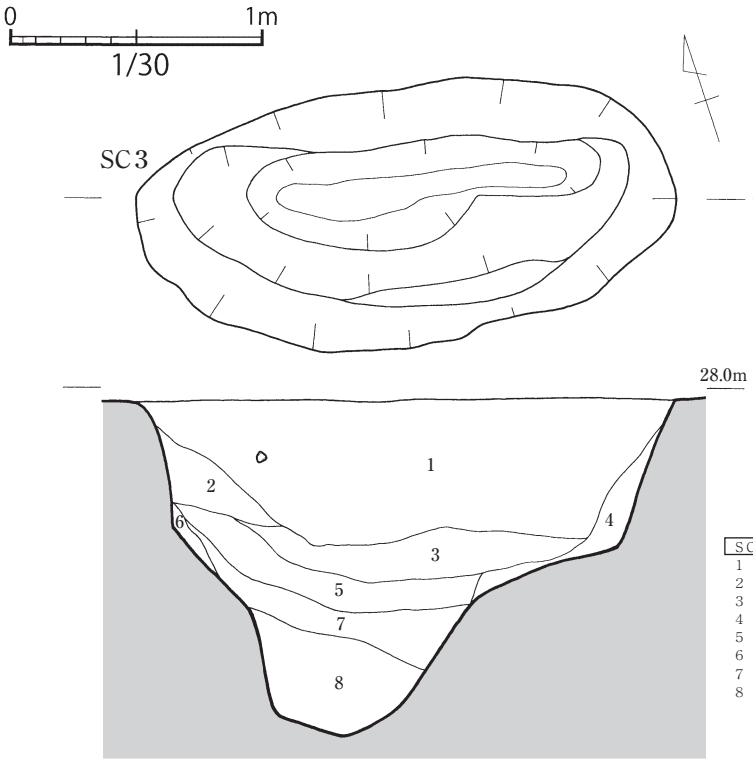


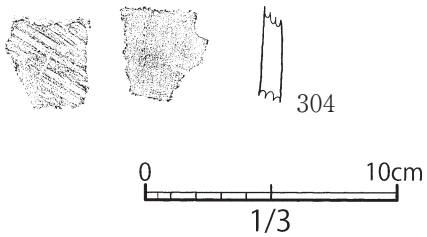
SC1

1　10YR3/4暗褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、10YR4/4褐色が中量混ざる、炭化物、白色粒子を少量含む
2　10YR4/6褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、ATブロックが少量混ざる
3　7.5YR4/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや強い、ATブロックは少量混ざる
4　10YR4/6褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、混ざり気のない層
5　7.5YR3/4暗褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、10YR4/4褐色の土が少量混ざる
6　10YR3/4暗褐色砂質土、粘性弱くやわらかい、褐色の粘土ブロック(AT混ざりφ0.5～1cm)がごく少量混ざる
7　7.5YR4/4褐色砂質土、粘性非常に弱くやわらかい、AT混じりの小ブロック(φ0.5～1cm)と粒子が混ざる
8　7.5YR4/4褐色砂質土、褐色を基調とする7層と類似するがφ3～5cm大のATブロックが多量に含まれる
9　7.5YR5/6明褐色砂質土、やや湿り気がありやわらかい、ATブロックを少量含む
10　9層と類似するがATブロックは混ざらない
11　7.5YR4/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、他の層に比べ比較的混ざり気は少ないがφ0.5～1cm大の褐灰色(7.5YR4/1)のブロックを少量含む
12　7.5YR4/4褐色砂質土、11層と類似するがやや暗め
13　10YR4/6褐色砂壌土、やや湿り気がありやわらかい、地山の土と混ざり始めている
14　13層と類似するがATブロックが少量混ざる
15　10YR4/6褐色砂壌土、ややしめり気があり固くしまる、ATブロックを多量に含む
16　10YR4/6褐色粘質土、粘性やや弱くやわらかい、地山(Ⅷ層)とよく似ているが粘性が弱い
17　10YR4/6褐色粘質土、粘性強く地山の土と混ざりやわらかい

SC2

1　7.5YR3/2黒褐色砂質土、やや粘性あり、しまっている、黄色の粒子が少量入る、砂利(φ1～2㎜)ごく少量入る
2　7.5YR4/3褐色砂質土、やや粘性あり、しまっている、黄色の粒子が少量入る、砂利(φ1～2㎜)ごく少量入る
3　10YR3/4暗褐色砂質土、1層より色調明るくしまり弱い
4　7.5YR4/4褐色土、1層より粘性強い
5　10YR3/4暗褐色土、4層に類似するがより粘性強い
6　7.5YR4/4褐色土、10YR4/4褐色が混ざる、粘性ややあり、しまりあり
7　10YR4/6褐色土、黒色土ブロック（φ10㎜）、ATが混ざる、粘性弱くやわらかい
8　10YR4/6褐色土、褐色を基調として10YR3/4暗褐色のブロックが入る、粘性やや強くしまり弱い
9　7.5YR4/4褐色土、4層と類似、細かい砂利が入る、壁の土の影響からかやや端が明るい
10　7.5YR4/4褐色土、AT・黒色土ブロック（φ10㎜）が入る
11　10YR4/6褐色土、粘性強く、砂利(φ2～3㎜)少量含む

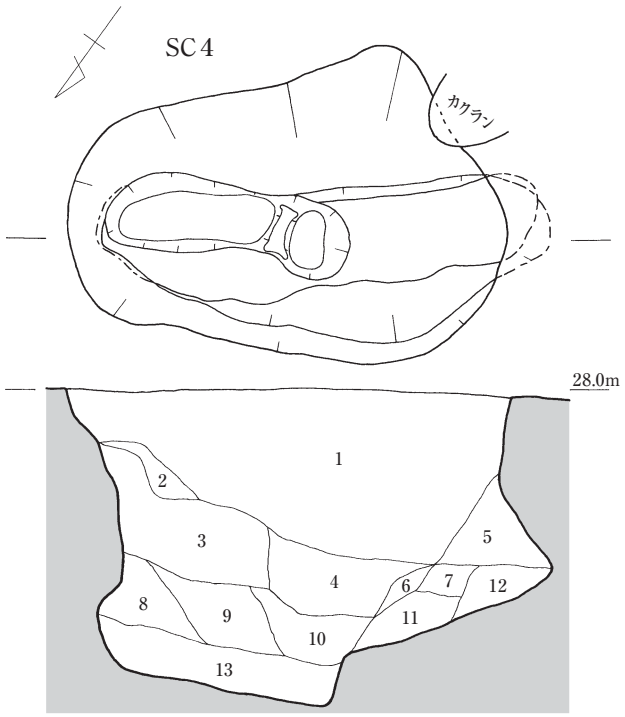


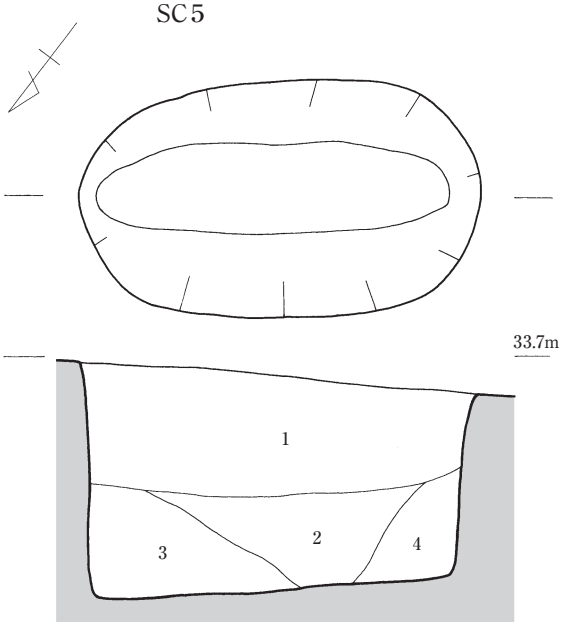


SC3

1　7.5YR3/2黒褐色砂質土、やや湿り気あり、固くしまる、小礫(φ1～2mm)を少量含む
2　7.5YR3/4暗褐色砂質土、粘性やや弱くしまり弱い、褐色粒子を少量含む
3　2層と類似するがATブロック(φ1～2cm)、褐色を少量含む
4　－
5　7.5YR3/3暗褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、ATブロック(φ2～4cm)を少量含む。
6　7.5YR4/4褐色粘質土、粘性やや弱くしまりあり、φ5㎜大の小礫を少量含む
7　6と類似するが中央部が若干明るくなる
8　7.5YR4/3褐色粘質土、粘性やや強くやわらかい、地山(Ⅷ層)と混ざり小礫含むが粘性が弱くやや色調暗い

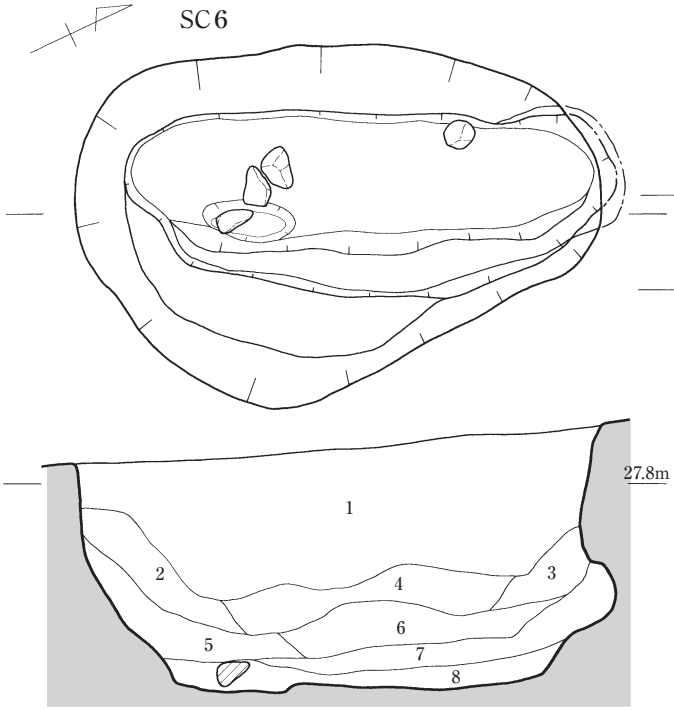
第66図　陥し穴状土坑および出土遺物実測図（1）

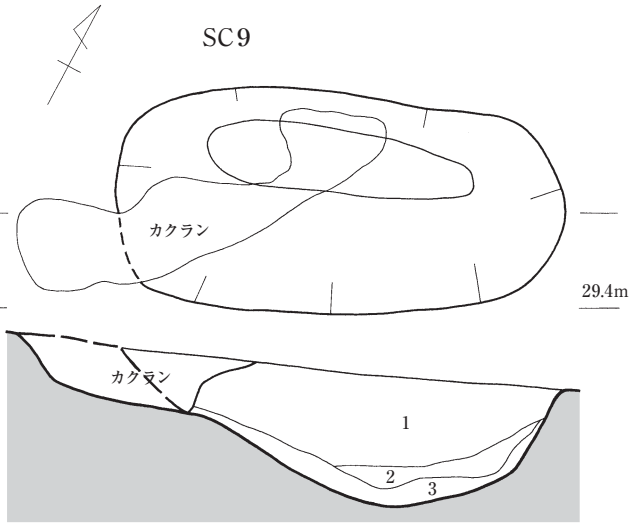




SC5
1　7.5YR4/4褐色土、粘性弱く、固くしまる、小礫（φ1～2㎜）少量含む
2　7.5YR4/4褐色土、1層よりさらに小礫含む
3　色調は1層より若干暗く、粘性弱い、壁の土が混ざる
4　3層と同様、若干小礫多い

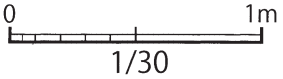
SC4
1　7.5YR3/2黒褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、φ1～2㎜大の小礫、炭化粒を少量含む
2　7.5YR3/2黒褐色砂質土、1層と類似するがやや色調が明るく混ざり気が少ない
3　7.5YR3/4暗褐色砂質土、やや湿り気がありやわらかい、φ2～3㎜大のATブロック少量含む
4　7.5YR3/2黒褐色砂質土、粘性弱くやわらかい、ATが少量混ざる　5　2層と同じだが若干やわらかい
6　4層と同じだがATブロックとともに粘土ブロック少量混ざる　7　7.5YR3/2黒褐色土、粘性弱くやわらかい
8　7.5YR4/4褐色砂質土、粘性ややありやわらかい、AT混ざる　9　7.5YR4/6褐色土、8層と類似するがATの量やや多め
10　7.5YR3/4暗褐色砂質土、粘性やや強くやわらかい、ATと褐色（7.5YR4/3）粘土ブロックを中量含む
11　7.5YR4/4褐色砂質土、粘性やや強くやわらかい　12　7.5YR4/6褐色砂質土、粘性やや強くしまりあり、粘土ブロック少量含む
13　7.5YR4/4褐色粘質土、粘性強くしまりあり、AT、粘土ブロック含む



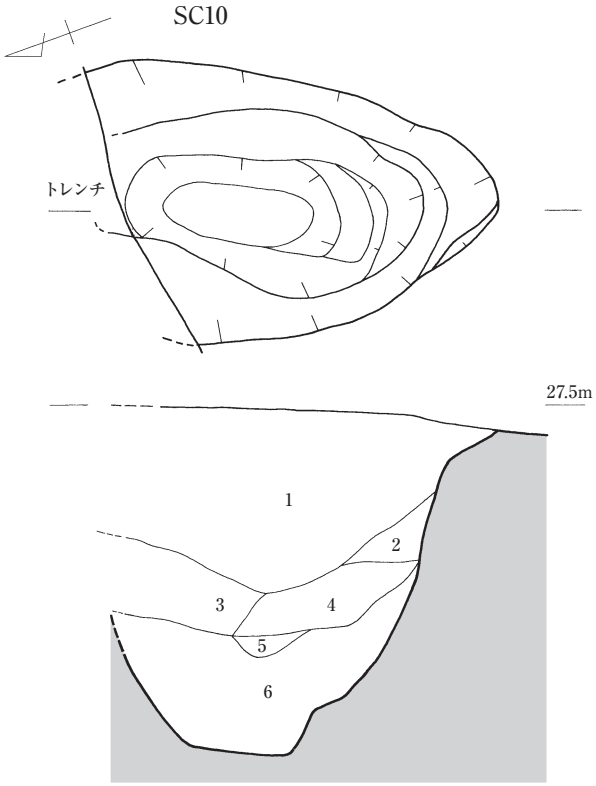


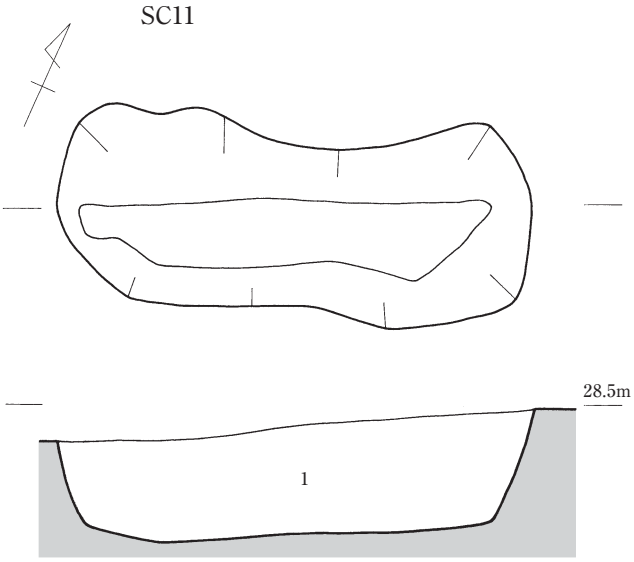
SC9
1　10YR3/4暗褐色砂質土、粘性ややあり、しまりあり褐色（10YR4/6）を少量含む
2　7.5YR3/4暗褐色砂質土、粘性弱くやわらかい。
3　10YR4/4褐色粘質土、粘性やや弱くやわらかい、地山（Ⅷ層）と類似するが粘性弱い

SC6
1　7.5YR3/3暗褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、炭化物・褐色（10YR4/6）ブロックを少量含む
2　7.5YR4/4褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、混ざり気の少ない層、下にいくにつれ、やや色調が暗くなる
3　10YR4/6褐色砂質土、粘性ややありしまりあり、4層より若干色調明るい
4　7.5YR4/4褐色砂質土、粘性弱くややしまり弱い、褐色（10YR4/6）土が少量混ざる
5　7.5YR3/4暗褐色砂質土、やや湿り気あり、しまりあり、ATブロック（φ1～5㎜）を少量含む
6　7.5YR4/4褐色砂質土、4層と類似するがATブロック（φ3～5㎜）が中量含まれる
7　7.5YR4/4褐色砂質土、粘性やや強くしまりあり
8　10YR4/6褐色粘質土、地山（Ⅷ層）の土と埋土が混ざったものか、粘性が地山（Ⅷ層）より弱い



第67図　陥し穴状土坑実測図（2）

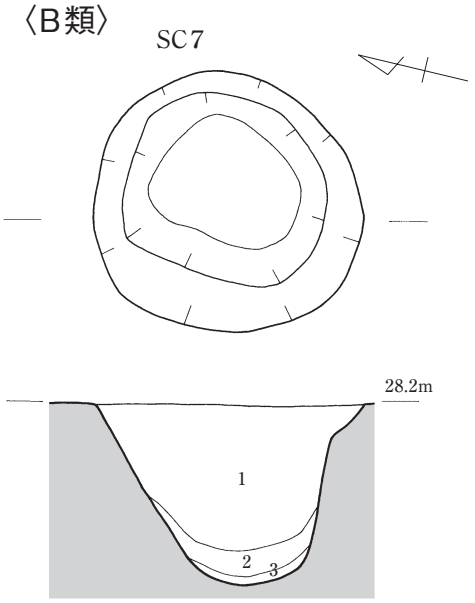


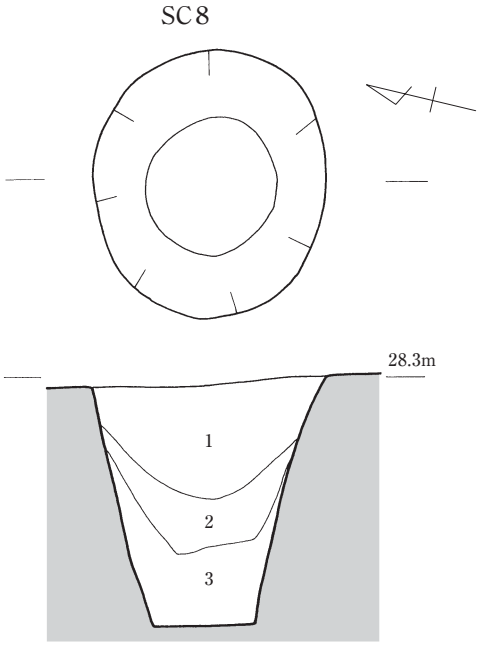


SC11
1　7.5YR5/8明褐色砂質土、粘性ややあり、しまりあり、10YR5/8、黄褐色のブロック（φ5～50㎜）を含む

SC10
1　7.5YR3/4暗褐色土、粘性ややあり、しまりありφ1㎜の黄色い粒が混ざる、下にいくにつれて度合が増す
2　7.5YR4/6褐色土、粘性あり、しまりややあり
3　10YR4/6褐色土、粘性あり、しまりややあり、ATや黒褐色のブロックが少量混ざる
4　10YR4/6褐色土、粘性あり、しまり弱い、2層に灰色の粒（φ2㎜）や砂利（φ5㎜）が少量混ざる
5　10YR4/6褐色土、4層にATのブロックが少量混ざる
6　10YR5/8黄褐色土、粘性あり、しまりない、上部にはATのブロック（φ10㎜）が入るが、下部には10YR5/8の粘質性のブロック（φ20㎜）が入る

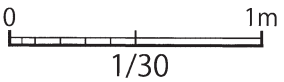
〈B類〉





SC7
1　10YR5/8黄褐色砂質土、粘性あり、しまりある、AT粒子含む
2　7.5YR5/6明褐色砂質土、粘性弱い、しまり弱い、ATや黒褐色のブロックを多く含む
3　10YR5/5黄褐色砂質土、粘性あり、しまり弱い、ATブロックをやや含む

SC8
1　7.5YR4/6褐色砂質土、粘性ややあり、しまりあり、10㎝大の黒褐色ブロックが入る
2　10YR5/8黄褐色砂質土、粘性ややあり、しまりあり、ATが多量に含まれる
3　7.5YR5/6明褐色砂質土、粘性あり、しまり弱い、φ5㎜大のATが少量含まれる



第68図　陥し穴状土坑実測図（3）

ＳＣ６

Ａ－３区の平坦面で検出し、等高線に直交する。平面形態は長軸2.2m×短軸1.4mの楕円形で、断面形態は深さ1.0mのやや台形である。底面の西側に深さ10cmほどの窪みがあり、床に20cm大の礫が４個出土した。埋土中部に第Ⅵ層(ＡＴ）を含む。

ＳＣ９

Ａ－２区の斜面で検出し、等高線と斜めに交わる。上部が攪乱で一部削平されている。平面形態は長軸1.8m×短軸0.9mの楕円形で、断面形態は深さ0.5mのやや逆三角形である。

ＳＣ10

1次調査時にＡ－３区のＢ８Ｔの断面で検出し、等高線に直交する。平面形態は短軸1.1mの楕円形で、断面形態は深さ1.4mの逆三角形である。最大規模の1つである。埋土中部から下部に第Ⅵ層（ＡＴ）を含む。

ＳＣ11

Ａ－３区の平坦面で検出し、等高線に直交する。平面形態は長軸1.9m×短軸0.7mの楕円形で、断面形態は深さ0.5mの長方形である。

＜Ｂ類＞（第68図）

ＳＣ７

Ａ－３区の平坦面で検出し、ＳＣ８と隣接し、その並びは等高線と斜めに交わる。平面形態は径1.1mの円形で、断面形態は深さ0.7mの頂点が丸みをもつ逆三角形である。埋土全体に第Ⅵ層（ＡＴ）を含む。

ＳＣ８

Ａ－３区の平坦面で検出し、平面形態は径1.1mの円形で、断面形態は深さ1.0mの台形である。埋土中部から下部に第Ⅵ層（ＡＴ）を含む。

11基中10基が斜面地から緩やかな勾配に変わる変換点付近で検出され、東には谷部が存在する。また、近くに他の遺構もないことより、人の活動の気配を感じない、野生動物にとっては格好の活動場所である。そのような場所に狩猟目的の陥し穴が存在することは自然であると思われる。

時期については検出面が表土直下であることより不明確である。しかし、埋土中にＡＴは含まれるものの、アカホヤが含まれないことを考えると、アカホヤ降灰以前、換言すると縄文時代早期以前の可能性が高い。

また、埋土中ではあるものの貝殻条痕文土器が出土していること、谷部の埋没土から縄文時代の石鏃等、狩猟具が多数出土していることを合わせて考えると、縄文時代早期の遺構である可能性が高い。

等高線に対して長軸が直交するもの（７基）、平行に位置するもの（２基）がある。

平面形態、等高線に対する長軸の方向、距離、埋土中のＡＴの有無で分類すると、ＳＣ２とＳＣ３、ＳＣ４とＳＣ６、ＳＣ７とＳＣ８はそれぞれ同類でほぼ同時期に存在したのではないかと考えている。また、等高線に対して長軸が直交し、かつ単独であるものが５基と多い。（ＳＣ1・5・9・10・11）

２　その他の土坑（ＳＣ　第69図）

ＳＣ18

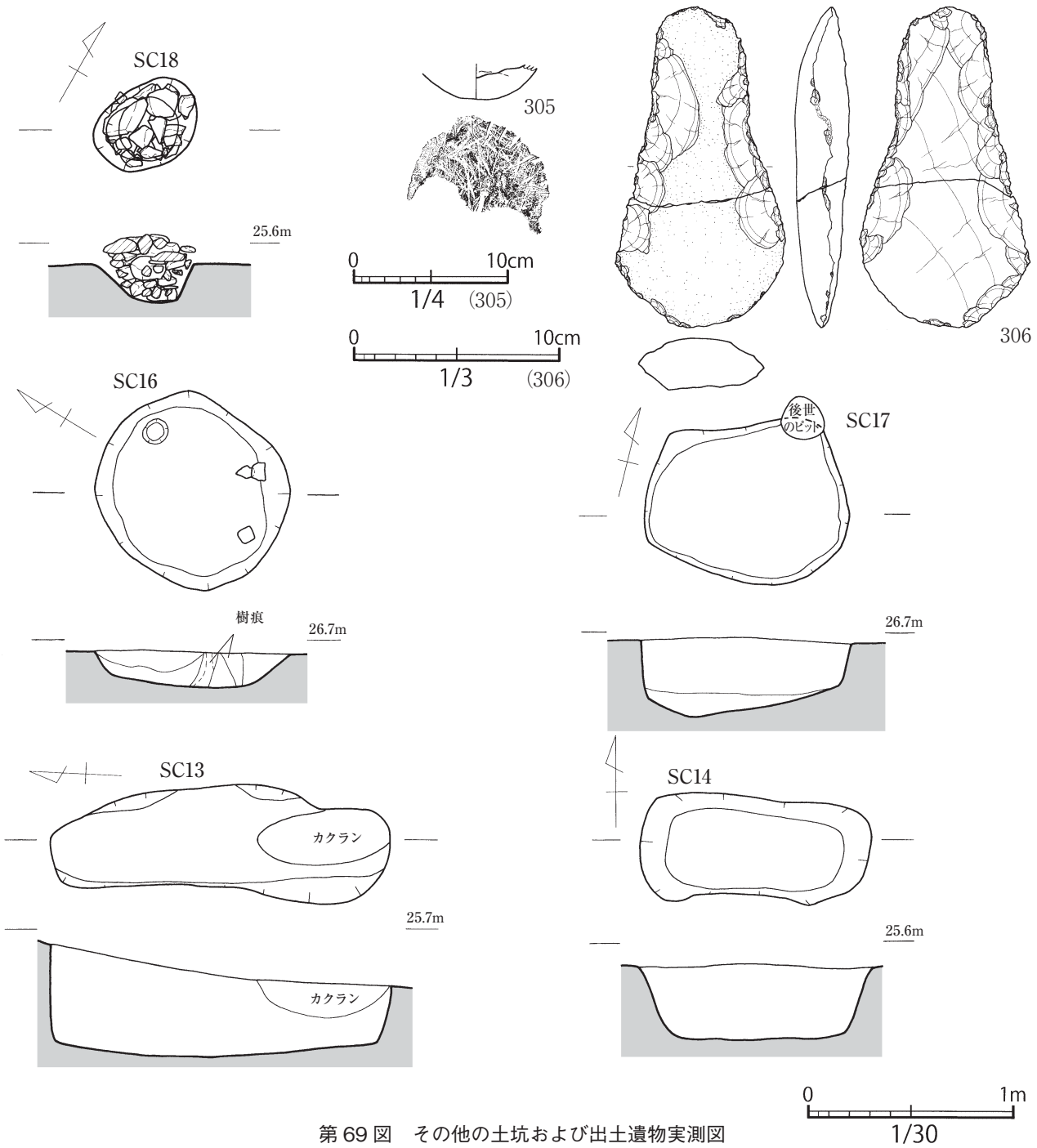
Ｃ－３区、第Ⅱ層で検出。検出当初は縄文時代早期の集石遺構として考えていたが、調査を進めると土坑の中の破砕礫に混じって板状の礫や折損部の磨滅が少ない折れた石斧306、土師器の底部305等が出土した。古墳時代以降に集石遺構や散礫の礫を土坑に入れる際に、石斧や土師器が入り込んだとものと考えられる。

・ＳＣ18出土遺物

305は甕の底部で、底面に工具の痕が顕著に残る。306は打製石斧で表面に自然面を残し、両端を剥離し基部にかけて細くなる。

ＳＣ13・14

Ｂ－Ｐ区の表土直下第Ⅳ層で検出。埋土中に炭化種実を多量に含むが、同定はできていない。



第 69 図　その他の土坑および出土遺物実測図

第27表　遺構内出土土器観察表

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様 外面	手法・調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	備考
304	深鉢	胴部	SC3		斜方向の条痕文	条痕後に丁寧なナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR5/3)	2.5㎜以下の灰色粒、微細な光沢粒を含む	内面：黒変
305	甕	底部	SC18		タタキ後にナデ	指押さえ後にナデ	淡黄 (2.5Y8/4)	灰白 (2.5Y8/1)	1~3㎜の赤褐・黒褐色粒を多く含む	内面：一部黒斑

第28表　遺構内出土石器観察表

No.	器　種	石　材	出土地点	計測値 最大長（cm）	計測値 最大幅（cm）	計測値 最大厚（cm）	計測値 重　量（g）	備考
306	打製石斧	砂岩	SC18	15.4	8.2	2.6	317.0	

３　包含層出土石器（第70～75図）

包含層出土石器のほとんどが谷部埋没土からの出土であるので、時期が不明確である。ここでは、器種や石材等を中心に分類し、その詳細を述べる。

打製石鏃

307～333は打製石鏃である。未製品３点を含め、遺跡内で42点が出土している。谷部埋没土からの出土が多い中、307・308・312は第Ⅲ層、縄文時代早期の層から出土している。石材別では、姫島産黒曜石４点、チャート29点、ホルンフェルス11点、緑色片岩１点である。

次の特徴をもとに分類すると、
Ａ類…平面形態が二等辺三角形のもの
Ｂ類…平面形態が正三角形のもの
Ｃ類…平面形態が砲弾型・五角形のもの
１類…基部抉りあり
２類…基部抉りなし

Ａ１類…308～321	を含め遺跡内合計	２１点
Ａ２類…307・322～324	合計	６点
Ｂ１類…325～328	合計	９点
Ｃ１類…329～331	合計	３点

Ａ１類の307・308は大きさや石材、器面の厚さから他の石鏃とは異なる。313～318は抉りの角度がほぼ直角で、全ていずれかの部位が欠損している。319・320は脚部の先端が平坦面を作る。329・330は砲弾型で抉りが半円形である。331は五角形である。

石錐

334・335はチャート製の石錐である。全面に加工を施し、丁寧なつくりである。

異形石器

336は用途不明の石器である。石材はチャートで、細かい剥離を全周に巡らす。

石匙

337・338は石匙である。石材は337は流紋岩、338はホルンフェルスである。

スクレイパー（１）・剥片（１）・石核

339～341はスクレイパーである。石材は339がチャート、340・341はホルンフェルスである。340は横長剥片、341は縦長剥片を素材としている。

342・345～347は二次加工剥片である。石材は342がサヌカイト、345～347はホルンフェルスである。石材のサヌカイトは342と後述の366の２点のみの出土である。343・344はホルンフェルス製の剥片である。

348～354は石核である。石材は、348はホルンフェルス、349・350・352がチャート、351・353は黒曜石、354は流紋岩である。351・352は横方向、350・353は縦方向の剥離が見られる。348・349の剥離は不定方向で規格性が認められない。

礫器

355はホルンフェルス製の礫器である。裏面より粗い剥離を行った後、表面から調整を行い刃部を作り出している。

スクレイパー（２）・石鎌

356～363は円礫を素材とするスクレイパーで自然面を残す。

356・357・359はラウンドスクレイパーである。扁平な円礫の全周を巡るように、両面から加工を行い刃部を作り出している。両面に自然面を残す。石材は356は砂岩、357はホルンフェルス、359は頁岩である。358・360は扁平な剥片を素材としており、360は砂岩で、上縁は裏面から、下縁は表面からのみの加工で刃部を作り出している。

361～363はエンドスクレイパーである。石材は、361は砂岩、362・363はホルンフェルスである。

364・365は緑色片岩製である。この石材で石器として出土したものはこの２点だけである。表と裏の２方向からの調整により側面に刃部を作る。石鎌か。366はサヌカイト製で横長剥片を素材とし、

左側面上部と下部に刃部をもつ。

打製石斧

367 ～ 372は打製石斧である。遺跡内で19点が出土しており、全て砂岩製である。その特徴から次の観点で分類する。

Ａ類…表裏どちらかに自然面を残すもの
Ｂ類…自然面を残さないもの
１類…基部にかけて細くなるもの
２類…抉りをもつもの
３類…草鞋形のもの
４類…刃部を細くするもの

Ａ１類…306・367	含め遺跡内	合計４点
Ａ２類…368・369・372		合計９点
Ａ３類…371		合計２点
Ｂ１類…370		合計１点
Ｂ３類…図化なし		合計１点
Ｂ４類…図化なし		合計２点

表裏どちらかに自然面を残すものの割合が多く、その特徴はスクレイパー（２）や剥片（２）と類似する。

剥片（２）

373 ～ 379の石材は砂岩で、礫の自然面を背面とする剥片を素材とし、打点と反対側面に鋭利な刃部を設けているものである。谷部埋没土を中心に比較的多く出土している。

373は縦長剥片を素材とし、側面に二次加工が見られる。374は幅広剥片を利用し、下縁に微細な剥離が見られる。375 ～ 379は横長剥片を利用し、刃部に使用痕らしき微細な剥離が確認できる。

石錘

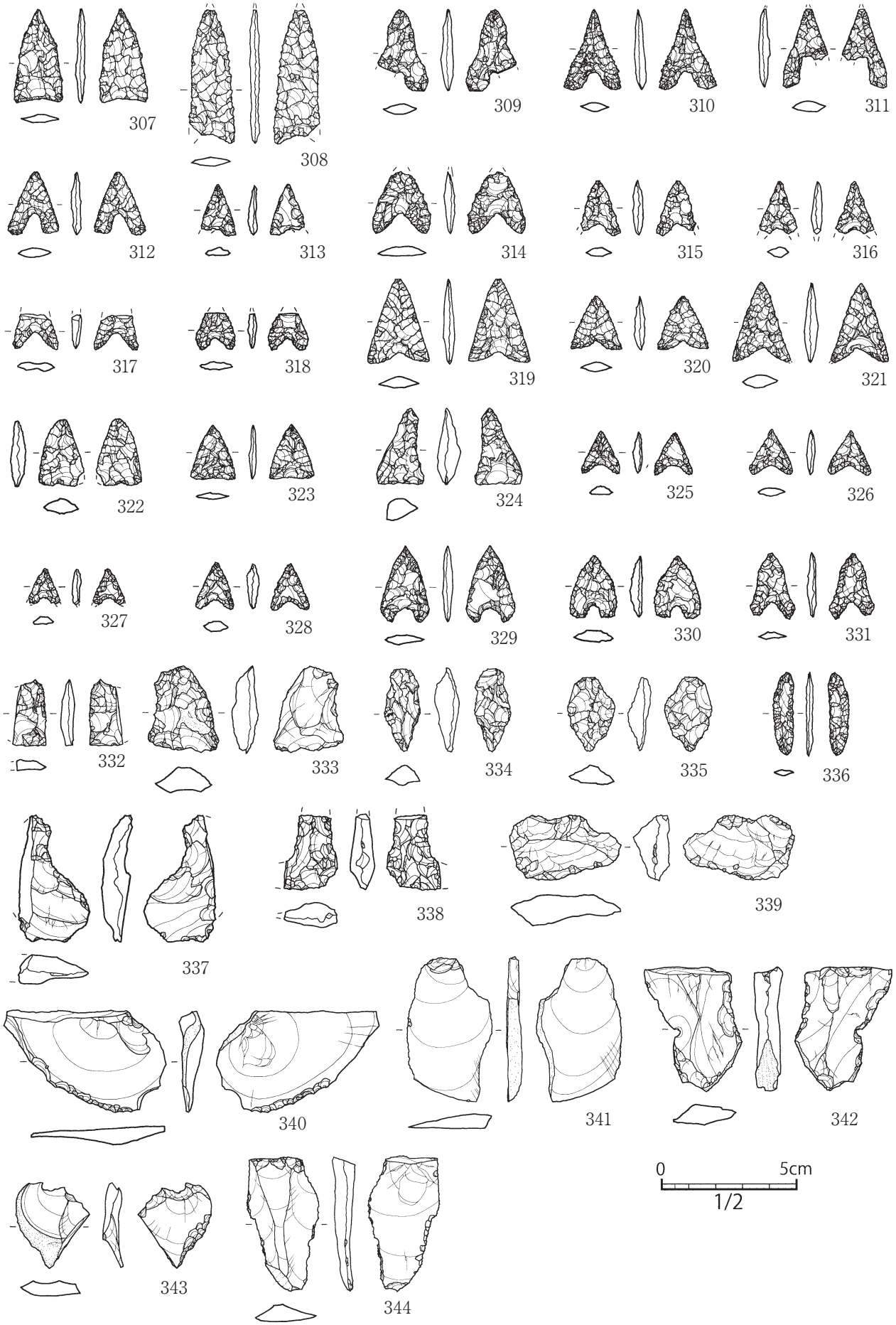
380 ～ 389は石錘である。ほとんどが谷部の埋没土から出土しており、基本的には扁平な円礫を素材とし、長軸の両端を打ち欠いたものである。遺跡内で合計98点出土している。石材別では、砂岩80点、ホルンフェルス９点、尾鈴山酸性岩類６点、頁岩３点で、砂岩が全体の82％を占める。380・381は裏面を複数回剥離した後、両端を打ち欠いている。382は上端にもやや小さめの打ち欠きをもつ。また、388・389のように自然の窪みを利用してその対称となる場所に打ち欠きを入れるものがある。図化していないが、円礫の両端が窪んでいるものを石錘として利用していた可能性があるものも10点出土している。

敲石

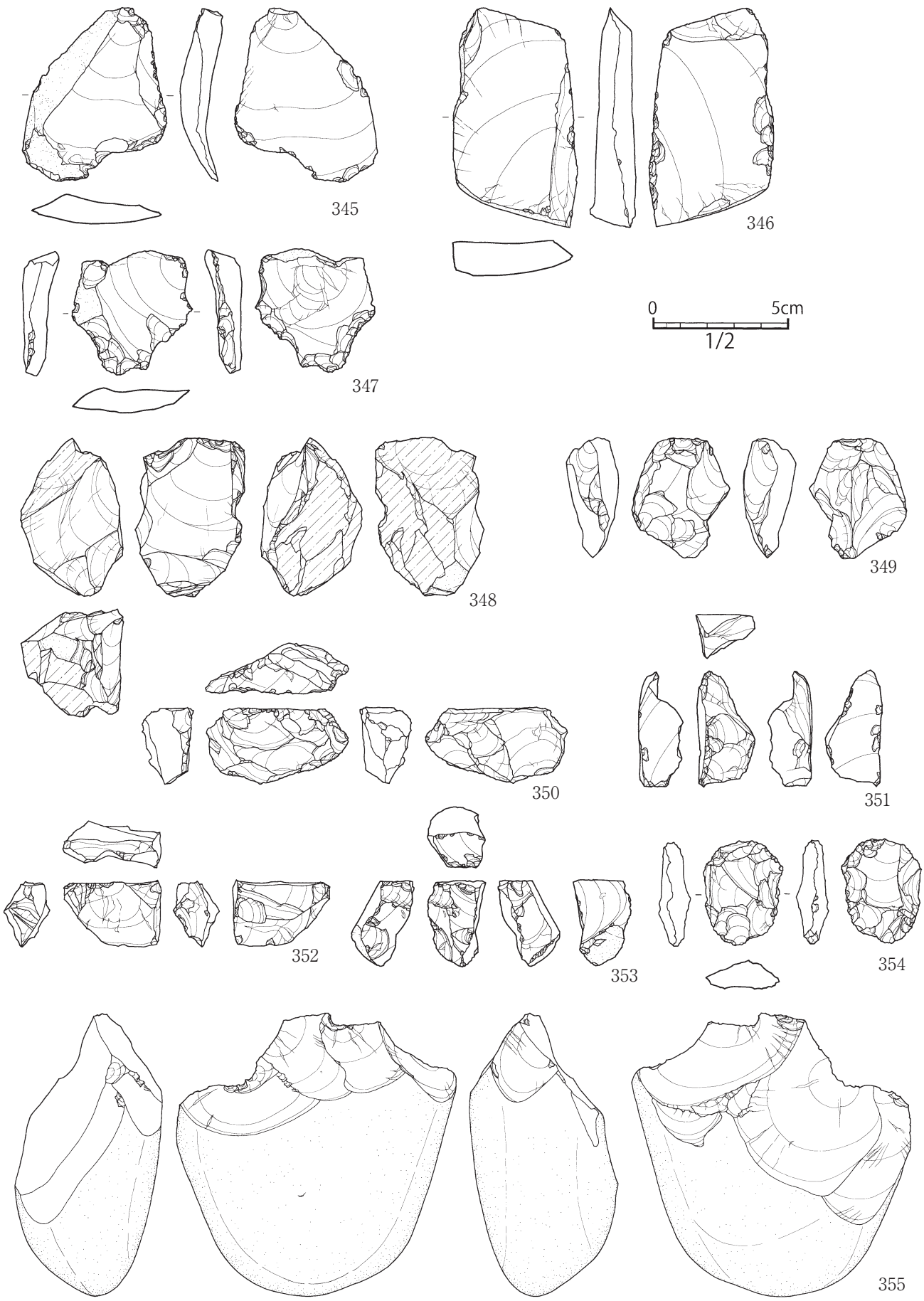
石材はいずれも砂岩である。390は亜円礫で表面・裏面に著しい敲打痕が見られる。391・395・398は磨石からの転用か。396は砥石からの転用か。392は表面と上下部に、393は下部から表面中央にかけて、394は末端と側面に著しい敲打痕が見られる。395は円礫の末端に敲打痕が見られる。397は台石の可能性もある。

その他

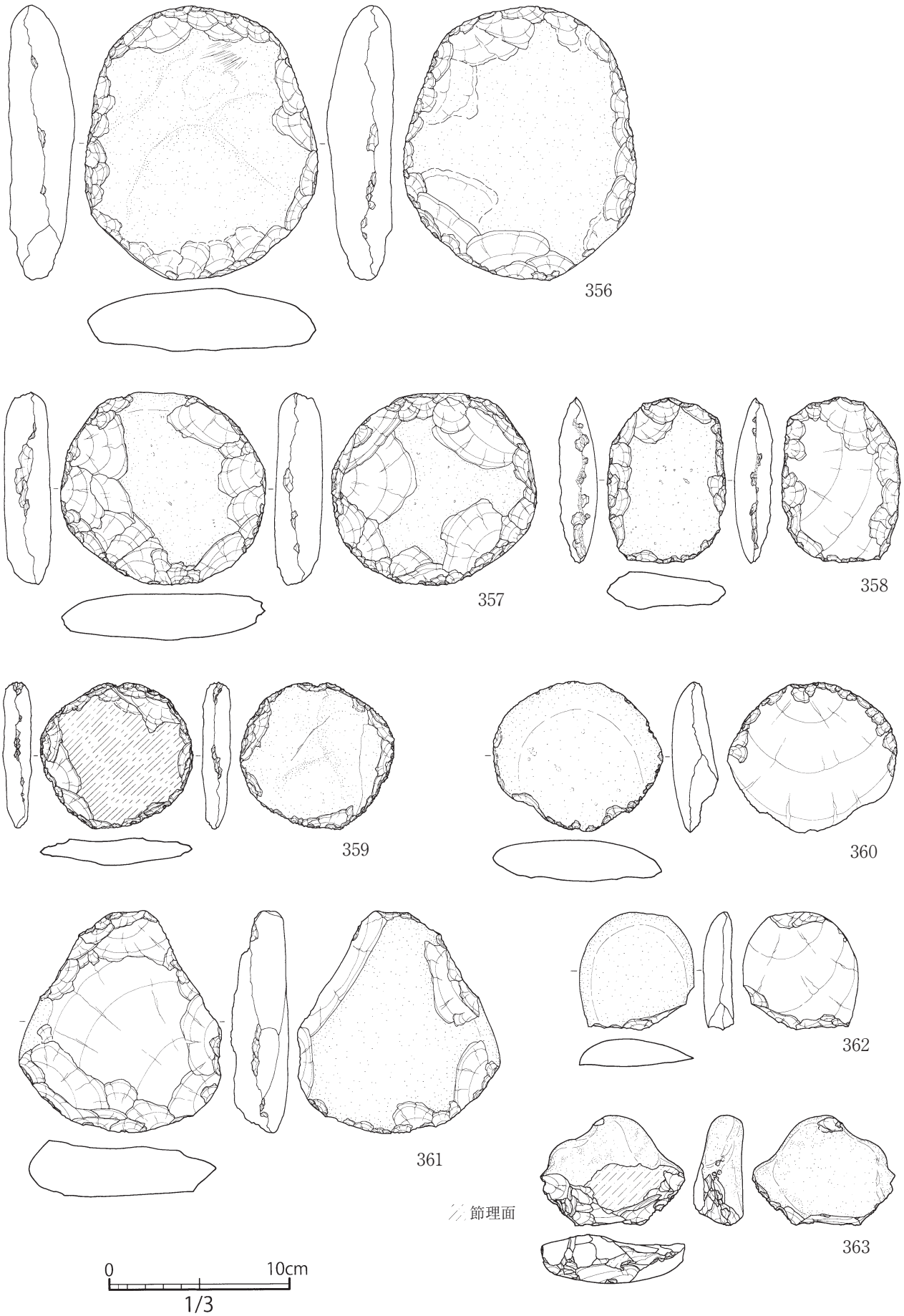
399はホルンフェルス製の石庖丁で、両側面に抉りをもち、下部の両面に研磨を施し刃部を作る。表面に２箇所貫通していない穿孔を有する。400は緑色片岩製の磨製石鏃で、擦痕が顕著に見られる。なお、右脚を欠損している。石庖丁と磨製石鏃はそれぞれ１点のみ出土している。401 ～ 403は砥石で、404 ～ 406は火打石である。404は石英製、405はチャート製で、表面に鉄錆が付着するが使用時のものであるかは不明。406は大田井産チャート製で使用時のつぶれが明瞭である。



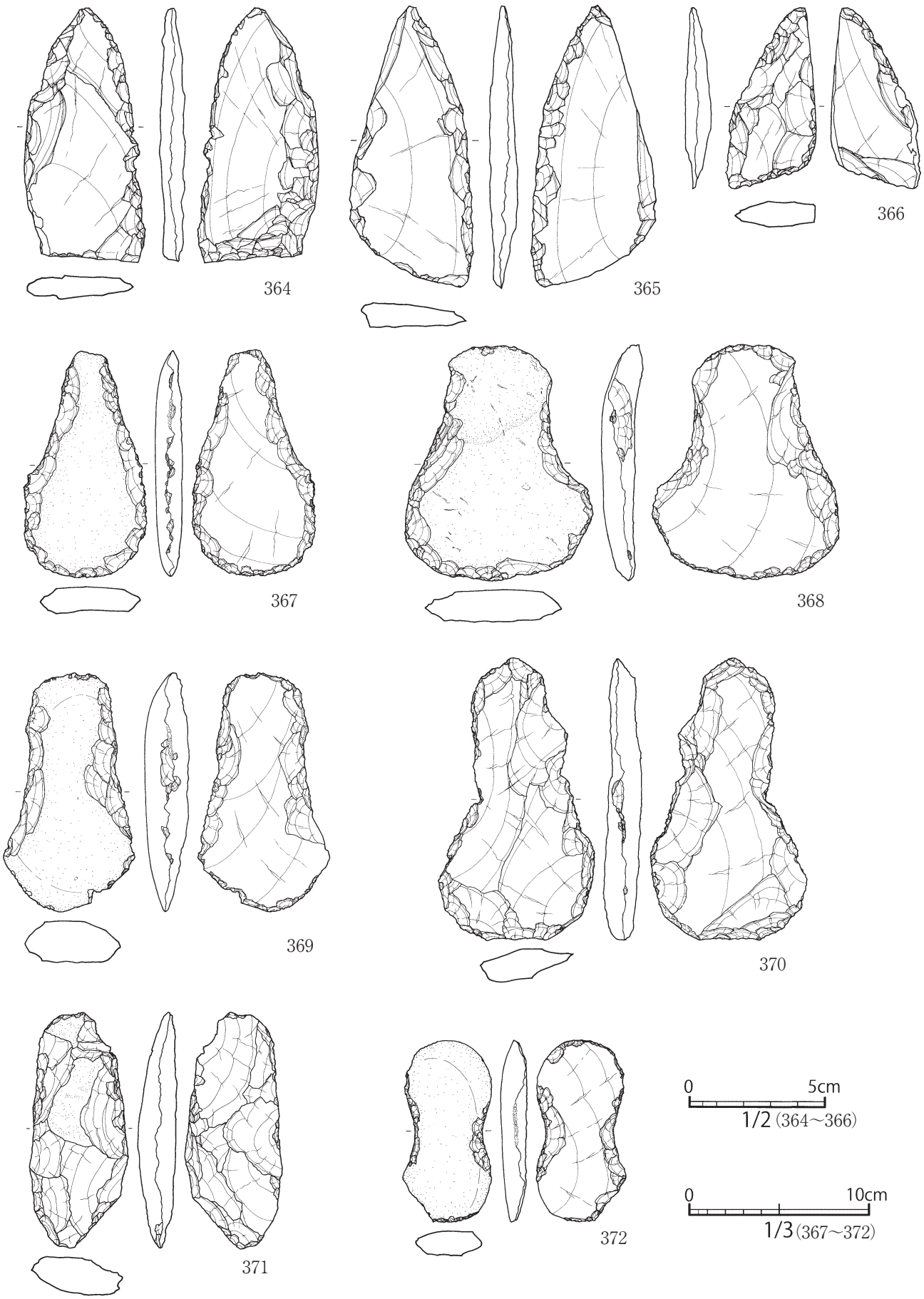
第 70 図　包含層出土石器実測図（1）



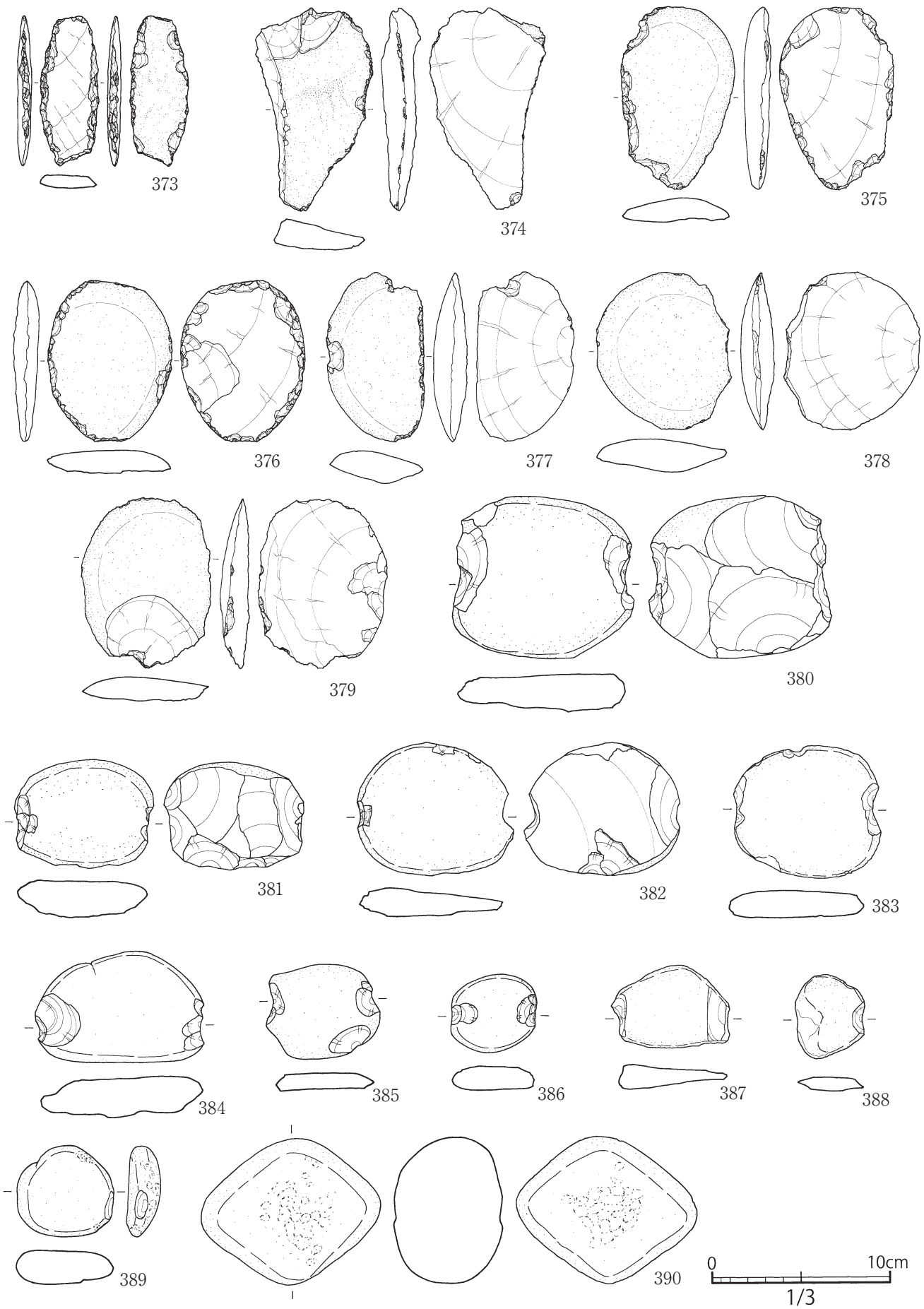
第 71 図　包含層出土石器実測図（2）



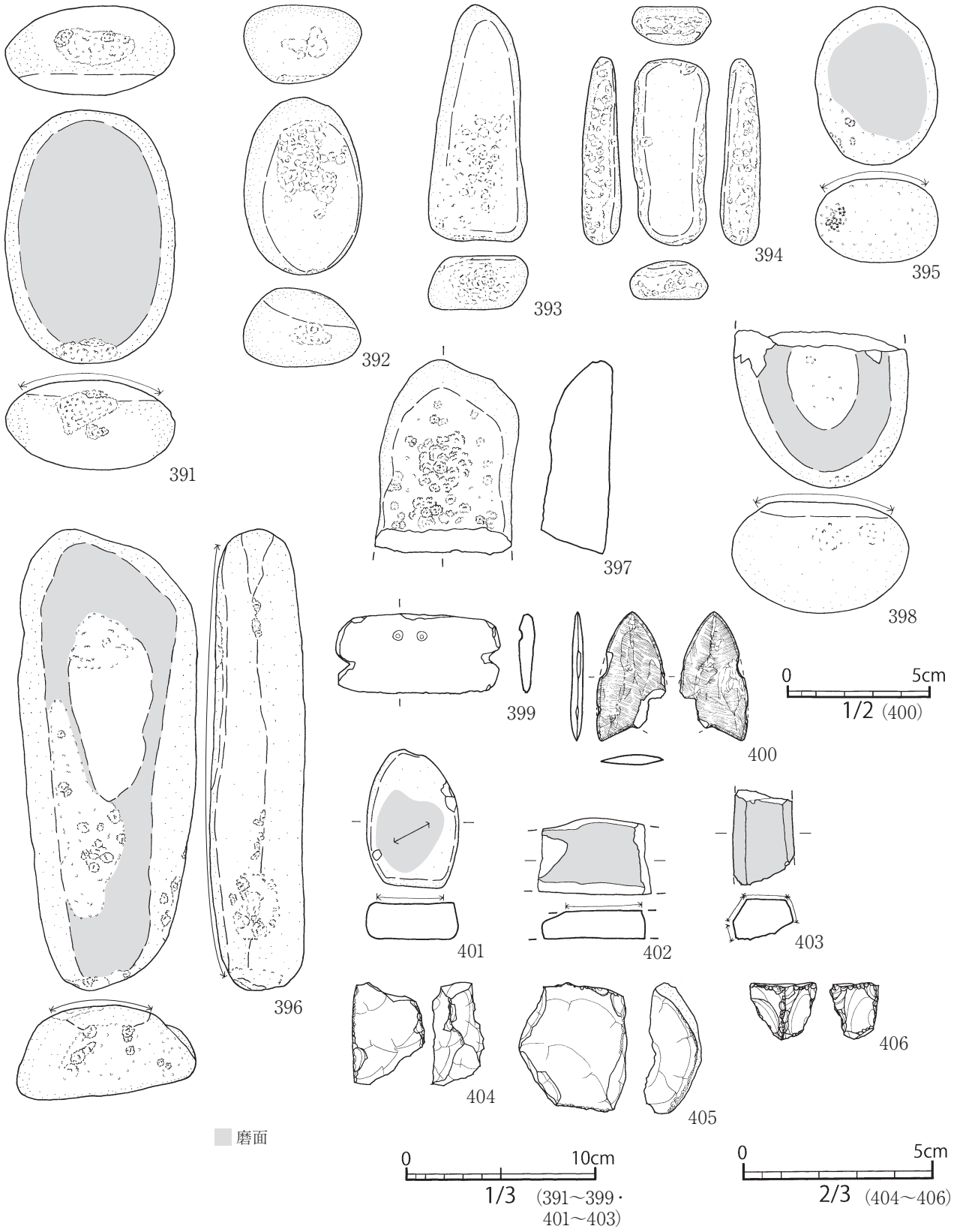
第 72 図　包含層出土石器実測図（3）



第 73 図　包含層出土石器実測図（4）



第 74 図　包含層出土石器実測図（5）



第 75 図　包含層出土石器実測図（6）

第29表　包含層出土石器観察表（1）

No.	器　種	石　材	出土地点	計測値				備考
				最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	
307	打製石鏃	ホルンフェルス	B	3.3	2.0	0.4	2.0	
308	打製石鏃	ホルンフェルス	C-4	4.9	1.7	0.4	3.3	
309	打製石鏃	チャート	C-2	3.0	1.8	0.5	1.7	一部欠損
310	打製石鏃	チャート	C-3	2.9	2.1	0.5	1.4	
311	打製石鏃	チャート	C-4	2.9	1.6	0.4	1.1	一部欠損
312	打製石鏃	チャート	C-2	2.3	1.5	0.3	1.0	
313	打製石鏃	黒曜石	B-7	1.9	1.3	0.3	0.4	一部欠損
314	打製石鏃	黒曜石	B-7	2.3	2.1	0.4	1.3	一部欠損
315	打製石鏃	チャート	C-2	2.0	1.4	0.3	0.6	一部欠損
316	打製石鏃	チャート	C-3	1.9	1.4	0.4	0.8	一部欠損
317	打製石鏃	チャート	B-7	1.3	1.6	0.4	0.6	一部欠損
318	打製石鏃	チャート	C-2	1.3	1.4	0.3	0.5	一部欠損
319	打製石鏃	チャート	B	2.2	2.0	0.5	2.4	
320	打製石鏃	黒曜石	C-1	1.9	1.8	0.4	0.8	
321	打製石鏃	黒曜石	C-1	2.9	2.1	0.5	1.8	
322	打製石鏃	チャート	SA3b	2.5	1.6	0.6	1.8	一部欠損
323	打製石鏃	チャート	C-4	2.0	1.6	0.3	0.7	
324	打製石鏃	チャート	B-7	2.9	1.7	0.8	2.7	
325	打製石鏃	チャート	B-7	1.5	1.4	0.3	0.4	
326	打製石鏃	チャート	C-3	1.6	1.6	0.3	0.5	
327	打製石鏃	ホルンフェルス	B-7	1.3	1.2	0.3	0.3	一部欠損
328	打製石鏃	ホルンフェルス	B-7	1.7	1.4	0.4	0.6	
329	打製石鏃	チャート	C-1	2.8	1.8	0.4	1.3	
330	打製石鏃	ホルンフェルス	B-5	2.3	1.7	0.5	1.3	
331	打製石鏃	チャート	C-3	2.4	1.6	0.3	0.7	
332	打製石鏃	チャート	SA10	2.4	1.2	0.4	1.7	未製品
333	打製石鏃	チャート	B-7	3.1	2.1	1.0	6.7	
	打製石鏃	チャート	C-3	1.3	1.5	0.5	1.2	図化なし
	打製石鏃	チャート	C-4	1.5	1.7	0.3	1.0	図化なし
	打製石鏃	ホルンフェルス	B-7	2.2	1.3	0.4	0.9	図化なし
	打製石鏃	チャート	B-7	1.7	1.1	0.3	0.4	図化なし
	打製石鏃	ホルンフェルス	B-7	2.2	1.1	0.3	0.4	図化なし、未製品
	打製石鏃	ホルンフェルス	B	3.9	2.6	1.1	8.9	図化なし
	打製石鏃	チャート	B-7	1.8	1.7	0.3	0.7	図化なし
	打製石鏃	チャート	B-7	2.7	1.5	0.7	2.2	図化なし
	打製石鏃	チャート	B-7	1.9	1.2	0.3	0.7	図化なし
	打製石鏃	チャート	B-7	2.8	1.8	0.6	2.2	図化なし
	打製石鏃	チャート	B-7	1.4	1.4	0.2	0.3	図化なし
	打製石鏃	チャート	C10tr	1.7	1.4	0.4	0.7	図化なし
	打製石鏃	チャート	C	2.3	1.6	0.5	1.4	図化なし
	打製石鏃	ホルンフェルス	B	1.6	1.4	0.3	0.5	図化なし
	打製石鏃	チャート	C-4	2.2	1.5	0.5	1.7	図化なし、未製品
334	石錐	チャート	B-7	3.1	1.3	0.8	2.8	
335	石錐	チャート	B-7	2.8	1.8	0.9	2.8	
336	異形石器	チャート	B-5	3.0	0.8	0.3	0.7	
337	石匙	流紋岩	C-4	4.7	2.6	1.0	8.4	一部欠損
338	石匙	ホルンフェルス	B-7	2.8	2.0	0.9	4.7	一部欠損
339	スクレイパー	チャート	C-4	2.4	4.2	1.4	10.2	
340	スクレイパー	ホルンフェルス	C-1	3.8	6.0	0.9	16.9	
341	スクレイパー	ホルンフェルス	SA1	5.5	3.2	0.6	11.3	
342	二次加工剥片	サヌカイト	SA4	4.6	3.6	0.8	13.7	
343	剥片	ホルンフェルス	SA4	3.1	2.7	0.5	4.7	
344	剥片	ホルンフェルス	C-4	5.0	2.6	0.6	9.0	
345	二次加工剥片	ホルンフェルス	C-2	6.4	5.3	1.1	31.4	
346	二次加工剥片	ホルンフェルス	C-4	8.2	4.6	1.3	80.0	

第30表　包含層出土石器観察表（2）

No.	器　種	石　材	出土地点	計測値				備考
				最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	
347	二次加工剥片	ホルンフェルス	B-7	4.6	4.6	1.0	22.0	
348	石核	ホルンフェルス	SA4	5.9	3.7	4.0	81.4	
349	石核	チャート	SA4	3.7	3.6	2.8	28.0	
350	石核	チャート	B-7	5.3	2.8	1.9	22.6	
351	石核	黒曜石	C-1	4.3	2.2	1.6	11.4	
352	石核	チャート	C-4	3.6	2.5	1.7	13.5	
353	石核	黒曜石	C-4	3.2	2.2	2.3	12.7	
354	石核	流紋岩	C-4	3.9	2.9	1.2	12.1	
355	礫器	ホルンフェルス	B	10.6	10.4	5.5	622.0	
356	スクレイパー	砂岩	C-4	15.2	12.9	3.7	884.0	
357	スクレイパー	ホルンフェルス	C-3	10.6	11.3	2.6	401.0	
358	スクレイパー	砂岩	C-2	9.1	6.5	2.1	154.0	
359	スクレイパー	頁岩	C-1	8.4	8.1	1.6	110.0	
360	スクレイパー	尾鈴山酸性岩類	C-2	9.4	8.3	2.6	194.0	
361	スクレイパー	砂岩	B-1	12.2	11.1	3.2	481.0	
362	スクレイパー	ホルンフェルス	C8tr	6.5	6.3	1.7	92.0	
363	スクレイパー	ホルンフェルス	C-3	7.9	6.1	2.7	144.0	
364	石鎌	緑泥片岩	C-2	9.5	4.5	0.9	41.9	
365	石鎌	緑泥片岩	C-1	10.4	4.7	1.1	51.9	
366	スクレイパー	サヌカイト	B-7	6.7	3.4	0.9	19.7	
367	打製石斧	砂岩	C-4	12.5	6.8	1.5	159.0	
368	打製石斧	砂岩	C-2	13.0	10.4	2.3	285.0	
369	打製石斧	砂岩	A-3	13.2	7.3	2.5	252.0	
370	打製石斧	砂岩	C-4	15.6	8.6	2.1	242.0	
371	打製石斧	砂岩	C-2	13.0	5.4	2.1	149.0	
372	打製石斧	砂岩	C-1	10.0	4.9	1.5	90.0	
	打製石斧	砂岩	C-1	10.2	6.5	1.5	133.0	図化なし
	打製石斧	砂岩	C-1	9.3	6.8	1.2	95.7	図化なし
	打製石斧	砂岩	C-2	9.8	7.4	1.7	125.3	図化なし
	打製石斧	砂岩	C-2	11.8	7.8	1.7	125.3	図化なし
	打製石斧	砂岩	C-2	12.3	8.5	1.8	183.4	図化なし
	打製石斧	砂岩	C-3	11.5	7.3	1.4	157.3	図化なし
	打製石斧	砂岩	C8tr	11.0	5.7	1.7	125.5	図化なし
	打製石斧	砂岩	B	11.3	7.7	1.5	151.3	図化なし
	打製石斧	砂岩	C-1	11.4	5.6	1.4	98.3	図化なし
	打製石斧	砂岩	C-2	9.0	5.0	1.4	65.2	図化なし
	打製石斧	砂岩	B-7	9.4	6.8	1.2	83.6	図化なし
	打製石斧	砂岩	C-1	7.4	6.0	1.3	74.4	図化なし
373	二次加工剥片	砂岩	B	8.4	3.2	0.8	27.1	
374	剥片	砂岩	C-1	11.3	6.5	2.2	111.0	
375	微細剥離ある剥片	砂岩	B-7	10.2	6.3	1.5	114.0	
376	微細剥離ある剥片	砂岩	B-7	9.0	6.9	1.4	107.0	
377	微細剥離ある剥片	砂岩	C-1	9.5	5.4	1.9	102.0	
378	微細剥離ある剥片	砂岩	C-2	8.8	7.6	1.9	133.0	
379	剥片	砂岩	B-7	9.5	7.2	1.7	124.0	
380	石錘	砂岩	C-3	10.2	9.2	2.7	296.1	
381	石錘	砂岩	B-7	7.8	6.2	2.2	145.3	
382	石錘	砂岩	C-3	7.5	8.7	1.6	130.6	
383	石錘	砂岩	B-7	7.4	8.3	1.6	126.1	
384	石錘	尾鈴山酸性岩類	C-2	6.3	9.5	2.3	179.3	
385	石錘	砂岩	B-7	5.3	6.4	1.0	49.8	
386	石錘	砂岩	B-7	4.4	4.9	1.4	43.3	
387	石錘	頁岩	C-3	4.7	6.6	1.4	46.1	
388	石錘	砂岩	B-7	4.8	3.9	0.8	19.8	
389	石錘	砂岩	B-7	5.1	5.5	1.9	69.7	

第31表　包含層出土石器観察表（3）

No.	器　種	石　材	出土地点	計測値				備考
				最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	
	石錘	砂岩	SA9	6.3	6.8	2.5	138.5	図化なし
	石錘	尾鈴山酸性岩類	SA5	5.0	6.2	1.6	75.3	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	9.2	10.2	2.7	296.1	図化なし
	石錘	頁岩	C-3	4.7	6.63	1.4	46.1	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	5.1	5.45	1.9	69.7	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	7.43	8.3	1.6	126.1	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	6.2	7.8	2.2	145.3	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	4.75	3.9	0.78	19.8	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	4.4	4.85	1.35	43.3	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	5.3	6.4	1.0	49.8	図化なし
	石錘	尾鈴山酸性岩類	SA10d	6.2	4.9	1.7	42.5	図化なし
	石錘	砂岩	SA10a	7.0	6.5	1.8	132.1	図化なし
	石錘	砂岩	C-1	7.4	6.4	1.8	134.0	図化なし
	石錘	砂岩	C-1	5.7	4.1	0.9	37.9	図化なし
	石錘	ホルンフェルス	C-1	5.9	6.0	1.7	95.7	図化なし
	石錘	砂岩	C-1	5.8	5.8	1.7	77.1	図化なし
	石錘	砂岩	C-1	5.8	5.4	0.9	50.9	図化なし
	石錘	砂岩	C-1	5.1	5.4	1.4	62.0	図化なし
	石錘	砂岩	C-2	6.2	5.0	1.4	82.2	図化なし
	石錘	砂岩	C-2	7.8	5.5	1.8	129.3	図化なし
	石錘	砂岩	C-2	8.05	7.4	1.7	142.1	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	5.4	5.2	0.9	50.0	図化なし
	石錘	ホルンフェルス	C-2	5.7	5.9	1.2	78.4	図化なし
	石錘	ホルンフェルス	C-3	6.4	5.3	1.5	88.5	図化なし
	石錘	尾鈴山酸性岩類	C-3	6.4	5.8	1.65	106.4	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	7.0	7.1	2.7	184.7	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	6.4	5.5	1.85	97.0	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	5.7	5.3	1.2	50.8	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	7.3	6.0	1.6	82.6	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	砂岩	C-3	7.4	7.8	2.05	194.9	図化なし
	石錘	尾鈴山酸性岩類	C-3	7.8	7.1	2.0	182.4	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	7.6	5.75	2.4	159.4	図化なし
	石錘	砂岩	C-4	7.05	6.0	1.45	83.0	図化なし
	石錘	砂岩	C-4	7.1	6.0	1.5	111.0	図化なし
	石錘	砂岩	C-4	7.0	6.9	1.25	117.1	図化なし
	石錘	砂岩	C-4	8.4	7.5	2.2	180.2	図化なし
	石錘	頁岩	C10tr	7.55	5.65	2.2	146.6	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	6.0	5.2	1.5	85.9	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	7.1	5.0	1.25	84.4	図化なし
	石錘	ホルンフェルス	B-7	7.3	4.7	1.5	87.7	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	4.55	3.4	0.5	18.5	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	頁岩	B-7	8.5	7.0	1.8	172.9	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	7.3	6.0	1.4	95.7	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	8.05	5.4	1.35	78.6	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	6.1	4.8	1.4	60.4	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	7.5	6.15	2.4	173.0	図化なし
	石錘	ホルンフェルス	B-7	6.6	5.45	1.2	77.5	図化なし
	石錘	ホルンフェルス	B-7	6.7	5.0	1.6	94.0	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	6.45	4.55	0.9	48.0	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	7.25	5.7	1.9	111.1	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	5.8	3.5	1.5	47.3	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	5.7	6.0	1.3	73.2	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	8.0	6.35	1.9	142.2	図化なし

第32表　包含層出土石器観察表（4）

No.	器　種	石　材	出土地点	計測値				備考
				最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	
	石錘	砂岩	B-7	6.4	5.2	1.6	71.5	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	砂岩	B-7	7.5	5.1	1.75	118.8	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	8.55	8.6	1.75	195.7	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	7.3	5.1	1.7	97.2	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	尾鈴山酸性岩類	B-7	6.95	5.7	1.45	70.5	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	8.55	5.8	1.35	109.5	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	6.1	5.3	1.35	71.8	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	8.0	7.0	2.1	143.4	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	7.2	7.3	2.25	182.1	図化なし
	石錘	砂岩	B-7	6.7	5.1	0.6	31.2	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	ホルンフェルス	B-7	4.7	4.1	1.2	37.4	図化なし
	石錘	砂岩	B	7.2	5.0	1.15	67.1	図化なし
	石錘	ホルンフェルス	B	4.8	4.0	0.5	18.7	図化なし
	石錘	砂岩	B	5.2	4.2	0.6	27.6	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	砂岩	B	5.3	4.5	0.6	33.0	図化なし
	石錘	砂岩	B4tr	5.2	4.6	0.9	39.2	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	砂岩	C-1	7.0	6.8	1.6	127.7	図化なし
	石錘	砂岩	C-1	6.0	6.0	1.9	106.9	図化なし
	石錘	砂岩	C-1	8.7	7.9	2.0	192.3	図化なし
	石錘	砂岩	C-1	8.3	6.5	1.45	136.7	図化なし
	石錘	砂岩	C-2	7.0	6.3	0.8	71.1	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	砂岩	C-2	6.0	4.2	1.2	45.4	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	6.2	5.8	1.85	94.1	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	7.6	6.3	2.05	142.0	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	砂岩	C-4	6.2	5.6	1.7	94.3	図化なし
	石錘	砂岩	C-4	6.9	6.5	1.4	112.9	図化なし
	石錘	砂岩	C-4	5.7	5.3	1.3	59.7	図化なし 打欠をせず、自然石利用
	石錘	砂岩	C-4	7.6	7.1	1.9	147.7	図化なし
	石錘	砂岩	C-4	5.9	5.4	1.9	103.6	図化なし
	石錘	砂岩	C-4	6.7	5.4	1.5	87.3	図化なし
	石錘	砂岩	C-3	7.5	6.2	1.8	104.0	図化なし
	石錘	砂岩	SH281	6.5	6.5	1.8	124.1	図化なし
390	敲石	砂岩	C-2	10.1	8.3	6.1	621.8	
391	敲石	尾鈴山酸性岩類	C-2	13.4	9.0	4.7	889.0	磨石からの転用か
392	敲石	砂岩	B-1	9.4	6.2	4.2	316.6	
393	敲石	砂岩	C-3	12.6	5.2	2.9	289.9	
394	敲石	砂岩	C-2	10.0	4.1	2.0	117.4	
395	敲石	砂岩	C-2	8.4	6.5	4.4	353.7	磨石からの転用か
396	敲石	砂岩	C-3	24.4	9.5	5.0	1590.1	
397	敲石	砂岩	B-1	10.3	7.6	4.0	440.3	台石の可能性あり
398	敲石	尾鈴山酸性岩類	SC18	(6.3)	9.3	5.9	662.4	一部破損、 磨石からの転用か
399	石庖丁	ホルンフェルス	C-1	8.7	4.3	0.8	49.8	
400	磨製石鏃	緑色片岩	B-7	4.5	2.4	0.4	4.7	
401	砥石	ホルンフェルス	C-3	7.4	4.9	2.0	132.1	
402	砥石	ホルンフェルス	B-7	6.0	4.1	1.5	68.8	
403	砥石	凝灰岩	B4tr	5.0	3.3	2.5	68.9	
404	火打石	石英	C-2	2.7	1.9	1.4	7.7	
405	火打石	チャート	A-3	3.4	2.9	1.5	14.0	
406	火打石	チャート	A-3	1.5	1.6	1.3	3.2	

第33表　谷部遺物包含層別主な石器出土量

			2層		3層		その他		合計	
			点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
打製石鏃		出土量	14点	17.0g	18点	18.0g	11点	31.3g	43点	66.3g
		総量比	33%	26%	42%	27%	25%	47%		
打製石斧		出土量	9点	1167.3g	6点	899.2g	4点	845.8g	19点	2912.3g
		総量比	47%	40%	32%	31%	21%	29%		
石錘		出土量	40点	3656.0g	41点	4291.0g	17点	1661.0g	98点	9608.0g
		総量比	41%	38%	42%	45%	17%	17%		
剥片	（砂岩）	出土量	18点	1297.0g	26点	1887.0g	6点	422.0g	50点	3606.0g
		総量比	36%	36%	52%	52%	12%	12%		
	（砂岩以外）	出土量	147点	891.9g	193点	746.7g	43点	630.4g	383点	2269.0g
		総量比	38%	39%	50%	33%	11%	28%		

第34表　谷部遺物包含層別土器出土量

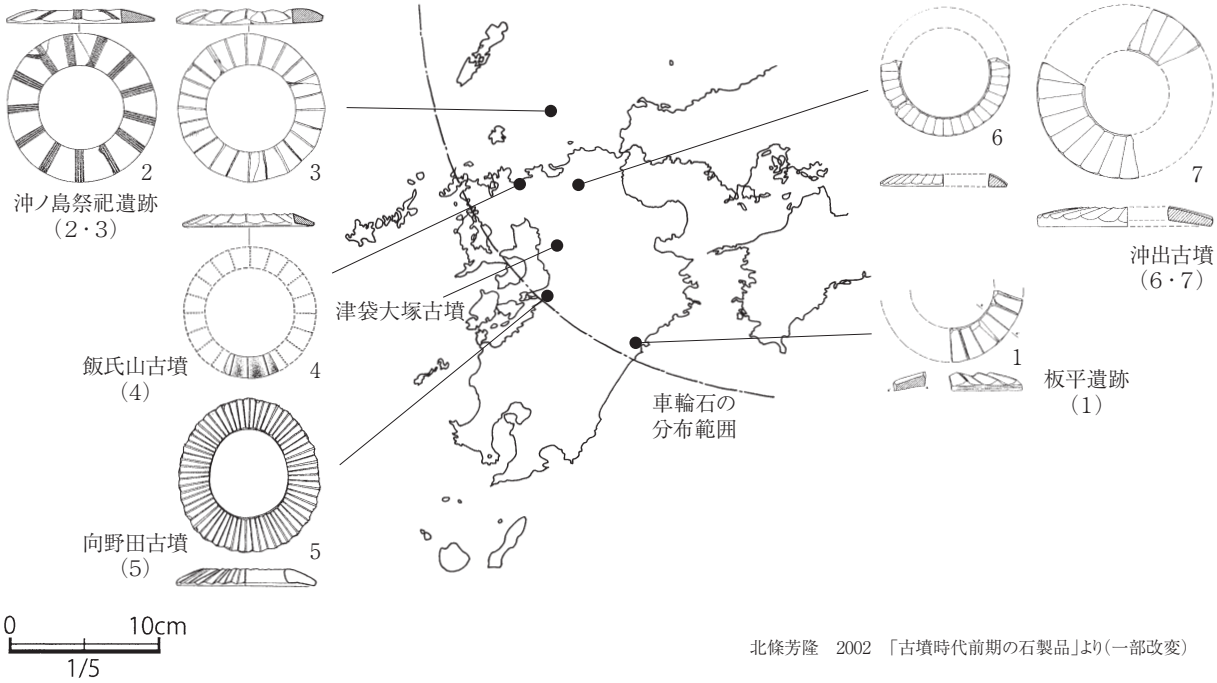
		2層	3層	その他	総重量
縄文時代	出土量〔g〕	7249.2	8042.9	7724.1	23016.2
	出土比	31%	35%	34%	
古墳時代	出土量〔g〕	24291.3	14079.3	14405.4	52776.0
	出土比	46%	27%	27%	
古代以降	出土量〔g〕	1195.7	940.0	1285.2	3420.9
	出土比	35%	27%	38%	

※　ただし、重量には遺構出土土器の重量は含めていない。

第35表　古墳時代前期遺構別「在地系」および「外来系」土器分類表

遺構	「在地系」	「外来系」		
	胎土→在地 技術→在地	胎土→在地 技術→外来	胎土→外来 技術→在地	胎土→外来 技術→外来
SA1	99,100,101,102,104		103	
SA3	106,107,108,111,112,113,114,115,116		109,110	
SA4	117			
SA6	121,122,123,124,125			126
SA9	131,132,133,134,145,136,137,141,145,148	129,130,133,139,140	142,143,144	146,147
SA10	155,157,158,159,160,161,162,164,166,167,168,170,171,172,173,177,178,179,180,181,182,183,184,186,187,188	154,163,165,169,174,175,176	156	

※胎土の分類は肉眼観察による



北條芳隆　2002　「古墳時代前期の石製品」より（一部改変）

第 76 図　九州の車輪石の分布

第Ⅳ章　自然科学分析の結果

本遺跡は耕作により土層の堆積が悪く、ほとんどの遺構が表土直下で検出されている。また、現況では平坦であるが、調査区東側、南北方向に谷が存在したと考えており、その埋没土からは多くの遺物が出土しているが、その谷部分がどの時代に埋没していったのか判断が困難である。

そこで、炭化物（遺構や谷部）の自然科学分析を通して、遺跡の当時の植生や遺構・谷部の詳細な年代、遺構がどのような使われ方をしたのか等、さらに有用な情報を得ることで、当時の様相をより詳細に復原できると考えている。

自然科学分析は平成18年度、平成19年度の２回実施した。結果をそれぞれ以下に示す。

第１節　平成 18 年度の結果

板平遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

２．試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
№1	ＳＰ１	炭化材（ブナ科）	酸−アルカリ−酸洗浄	AMS
№2	ＳＩ12	炭化材（広葉樹）	酸−アルカリ−酸洗浄	AMS
№3	ＳＩ19	炭化材（コナラ属コナラ節）	酸−アルカリ−酸洗浄	AMS
№4	ＳＡ４	炭化材（シイ属）	酸−アルカリ−酸洗浄	AMS
№5	谷部	炭化物	酸−アルカリ−酸洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

３．測定結果

（１）未補正^{14}C年代

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いて計算している。

（２）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（３）^{14}C年代

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を−25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

（４）暦年代（Calendar Age）

^{14}C年代を実際の年代（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１δ（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

試料名	測定№ （Beta－）	未補正^{14}C年代 （年BP）	δ^{13}C （‰）	^{14}C年代 （年BP）	暦年代 （１σ:68％確率，２σ:95％確率）
№1 （ＳＰ1）	224588	9220±40	−25.3	9220±40	交点：cal BC 8450 １σ：cal BC 8540－8510, 8480－8330 ２σ：cal BC 8560－8300
№2 （ＳＩ12）	224589	9270±40	−24.4	9280±40	交点：cal BC 8550 １σ：cal BC 8600－8590, 8570－8470 ２σ：cal BC 8630－8420, 8400－8350
№3 （ＳＩ19）	224590	8200±40	−26.5	8180±40	交点：cal BC 7170 １σ：cal BC 7250－7230, 7190－7080 ２σ：cal BC 7320－7070
№4 （ＳＡ4）	224591	1850±40	−27.4	1810±40	交点：cal AD 230 １σ：cal AD 140－250 ２σ：cal AD 120－260, 280－330
№5 （谷部）	224592	960±40	−25.3	960±40	交点：cal AD 1040 １σ：cal AD 1020－1060, 1080－1150 ２σ：cal AD 1010－1170

BP：Before Physics (Present)，cal：calibrated，BC：紀元前，AD：紀元後

４．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№1の炭化材では9220±40年BP（１σの暦年代でBC8540～8510, 8480～8330年）、№2の炭化材では9280±40年BP（同BC8600～8590, 8570～8470年）、№3の炭化材では8180±40年BP(同BC7250～7230, 7190～7080年)、№4の炭化材では 1810±40年BP(同AD140～250年)、№5の炭化物では960±40年BP（同AD1020～1060, 1080～1150年）の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26－0 ka BP. Radiocarbon 46,1029－1058.
尾嵜大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p.14－15.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1－36.

Ⅱ．樹種同定

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、ＳＰ1、ＳＩ12、ＳＩ19、ＳＡ4から採取された炭化材4点である。

３．方法

試料を割折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目)、接線断面(板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

シイ属　*Castanopsis*　ブナ科　図版１

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州(福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。シイ属にはスダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、試料の保存状態が悪いためシイ属の同定にとどめた。

コナラ属コナラ節　*Quercus sect. Prinus*　ブナ科　図版２

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

ブナ科　Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管と火炎状に配列する小道管が見られた。放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科のクリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかであるが、試料の保存状態が悪く小片で広範囲の観察が困難なため、ブナ科の同定にとどめた。

広葉樹　broad－leaved tree

横断面:道管が存在する。放射断面:道管と放射組織が存在する。接線断面:道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。試料の保存状態が悪く小片で広範囲の観察が困難なため、広葉樹の同定にとどめた。

５．所見

樹種同定の結果、シイ属１点、コナラ属コナラ節１点、ブナ科１点、広葉樹１点が同定された。シイ属にはスダジイとツブラジイがあり、どちらも温帯下部の暖温帯に分布する常緑高木で、西南日本に分布する照葉樹林の主要構成要素である。コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。ブナ科は、クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかである。

文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.
島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成．植生史研究特別1号．植生史研究会，242p.

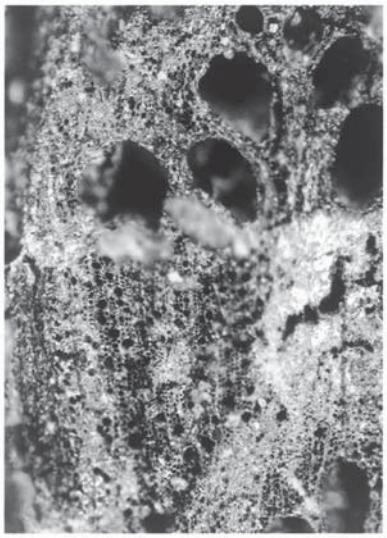
表１　板平遺跡における樹種同定結果

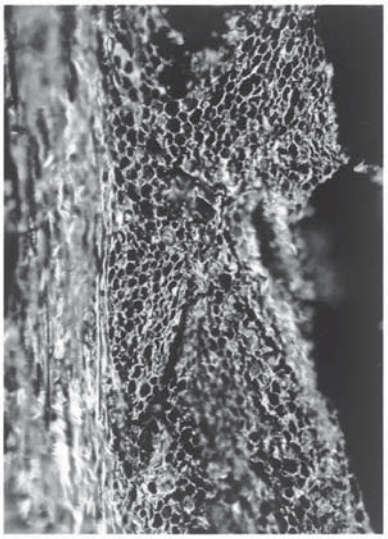
試料	結果（学名／和名）	
試料１（ＳＰ１）	Fagaceae	ブナ科
試料２（ＳＩ12）	broad－leaved tree	広葉樹
試料３（ＳＩ19）	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
試料４（ＳＡ４）	*Castanopsis*	シイ属

板平遺跡の炭化材

横断面 ―――― ： 0.4mm　放射断面 ―――― ： 0.2mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

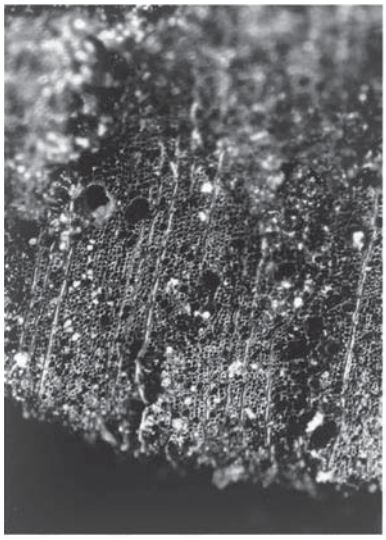
1．試料４（ＳＡ４）　シイ属





横断面 ―――― ： 0.4mm　放射断面 ―――― ： 0.2mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

2．試料３（ＳＩ１９）　コナラ属コナラ節



横断面 ―――― ： 0.5mm　横断面 ―――― ： 0.5mm

試料１（ＳＰ１）　ブナ科　試料２（ＳＩ12）　広葉樹

第２節　平成 19 年度の結果

Ⅰ．放射性炭素年代測定

１．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理	測定法
№1	SI18，配石上面	炭化材(コナラ属コナラ節)	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№2	SC20，深鉢と同レベル	炭化材(サカキ)	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№3	SA ９，土器の口縁付着	炭化物	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№4	SA10，床面炭化材	炭化材(ミズキ属？)	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
№5	谷部，３層最下部	炭化物	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

２．測定結果

表1に放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を示した。

（1）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差(‰）で表す。試料のδ^{13}C値を−25(‰）に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（2）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。統計誤差は１σ（68.2％確率）である。

（3）暦年代（Calendar Age）

^{14}C年代測定値を実際の年代値（暦年代）に近づけるため、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24,050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC10,450年まで)。

暦年代は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で示し、較正プログラムOxCal3.1の確率法により１σ（68.2％確率）と２σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。()内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。CalはCalibratedの略、BCは西暦紀元前、ADは紀元後を示す。

３．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№1の炭化材では8215±25年BP（２σの暦年代でBC7330 ～ 7130, 7100 ～ 7080年)、№２の炭化材では3325±20年BP（BC1670 ～ 1520年)、№3の炭化物では1760±15年BP（AD230 ～ 340年)、№4の炭化材では1785±15年BP（AD130 ～ 330年)、№5の炭化物では920±15年BP（AD1030 ～ 1160年）の年代値が得られた。

文献

Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program,Radiocarbon,37(2), p.425−430.
Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355−363.
Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26−0 ka BP. Radiocarbon 46,p.1029−1058.
尾嵜大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p.14−15.
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代, p.3−20.

表1　放射性炭素年代測定結果

試料名	測定番号	δ^{13}C (‰)	^{14}C年代 (年BP)	暦年代	
				1σ（68.2%確率）	2σ（95.4%確率）
1 (SI18)	PED−8326	−27.13±0.23	8215±25	7310BC（68.2%）7170BC	7330BC（92.7%）7130BC 7100BC（ 2.7%）7080BC
2 (SC20)	PED−8327	−28.63±0.25	3325±20	1635BC（30.5%）1600BC 1580BC（37.7%）1535BC	1670BC（95.4%）1520BC
3 (SA9)	PED−8328	−28.40±0.26	1760±15	240AD（26.0%）260AD 280AD（42.2%）325AD	230AD（95.4%）340AD
4 (SA10)	PED−8329	−28.65±0.25	1785±15	220AD（50.1%）260AD 295AD（18.1%）320AD	130AD（95.4%）330AD
5 (谷部)	PED−8330	−29.14±0.26	920±15	1040AD（43.0%）1100AD 1120AD（25.2%）1160AD	1030AD（95.4%）1160AD

Ⅱ．樹種同定

1．試料

試料は、配石遺構や住居跡などから出土した炭化材4点である。試料の詳細を表1に示す。

2．方法

試料を割折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目)、接線断面(板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50 ～ 1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3．結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　図版1

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

サカキ　*Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科　図版2

横断面：小型の道管が単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～ 10m、径20 ～ 30cmである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ミズキ属？　*Cornus*?　ミズキ科　図版3

横断面：やや小型の道管が散在する散孔材である。道管は単独のものが多い。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型であり、4細胞幅ぐらいで紡錘形の多列のものが見られる

以上の形質よりミズキ科のミズキ属？に同定される。ミズキ属に類似するが、試料の保存状態が悪く小片で広範囲の観察が困難なためミズキ属？とした。ミズキ属には、ミズキ、クマノミズキなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または低木である。材は建築、器具、彫刻、旋作、薪炭などに用いられる。

不明　unknown　図版4

道管、仮道管、放射組織などの木材の構成要素が存在せず、木材の形質を呈していない。

4．所見

樹種同定の結果、コナラ属コナラ節、サカキ、ミズキ属？が同定された。コナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に自生する落葉広葉樹であり、温帯を中心に広く分布する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。サカキは、暖地の山林等に自生する常緑広葉樹で、深い谷間やこれにつづく斜面などやや湿気のある肥沃な土壌を好む。西南日本に分布する照葉樹林の構成要素である。ミズキ属は、日本各地の山地に自生する落葉広葉樹であり、谷間や暖傾斜地や谷間など湿気のある肥沃な土壌を好む。

文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.
島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成．植生史研究特別1号．植生史研究会，242p.

表1　板平遺跡における樹種同定結果

試料	出土地点	結果（学名／和名）	
試料1	SI18，配石上面	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
試料2	SC20，深鉢と同レベル	*Cleyera japonica* Thunb.	サカキ
試料4	SA10，床面炭化材	*Cornus*？	ミズキ属？
試料5	谷部，３層最下部	unknown	不明

Ⅲ．種実同定

1．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2．試料

試料は、竪穴住居跡（古墳時代）、土坑（縄文時代後期）、集石遺構（縄文時代早期）、炉穴（縄文時代早期）から出土した選別済み試料4式（27ケース）である。試料の詳細を表1に示す。

3．方法

同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4．結果

分析の結果、樹木5、草本5の計10分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、各分類群の写真を示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Schotty.　炭化子葉（半形）　ブナ科

炭化して黒色で楕円形を呈する。表面はなめらかで縦方向に一条の凹線が入る。

コナラ属　*Quercus*　炭化子葉（半形）　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。炭化が著しく発泡し欠落しているため、属レベルの同定にとどめた。

バラ科　Rosaceae　炭化核

側面に縫合線が発達する。表面にはバラ科特有の隆起がある。

カラスザンショウ　*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.　炭化種子片　ミカン科

黒色で楕円形を呈し側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

カラスザンショウ？　*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.？　炭化種子片　ミカン科

黒色で楕円形を呈し、表面には大きい網目模様がある。破片であるため？とした。

サンショウ属　*Zanthozylum*　炭化種子片　ミカン科

黒色で楕円形を呈し側面にへそがある。表面には網目模様がある。破片でヘソが欠落しており、サンショウ、イヌザンショウの同定が困難なため、属レベルの同定にとどめた。

〔草本〕

イネ　*Oryza sativa* L.　炭化果実　イネ科

炭化して黒色である。長楕円形を呈し胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

イネ科　Gramineae　穎

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

黒褐色で頂端が尖る広卵形を呈す。断面は両凸レンズ状で表面には光沢がある。

ヒユ属　*Amaranthus*　種子　ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。

カタバミ属　*Oxalis*　種子　カタバミ科

黒褐色で楕円形を呈し上端がとがる。両面には横方向に６～８本の隆起が走る。

不明種実

種実ではあるが、破片で発泡し表面模様が観察できないため不明種実とした。

不明幼果

変形して形が不明であり表面模様が観察できないため、不明幼果とした。

〔その他〕

虫瘤？　炭化して表面に種実の細胞が認められない。確定的ではないが虫瘤？とした。

炭化物片　種実ではなく、破片で発泡しているものを炭化物とした。

炭化材片　木材が炭化しているものを炭化材片とした。

５．所見

種実同定の結果、竪穴住居跡（古墳時代）では、タデ属が多く認められ、ヒユ属、イネ科、ツブラジイ、バラ科、コナラ属、カラスザンショウ、サンショウ属、イネ（炭化米）、カタバミ属も認められた。また、土坑（縄文時代後期）ではコナラ属、集石遺構（縄文時代早期）ではカラスザンショウ、炉穴（縄文時代早期）ではイネ（炭化米）が認められた。

栽培植物では、竪穴住居跡と炉穴でイネ（炭化米）が認められたが、後者については何らかの混入と考えられる。竪穴住居跡で多く認められたタデ属は、集落や畑地およびその縁辺に生育する人里植物ないし耕地雑草であり、ヒユ属、カタバミ属なども同様の環境に生育する。カラスザンショウは、温暖な沿岸部の森林要素で二次林種でもある。その他の分類群も、二次林および人為環境に生育するものが多い。

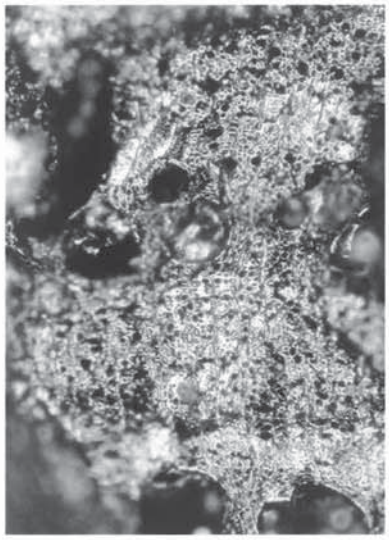
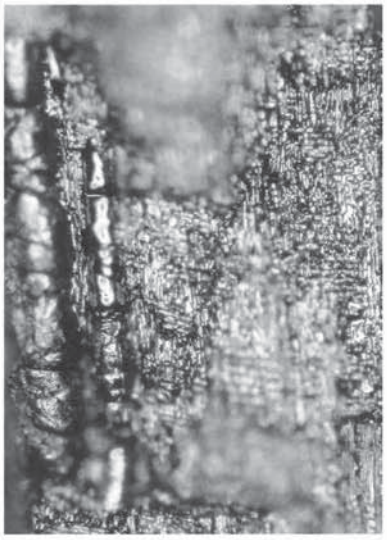
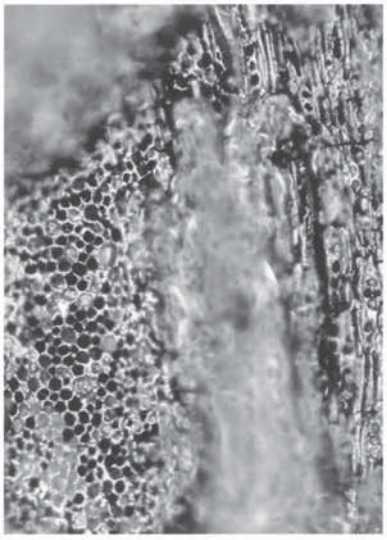
文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131−139.
南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165−174.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276−283.
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.2−14.

表1　板平遺跡における種実同定結果

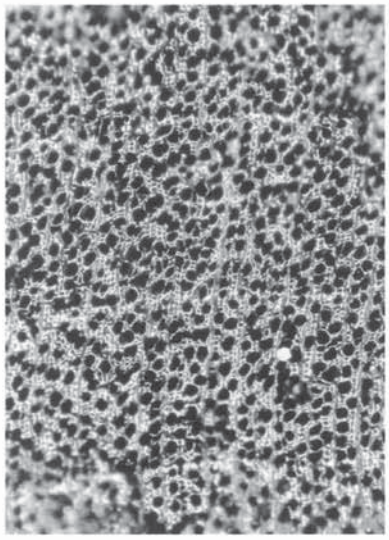
試料番号	出土遺構		分類群 学名	分類群 和名	部位	個数	備考
1	竪穴住居跡	SA3-1	Unknown	不明種実		1	
			Unknown	不明		2	
2		SA3-2	Unknown	不明		1	
3		SA4	Rosaceae	バラ科	核片	2	炭化材片14
			Zanthoxylum	サンショウ属	種子片	1	砂塊1
			Amaranthus	ヒユ属	種子	1	
			Unknown	不明		11	
4		SA3-3	*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et	カラスザンショウ	種子片	1	
5		SA4炉（二次）					炭化物3（虫瘤?）
6		SA4炉	*Castanopsis cuspidata Schottky.*	ツブラジイ	子葉（半形）	2	
7		SA6	Gramineae	イネ科	穎	1	炭化物5（虫瘤?）、植物片3
8		SA9中央炉	Quercus	コナラ属	子葉（半形）	1	
			Polygonum	タデ属	果実	48	
			Unknown	不明	幼果	2	
			Unknown	不明		1	
9		SA10焼土付近	*Polygonum*	タデ属	果実	1	炭化物片1
			Amaranthus	ヒユ属	種子	5	炭化物3（虫瘤?）
10		SA10炉2	*Oryza sativa* L.	イネ	果実	1	炭化材片7
			Gramineae	イネ科	穎	4	炭化物片3
			Oxalis	カタバミ属	種子	1	砂塊1
			Unknown	不明		1	
11	土坑	SC20-①層	*Quercus*	コナラ属	子葉（半形）	1	
12		SC20-②層					炭化材片1
13		SC20-③層					炭化材片1
14	集石遺構	SI11配石	*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et	カラスザンショウ	種子片	1	
15		SI12SI18					炭化材片21、炭化物2（虫瘤?）
16		配石と下の石の間	*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et	カラスザンショウ？	種子片	1	
17		SI19	Unknown	不明	幼果	2	炭化材片17、炭化物9（虫瘤?）、砂塊2、昆虫片2
18		SI19南側					炭化材片18、炭化物1（虫瘤?）
19	炉穴	SP8					炭化材片2、炭化物6、炭化物90（虫瘤?）
20		SP11					芽6、炭化物1（虫瘤?）
21		SP13					炭化物2、炭化物4（虫瘤?）
22		SP14					炭化物10（虫瘤?）
23		SP23 ～ 26-①層	*Oryza sativa* L.	イネ	果実	1	炭化材片2
24		SP23 ～ 26-②層					炭化材片9、炭化物片1
25		SP23 ～ 26-③層					炭化材片3
26		SP23 ～ 26-④層					炭化材片6、炭化物片7
27		SP19	Unknown	不明種実片		7	炭化材片4、炭化物片7、炭化物4（虫瘤?）、砂塊7

※ タデ属、ヒユ属、カタバミ属、不明幼果は未炭化。その他はすべて炭化。

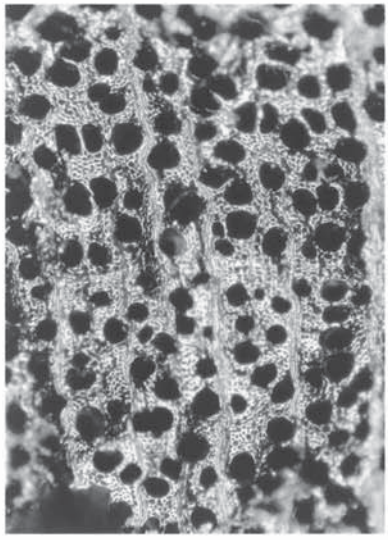
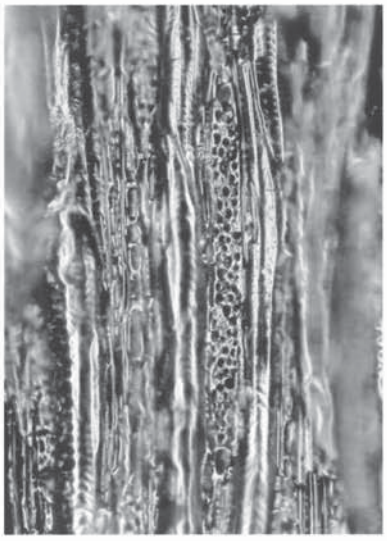
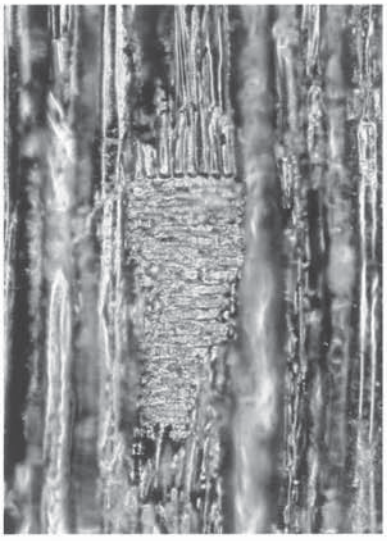
横断面 ―――― ：0.4mm　放射断面 ―――― ：0.4mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

1．試料1　コナラ属コナラ節



横断面 ―――― ：0.4mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

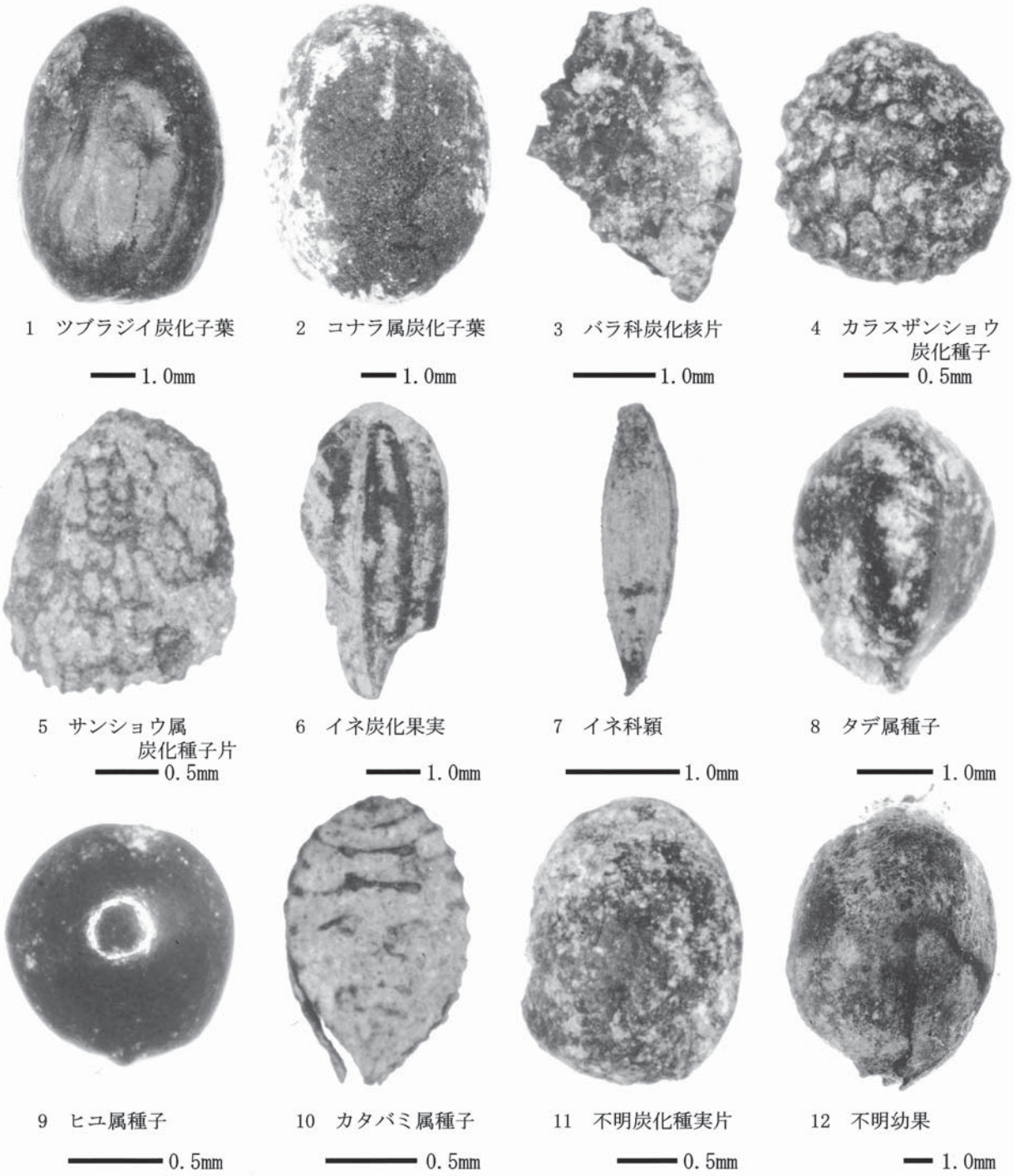
2．試料2　サカキ

横断面 ―――― ：0.4mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

3．試料4　ミズキ属？

板平遺跡の種実


1　ツブラジイ炭化子葉
1.0mm
2　コナラ属炭化子葉
1.0mm
3　バラ科炭化核片
1.0mm
4　カラスザンショウ
炭化種子
0.5mm
5　サンショウ属
炭化種子片
0.5mm
6　イネ炭化果実
1.0mm
7　イネ科穎
1.0mm
8　タデ属種子
1.0mm
9　ヒユ属種子
0.5mm
10　カタバミ属種子
0.5mm
11　不明炭化種実片
0.5mm
12　不明幼果
1.0mm

第Ⅴ章　まとめ

板平遺跡は、旧石器時代から縄文時代早期・後期・晩期、古墳時代前期・後期、古代、中世、近世以降までの遺構や遺物が確認されている。ここでは、まず自然科学分析のデータ等を基に本遺跡周辺の環境を復原する。次に、各時代について簡単にまとめ、最後に本遺跡と車輪石の関連について触れる。

古環境の復原

ＡＴ火山灰降灰（約26,000 ～ 29,000年前）以前より東側に谷部が存在する。アカホヤ火山灰降灰以前約8,000 ～ 9,000年前は、温帯の日当たりの良い山野に落葉広葉樹のブナ科が自生する。降灰後約3,300年前になると、谷間に続く斜面の湿気のある肥沃な土壌に、照葉樹林の構成要素であるサカキや二次林種のミカン科のカラスノザンショウも自生する。その後、約1,800年前になると谷間に落葉広葉樹であるミズキが自生し、栽培植物であるイネや人里植物であるタデ属、ヒユ属、カタバミ属等が生育する。谷部は約900年前に二次堆積アカホヤに続き、黒褐色土により埋没し、現況に近い状態になったものと考えられる。このことは谷部２層および３層における各時期の土器出土量に有意差が認められないことからも妥当である（第34表）。

旧石器時代

ＡＴ火山灰層下位の褐色粘質土層で、ホルンフェルスと流紋岩製の剥片と石核が出土した。少数でありながら谷部への落ち込み付近に偏在していたことを考えると、石器の製作場所は西側の調査区外である可能性がある。また、流紋岩は本遺跡の近辺では見ることができず、五ヶ瀬川流域で見られる祖母・傾山起源の火成岩（延岡市赤木遺跡、延岡市山田遺跡で出土）と類似していることから、五ヶ瀬川流域との交流の可能性が窺える。

縄文時代早期

集石遺構については、Ａ・Ｂ・Ｃ類は約9,200年ＢＰ、Ａ′類は約8,200年ＢＰに使用していたものであると推定する。

また、炉穴については、31基中４基においてブリッジの痕跡が見られた。県内では国富町木脇遺跡や西都市別府原遺跡、山田遺跡等において確認されている。第Ⅲ章第３節の小結にも述べたが、集石遺構と炉穴を併設していた可能性が見出されたことについては特筆すべき点である。

土器については、貝殻での調整を施すものを主体とし、特に口縁部付近に貝殻刺突文を２～３段施し、胴部は無文で丁寧なナデやミガキを施す政所式（中原Ⅱ式）の占める割合が大きい。また、接合はできなかったものの、出土位置や胎土、焼成等から15・33は政所式の底部である可能性が高い。県北地域では延岡市吉野遺跡において同型式の土器が出土している。政所式土器は約9,200年BP頃の集石遺構や炉穴と共に使用されていたと考えられるが、約8,200年BP頃の使用土器については特定ができていない。

縄文時代後・晩期

後期の土器については、磨消縄文を施していないものの、太郎迫式から三万田式の様相をもつものが大半を占め、その前後の市来式や鳥井原式も少量見られる。特に、深鉢36・46に代表される器形や66・67に代表される文様は本遺跡の当時期を特徴付けるものとなっている。

また、晩期の土器では、短頸化した精製浅鉢96・97等黒川式に類似する土器や口縁部に無刻目突帯をもつ深鉢89 ～ 94が見られる。

本遺跡の土器が、門川町赤木遺跡（三万田式）・分蔵遺跡・南町遺跡（黒川式・無刻目突帯文土器）と類似した特徴を示す反面、日向市東郷町仲野原遺跡（綾式・市来式・鐘ヶ崎式・御領式等）と特徴を異にするのは、当時期の人・物・製作技法の交流を考える上で注目すべき点である。

古墳時代前期

竪穴住居跡９軒を検出している。住居間の切り合いは見られず、住居は10m～ 80m程度の間隔をもつ散漫な配置である。

出土した遺物群、特に弥生時代終末～古墳時代前期の土器群の位置付けについて、寺沢薫氏と松永幸寿氏の論考をもとに、その対応関係を考え

ていきたい。寺沢氏が奈良県矢部遺跡の出土土器をもとに、畿内における古墳出現前後期の土器群を庄内０～３式、布留０～４式と区分した編年案を提示した（寺沢1986）。この編年案は畿内及び各地域の土器編年作業の中で1つの基軸となっている。以下「寺沢編年」と略す。また、松永氏は宮崎平野を中心とした宮崎県域の弥生時代後期から古墳時代中期までを全８期に区分する編年案を示した（松永2004）。以下「松永編年」と略す。

なお、胎土中にφ1～3㎜程度の褐色の粒を多く含み、土器の形状や調整等の製作技法が宮崎県的な特徴をもつものを「在地系」、それ以外を「外来系」と考えている（第35表）。

ＳＡ１の高坏104は口縁部と受部との境の内面に段、外面に沈線をもち、松永編年６期併行とみなした。

ＳＡ３の小型丸底壺109・110は、松永編年６～７期併行とみなした。ＳＡ６の小型丸底壺126は口径が胴部最大径より大きく、松永編年に該当するものがないが、寺沢編年布留２～３式併行とみなした。

ＳＡ４の甕18は平底で頸部の締まりが弱く、長い口縁が外反し、松永編年５～６期併行とみなした。

ＳＡ９の甕131・132は口縁が外反し、松永編年６～７期併行とみなした。甕129・130は内面のケズリが明瞭で、器壁が薄く、口縁は内湾しながら外傾することから、松永編年６期、寺沢編年布留２式併行とみなした。129・130の類例として宮崎市猿野遺跡等の出土例がある。高坏146はいわゆる有段高坏である。庄内式期から認められる形式であるが、有段部が大きく外に張り出すため、寺沢編年布留１式併行とみなした。類似資料として隣県では熊本県方保田東原遺跡、大分県鹿道原遺跡の出土例がある。また、暗文を施した高坏147は寺沢編年の布留０～１式併行とみなした。

ＳＡ10の甕155・157・158・160等は口縁部が外反し、松永編年６～７期併行とみなした。甕154・163はＳＡ９の129・130と類似している。163は球形の胴部を有し、布留系甕の様相を呈する。複合口縁壺169は球胴で１次・２次口縁ともに外反し、寺沢編年の布留１式に併行するとみなした。

以上のことより、前期の竪穴住居跡の時期は松永編年５～６期を中心とした時期に相当し、寺沢編年布留０～３式の時期に併行する形態やその製作技法の模倣といった外来系の要素が認められる。竪穴住居跡の実年代としては４世紀第１四半期～第３四半期に相当するものである。

古墳時代後期

竪穴住居跡３軒を南側で検出している。ＳＡ５の須恵器の坏蓋194、ＳＡ11の土師器の坏196、ＳＡ12の瓹199は後期（ＭＴ15併行期）のものであると考えられる。ただし、須恵器の中には遺構外ではあるが、198･241･243のように中期後葉（ＴＫ47併行期）に相当するものもあり、時期が上る可能性が残される。

古代～近世

遺構は掘立柱建物跡を11棟確認している。主な特徴には、①柱穴の大部分が径約30㎝、②身舎の柱穴は側柱のみで庇をもたない、③規模は３間×２間と３間×１間の割合が大きい、④身舎面積は15 ～ 25㎡程度、⑤桁行の柱間は２ｍ前後の５点があげられる。また、⑥梁間が桁行の約1.5倍～２倍の梁間一間型が６棟と多いことも特徴の一つである。第Ⅲ章第７節では、時期は未確定としているものの、これらの特徴から中世の平均的農家の建物跡である可能性が高い（①～⑤外山・原田2004、⑥宮本2002）。

なお、散礫の範囲内にピットは数基しか確認されていない。当時の人は、土中にある散礫の範囲内にはピットが掘りにくいことを経験から認識しており、意識的に散礫を避けていることに他ならないことを付加しておく（第３図、第54図）。

出土遺物は、古代～中世の土師器、中世～近世の陶磁器・銭貨が出土している。特に中世の陶磁器については、越州窯・龍泉窯・景徳鎮窯・漳州窯産の貿易陶磁や青磁の香炉・水注、古瀬戸の瓶子等、平均的な農家では入手困難な遺物もあり、ある程度有力な農家の存在も窺える。

また、近隣の塩見城跡や中山遺跡においても、中世の同時期の陶磁器が出土しており、本遺跡との関連が注目される。

車輪石について

最後に、本遺跡で出土した車輪石248の位置付けについて、三浦俊明氏の論考をもとに考えてい

きたい。三浦氏は車輪石の型式学的研究により、環体断面の形態変化に基づいて4段階に区分する編年案を示した（三浦2005）。以下「三浦編年」と略す。また、石材については、北條芳隆氏が鍬形石の型式と材質の関係の研究より材質を4種類に分類している（北條2002）。

次の①～⑦の属性から、時期や製作場所等を考えていく。①石材は硬質の緑色凝灰岩、②平面および内孔形態はともに卵形、③外斜面は放射状匙面の頂・凹部の両方に沈線をもつ。④推定最大長は約10㎝の小形、⑤内孔の推定最大幅約5.5㎝である。また、環体断面の⑥底面高比は約25%、⑦外側面はやや内反りである。

⑥・⑦の環帯断面の2属性は、三浦編年第Ⅱ段階に相当する。①の石材は北條分類の材質3に相当するが、この石材を生産できる岩石帯や製作遺跡は近隣に存在せず、外部より持ち込まれた可能性が高い。②～④の属性は古い段階の指標とはなるものの、三浦編年第Ⅳ段階においても残存している。⑤の内孔最大幅は三浦編年第Ⅰ段階からの特徴であり、どの段階においてもこの規格の出現割合が最も大きい。三浦編年第Ⅱ段階は生産地の拡散が始まる前段階と考えられており、初期からの生産地である畿内や北陸地方で同一規格の穿孔具を使用して製作された可能性がある。なお、三浦氏は「第Ⅱ段階の車輪石は前方後円墳集成の共通編年2期の古墳に副葬され始め、多くは3期で副葬される傾向がある」と論じている。

一般に車輪石は畿内を中心に多数出土しているが、九州では6遺跡から10点出土しており、本遺跡は分布南限にあたる（第76図）。ほとんどが前期古墳の副葬品であることから、近隣の古墳が崩落して包含層へ流れ込んだ可能性がある。しかし、近隣の富高2号墳（5期）は仿製の四獣鏡が出土しているものの約2㎞離れており、調査区外の東側の緩斜面に未発見の古墳が存在する可能性もある。

九州の他の車輪石を観察すると、向野田古墳（4期）・伝沖ノ島・板平遺跡…三浦編年Ⅰ～Ⅱ段階、飯氏山古墳・沖出古墳（3期）・津袋大塚古墳（5期）・沖ノ島祭祀遺跡…三浦編年Ⅲ～Ⅳ段階に相当する。九州内では本遺跡の車輪石は古い部類に属し、平面形態の卵型は向野田古墳に次ぎ2例目である。しかし、九州の他の車輪石との有効な関連性を見出すことはできていない。また、九州においては「三浦編年」と「前方後円墳集成の共通編年」との相関はほとんどないように思われる。

以上のことより、本遺跡から出土した車輪石の時期は確定できないまでも、古い段階の要素を多く持ち、初期の製作技法が継承されたものであることは言えそうである。また、車輪石に加えて、同時期の勾玉や外来系土器等の存在は、ある程度の力を有する者の存在を想起することができる。

本遺跡の車輪石が古い段階のもので、力を有する者が存在したとすると、畿内中央政権から威信材として配布されたとも考えられる。しかし、他の出土例のように古墳からの出土ではなく、近隣に古墳が存在するわけでもない。それ以上に、古墳時代前期の出土土器に布留系等外来系土器が多数見られ、人・物・土器や石製品の製作技術等の他の地域との交流が活発であったと推測できることから、車輪石はその交流の一環で、日向の地にもたらされたものであると考えたい。

今後、日向市や県内における古墳時代前期の調査が進み、資料を比較・検討することにより、板平遺跡および車輪石の位置付けが明らかになることを期待して結びとしたい。

〔参考・引用文献〕

大阪府文化財センター 2006『古式土師器の年代学』
熊本市教育委員会1986『戸坂遺跡発掘調査報告書』
東京大学出版会2003『新編 火山灰アトラス』
近藤義郎ほか1992『前方後円墳集成』山川出版社
寺沢薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』橿原考古学研究所
堂込秀人1997「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分」『鹿児島考古』第31号
外山隆之・原田亜紀子2004「都城市における中世掘立柱建物跡の類型化」『宮崎考古』第19号
北條芳隆2002「古墳時代前期の石製品」『考古資料大観』第9巻
松永幸寿2004「日向における古式土師器の成立と展開」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』
三浦俊明2005「車輪石生産の展開」『待兼山考古学論集』
水ノ江和同1997「北部九州の縄紋後・晩期土器－三万田式から刻目突帯文土器の直前まで－」『縄文時代』第8号
宮本長二郎2002「古代末から中世の住居建築」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第16号

表土除去後（Ａ区、北から）

平坦部土層断面

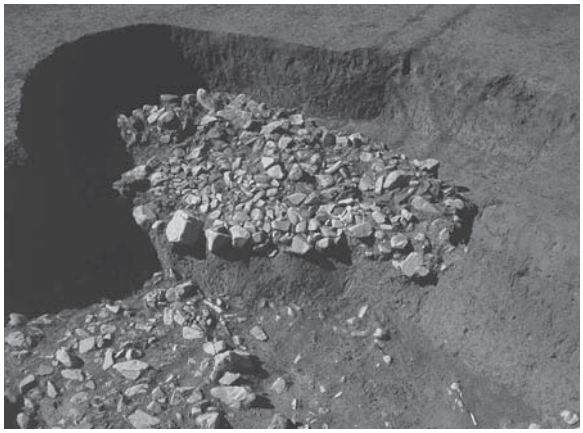
谷部土層縦断面

谷部土層横断面

谷部掘削作業風景（北から）

谷部風景（北から）

旧石器時代遺物出土状況（Ａ区）


土石流による礫溜り（Ｂ区）

図版２

散礫検出状況（Ｃ区）

散礫検出作業風景

ＳＩ 10 検出状況

ＳＩ 16・20・21 検出状況

ＳＩ 19 検出状況

ＳＩ４・５・６半截状況

ＳＩ 11 半截状況

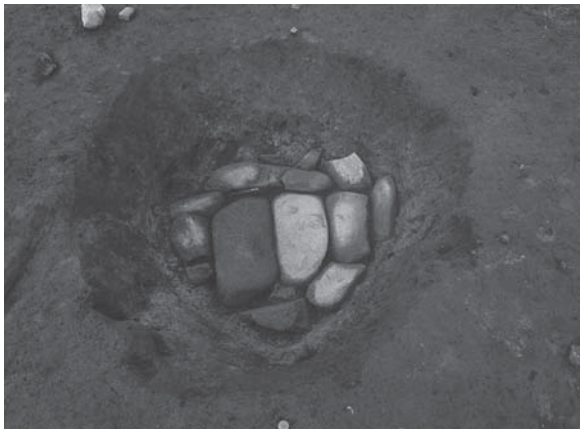
ＳＩ６半截状況

ＳＩ３配石

ＳＩ 16・20 配石

ＳＩ 10 配石

ＳＩ 18 配石


ＳＩ 19 配石

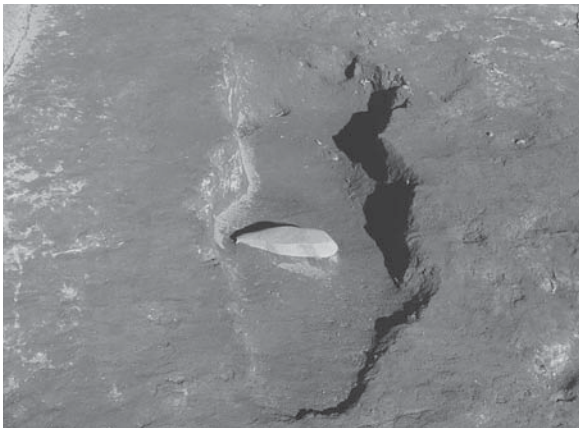
図版４

ＳＰ 12 検出状況

ＳＰ 27 ～ 29 検出状況

ＳＰ 23 ～ 26 検出状況

ＳＰ 27 ～ 29 埋土中礫出土状況


ＳＰ１完掘状況

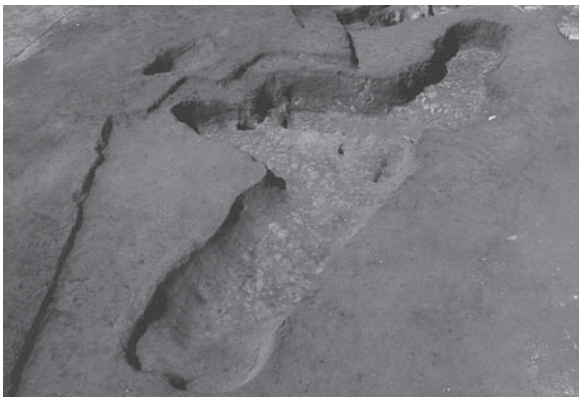
ＳＰ２・３・４完掘状況

ＳＰ 20・21 完掘状況

ＳＰ 12・ＳＰ 13・ＳＰ 14 ～ 17 完掘状況

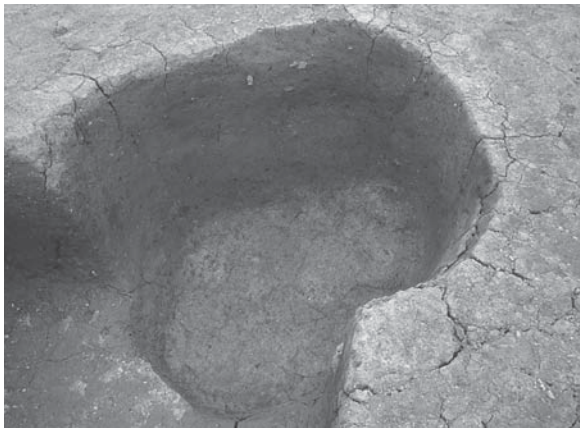
ＳＰ 27 ～ 29 完掘状況

ＳＰ５～ 10・18 完掘状況


ＳＰ 23 ～ 26 完掘状況

集石遺構と炉穴の位置関係

ＳＣ 20 土器出土状況


ＳＣ 20 完掘状況

ＳＸ１検出作業風景

ＳＸ１検出状況

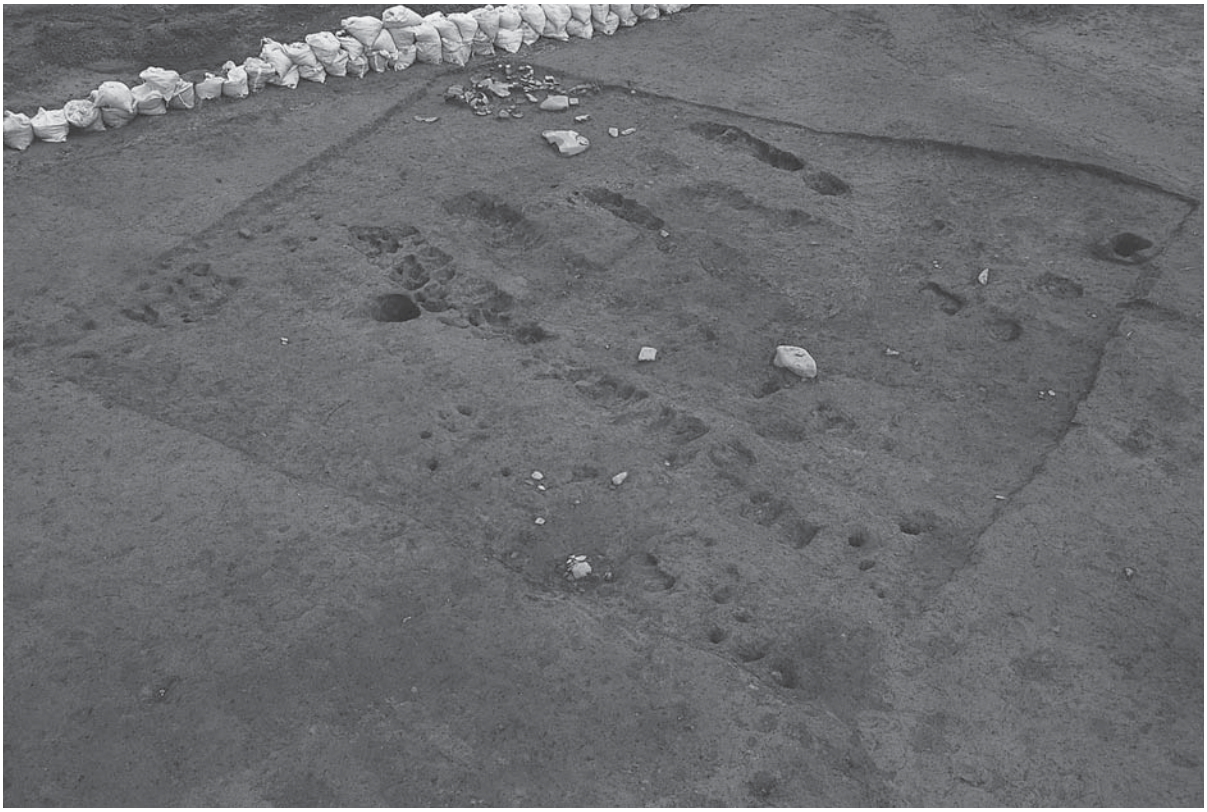
図版６

ＳＡ１検出状況（南から）

ＳＡ３遺物出土状況

ＳＡ９遺物出土状況

ＳＡ 10 遺物出土状況

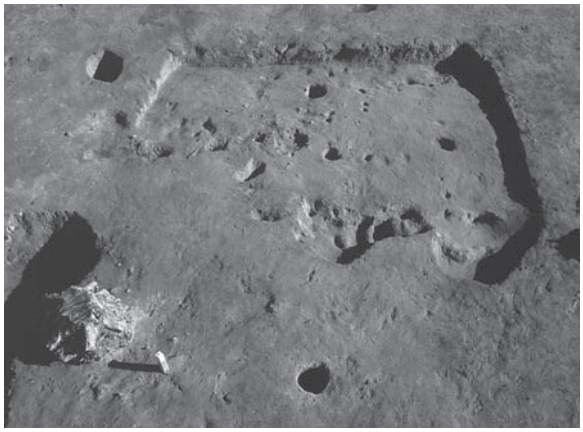


ＳＡ９完掘状況

ＳＡ３完掘状況

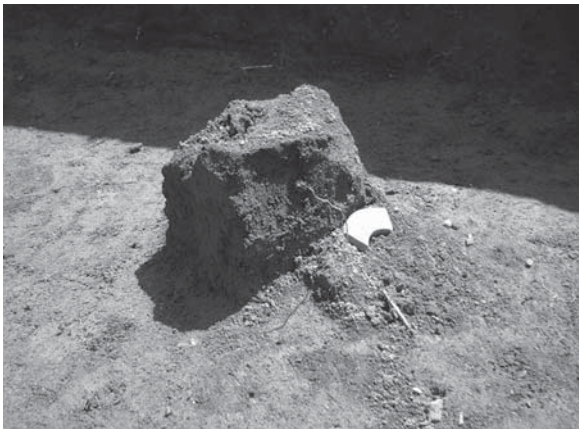
ＳＡ 12 完掘状況

ＳＡ４完掘状況


ＳＡ１完掘状況

ＳＡ６完掘状況

ＳＡ 10 完掘状況


車輪石出土状況

ＳＣ 21 土器出土状況

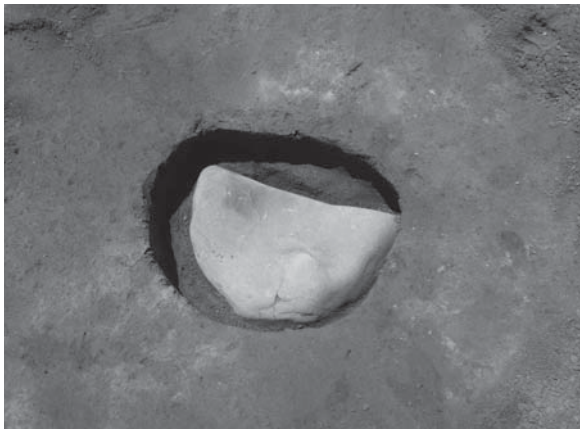
図版８

Ｃ区掘立柱建物跡検出状況

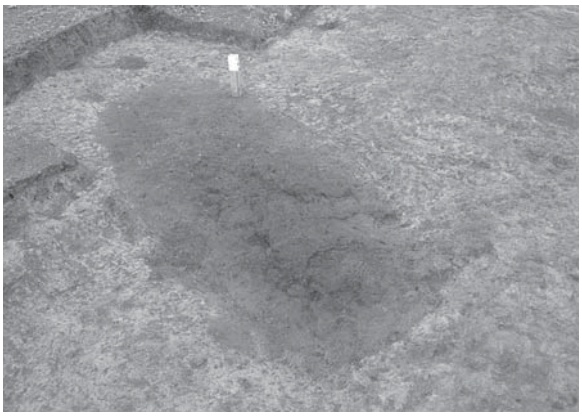
Ｂ区ピット検出状況

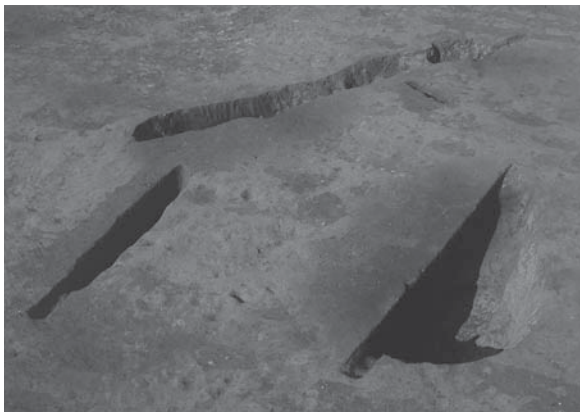
ＳＢ２検出状況

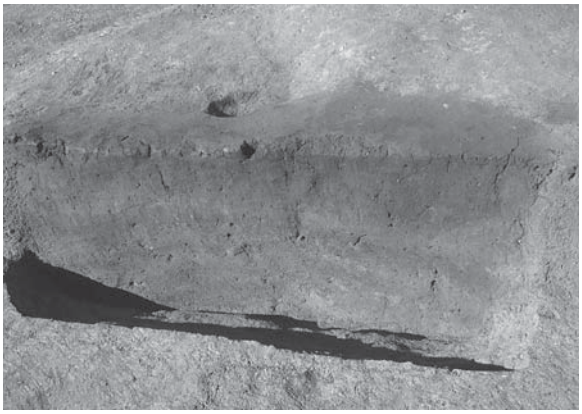
柱穴土層断面



柱穴中根石


ＳＣ１検出状況


ＳＣ４・６半截後状況


ＳＣ１土層断面

ＳＣ 10 土層断面

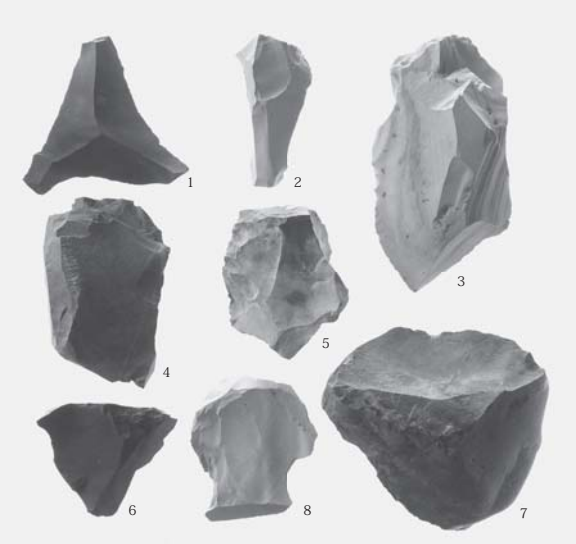
ＳＣ４完掘状況

ＳＣ 18 半截状況

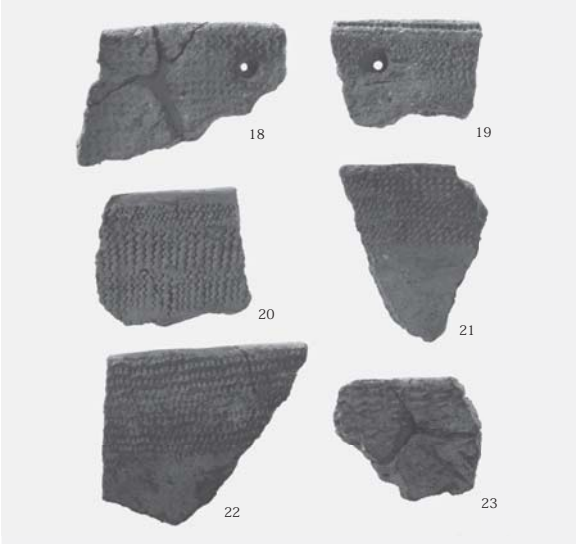
散礫取上げ作業風景

現地説明会風景

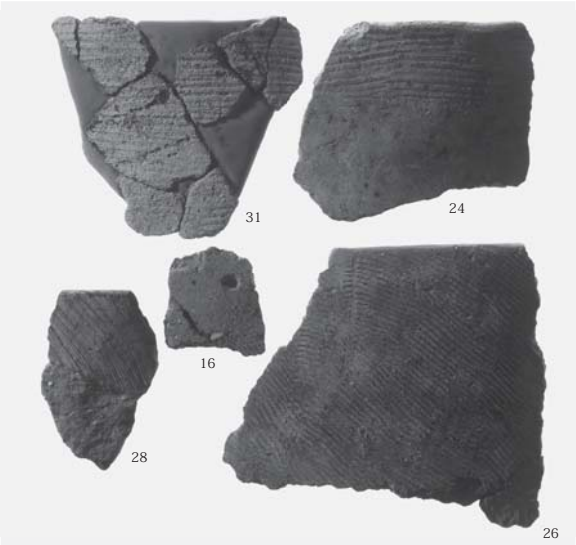
図版 10



旧石器時代石器



縄文時代早期土器（1）

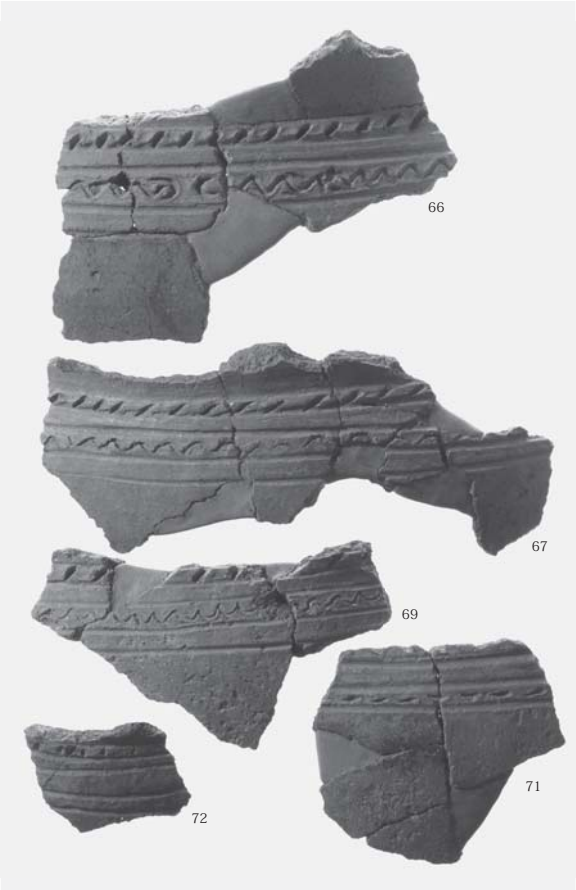


縄文時代早期土器（2）

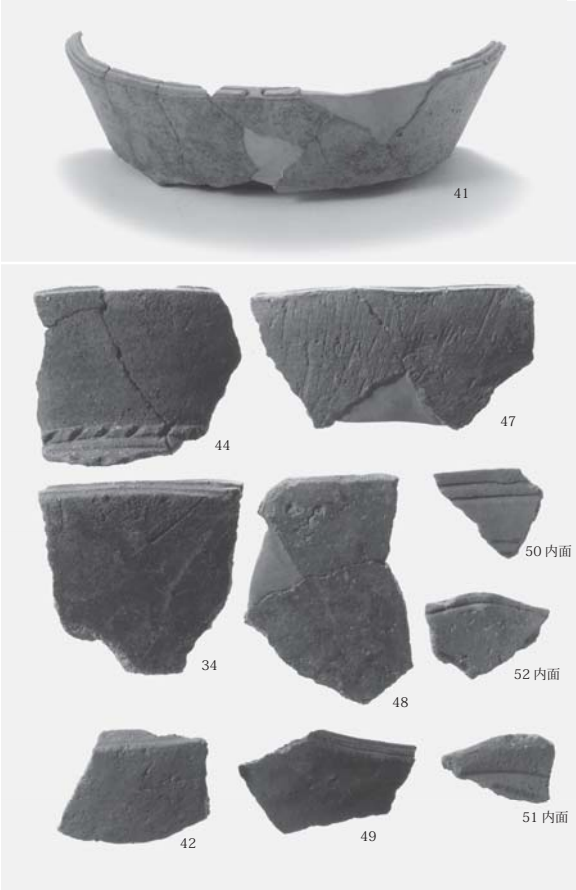
縄文時代早期土器（3）

縄文時代後期土器（1）

縄文時代後期土器（2）



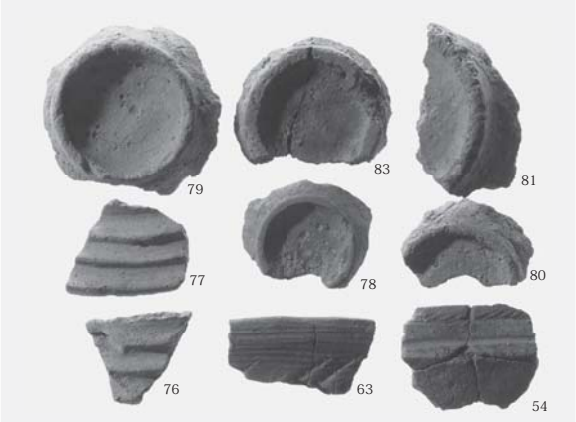
縄文時代後期土器（3）



縄文時代後期土器（4）

縄文時代後期土器（5）

縄文時代後期土器（6）



縄文時代後期土器（7）

縄文時代晩期土器

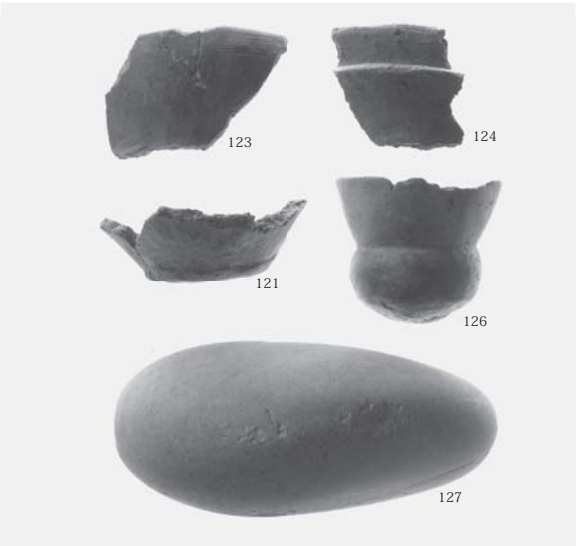
図版 12

ＳＡ１・ＳＡ２出土遺物

ＳＡ３出土土器

ＳＡ４出土遺物（1）

ＳＡ４出土遺物（2）



ＳＡ６出土遺物

ＳＡ８出土石器

ＳＡ９出土土器（1）

ＳＡ９出土土器（2）

ＳＡ９出土土器（3）

ＳＡ９出土土器（4）

ＳＡ９出土土器（5）

ＳＡ９出土土器（6）

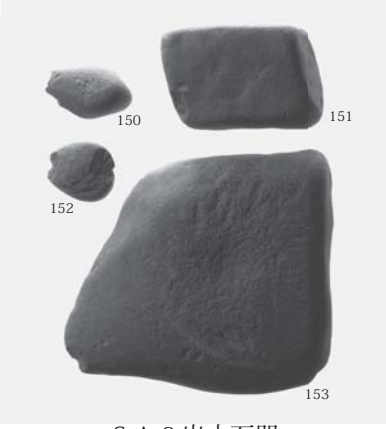
ＳＡ９出土土器（7）

ＳＡ９出土土器（8）

ＳＡ９出土土器（9）

ＳＡ９出土土器（10）

ＳＡ９出土土器（11）



ＳＡ９出土石器

図版 14

ＳＡ 10 出土土器（1）

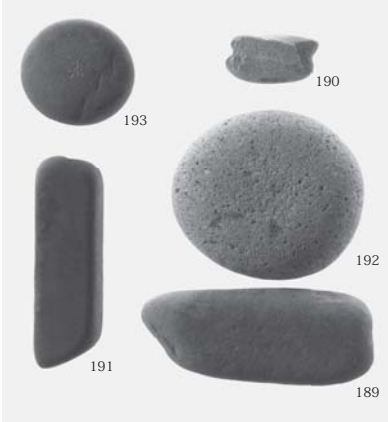
ＳＡ 10 出土土器（2）

ＳＡ 10 出土土器（3）

ＳＡ 10 出土土器（4）

ＳＡ 10 出土土器（5）

ＳＡ 10 出土土器（6）



ＳＡ 10 出土石器

ＳＡ５出土遺物

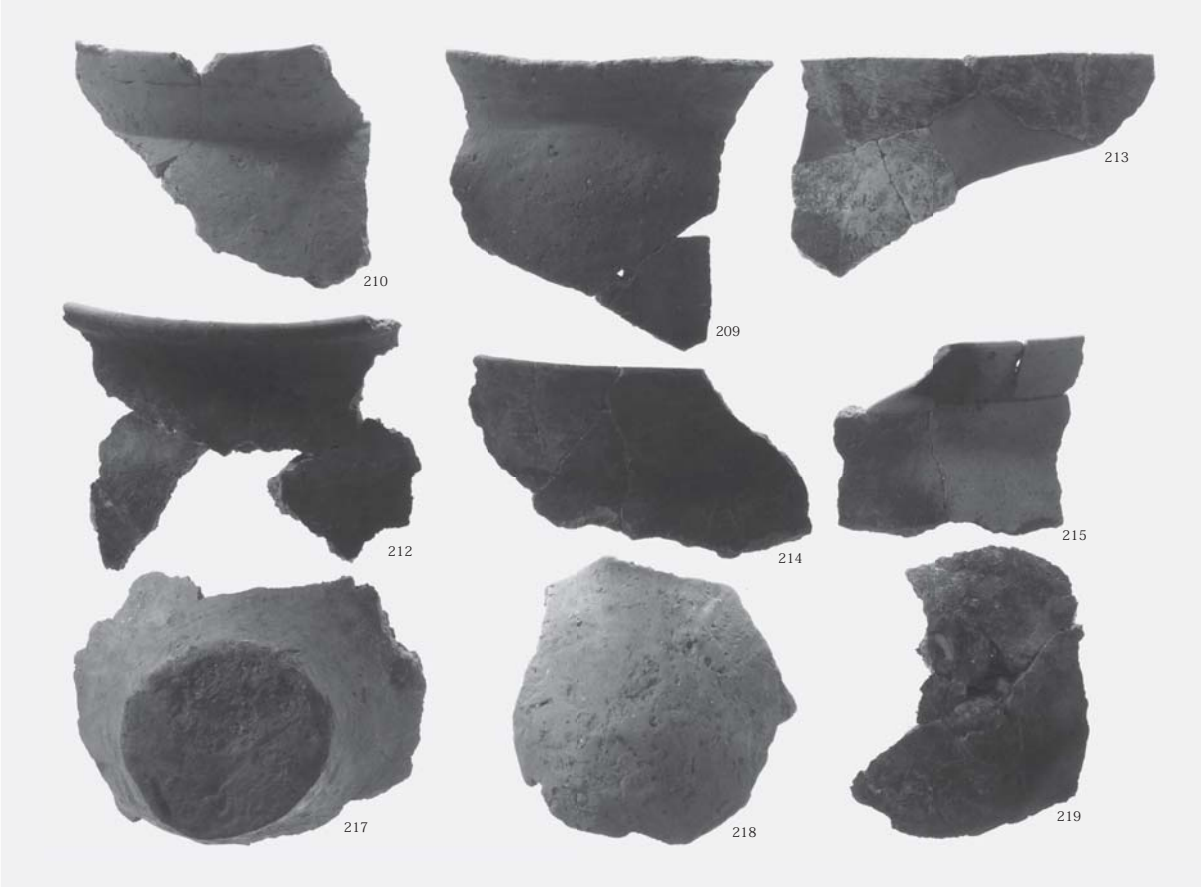
ＳＡ 11 出土土器

ＳＡ 12 出土土器

ＳＣ 21 出土土器

ＳＣ 15 出土土器

包含層出土土器（１）

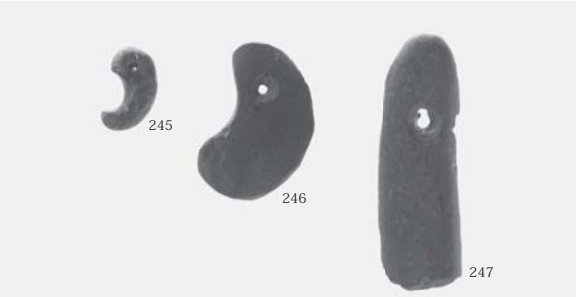


包含層出土土器（２）

包含層出土土器（3）

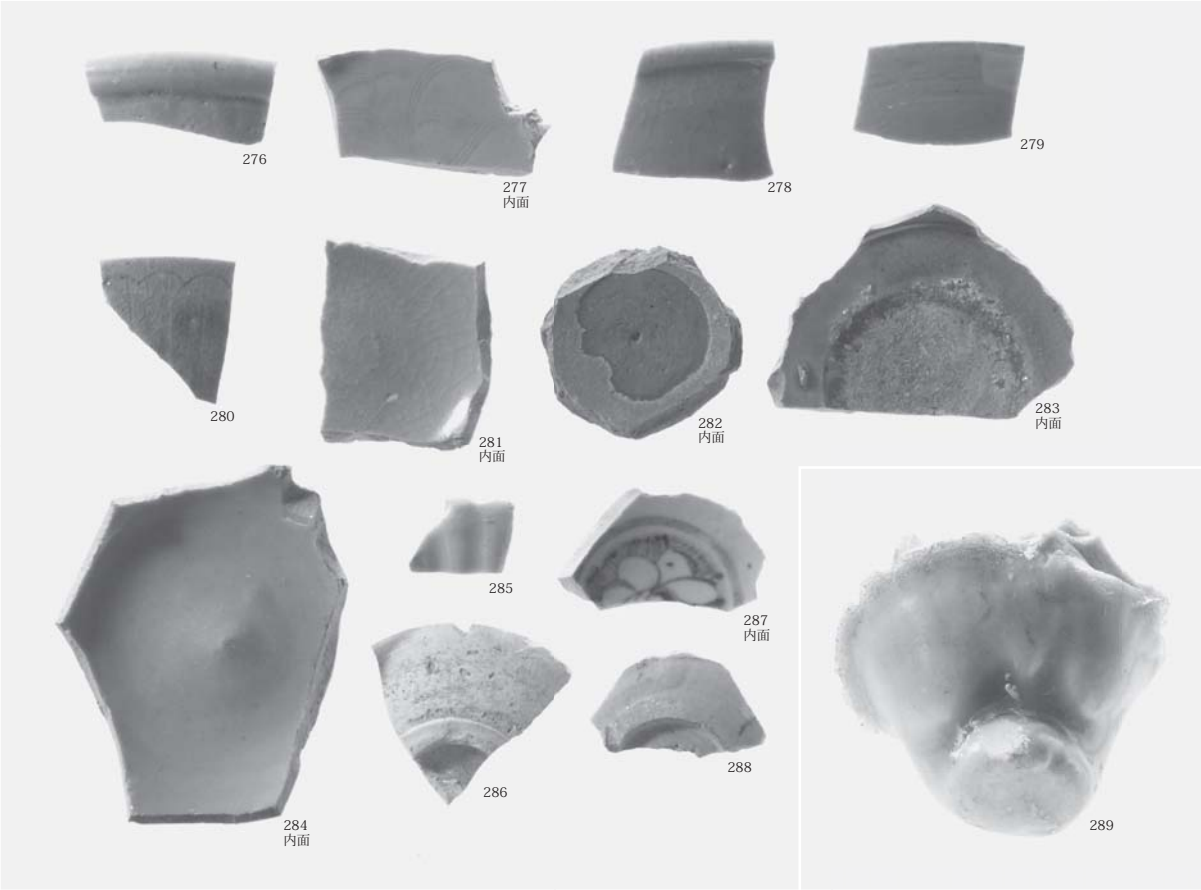
包含層出土土器（4）

包含層出土土器（5）

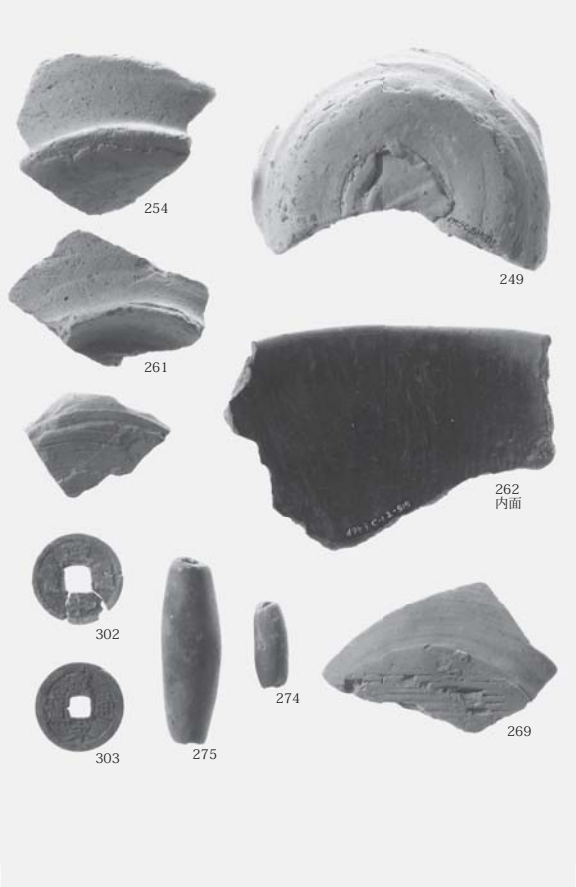


包含層出土石製装飾品

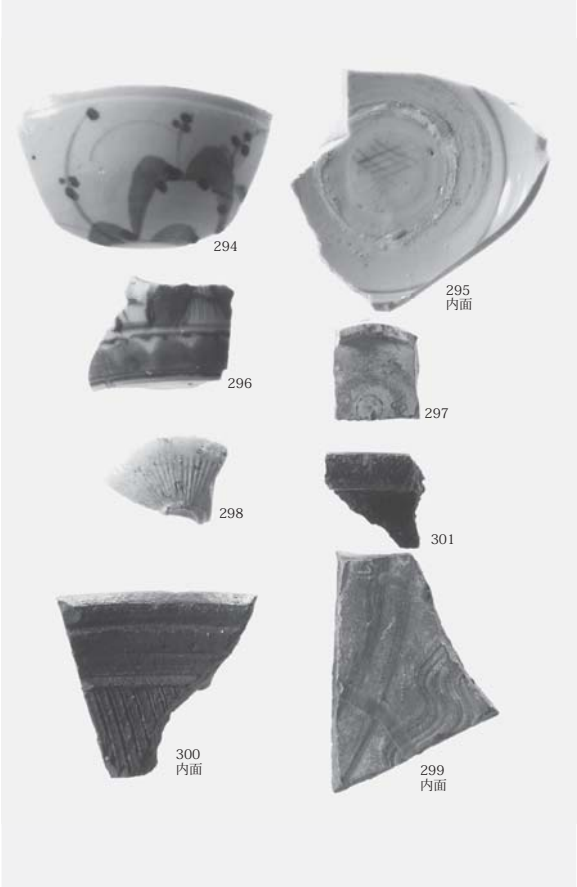
包含層出土車輪石



中世陶磁器

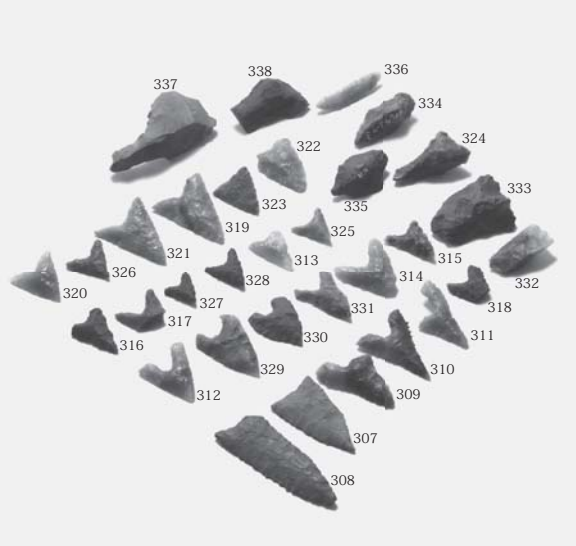


古代～中世土器および銭貨

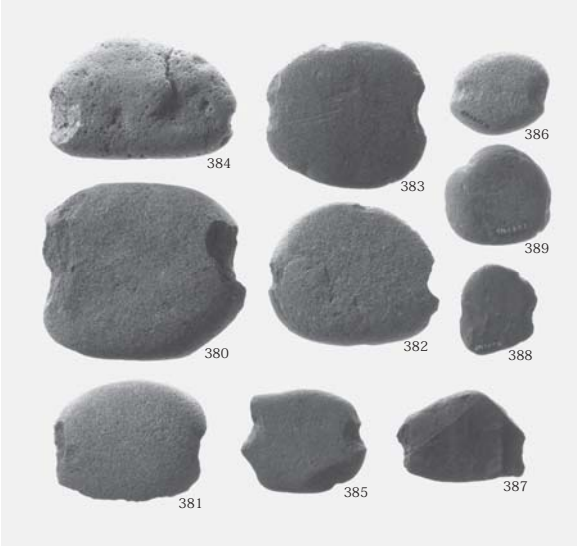


近世陶磁器

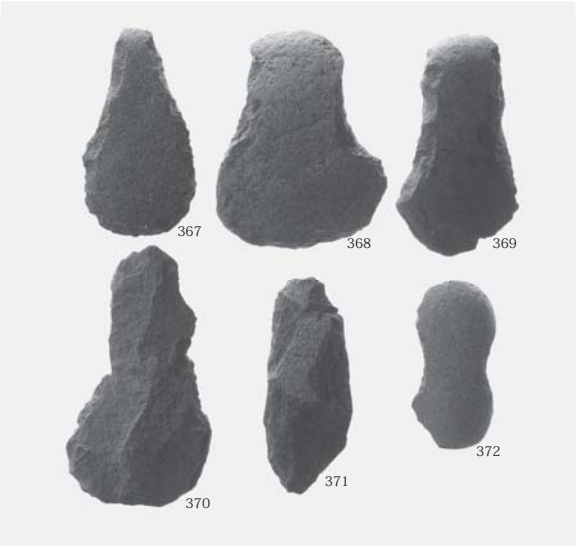
図版 18



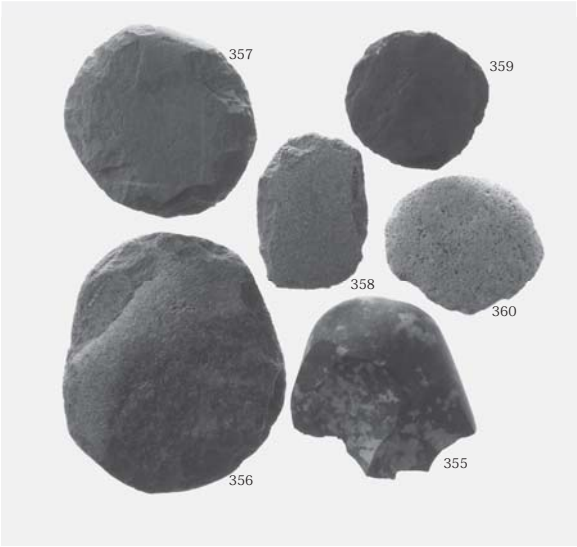
打製石鏃・石錐・異形石器・石匙



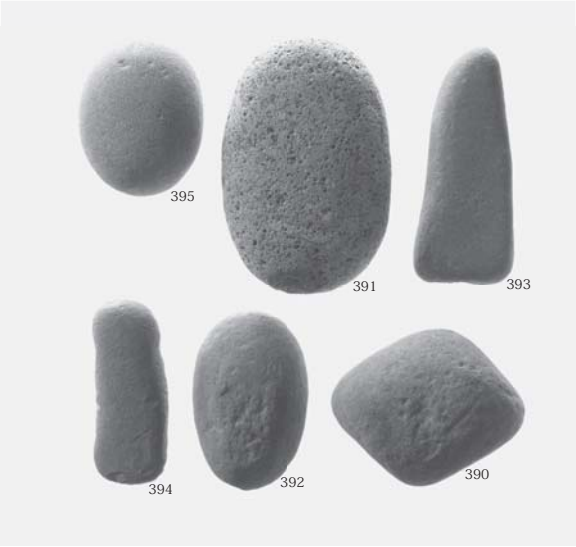
石錘



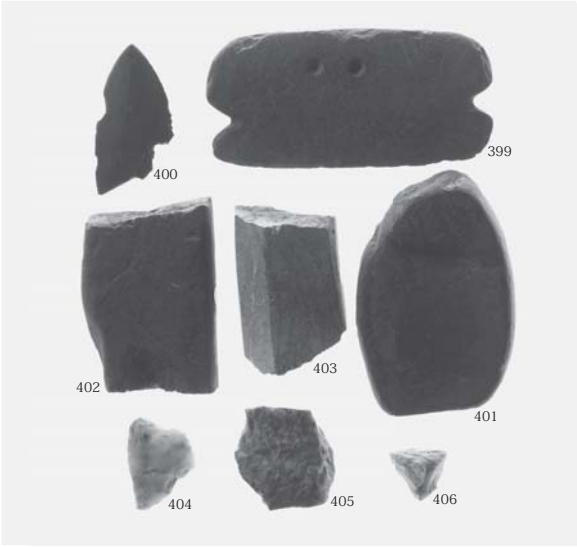
打製石斧



スクレイパー・礫器



敲石



弥生時代以降石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	いたびらいせき
書名	板平遺跡
副書名	東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	２
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第１７６集
執筆・編集担当者名	向江　修一
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	宮崎県宮崎市佐土原町下那珂４０１９番地
発行年月日	２００８年３月１４日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
板平遺跡（いたびらいせき）	宮崎県日向市（みやざきけんひゅうがし） 大字富高（おおあざとみたか） 字板平他（あざいたびら）	45206	3009	32度 26分 43秒	131度 36分 22秒	平成17年 8月22日 ～ 平成18年 10月4日	21,960㎡	東九州自動車道(門川～日向間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落 散布地	旧石器時代		石核・剥片	車輪石の出土
	縄文時代早期	散礫・集石遺構20基・炉穴31基・土坑4基	土器	
	縄文時代後期	石組遺構1基・土坑1基	土器	
	縄文時代晩期		土器	
	弥生時代終末～古墳時代前期	竪穴住居跡9軒・土坑2基	土師器・石器・車輪石・勾玉	
	古墳時代中期～後期	竪穴住居跡3軒	須恵器・土師器・石器	
	古代・中世・近世	掘立柱建物跡11棟	土師器・布痕土器・須恵器・陶磁器・銭貨	
	時期不詳	陥し穴状土坑11基・土坑・ピット	石器	

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第176集

板　平　遺　跡

東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書２

2008年3月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171　FAX 0985(72)0660

印　刷　株式会社　長崎印刷
〒889-4413　宮崎県西諸県郡高原町大字後川内18-2
TEL 0984(42)1069　FAX 0984(42)1330